

平成元年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

— 第 1 分 冊 —

1990・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

序 文

現在、県内でその所在が判っている埋蔵文化財は、約11,500件ありますが、各種の調査などにより、なお増加する傾向にあります。

これらの埋蔵文化財は、郷土の歴史、文化等を理解するうえで必要なものとして、それらの置かれた自然環境とともにそれらを整備し活用を図り、県民生活の中で広く生かされ、親しまれるような保護をしていくことが理想であると考えております。

しかし、私たちの生活の向上につながる開発事業との調整の結果、やむなく発掘調査をして記録保存しなければならない場合も数多くあります。

近年は、内需拡大策による各種開発の増加に伴う事前の発掘調査が急増してきているため、県市町村ともどもその対応に苦慮していますが、県市町村における埋蔵文化財の保護体制の強化や関係機関の継続的なご努力等によりまして、少なからずその成果をあげてきている現状にあります。

以下にご報告します農業基盤整備事業に伴う発掘調査結果もこうした場合の一部ではありますが、この成果が、埋蔵文化財の保護の一助として、歴史学習の場で広く活用されることを強く希望するものであります。

調査にあたりまして、県農林水産部、各関係事務所、各土地改良区、各市町村教育委員会をはじめ、地元の方々には多大のご協力をいただきましたことにつきまして、深甚の謝意を表するものであります。

なお、平成元年4月、三重県埋蔵文化財センターが多気郡明和町に産声をあげましたのでお知らせするとともに、この埋蔵文化財センターが三重県の埋蔵文化財の保護の中核機関として大きく育っていきますようセンター職員一同、渾身の努力をかたむける所存であります。皆様方の適切なお指導、ご鞭撻を賜りますよう心より願います。

平成2年3月

三重県埋蔵文化財センター所長

中 林 昭 一

例 言

1. 本書は、平成元年度農業基盤整備事業地内における埋蔵文化財の発掘調査結果の一部を、第1分冊としてまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。なお家野遺跡の町道部分の調査については、白山町が負担した。
3. 調査体制は下記によった。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査協力 三重県農林水産部農村整備課、耕地課、各農林事務所

各土地改良区

各市町村教育委員会

県文化財調査員ほか

4. 各遺跡出土の遺物整理は、原則として第1次整理を各調査担当者が行い、第2次整理については、各担当者のほか、管理指導課の主導で行った。
5. 本書の執筆・編集は、基本的に各調査担当者並びに倉田があたり、文末にその執筆者名を記すとともに各項の中で分担執筆による場合は、項目の末にも執筆者名を記した。
6. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記より、図面における方位は特に断らない限り磁北である。
SB ; 竪穴住居、掘立柱建物、SD ; 溝、SK ; 土坑、SE ; 井戸
SA ; 柵、塀、SP ; 水溜、SX ; 墓、その他性格不明遺構
7. 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前言	1
	1. 分布調査	1
	2. 試掘調査	4
	3. 調査の経過とその成果	4
II	阿山郡伊賀町 西沖遺跡	9
III	上野市上神戸・下神戸 浮田遺跡・朝神遺跡	27
	1. 位置と歴史的環境	27
	2. 浮田遺跡	28
	3. 朝神遺跡	47
IV	上野市才良・市部 才良遺跡・澤田遺跡	59
	1. 位置と歴史的環境	59
	2. 才良遺跡	60
	3. 澤田遺跡	78
V	三重郡菰野町下村 山之東遺跡	93
VI	四日市市山田町 中尾山遺跡	97
VII	鈴鹿市徳居町 敷田遺跡ほか	103
	1. 位置と歴史的環境	103
	2. 敷田遺跡	104
	3. 口北台遺跡	110
	4. 西条遺跡	111
VIII	津市大里睦合町 河崎遺跡	125
IX	安芸郡安濃町 光明寺遺跡ほか	127
	1. 位置と歴史的環境	127
	2. 光明寺遺跡	129
	3. 迎山遺跡	132
	4. 三垣内遺跡・大垣内遺跡	137
	5. 西田遺跡	139
X	多気郡明和町 外山遺跡・本郷遺跡	145
	1. 位置と歴史的環境	145
	2. 外山遺跡	147
	3. 本郷遺跡	167
XI	一志郡白山町 家野遺跡	179

図 版 目 次

- PL 1 A区掘立柱建物SB1、掘立柱建物SB10・11
- PL 2 A区掘立柱建物SB17、B区調査区全景
- PL 3 出土遺物
- PL 4 遺跡全景（北から）
A-2トレンチ全景、竪穴住居SB10
- PL 5 B-2トレンチSB59・60、B-2トレンチ柱穴群
C-1トレンチ全景、C-2トレンチ全景
- PL 6 土坑SK26遺物出土状況、土坑SK50遺物出土状況
- PL 7 出土遺物
- PL 8 調査前の朝神遺跡、調査後の土塁・堀
- PL 9 A地区全景、溝SD4遺物出土状況
- PL10 掘立柱建物SB3、掘立柱建物SB21
- PL11 土壇墓SX2、土坑SK10・11
- PL12 B地区全景、溝SD24・25
- PL13 A地区溝SD4出土遺物（1）
- PL14 A地区溝SD4出土遺物（2）
- PL15 A地区溝SD4出土遺物（3）
- PL16 A・B地区出土遺物
- PL17 Aトレンチ北部全景、Bトレンチ全景、Aトレンチ南部全景
- PL18 掘立柱建物SB7、土坑SK13遺物出土状況
- PL19 調査区全景、土壇墓SX2
- PL20 土坑SK3、土坑SK4
- PL21 調査区南部全景、掘立柱建物SB4
- PL22 土坑SK1遺物出土状況、口北台遺跡調査風景
- PL23 出土遺物
- PL24 調査区全景、竪穴住居SB1
- PL25 井戸SE6、土坑SK3
- PL26 出土遺物
- PL27 調査区全景、溝SD2
- PL28 調査区南部全景、形象埴輪
- PL29 A区全景、土坑SK1
- PL30 A区全景、B区全景
- PL31 A区南部、土坑SK4
- PL32 B区掘立柱建物SB1、C区遺構全景
- PL33 A区出土遺物、石碇
- PL34 A・B区出土遺物
- PL35 調査区全景、掘立柱建物SB1
- PL36 出土遺物
- PL37 調査区全景、調査区東部全景
- PL38 中央部掘立柱建物群、西部掘立柱建物群
- PL39 井戸SE15、SX20、井戸SE56
- PL40 出土遺物
- PL41 出土遺物
- PL42 出土遺物
- PL43 出土遺物
- PL44 出土遺物

挿図目次

- 第1図 調査遺跡位置図
- 西沖遺跡**
- 第2図 遺跡位置図
- 第3図 遺跡地形図
- 第4図 調査区位置図
- 第5図 A区掘立柱建物配置図
- 第6図 A区西部遺構平面図
- 第7図 A区中央部遺構平面図
- 第8図 A区東部遺構平面図
- 第9図 掘立柱建物SB17遺構実測図
- 第10図 B区遺構平面図
- 第11図 A区出土遺物実測図
- 第12図 B区出土遺物実測図
- 浮田遺跡**
- 第13図 遺跡位置図
- 第14図 遺跡地形図
- 第15図 A-1トレンチ遺構平面図
- 第16図 土坑SK9遺物出土状況
- 第17図 A-2トレンチ遺構平面図
- 第18図 A-3トレンチ遺構平面図
- 第19図 B-1トレンチ遺構平面図
- 第20図 B-2トレンチ遺構平面図

- 第21図 土坑S K 26遺物出土状況
- 第22図 土坑S K 50遺物出土状況
- 第23図 土坑S K 57遺物出土状況
- 第24図 土坑S K 61遺物出土状況
- 第25図 B-3 トレンチ遺構平面図
- 第26図 C-1 トレンチ遺構平面図
- 第27図 C-2 トレンチ遺構平面図
- 第28図 A トレンチ出土遺物実測図
- 第29図 B トレンチ出土遺物実測図(1)
- 第30図 B トレンチ出土遺物実測図(2)
- 第31図 C トレンチ出土遺物実測図
- 第32図 浮田遺跡における中世土師器皿変遷表

朝神遺跡

- 第33図 調査区位置図
- 第34図 調査前の土塁測量図
- 第35図 調査後の土塁・堀測量図
- 第36図 土塁・堀土層断面図
- 第37図 堀・土塁・表土出土遺物実測図

才良遺跡

- 第38図 遺跡位置図
- 第39図 調査区位置図
- 第40図 A地区遺構平面図
- 第41図 土墳墓S X 2平面図
- 第42図 S K 10・11、S K 13・14遺構実測図・土層断面図
- 第43図 溝S D 4 遺物出土状況
- 第44図 S D 4 出土遺物実測図(1)
- 第45図 S D 4 出土遺物実測図(2)
- 第46図 S D 4 出土遺物実測図(3)
- 第47図 S D 4・S B 8 出土遺物実測図
- 第48図 遺物実測図
- 第49図 B地区遺構平面図、土層断面図
- 第50図 B地区出土遺物実測図

澤田遺跡

- 第51図 S B 7 遺構実測図
- 第52図 調査区位置図
- 第53図 A トレンチ遺構平面図
- 第54図 S B 16・17・18・19遺構平面図
- 第55図 澤田遺跡出土遺物実測図
- 第56図 B トレンチ遺構平面図

山之東遺跡

- 第57図 遺跡地形図、右上；遺跡位置図
- 第58図 調査区位置図
- 第59図 遺構平面図、土墳墓S X 1・S X 2 遺構実測図

中尾山遺跡

- 第60図 遺跡地形図、右上；遺跡位置図
- 第61図 調査区位置図
- 第62図 遺構平面図
- 第63図 S K 3・S K 4・S X 5 遺構実測図
- 第64図 遺物実測図

敷田遺跡

- 第65図 遺跡位置図
- 第66図 遺跡地形図
- 第67図 調査区位置図
- 第68図 S B 4 遺構実測図
- 第69図 S K 2 遺構実測図
- 第70図 遺構平面図
- 第71図 S K 1 遺物出土状況図
- 第72図 遺物実測図

口北台遺跡

- 第73図 調査区位置図

西条遺跡

- 第74図 遺跡地形図
- 第75図 調査区位置図
- 第76図 遺構平面図
- 第77図 S E 6 遺構実測図・土層断面図
- 第78図 S B 1 出土遺物
- 第79図 遺物実測図

河崎遺跡

- 第80図 遺跡位置図
- 第81図 遺跡地形図
- 第82図 遺構平面図

光明寺遺跡

- 第83図 遺跡位置図
- 第84図 遺跡地形図
- 第85図 調査区位置図
- 第86図 遺構平面図、右下；S D 2 遺物出土状況
- 第87図 遺物実測図

迎山遺跡

- 第88図 遺跡地形図
- 第89図 調査区位置図

第90図 S K 1 遺構実測図・断面図

第91図 遺構平面図

第92図 遺物実測図

第93図 埴輪実測図

三垣内遺跡・大垣内遺跡

第94図 遺跡地形図

第95図 調査区位置図

第96図 遺構平面図

第97図 S K 1 遺構実測図

第98図 遺物実測図

西田遺跡

第99図 A区調査区位置図

第100図 B区調査区位置図

第101図 遺構平面図

第102図 遺物実測図

外山遺跡

第103図 遺跡位置図

第104図 遺跡地形図

第105図 調査区位置図

第106図 A区遺構平面図

第107図 B区遺構平面図

第108図 C区遺構平面図

第109図 A区S K 4 出土遺物実測図（1）

第110図 A区S K 4 出土遺物実測図（2）

第111図 A区S K 4 出土遺物実測図（3）

第112図 A区S K 5 出土遺物実測図

第113図 B区出土遺物実測図

第114図 C区出土遺物実測図

本郷遺跡

第115図 調査区位置図

第116図 遺構平面図、右下；掘立柱建物S B 1 実測図

第117図 遺物実測図

家野遺跡

第118図 遺跡位置図

第119図 遺跡地形図

第120図 調査区位置図

第121図 遺構平面図

第122図 S K 8・36遺構実測図

第123図 S B 9～13遺構実測図

第124図 S B 25～32遺構実測図

第125図 S B 43～53遺構実測図

第126図 S E 56・15遺構実測図

第127図 S D 14土層断面図

第128図 S K 17・S X 20遺構実測図

第129図 縄文・弥生遺物実測図

第130図 S K 7 出土遺物実測図

第131図 S K 7・24出土遺物実測図

第132図 S K 17ほか土坑出土遺物実測図

第133図 S E 56出土遺物実測図

第134図 その他の遺構、包含層出土遺物実測図

表 目 次

第1表 平成元年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧

第2表 発掘調査（本調査）遺跡一覧

第3表 発掘調査（立合調査）遺跡一覧

第4表 現地説明会等開催一覧

第5表 西沖遺跡出土遺物観察表

第6表 B-2 トレンチ土坑一覧表

第7表 B-2 トレンチ溝一覧表

第8表 C-1 トレンチ土坑一覧表

第9表 C-1 トレンチ溝一覧表

第10表 浮田遺跡出土遺物観察表

第11表 朝神遺跡出土遺物観察表

第12表 才良遺跡A地区出土遺物観察表

第13表 敷田遺跡出土遺物観察表

第14表 西条遺跡出土遺物観察表

第15表 円筒埴輪観察表

第16表 口径分類による焙烙個体表

第17表 土坑S K 4 出土焙烙分類表

第18表 土坑S K 5 出土焙烙分類表

第19表 外山遺跡出土遺物観察表

第20表 本郷遺跡出土遺物観察表

第21表 掘立柱建物一覧表

第22表 家野遺跡出土遺物観察表

I 前 言

県教育委員会文化課では、各種公共事業の実施予定について、庁内各開発関係課あて事業照会をおこない、次年度以降の事業計画について内容を把握するとともに、早い段階での遺跡の保護協議ができるよう努めている。

しかし県営ほ場整備の場合、広大な事業面積に対し、当該年度の調査がほぼ終了する冬場の短期間で、分布調査、試掘調査を実施して協議資料を作成しなければならず、保護協議の結果、工法上切り盛りの関係でやむなく記録保存に至る遺跡の調査面積が最終的に確定するのが、次年度当初にまでずれ込む場合が多い。また麦の転作奨励策や通年施行という工期の限定がからみ、調査期間の点ではかなり制約を受けているのが現状であり、年々増加する調査面積の拡大に伴い、調査担当者個人にかかる負担も増えている。

最近のほ場整備の動向は、事業対象域が漸次平野部から山間部に移行しており、必然的に協議対象となる遺跡数も増加の傾向にある。中小河川に面する河岸段丘上は、古代から恰好の生活の場であり、特

に縄文遺跡や中世の遺跡の発見例が相次いでいる。

このように遺跡立地が沖積地から洪積地へと移行傾向にあるが故に、水田面の段差が顕著な場所では、耕土直下が遺構面となる場合が多く、工法上、切り盛りの変更に支障をきたす場合や、耕土を動かすだけの表土扱いでも、遺跡の保護上、問題となる場合が増加しつつある。そのため調査を年度送りとする遺跡数も年々蓄積され、今後、調査予算の問題、調査担当者の人員増や質的向上の問題とも合わせて、抜本的な解決を図っていく必要がある。

農地の改良は今に始まったわけではない。しかし過去のそれは自然地形に制約されながらの微変であり、大型重機を駆使し、短期間のうちに農道や流路を変え、古代・中世の条里遺構や歴史的環境を大きく改変する現代のほ場整備事業とは質的に異なる。だからこそ関係開発機関との早期かつ円滑な保護調整はもちろんのこと、なお一層、関係者への埋蔵文化財に対する理解と協力が強く望まれるところである。

1 分 布 調 査

平成元年度農業基盤整備事業については、昭和63年7月末に農林水産部各関係課あてに事業照会を行い、同年9月にその回答を得た。そこで早速文化課では、同年12月から平成元年2月にかけて、事業計画図面（縮尺1：1000）をもとに県下の事業予定地全域について分布調査を実施した。また年度途中で急拠追加事業になった地区については、元年10月に分布調査をした。

その結果の詳細は第1表の通りであるが、ほ場整備事業については事業面積641.2haのうちで77件（遺跡数）、面積にして691.480㎡もの遺物包含地、古墳等を確認した。この段階では、遺物の散布が希薄であったり、立地面を重要視した遺跡も含まれるが、分布調査の限界を考慮し、少なくとも試掘調査

の要があると判断したものについては、すべて遺跡として取りあげることになっている。このほか県営土地改良総合整備事業の鶴川原東部南地区で1遺跡、県営畜産経営環境整備事業の度会地区で1遺跡が確認された。

一方、農道整備事業関係についても並行して分布調査を実施した結果、揮発油税財源身替農道の伊賀町新堂友田第2地区で古墳らしき遺跡が1基ルート上にかかっていることが判明した。

これらの分布調査結果については、各々事業主管課である農村整備課、及び耕地課を通して各所轄農林事務所などに報告するとともに、遺跡の現状保存、あるいは工法上、極力設計変更をして遺跡の保護に努めるよう強く要請した。

事業名	事務所名	地区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	事業地内遺跡 面積(m ²)	措置		
県 営 ほ 場 整 備 事 業	桑名	藤原中部	20	新屋遺跡	員弁郡藤原町市場字新屋	-	試掘・工事可		
				北林遺跡	” ” ” 字北林	-	” ・ ”		
		十社北部	20	田辺鳥井西遺跡	” 北勢町田辺	-	” ・ ”		
				川原観音西遺跡	” ” ” 川原	-	” ・ ”		
		四日市 八風	11	鶴見塚	四日市市西村町上條	-	試掘・工事可		
		四日市南部	26	向山遺跡	” 山田町向山	-	” ・ ”		
				大倉遺跡	” ” 大倉	4,700	” ・ 工法変更し保存		
				樫ノ木遺跡	” ” 樫ノ木	700	” ・ ”		
				中尾山遺跡	” ” 中尾山	700	” ・ 立会調査 700m ²		
		合川・下之庄	27	口北台遺跡	鈴鹿市徳居町口北台	6,400	” ・ ” 130m ²		
				敷田遺跡	” ” 敷田	19,000	” ・ 本調査 1,900m ²		
				西条遺跡	” ” 西条	300	昭和63年度送り分を立会調査 290m ²		
		津 芸濃南部	14.5	下川遺跡 (A～C区)	安芸郡芸濃町雲林院字宗下	61,200	試掘・本調査 3,980m ²		
				(D～E区)	” ” ”		” ・ 立会調査 1,170m ²		
		中郷	3.5	井之広遺跡	一志郡嬉野町釜生田字井之広	3,300	” ・ 本調査 2,790m ²		
				イバノ尾2号墳	” ” ” 字見行谷	120	地区除外		
		大里	5	河崎遺跡	津市大里睦合町字河崎	3,500	試掘・立会調査 60m ²		
				西野々遺跡	” ” 山室町字西野々	-	” ・ 工事可		
				宮下遺跡	” ” ” 字宮下	-	” ・ ”		
				長沢遺跡	” ” ” 字長沢	-	” ・ ”		
		穴倉川沿岸	15	光明寺遺跡	安芸郡安濃町光明寺東戸部	6,000	” ・ 本調査 175m ² 立会調査 300m ²		
				迎山遺跡	” ” 今徳字迎山	3,000	” ・ 立会調査 320m ²		
		久居	26	前川原遺跡	久居市七栗字前川原	15,000	” ・ 本調査 130m ²		
		美里中南部	22	三垣内遺跡	安芸郡美里村北穴倉字三垣内	2,200	” ・ 立会調査 600m ²		
				大垣内遺跡	” ” ” 字大垣内	1,800	” ・ ” 470m ²		
				西田遺跡	” ” 家所字西田	3,840	” ・ ” 1,000m ²		
				西出遺跡	” ” 三郷字西出	7,000	昭和63年度送り分本調査 1,000m ²		
		家城 家野	14.6	家野遺跡	一志郡白山町南家城	25,000	” ・ ” 2,200m ²		
		松阪 東黒部	14	天神遺跡	松阪市東黒部町天神	1,700	試掘・事業送り		
				堀坂川沿岸	40	伊勢寺遺跡	” 伊勢寺町世古	2,600	昭和63年度送り分本調査 2,600m ²
				大坪遺跡	” ” 大坪	21,900	試掘・立会調査 940m ²		
				向王子A遺跡	” ” 向王子	1,300	” ・ 工法変更し保存		
				向王子B遺跡	” ” ”	17,000	” ・ 立会調査 320m ²		
				大垣内遺跡	” ” 大垣内	32,000	” ・ ” 700m ²		
				辻墓垣内遺跡	” ” 辻墓垣内	1,000	” ・ 工法変更し保存		
				辻之前遺跡	” ” 辻之前	1,700	” ・ ”		
				十一遺跡	” ” 十一	-	” ・ 工事可		
		阪内川左岸	25	大足遺跡	” 大足町	6,300	” ・ 立会調査 320m ²		
				杉遺跡	” ” 杉	9,000	” ・ 工法変更し保存		
				古野遺跡	” 藤ノ木町古野	-	” ・ 工事可		
	八幡沖	10	園遺跡	” 丹生寺町園	-	” ・ ”			
			赤松遺跡	” ” 赤松	-	” ・ ”			
	明星	26	外山遺跡	多気郡明和町養村	17,500	” ・ 本調査 1,200m ² 立会調査 800m ²			

第1表 平成元年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧(1)

事業名	事務所名	地区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	事業地 内遺跡 面積(m ²)	措置
県 営 ほ 場 整 備 事 業				北野遺跡	多気郡明和町糞村	4,620	試掘・本調査 平成2年度に送り 6,300m ²
				本郷遺跡	“ “ 明星	-	“ “ 昭 和63年度送り分 本調査 510m ²
				は称穴遺跡	“ “ 糞村	-	“ “ 工事可
		丹生	30	西沖遺跡	“ 勢和村丹生	20,800	“ “ 立会調査 180m ²
				大川原遺跡	“ “ “	-	“ “ 工事可
				花岡遺跡	“ “ “	-	“ “ “
				野端遺跡	“ “ “	-	“ “ “
		伊勢一之瀬	16	四良ヶ瀬遺跡	度会郡度会町南中村	-	“ “ “
		上野河合	15	小富気遺跡	阿山郡阿山町馬場	800	“ “ 工法変更し保存
				澤遺跡	“ “ “	-	“ “ 工事可
		柘植川沿岸	60	西沖(上之段)遺跡	“ 伊賀町柏野	20,000	“ “ 本調査 3,440m ²
				堀塚遺跡	“ “ 新道	-	“ “ 工事可
				新堂遺跡	“ “ “	1,200	“ “ 地区除外
				瀬古遺跡	“ “ “	-	“ “ 工事可
		上野北部	36	高羽根遺跡	上野市服部町	15,500	“ “ 立会調査 200m ²
				川久保遺跡	“ 西条	3,600	“ “ 工法変更し保存
				上荒堀遺跡	“ 東条	-	“ “ 工事可
				伊賀国府推定地	“ 一之宮・坂之下	-	範囲確認調査 3,000m ²
		上野東部	20	宮山遺跡	“ 上友生	15,000	試掘・事業送り
				堂の前遺跡	“ “	2,800	試掘・事業送り
				口上の平遺跡	“ “	2,000	“ “ 工法変更し保存
				森見遺跡	“ “	-	“ “ 工事可
		上野南部第2	48	森脇遺跡	“ 市部	13,000	昭 和63年度送り分本調査 7,000m ²
			澤田遺跡	“ “	12,000	“ “ 本調査 500m ²	
			才良遺跡	“ 才良	55,000	“ “ “ 680m ²	
	上野南部第3	73	上林A遺跡	“ 上林	-	“ “ 工事可	
			上林B遺跡	“ “	-	“ “ “	
			下神戸A遺跡	“ 下神戸	-	“ “ “	
			浮田遺跡	“ “	200,000	“ “ 本調査 2,200m ² 立会調査700m ² は次年度送り	
			朝神遺跡	“ “	400	昭 和63年度送り分を本調査 400m ²	
			617.6	73 件		642,480	
平成元年度 県営ほ場整備 追加事業	上野	上野北部	23.6	長良遺跡	上野市印代字長良	10,000	試掘・工法変更し保存
				新寺A遺跡	“ 服部町字新寺	10,500	“ “ 立会調査 250m ²
				新寺B遺跡	“ “ “	13,500	“ “ “
				間田遺跡	“ “ 字間田	15,000	“ “ 平成2年度送り
			総件数	77 件	遺跡総面積	691,480	
県営土地改良 総合整備事業	四日市	鷯川原東部南		山之東遺跡	三重郡菟野町下村字山之東	400	試掘・立会調査 70m ²
県営畜産経営 環境整備事業	伊勢度会	3.5	稲垣外遺跡	度会郡大宮町打見	-	“ “ 工事可	
かんがい排水 特別事業	上野	上野北部		南田遺跡	上野市土橋字堂木	128,000	立会調査 1,250m ² 平成2年度送り
揮発油税 財源身替農道	上野	友田第2		(古墳)	阿山郡伊賀町新堂	-	試掘・工事可
広域管農団 地農道整備	津	中勢I期 (グリーンロード)		赤坂遺跡	安芸郡芸濃町岡本字赤坂	1,100	“ “ 本調査 次年度以降 1,100m ²

第1表 平成元年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧(2)

2 試掘調査

県営ほ場整備事業にかかる76遺跡のうち、昨年度に試掘調査を実施していた7遺跡を除き、平成元年2月～3月にかけてすべての箇所で試掘調査を実施した。そのトータル面積は9,281㎡に及ぶ。試掘坑は、基本的に4m×2mとし、田面一筆毎に設定することを原則としているが、畑作等の関係で十分にできない場所も何カ所があり、遺跡の範囲を確定するにあたり、若干問題も残った。

こうして個々の遺跡について、遺跡の広がり、遺物包含層や遺構面の深度、遺構の内容などの詳細な情報を収集し、この資料をもとに遺跡保護に立脚した工事設計変更等について具体的に各農林事務所との間で協議をもった。

その結果、横穴式石室が露呈する嬉野町イバノ尾2号墳、墳丘測量や周溝確認調査で径40mの円墳と判明した伊賀町新堂古墳、森脇遺跡内に所在する糠塚古墳については、当初から地区除外という形で現状保存されることになった。

四日市管内では、鈴鹿市合川・下之庄地区の敷田遺跡の対応が憂慮された。当地区では中ノ川左岸の段丘上に位置する遺跡群の調査を県営ほ場整備事業に伴い、昭和61年から実施してきたが、今回の敷田遺跡もその1つで、鎌倉時代を中心とする面積19,000㎡に及ぶ遺跡であることが確認された。しかし最終的に盛土等による工法変更により、大部分は保存され、削平部分2,350㎡が本調査の対象となった。

津管内の下川遺跡は、芸濃町下川集落の北に広がる台地上に営まれた鎌倉時代～室町時代の集落跡と考えられ、面積61,200㎡に及ぶ広大な遺跡であることが確認された。そのため面的な部分については、極力工法変更し保存するよう調整した結果、大半が排水路部分の調査となった。

松阪管内でも多くの遺跡が確認された。特に伊勢

寺町南方に広がる畑地は、広範囲に奈良時代以降の遺跡が群在しており、伊勢寺廃寺を中心とする良好な歴史的環境をもつ地域として注目されているところから、その対応に苦慮したが、大部分は地下に保存され、排水路部分についてのみ、立会調査を実施することになった。

上野管内でも同様に、伊賀町西沖遺跡が20,000㎡、上野市才良遺跡が55,000㎡、上野市浮田遺跡が200,000㎡と、いずれも事業地内に広大な遺跡が含まれることが確認されたが、面的な部分は大部分が工事の設計変更により保存され、多くは排水路部分の調査となった。

こうして県下各地で実施した試掘調査については、その結果をもとに、農村整備課、各農林事務所と何度も協議を重ね、年間の調査能力や予算面も考慮に入れながら検討した結果、最終的に平成元年度調査対象遺跡は、昨年度から送りの未調査遺跡7遺跡を加え、本調査が16遺跡30,725㎡、立会調査が21遺跡20,180㎡として集約化された。

一方、伊賀国府推定地の確認調査は、平成2年度以降に予想される県営ほ場整備事業に先立ち、遺漏のない保護調整ができるよう、伊賀国府の所在とその範囲、遺構深度等の資料を得るため、国と県農林水産部の協力を得、昭和63年度より実施している。広義の試掘調査とも言える。本年度は一之宮地区と、遺物の散布状況が濃密である柘植川北岸の国町地区を対象地区とし、トレンチ調査で総延長1,000m、面積にして3,000㎡の調査を実施することにした。

このほか、県営土地改良総合整備事業に伴い、菰野町山之東遺跡と、広域営農団地農道整備事業（中勢I期グリーンロード）に伴い、芸濃町赤坂遺跡の試掘調査を実施し、前者は立会調査（70㎡）、後者は平成2年度以降に本調査（1,100㎡）を実施することになった。

3 調査の経過とその成果

新設された埋蔵文化財センターへの移転という慌

ただしい中でスタートした平成元年度の調査は、早

速5月連休明けからの調査開始に向け、諸準備を行うとともに、所定の事務手続き等を行った。

昨年度からの送り分であった伊勢寺遺跡の調査は、地元から田植えの時期までにはほ場整備事業が完了するようにとの強い要望があり、面調査(1,600㎡)終了の期限が、6月初旬という極めて厳しい条件のもとで、5月8日から調査を開始した。調査を進める過程で、奈良・平安時代から鎌倉時代にかけての2重、3重に巡る区画溝が検出されたほか、多量の瓦罫類、全国的に見て類例のない三彩陶器が出土するなど、当調査区が伊勢寺廃寺の北限部に相当することが分かってきた。しかし昨年度からの調整経緯もあり、記録保存に留めざるを得なくなったことは、痛恨の窮みである。

この伊勢寺遺跡とほぼ同時期に、北勢で敷田遺跡、中勢で井之広遺跡、上野で浮田・朝神遺跡の調査に着手した。

これらにやや遅れて、美里村西出遺跡の調査を5月10日から開始した。重機で表土を除去したところ、遺物包含層上面から押型文土器が多量に出土し始め、中世の整地層も確認されたことから、慎重な調査が要求され、1現場3名体制で臨むことにした。調査の結果、縄文時代早期の竪穴住居23棟、焼土坑3基が検出されたほか、遺物では6,000点以上の押型文土器が出土し、その編年研究のうえで貴重な資料が得られたばかりでなく、西日本屈指の縄文時代早期の遺跡であることが確認された。遺構深度は当初の予想より深かったため、幸い工事による削平の影響は少なく、大部分が地下に保存されることになった。

春に開始した調査が終盤を迎えた6月後半から7月中旬にかけ、麦の収穫を待って、いよいよ夏場の調査に突入した。上野では、本年度最も調査面積の大きい森脇遺跡の調査を皮切りに、明和町本郷遺跡、白山町家野遺跡、明和町外山遺跡の調査を順次開始した。森脇遺跡に次いで調査面積の大きかった芸濃町下川遺跡は、8月1日に調査に入った。

森脇遺跡では、昨年度の調査にひき続き、今回も奈良時代の掘立柱建物を多数検出したが、これらと柱通りの異なる飛鳥時代の掘立柱建物群も新たに検出された。このほか遺跡内に残る糠塚古墳が、その周溝調査から全長37mの帆立貝式前方後円墳であっ

たことが判明したほか、古墳時代の溝を堰止めた井堰の跡が良好な状態で検出された。

家野遺跡では、溝によって囲まれた屋敷地と考えられる3つのブロックが検出された。各ブロックでは、それぞれ室町時代の掘立柱建物、石組み井戸、広場があり、中世の村落形態を解明するうえで貴重な成果が得られた。

当初遺構が薄いと思われた外山遺跡では、近世の土師器鍋・皿類が多量に一括投棄された土坑が、2基見つかると、今まで空白地帯であったその編年的位置付けについて一石投げられることになった。

9月に入り、ほ場整備事業の工事発注が始まると、これと並行し松阪管内では、大足遺跡、大坪遺跡、大垣内遺跡などの立会い調査をほぼ同時期に着手した。排水路部分の調査が中心となったため、遺跡の全容を把握し難いが、大足遺跡では周溝と思われる溝から朱塗りの2重口縁壺がほぼ完形で出土したのが注目される。

稲の収穫が伊勢平野に比べて遅い上野では、10月から伊賀国府推定地の調査と伊賀町西沖遺跡の調査に入った。国府推定地の調査では、柘植川北部の国町地区で、ほぼ真北方向にのる大型掘立柱建物群や区画溝の一部が検出されたほか、遺物では、奈良時代中期から平安時代末期にかけての多量の土師器をはじめ、緑釉陶器、円面硯、墨書土器が出土するなど、当地区が伊賀国府の一部に相当する可能性が高くなってきた。今後その保護について、早急に国(文化庁)、県農林水産部、上野市、県教育委員会との間で協議するとともに、地元地権者に理解を得るための啓蒙活動が必要となってこよう。

10月後半から11月中旬にかけ、津・四日市管内では、三垣内遺跡の調査をはじめ5件の小規模な立会調査を実施した。この内、河崎遺跡と西田遺跡は、農林事務所と施行業者との間の連絡不徹底のため、立会調査予定地の一部が削平されるという不祥事をひきおこした。早急に連絡をとったが遺跡が元へ戻るわけではなく、2度とこのような事態をおこさないよう反省を促し収束せざるを得なくなったことは甚だ遺憾であった。

こうした中で、下川遺跡の立会調査予定面積が3,060㎡と突出していたため、農林側で経費の面や

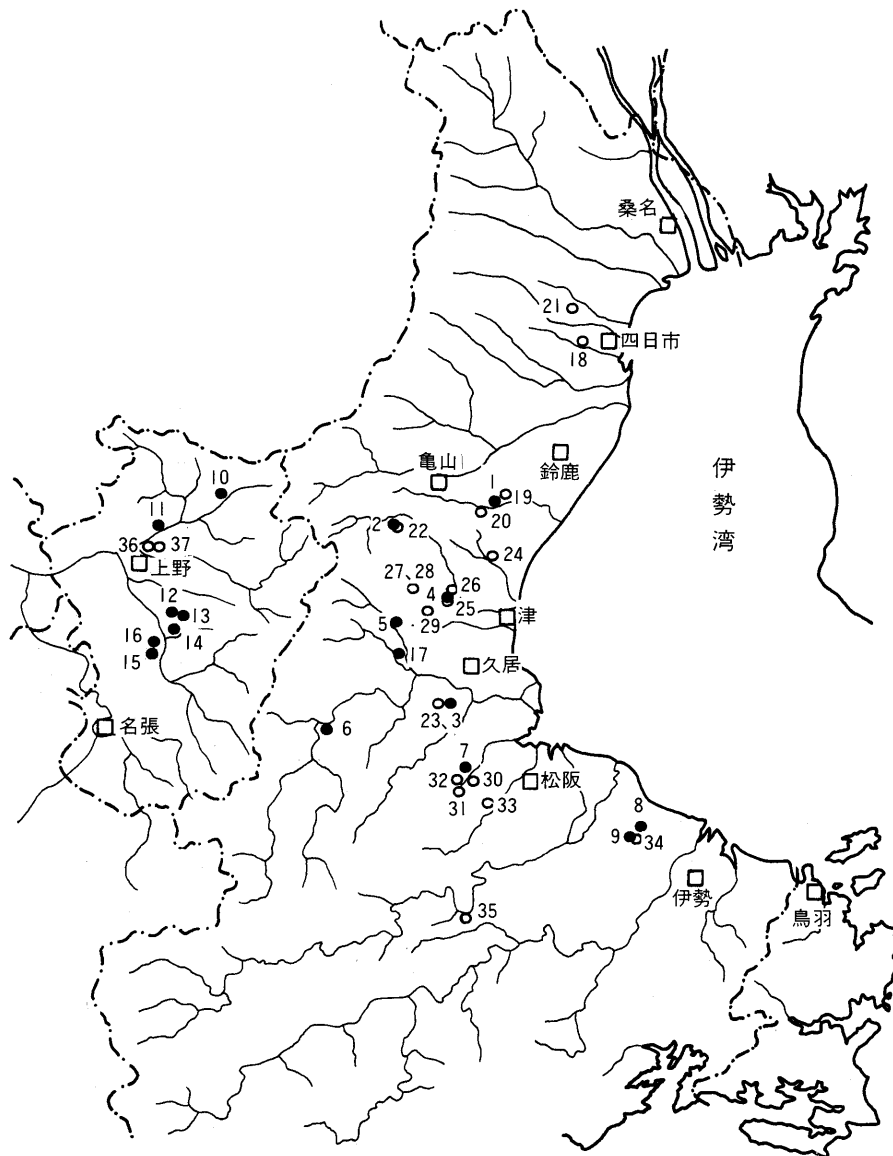
立会調査の考え方について危惧が生じた。そこで10月28日に、急埤、農村整備課、津農林水産事務所、文化振興課、埋蔵文化財センターの4者でその対応につき協議し、とりあえず重機で線的なトレンチ調査を入れ、遺跡の広がりやを再度確認することとなり、最終的に1,170㎡を立会調査することになった。

上野市才良遺跡は、伊賀地方の弥生時代後期を代表する遺跡として著名であり、白鳳期の瓦を出土した財良廃寺も包括する広大な遺跡である。11月半ばに調査を開始し、弥生時代の遺跡の広がりや、財良廃寺の範囲を確認するうえで注目されたが、直接寺院に関係する遺構は検出されず、当調査区までは及ばないものと考えられる。一方、弥生時代の遺構としては、弥生後期の土器が多量に廃棄された溝の一

部が検出され、伊賀地方の弥生文化を語るうえで貴重な資料が得られた。

12月に入り、本年度最後の調査として、安濃町光明寺遺跡と、上野市澤田遺跡の調査を開始した。光明寺遺跡は、地元の意向が複雑にからみ、工事計画が2転、3転した。そのため当初調整した調査予定面積が大幅に減少した。

かくして県下各地で間断なく実施した本年度の現地調査は、12月27日、森脇遺跡の調査終了をもってすべて完了した。前述のように本年度も特筆すべき幾多の成果があった。これらの成果を早く世に出すのが、我々調査に携わった者の責務であると肝に銘じ、多忙な中、担当者の熱意と努力で、ようやく第1分冊の完成をみた。 (倉田直純)



第1図 調査遺跡位置図

位置図 番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査担当	発掘調査期間
1	敷田遺跡	鈴鹿市徳居町敷田	1,900	服部芳、三枝	平成元年5月8日～同年7月3日
2	下川遺跡	安芸郡芸濃町雲林院	3,980	宮田、渡辺、東	平成元年8月1日～同年12月22日
3	井之広遺跡	一志郡嬉野町釜生田	2,790	小林、福田	平成元年5月2日～同年6月26日
4	光明寺遺跡	安芸郡安濃町光明寺	175	堀田	平成元年12月11日～同年12月15日
5	西出遺跡	安芸郡美里村三郷	1,000	服部久、堀田、山岡	平成元年5月10日～同年7月29日
6	家野遺跡	一志郡白山町南家城	2,200	服部久、山岡	平成元年7月17日～同年9月29日
7	伊勢寺遺跡	松阪市伊勢寺町	2,600	宮田、東	平成元年5月8日～同年7月6日
8	本郷遺跡	多気郡明和町本郷	510	倉田、東	平成元年7月3日～同年7月14日
9	外山遺跡	多気郡明和町蓑村	1,200	小林、福田	平成元年7月17日～同年8月11日
10	西沖遺跡	阿山郡伊賀町西之沢	3,440	中嶋、荒木	平成元年10月3日～同年12月16日
11	伊賀国府推定地	上野市一之宮・坂之下	2,600	服部久、三枝	平成元年10月2日～同年12月22日
12	森脇遺跡	上野市市部	7,000	森川常、山岡	平成元年6月20日～同年12月27日
13	澤田遺跡	上野市市部	500	山岡	平成元年12月11日～同年12月26日
14	才良遺跡	上野市才良	680	倉田、山岡	平成元年11月15日～同年12月8日
15	浮田遺跡	上野市上神戸	2,200	中嶋、荒木	平成元年5月29日～同年8月11日
16	朝神遺跡	上野市下神戸	400	中嶋、荒木、渡辺	平成元年5月8日～同年6月2日
17	前川原遺跡	久居市七栗前川原	130	久居市(辻)	平成元年10月4日～同年10月12日

第2表 発掘調査(本調査)遺跡一覧

位置図 番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査担当	発掘調査期間
18	中尾山遺跡	四日市市山田町中尾山	700	堀田、服部芳	平成元年7月31日～同年8月11日
19	口北台遺跡	鈴鹿市徳居町口北台	130	服部芳	平成元年7月4日
20	西条遺跡	鈴鹿市三宅町西条	290	服部芳	平成元年7月11日～同年7月18日
21	山之東遺跡	三重郡菰野町下村	70	服部芳、堀田	平成元年10月13日～同年10月16日
22	下川遺跡	安芸郡芸濃町雲林院	1,170	宮田、東	平成元年11月15日～同年12月12日
23	井之広遺跡	一志郡菰野町釜生田	50	小林	平成元年6月2日
24	河崎遺跡	津市大里睦合町河崎	60	倉田	平成元年11月8日
25	光明寺遺跡	安芸郡安濃町光明寺	300	堀田	平成元年11月2日
26	迎山遺跡	安芸郡安濃町今徳	320	堀田	平成元年11月1日～同年11月14日
27	三垣内遺跡	安芸郡美里村北穴倉	600	堀田、福田	平成元年10月20日～同年10月26日
28	大垣内遺跡	安芸郡美里村北穴倉	150	堀田	平成元年10月20日
29	西田遺跡	安芸郡美里村家所	1,000	小林、福田	平成元年11月13日～同年11月17日
30	大坪遺跡	松阪市伊勢寺町	940	倉田、堀田	平成元年9月18日～同年10月12日
31	向王子B遺跡	松阪市伊勢寺町	320	福田	平成元年10月2日～同年10月12日
32	大垣内遺跡	松阪市伊勢寺町	470	服部芳	平成元年9月18日～同年9月29日
33	大足遺跡	松阪市大足町	320	小林、福田	平成元年9月8日～同年9月22日
34	外山遺跡	多気郡明和町蓑村	800	小林、福田	平成元年9月4日～同年10月16日
35	西沖遺跡	多気郡勢和村丹生	180	小林	平成元年10月20日
36	高羽根遺跡	上野市服部町高羽根	200	服部芳	平成元年10月26日
37	新寺A・B遺跡	上野市服部町新寺	250	三枝	平成元年12月18日～同年12月21日

第3表 発掘調査(立会調査)遺跡一覧

遺 跡 名	開催年月日	参加人員	備 考
西 出 遺 跡	平成元年7月29日	80名	・美里村公報8号で紹介
家 野 遺 跡	平成元年10月5日	80名	・白山町「古里深訪講座」で講演 ・家城小学校4年～6年(120名)現地見学
伊賀国府推定地	平成元年12月16日	150名	
森 脇 遺 跡	平成元年12月16日	100名	
西 沖 遺 跡	平成元年12月16日	50名	
下 川 遺 跡	平成元年9月29日	70名	・雲林院小学校5年・6年現地見学
才 良 遺 跡	平成元年11月30日	120名	・丸山中学校2年現地見学

第4表 現地説明会等開催一覧

Ⅱ 阿山郡伊賀町 西沖遺跡

1. 位置と環境

伊賀は、四周を山に囲まれた盆地の国であり、伊賀町は、その北東部に位置し、東は鈴鹿山脈・布引山地で伊勢と境をなし、北は標高約250mの第3紀鮮新世の水口丘陵で近江と境をなす。鈴鹿山脈の一ツ家小平山（標高649.5m）に源を発する拓殖川が、その支流とともに形成した河岸段丘上にこの地域は発達してきた。西沖遺跡（1）もこの拓殖川右岸の河岸段丘上に位置している。

伊賀町内では古墳時代以前の遺跡は少なく、小波田遺跡^①（2）で縄文時代のサヌカイト製有舌尖頭器が、川西地区で摩製石斧が表採されている^②他、

天道遺跡^③（3）で縄文土器の破片が出土している。

古墳時代になると、河合川が拓殖川に合流する周辺の丘陵には多くの古墳が築造される。西沖遺跡の北西約600mの水口丘陵の先端部に築かれた東山古墳^④（4）は、楕円形の墳丘に割竹形木棺を直葬した主体部を有するもので、高杯、小型器台、四獣鏡などの出土品から4世紀前半の築造と考えられ、伊賀地方で最古の古墳とされる。東山古墳から1kmほど東方の両河川が合流するあたりの右岸の丘陵には5世紀に入って築造される外山3号墳をはじめ数基の前方後円墳と20数基の円墳からなる外山古墳群



第2図 遺跡位置図（1：50,000、国土地理院 上野1：25,000から）

(5)、昨年発掘調査が行われた奥弁天4号墳(6)、源六谷1号墳^④や、巨大な横穴式石室が推定される勘定塚古墳(8)などの古墳がある。左岸には5世紀に入ってからの築造と考えられ、全長188mをはかり県下最大の前方後円墳御墓山古墳(9)がある。一方、伊賀町内には19基の古墳が知られている。拓殖川左岸の丘陵には天長山1号墳^⑤(10)がある。この古墳は昭和4年に発掘され、5世紀末の須恵器・環頭大刀・勾玉等が出土し、内部主体は木炭樫であったとされている。周辺には同2号墳と、内田1・2号墳(11)がある。拓殖川右岸では、本遺跡北東1kmの権現山山頂に昭和38年に工事中発見された権現山古墳^⑥(12)がある。6世紀前半の須恵器を出土しているが消滅して現存しない。更に東方1kmの河岸段丘上には、円筒埴輪片が表採されている新堂古墳(13)がある。拓殖川と支流倉部川にはさまれた台地先端部には、6世紀後半の須恵器、土師器、鉄製品、玉類を出土し、横穴式石室を内部主体とする筒御前古墳^⑦(14)が所在した。これらの古墳は、点在する小規模古墳であり、古墳時代に拓殖川上流へと開発が進んでいったことが窺える。

古墳時代の集落については、北中溝遺跡^⑧(15)で古墳時代初め頃の竪穴住居11戸とこれらの建物を画する大溝が検出されている。竪穴住居のなかにはベッド状の高まりをもつものが2戸あり、興味深い。天道遺跡^⑨では古墳時代後期の竪穴住居8戸が検出されている。

拓殖川上流へと開発が進んだことは、その後、この地域で条里遺構が良く残っていることから考えられる。この地域は、旧伊賀国阿拝郡に属しその条里は「19の条」と「7の里」が認められ、その内には大化前代の田積とみなされる古い水田地割りも認められるが、条里制施行は壬申の乱後とされる^⑩。福永正三氏は、この地域の条里地割を復原し、その阡線はN25°Wの方位とされている。^⑪西沖遺跡は、十一条四里二十九坪から三十二坪内に含まれる。

伊賀国では、東大寺をはじめとする幾内大寺院の進出が著しく、平安時代以降多くの寺領荘園が経営され、この地域でも東大寺北廂とされる玉竜荘、予野荘(東大寺領)・拓殖荘(大安寺領)・柏野荘(東大寺領・長溝堂領)・壬生野荘(春日若宮領)・

河合荘(萬壽院領)などが営まれた。四面廂の掘立柱建物・倉庫をもつ建物群を検出した的場遺跡^⑫(16)は、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて存続した遺跡であり、柏野荘の荘域に含まれると考えられ、柏野荘との関係が注目される。

これらの荘園が隆盛をきわめたのは、平安期を中心とする時期であり、交通上も畿内とのむすびつきが深い。飛鳥京・平城京・平安京から伊賀を経て東国へ至る官道が開かれた。東国への官道は、北伊賀と南伊賀を通る2つの道があり、伊賀町内はその北方筋にあたる。平城京からは、771年(和銅4)に阿拝郡新居駅(推定地上野市新居)が新設され、木津川沿いに大和から伊賀へ入り、拓殖川沿いに東進し、加太峠を越えて伊勢に至る道が開かれる。平安京からは、近江甲賀郡から伊賀邦拓植郷を経て、中拓植付近で従来の道と合流したと考えられる。886年(仁和2)には、近江国經由の阿須波道が開かれ、伊賀は幹線道からはずされる。伊賀国での頓宮跡に比定されるのが、近江からの道と大和からの道の交点と考えられる中拓植地内の斎宮芝遺跡^⑬(17)である。この遺跡では須恵器・土師器が出土しているが、7世紀前半のものであり、頓宮跡とは直接関係のないものであり、斎宮芝遺跡の性格解明は今後の課題である。この他の遺跡には、奈良時代の溝や鎌倉時代の掘立柱建物が検出された畦垣内遺跡^⑭(18)や平安時代中頃の黒色土器が出土している古屋敷遺跡(19)がある。

中世になると、荘園体制の弛緩に伴い在地領主層の動きが活発となり、その拠点として城館が築かれた。伊賀地域では580を越える中世城館が確認されており、その分布は一定地域に偏在する傾向がある。拓殖川流域も多く城館が築かれた地域であり、伊賀町内では川西、川東、新堂、下拓植、中拓植、倉部、小杉地区で特に集中している。これらの城館は集落内や集落の後背丘陵に位置し、一辺数十mの土塁で囲まれた単郭もしくは複郭程度の単純な郭構造をもつものが多い。これらは、戦国時代以降の構築と考えられ、恒岡氏城^⑮(20)のように天正伊賀の乱に際して構築されたものもある。柏野城(21)・壬生野城(22)は、ともに天正伊賀の乱の伊賀勢の拠点となった城である。(上村安生)



第3図 遺跡地形図 (1 : 6,000)



第4図 調査区位置図 (1 : 2,500)

2. 遺 構

西沖遺跡は、拓植川右岸の標高162～165mの河岸段丘上に営まれた中世を主体とする集落遺跡で、分布調査ならびに試掘調査の結果、事業地内遺跡面積は約20,000㎡におよぶ。なお、当初遺跡の名称は上之段遺跡と呼称していたが、上之段地区は当地より西方にあり、当地の小字名が西沖であることが判明したため、西沖遺跡と改称することにした。

調査は遺跡の北縁にあたる排水路部分540㎡のトレンチ調査と、拓植川に面した水田部分2,900㎡の面調査を実施した。

排水路部分では、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての溝、土坑、掘立柱建物等がいくつか検出されたが、幅2.5mのトレンチ調査であったため、遺構の全容を把握するまでには至らなかった。

面調査部分では、古墳時代後期の溝1条のほか、平安時代後期から末期にかけての掘立柱建物6棟、溝、土坑などを検出した。

遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、耕土（暗灰色土）→床土（明褐色砂質土）→遺物包含層（黄灰色砂質土）→地山（黄灰色粘質土）の順で、表土下約50cmで地山に達した。ここでは、一応面調査部分をA区、排水路部分をB区とし、以下に概要を述べることにする。

(1) A区の遺構

A. 古墳時代後期の遺構

SD16 北西から南西方向に穏やかに蛇行しながら走る幅1.0m～3.5mの溝。深さは、10cm～20cmと浅く、下流部で何度も流路を変え、溝幅が広がっているところから自然流路と考えられる。溝埋土か

らは陶邑古窯址群の須恵器編年のMT15型式に相当する須恵器杯身・杯蓋のほか、若干量の弥生土器が出土した。

B. 平安時代中期末～後期初頭の遺構

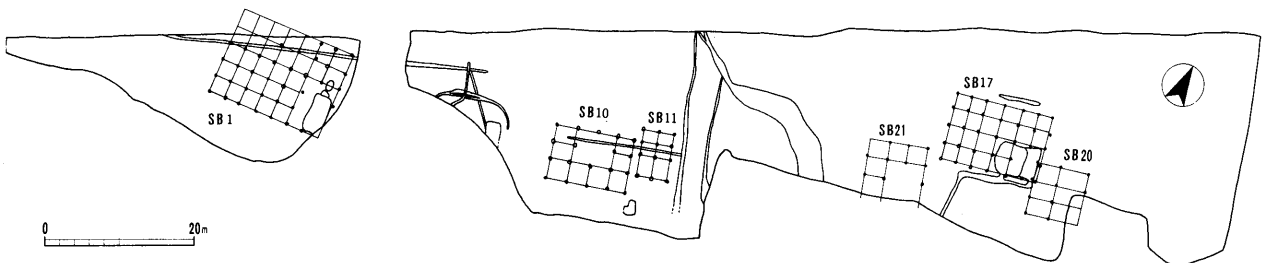
SB10 調査区中央部にある2間×2間の身舎に東・西・南に廂の付く東西4間(10.5m)×南北3間(7.1m)の東西棟建物。柱掘形は40cm～50cmで、大半の掘形で柱痕跡が明瞭に認められた。柱間寸法は一定しておらず、桁行2.75+2.7+2.35m、梁行2.25+2.25+2.6mを測る。棟方向はE18°Nを示す。西側柱通りの北から第2番目の柱掘形からは、10世紀末～11世紀初頭の黒色土器碗A類が出土しており、この建物の時期決定の一つの根拠となった。

SB11 SB10の東側に近接して建つ3間(6.3m)×2間(4.2m)の南北棟建物。梁行柱間は2.1mの等間であるが、桁行柱間は、北から1.7+1.8+2.8mと一定していない。この建物の南側柱通りが、SB10の南から第2列目の柱通りと揃うところから、ほぼ同時期の建物と推定した。

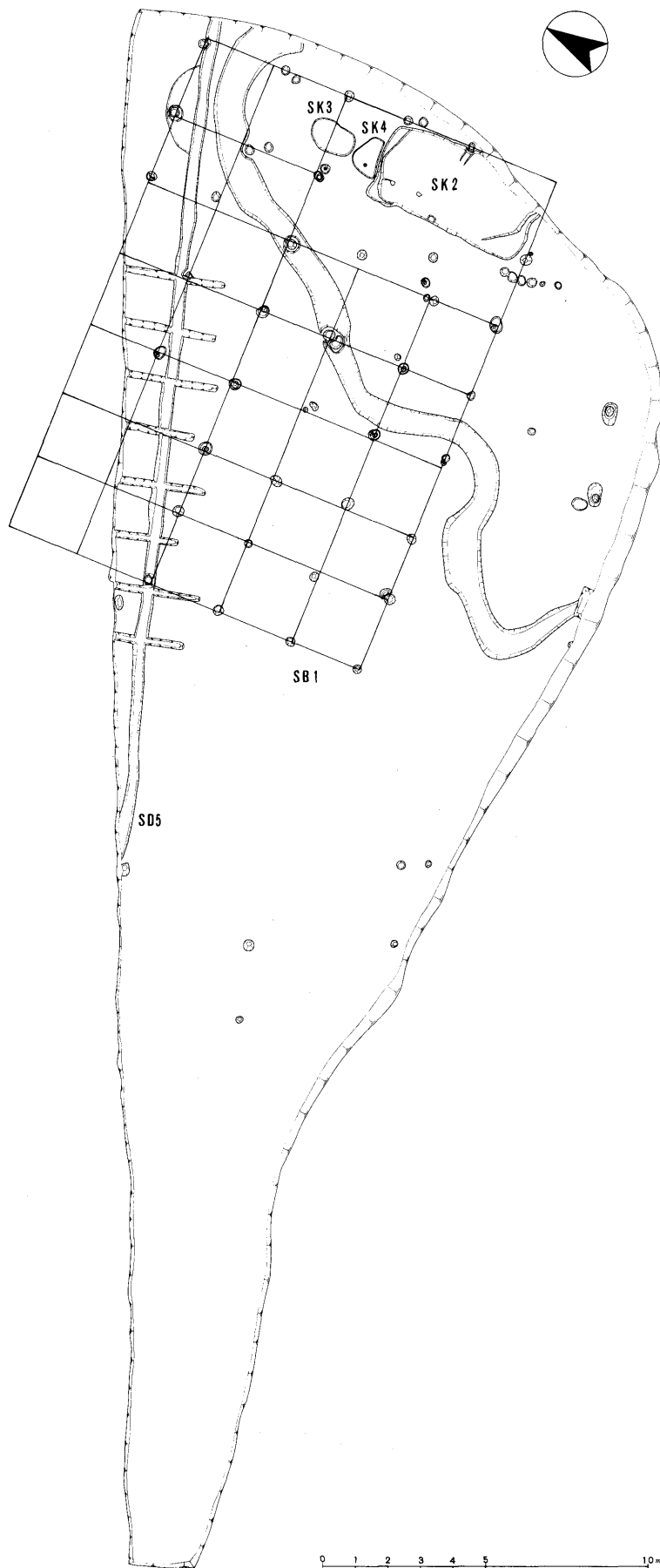
SD5 調査区西部北縁を東から西へ延びる細い溝。幅50cm、深さ10cm前後である。SB1の柱掘形は、この溝の埋土を切っており、これより新しい。

C. 平安時代後期後半～末期の遺構

SB1 調査区西部にある7間(16.05m)×5間(11.55m)の総柱の東西棟建物。今回検出された掘立柱建物の中で最も規模が大きく、南東隅には、瓦器碗・皿、土師器皿等が出土した5.1m×2.6mの浅い長方形の土坑SK2が伴う。桁行柱間は、2.25m等間であるが東の1間分のみ2.55mと広い。梁行柱間は、北から2.25+2.35+2.35+2.35+2.25mを



第5図 A区掘立柱建物配置図(1:1,000)



第6図 A区西部遺構平面図（1：200）

測り、北と南の1間分がやや狭い。柱掘形は径30cm前後の小さなもので、柱痕跡は10個の掘形で確認された。棟方向はE7°Nを示す。

SB17 調査区東部にある6間(13.2m)×4間(8.8m)の総柱の東西棟建物。南東隅に東西3間分(5.8m)×南北2間分(4.2m)の土坑SK18が伴う。土坑からは、11世紀後半～12世紀初頭の瓦器碗・皿、土師器皿・小皿・甕・羽釜等が比較的多く出土した。なお、土坑の東側3分の1が西側より5cm程高く、かつ土坑の南側2箇所排水溝が取り付くことから東側へ1間分建物を拡張したことも考えられなくはないが、土坑埋土の断面を見た限り、これを裏付ける確たる層位状況を認めることはできなかった。桁行柱間は、柱痕跡を結ぶと、2.05+2.05+2.5+2.5+2.05+2.05m、梁行桁間は2.0+2.2+2.45+2.15mを測る。棟方向はE15°Nを示す。

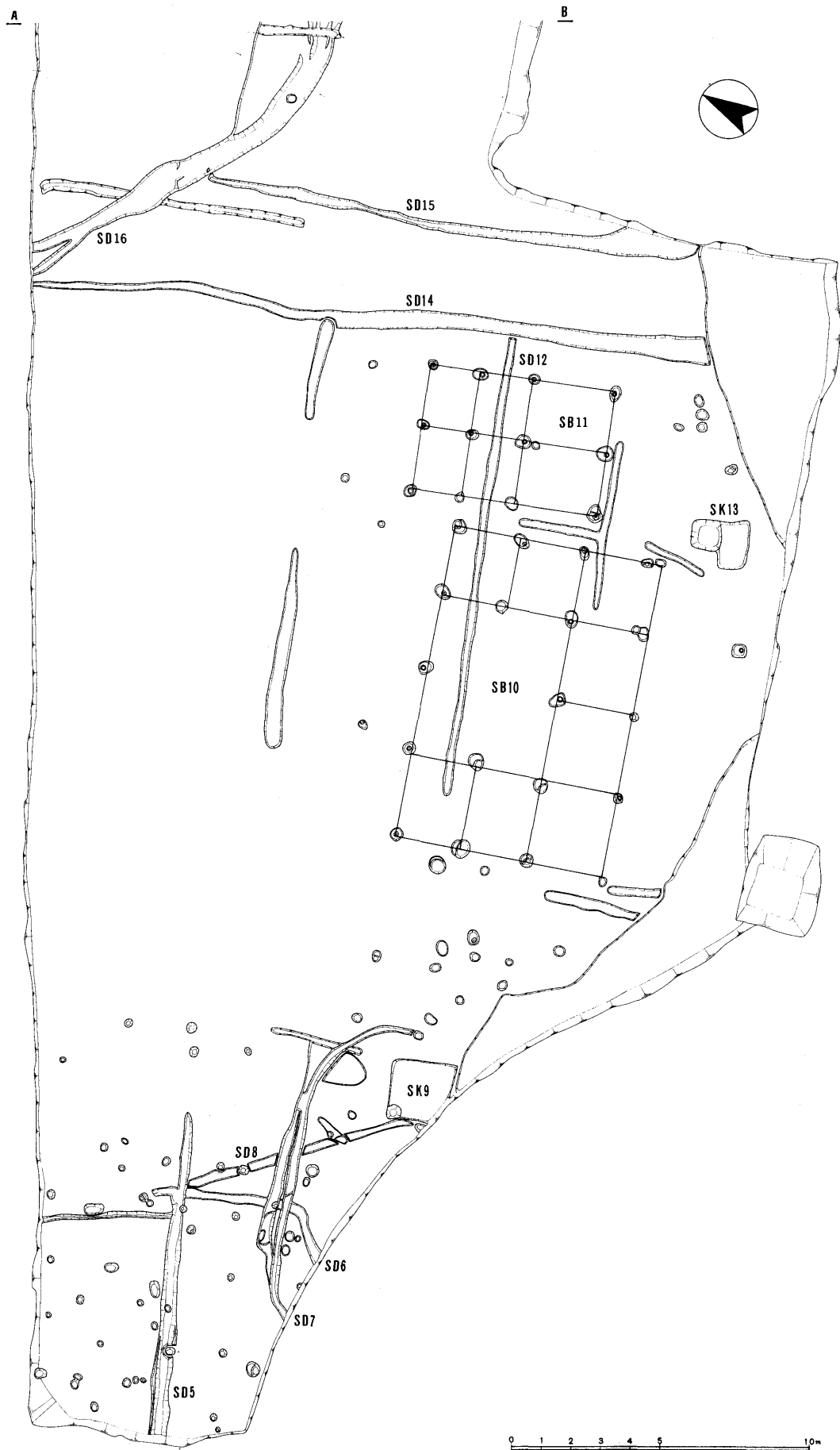
SD19 南東隅土坑SK18に取り付く排水溝。SB17の南側柱に沿ってほぼこれと併行して走り、南へ折れて段丘の端に至る。溝幅は50cm前後で、深さ15cmを測る。

SD7 調査区西部で検出した幅20cm前後の細い溝。11世紀後半代の瓦器碗、土師器小皿のほか、伊賀地方では究めて出土例の稀な12世紀前半～中頃の山茶碗等が出土した。

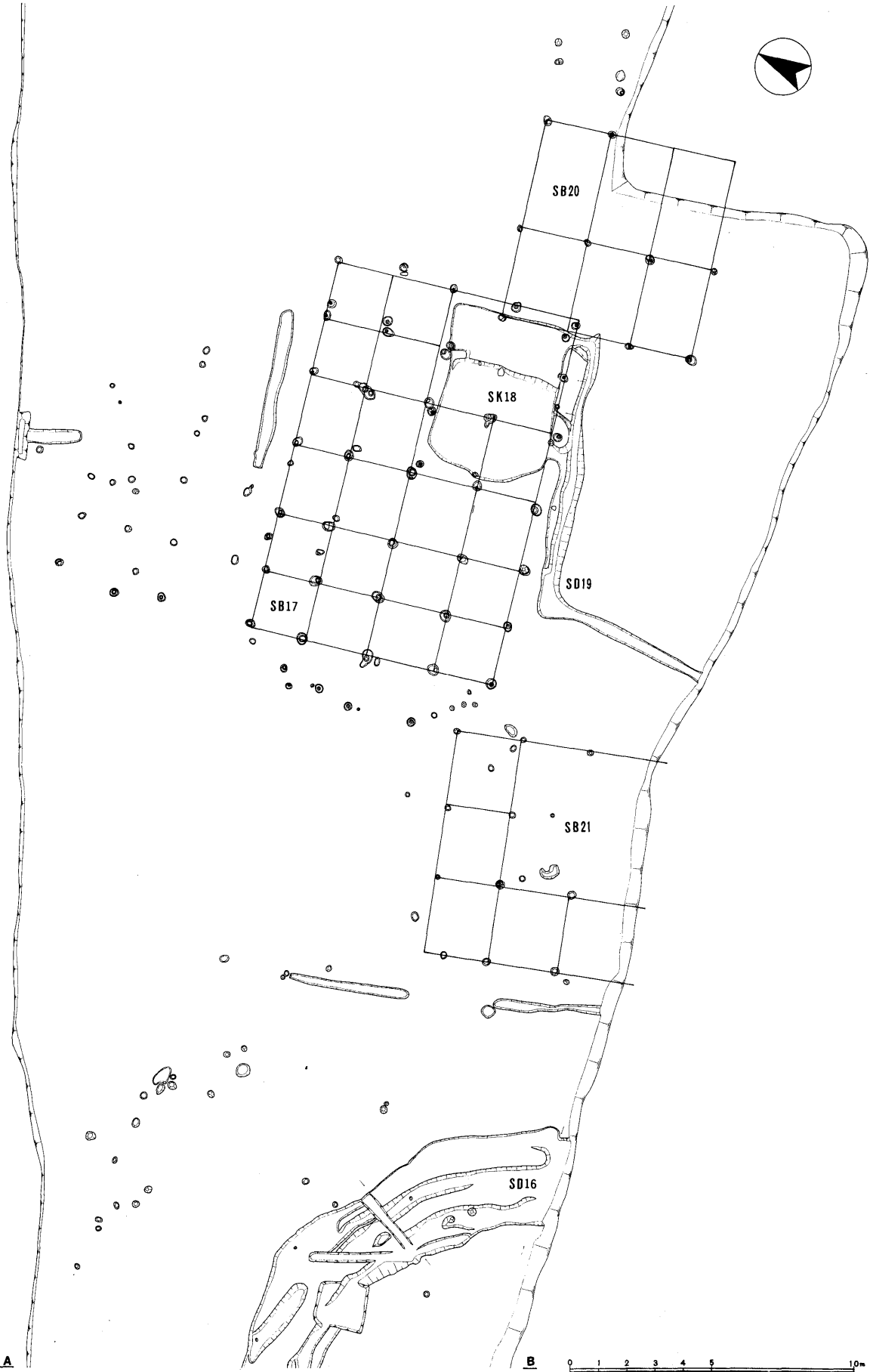
SK9 幅2m、深さ20cmの方形土坑で、南は調査区外へ延びる。瓦器碗・皿、土師器皿・甕の破片が少量出土した。

D. 鎌倉時代前半の遺構

SD15 調査区中央部を北から南に向かってほぼまっすぐに走る幅30cm、深さ4cm前後の細い溝。13世紀前半頃の瓦器片が少量出土したにとどまる。



第7图 A区中央部遺構平面図(1:200)



第8図 A区東部遺構平面図 (1 : 200)

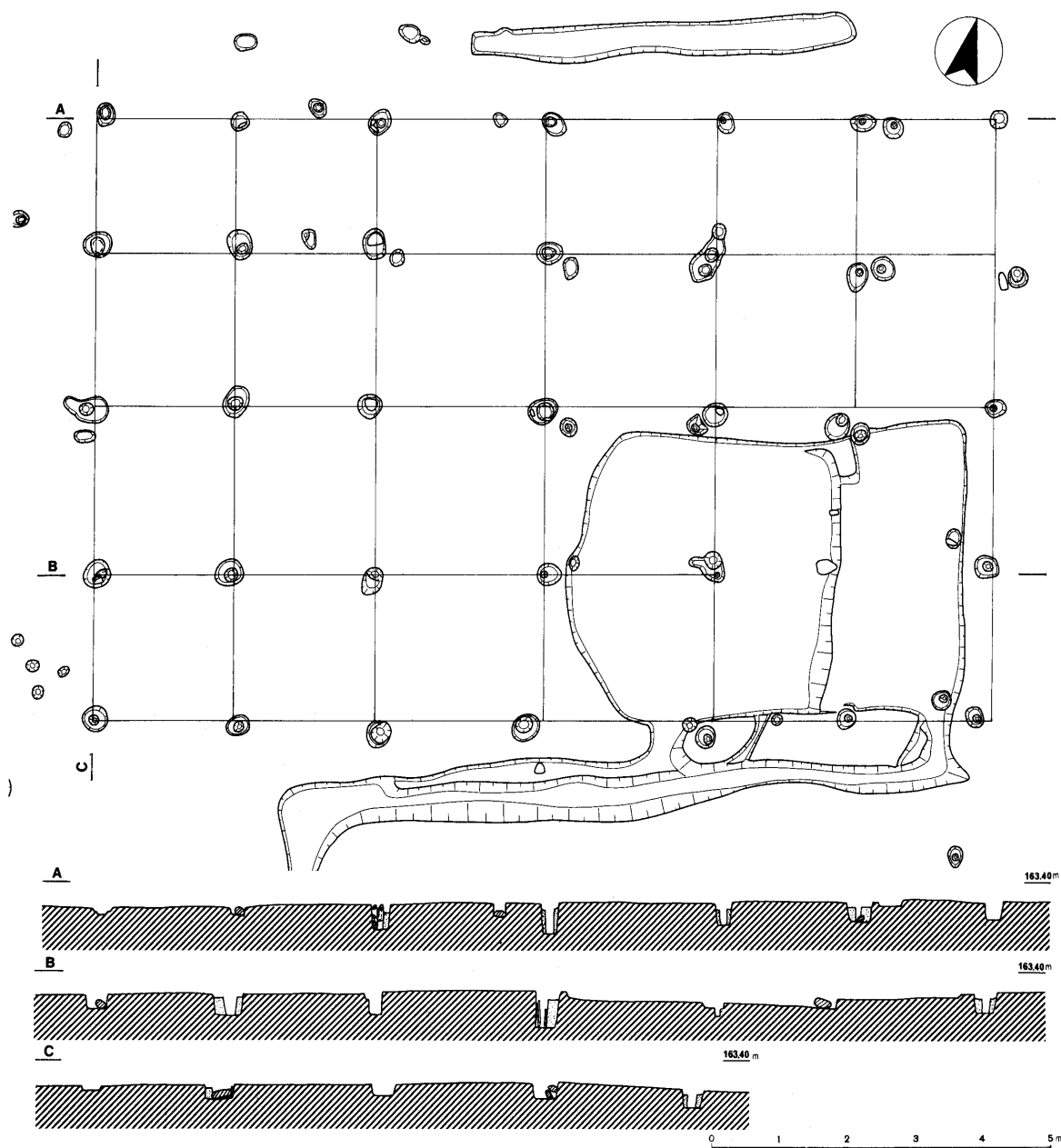
E. その他の遺構

遺構出土の遺物が極端に少なかったり、遺物が細片のため時期の決め難い遺構を時期不明遺構として取り上げた。なお、調査区全般にわたり、遺物包含層出土の土器は鎌倉時代前半頃までにおさまるところから、これよりは下らないものと思われる。

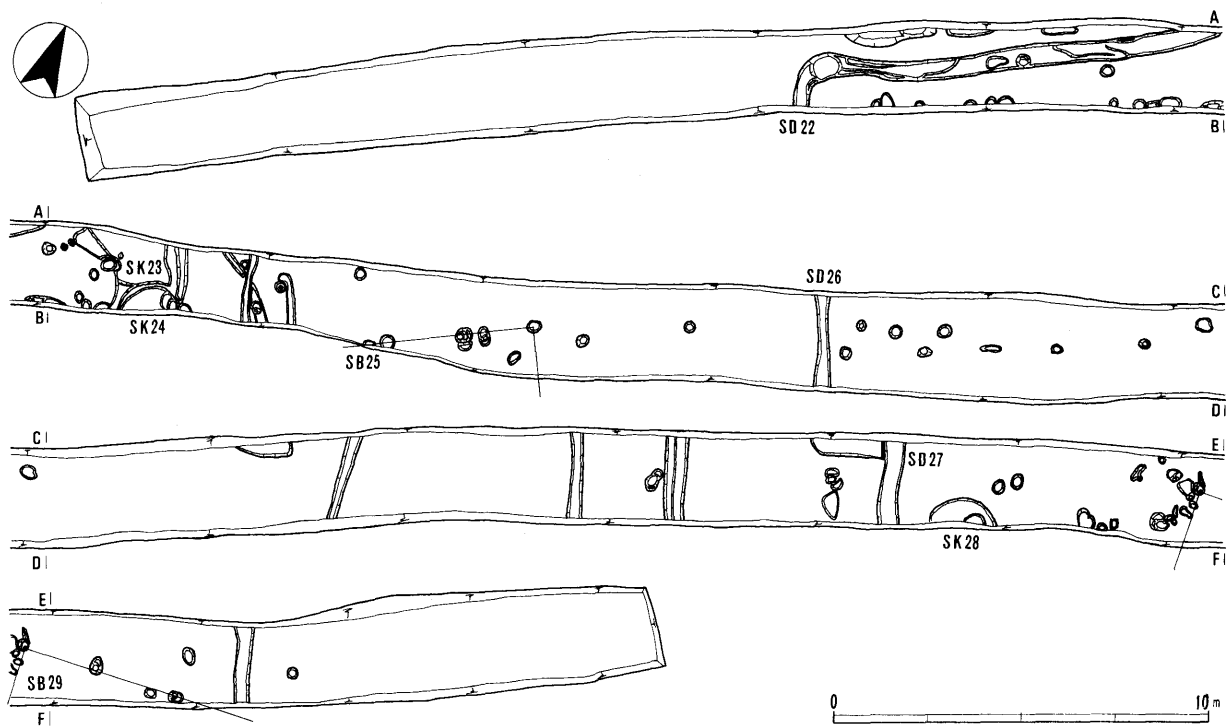
S B 20 S B 17と一部が重複し、時期的にこれと相前後する3間×2間の総柱建物。棟方向は南北棟建物とすればN16°Wを示す。柱掘形は、径20cm～30cmと小さい。桁行柱間は北から2.4+2.2+2.2mであるが、梁行柱間は異常に長く3.2+3.9mを測る。

S B 21 調査区東部にある3間×(3)間の建物で、南は調査区外へ延びるものと思われる。柱掘形はS B 20と同様、径20cm～30cmと小さいが、建物の平面プランはS B 10と似ている。東西方向の柱間は2.6mで、南北棟建物とすれば、N20°Wを示す。

その他、調査区の中央部から東部には、南北方向に走る小溝SD 6・SD 8・SD 14、東西方向の小溝SD 12や小規模な土坑SK 3・SK 4・SK 13などがある。このうちSK 4はS B 1の南東隅土坑であるSK 2に切られており、これより古い。



第9図 掘立柱建物S B 17遺構実測図(1:100)



第10図 B区遺構平面図(1:200)

(2) B区の遺構

東西トレンチは、3箇所に分かれ、総延長212mにもおよんだが、中央トレンチと東トレンチでは、顕著な遺構・遺物とも認められず、西部トレンチで溝、土坑、掘立柱建物などの一部を検出したにとどまる。いずれも遺構に伴う遺物は、細片が多く、時期を決め難いが、概ね平安時代末期～鎌倉時代初期におさまるものと考えられる。

SD 22 幅50cm、深さ10cm前後の溝。溝西部ではほぼ直角に南側へ折れ、またこの溝とはほぼ同一方向を示す掘立柱建物SB 25が存在するところから、屋敷地を囲う区画溝となる可能性も考えられる。

SK 23 北側が調査区外へ延びる不整形な土坑で深さ14cmを測る。内面にミガキを施す瓦器皿が出土。

SK 24 SK 23の南に接する楕円形土坑。深さ10cmを測る。平安時代末期の瓦器碗、土師器皿等が少量出土した。

SB 25 桁行3間以上の東西棟建物。柱掘形は35cm前後で、桁行柱間は2.0mを測る。棟方向は磁北に対してE28°Nである。柱掘形から鎌倉時代初期の瓦器碗が出土。

SD 26・27 いずれも調査区を南北に横断する幅30cm前後、深さ数cmの浅い溝。

SK 28 南側が調査区外へ延びる楕円形土坑。径2.7m以上、深さ10cmを測る。平安時代末期～鎌倉時代初期の瓦器碗が出土。

SB 29 桁行3間以上の東西棟建物。棟方向はE4°Nで、SB 25の棟方向とは大きく異なる。桁行柱間は2.1mで、柱掘形は30cm前後である。

3. 遺物

遺物は、A区とB区をあわせて、遺物整理箱で11箱分が出土した。その多くは、伊賀における中世の日常土器類の中で広く普及していた瓦器碗、瓦器皿類である。これに次いで出土量が多かったのが土師器皿・小皿で、このほか土師器甕・羽釜、黒色土器碗・山茶碗・白磁碗・緑釉陶器や、古墳時代の土師

器、須恵器も少量確認された。遺物の時期は、相対的にA地区では、11世紀後半～12世紀初頭のものが、B区では12世紀後半～13世紀初頭のものを中心になるものと考えられる。以下、比較的器種としてまとまりのある土坑、溝出土の遺物を中心に概述することにする。

(1) A区出土の遺物

A. 弥生時代後期・古墳時代後期の土器

溝S D16から出土した甕、須恵器蓋杯がある。

甕(1) 受口状口縁を呈するもので、体部外面に縦方向のハケメを施する。器面の保存が悪く、細片であるが弥生時代後期と思われる。

須恵器蓋杯(2~4) 田辺昭三氏の須恵器編年のMT15型式に相当し、6世紀前半頃のものと思われる。

このほかに、弥生時代後期と思われる口縁部片・底部片や古墳時代の土師器片が少量認められたが、自然流路からの出土遺物ということもあり、器面の摩耗著しく、時期の不明確なものが多い。

B. 平安時代中期末～後期初頭の土器

掘立柱建物S B10の柱掘形から出土した黒色土器碗A類と調査区東部包含層から出土の緑釉陶器小碗がある。

黒色土器(5) 体部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部はヨコナデされて細く尖がるように終わるので、口縁部内側の沈線や段は認められない。高台部分は欠いているが、やや外側に開く幅の広いものが付くものと思われる。器面の調整は、内面のみヘラミガキで、外面は弱い指頭圧痕が残る。黒色土器A類末期のものであろう。

緑釉陶器(42) 腰の張った小碗タイプのもので、器面の剥落が著しいが濃緑色の釉がみとめられた。高台は先端の尖がる断面三角形のものが付き、底部見込みに一条の浅い沈線が巡る。近江産の最末期のものと思われる。

C. 平安時代後期後半～末期の土器

この時期を代表する一群の資料として、掘立柱建物S B17の柱掘形及びこの建物に伴う土坑S K18、溝S D19出土の土器(6~24)、掘立柱建物S B1柱掘形及び土坑S K2出土の土器(25~34)、溝S D7出土の土器(35~41)をあげることとする。

S B17・S K18・S D19出土の土器には、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、土師器小皿、土師器甕、白磁碗等がある。

瓦器碗(6~12) 口径14.4cm~15.0cmで、器高指数は39~43を示し、腰の張る深碗タイプのもので

ある。このうち(6)は、内外面を密にヘラミガキし、底部に5本程度の近接したジグザク文の単位を十字形に配するもので、高台が高く、器壁が比較的厚いところから他の瓦器碗に比べ先行するものと思われる。山田氏による伊賀瓦器碗編年^⑩のI段階第2型式に相当するものであろう。このほか、底部のミガキには、ジグザク文(7)、格子文(9)、連結輪状文(8)等があり、I段階3型式からII段階第1型式に相当する。(11)は口縁部が強くヨコナデされて、外反気味に弱く屈曲するのでやや後出のものであろう。

瓦器皿(13~15) 口径9.0cm~10.8cmのものがある。(14)は、口縁部内外面をヘラミガキするほか、底部内面にジグザク文、同外面も短い乱方向のミガキを施す。(13)の底部内面には、瓦器碗(6)と同様のミガキ文が見られる。

土師器皿(16~18) 口径15.6cm~17.8cmのものがある。(16・17)は、口縁部を2段にヨコナデし、口縁部が弱く外反するもので、宇野隆夫氏による平安京内出土の土師器皿の分類とその編年^⑪に従えばC2類に相当し、平安京Ⅲ期(11世紀代)に位置付けられるものと考えられる。(18)は口縁部が1段ナデで、弱く内弯し、端部が丸いという特徴から同氏分類のD3類に相当しよう。

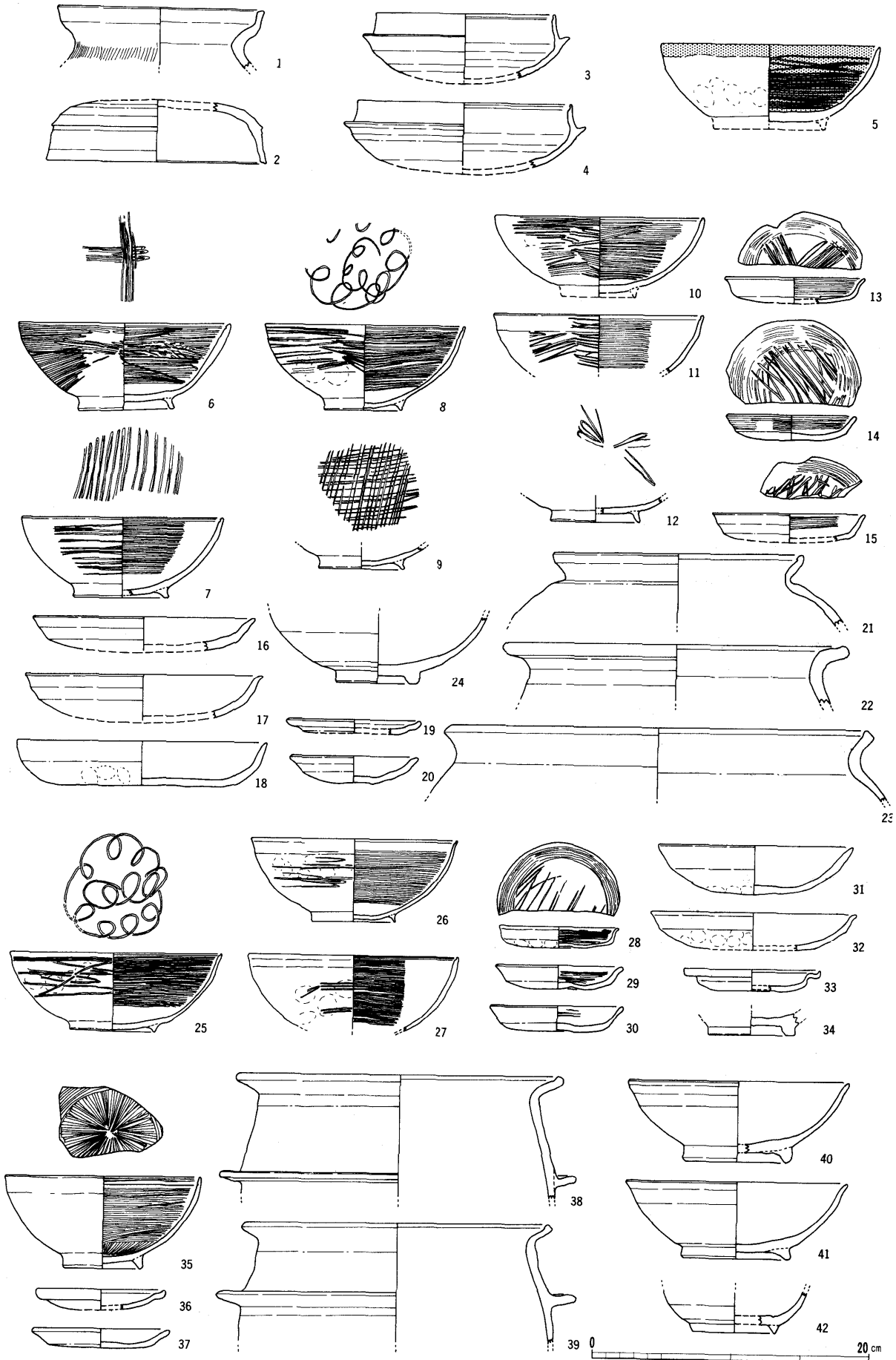
土師器小皿 「て」の字状口縁を呈するもの(19)と口縁部を2段にナデるもの(20)があり、土師器皿と同様、概ね平安京Ⅲ期に相当するものと考えられる。

土師器甕 口縁部の形態から、口縁端部を丸く内側に巻き込み内側に段をもつもの(21)、水平に近く開き端部が丸く終わる厚手のもの(22)、口縁端部を上方につまみ上げ、ヨコナデして端部外面に内傾する面をつくるもの(23)がある。なお、(22)は羽釜の口縁部かも知れない。

白磁碗(24) 口縁部を欠くがおそらく玉縁状口縁となろう。高台は削り出され、この外面まで淡灰白色の釉が厚く施釉される。

S B1・S K2出土の土器には、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、土師器小皿、白磁碗がある。

瓦器碗(25~27) 外面のヘラミガキが前述のものより若干疎で、高台は断面三角形の低くて細いも



第11图 A区出土遺物実測図(1:4)

のである。(25)の底部には、右回りの外周から内に向かって描かれた連結輪状文が認められたが、他は器面の残りが悪く不明である。

瓦器皿 (28~30) 口縁部内側のみヘラミガキするもので、口径は9cm前後と前述の一群より一回り小さい。底部内面に粗いジクザク文を施すもの(28)がある。

SB1・SK2出土の瓦器碗・瓦器皿は、以上のような形態・調整等の諸特徴から山田編年のⅡ段階1型式から2型式に相当するものと考えられる。

土師器皿 (31・32) 口縁部が弱く外反し、端部が細く終わる深めのもの(31)と口縁部が強いヨコナデにより外反した浅めのもの(32)がある。いずれも口縁部は1段ナデで、外底に指頭圧痕が認められた。

土師器小皿 (33) 口縁部の屈曲が鋭く「て」の字状口縁を呈するものである。

SD7出土の土器には、瓦器碗、土師器小皿、土師器羽釜、山茶碗等がある。溝からの出土遺物であるため、11世紀前半から12世紀中頃までの土器が混在する。

瓦器碗 (35) 体部から口縁部にかけて内弯気味に立ちあがる深碗タイプのもので、高く厚い高台が付く。器面の調整は、内外面とも密にヘラミガキするが、外面は器面の保存が悪く調整痕は不明瞭である。底部のミガキは菊花状を呈し、体部のミガキに先行する。口縁部内側の沈線は口縁部からやや下がった位置にある。以上の点でこの瓦器碗は、山田編年のⅠ段階第1型式に相当するものと考えられる。

土師器小皿 「て」の字状口縁を呈するもの(36)と平坦な底部に外傾する1段ナデの口縁部から成る

もの(37)がある。概ね11世紀代におさまるものであろう。

土師器羽釜 (38・39) 口径22cm前後で「く」の字に曲がった口縁の端部は、内側に丸く肥厚する。鏝は長さ3cm程で、体部中央より上方にやや上向き気味に貼り付く。胎土に石英、長石粒を多く含み、色調は暗褐色を呈する。

山茶碗 (40・41) 腰の張った体部、弱く外反する口縁部から成り、厚くてやや高い高台が付く。いずれも口縁部から体部内面にかけて淡緑色の自然釉が付着する。藤沢良祐氏による瀬戸窯山茶碗編年^⑨のⅡ段階3型式~4型式に相当し、12世紀前半~中頃のものと思われる。

(2) B区出土の遺物

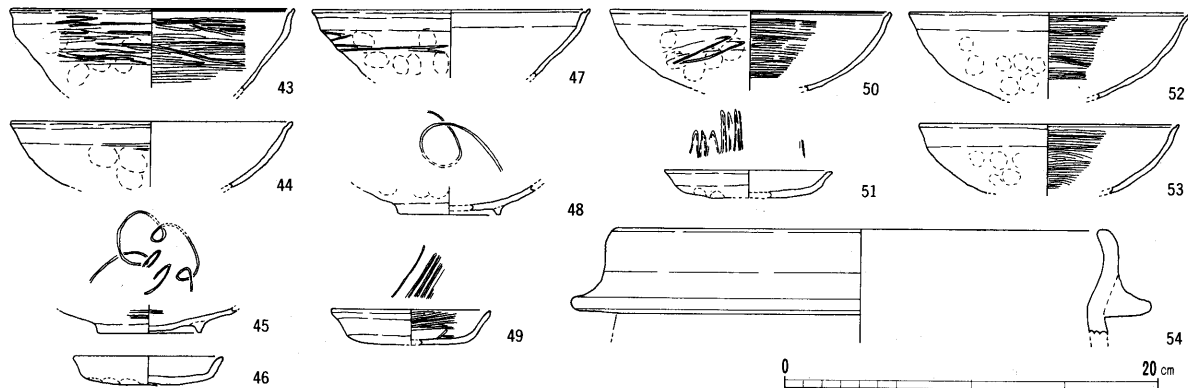
瓦器碗、瓦器皿のほか土師器皿・羽釜が少量出土した。いずれも小さな破片で遺構に伴う良好な一括資料は抽出できなかった。

瓦器碗 体部内面を密に、外面を指圧後粗くヘラミガキするもの(43・37・50)と、内面のみヘラミガキするもの(52・53)がある。底部の連結輪状文はかなり簡略化が進んでおり、これらは山田編年のⅡ段階3型式~4型式に相当し、12世紀後半~13世紀初頭にかけてのものであろう。

瓦器皿 (49)のように口縁部内面にヘラミガキを施すや古手のものも見られるが、(51)のような口縁部内面にヘラミガキを施さない器高の浅いものが多く認められた。

土師器皿 (64) 口縁部はヨコナデ、底部外面は指頭で押さえる。胎土は比較的良好である。

羽釜 (54) 内弯気味に立ち上がる口縁の下部には厚手の鏝が付く。淡赤褐色を呈し、胎土は粗い。



第12図 B区出土遺物実測図(1:4)

4. 結 語

調査の結果、西沖遺跡は、拓植川右岸に営まれた平安時代中期末から鎌倉時代初頭にかけての集落跡であることを確認した。検出した主な遺構は、大型の総柱掘立柱建物をはじめ、溝、土坑等であるが、遺構の重複がほとんどないところから、一定の場所に長期間居住空間を求めていたのではなく、10世紀末頃まず拓植川に近い段丘上に集落が形成されはじめ、この集落は12世紀初頭頃まで存続するものの、やがて拓植川から離れた北部の段丘上に集落が移動していったことが推察される。

特に今回の調査で注目された遺構としては、平安時代中期末～後期初頭に遡る総柱風の掘立柱建物S B10があげられる。その上部構造については、不明と言わざるを得ないが、ここでは建物の中央部の床束柱を欠くところから、一応2間×2間の身舎に3面に廂の付く3面廂付建物と考えている。目下、同様な建物の例は、伊賀地方の森脇遺跡で1例^⑩、伊勢地方の斎宮跡で3例^⑪が確認されているのみである。斎宮跡の3例はいずれも平安時代末期に位置付けられており、南東隅に土坑を伴い、北面に廂を有する点で、伊賀地方の建物とは若干の相違がある。平安時代後期（11世紀代）には、各地で床束柱をもつ3間×2間、4間×2間程度の小規模な掘立柱建

〔注〕

- ① 『伊賀町史』伊賀町 1979
- ② 注①文献に同じ
- ③ 『三重県埋蔵文化財年報19』三重県教育委員会 1989
- ④ 『三重県埋蔵文化財年報17』三重県教育委員会 1987
- ⑤ 岡本武和・藤井尚登『奥弁天4号古墳・源六谷1号古墳』阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1989
- ⑥ 森浩一・石部正志「古墳文化の地域的特色5 畿内およびその周辺」『日本の考古学』IV 1966
- ⑦ 吉水康夫「権現山古墳の出土の遺跡」『筒御前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1977
- ⑧ 吉水康夫『筒御前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1977
- ⑨ 『三重県埋蔵文化財年報』三重県教育委員会 1988
- ⑩ 注③文献に同じ
- ⑪ 栗原治夫「条里制施行の一形態—伊賀国郡の場合—」『日本古代史論集』下巻1962
- ⑫ 福永正三「古代の伊賀町」『伊賀町史』伊賀町 1979
- ⑬ 駒田利治『的場遺跡発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1978

物が出現し始めるが、3面廂付建物は、こうした建物と共に建物が中型化、大型化する典型的な中世掘立柱建物の過渡的な建物の一類型として扱えられよう。

一方、南東隅土坑を伴う掘立柱建物については、伊勢湾沿岸地域を中心にかなりの検出例が蓄積されつつあり、その多くは12世紀中頃以降に急速に広まったことが指摘されている^⑭が、今回検出の掘立柱建物S B1、S B17は、これらより50年程遡る11世紀後半～12世紀初頭に位置付けられるものであり、県下での初現例と言える。

以上のことから掘立柱建物における古代から中世への建築様式の変革は、あるいは伊賀地域が県内では先行する可能性も考えられる。今後、当地域での同時期の掘立柱建物の検出例が増えることを期待したい。

遺物では、溝S D7出土遺物の中に伊賀での出土例が稀な山茶碗が相伴していたことが注目される。ただ、遺物の章でも述べたように資料的に乏しく、溝出土の遺物でもあるという点で、瓦器碗、土師器小皿との年代的なズレもあって残念ながら伊賀の土器と山茶碗との明確な相伴関係を明らかにできなかったのは惜しまれる。

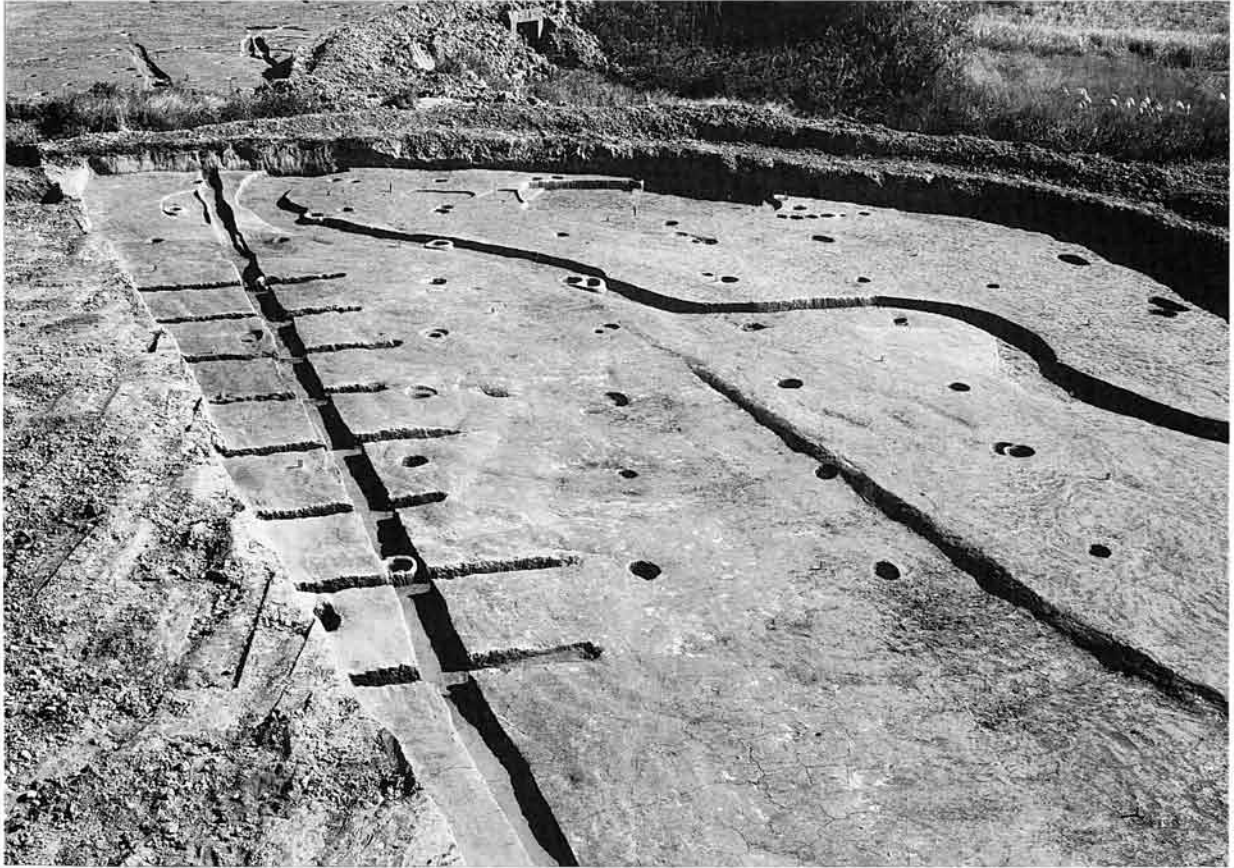
（倉田直純）

- ⑭ 「斎宮芝遺跡出土の遺物」『注⑧』伊賀町教育委員会 1977
- ⑮ 注③文献に同じ
- ⑯ 新田 洋・山下雅春『恒岡氏城跡調査報告』三重県教育委員会 1981
- ⑰ 山田 猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 1986
- ⑱ 宇野隆夫『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981
- ⑲ 藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民族資料館 1983
- ⑳ 『森脇遺跡（第二次調査）』現地説明会資料 三重県埋蔵文化財センター 1989 所収の掘立柱建物S B31
- ㉑ 倉田直純『史跡斎宮跡第37-4次発掘調査報告』明和町・三重県斎宮跡調査事務所 1985
- ㉒ 浅尾 悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990

No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	備考	実測No.
			口径	器高	底径					
1	弥生甕	S D16	14.6	-	-	受口状口縁 体部外面ハケメ	石英、長石 粒含む	黄褐色	口縁1 / 3残	36
2	須恵器杯蓋	"	15.8	-	-	天井部ロクロヘラケズリ	精良	青灰色	口縁1 / 10残	40
3	" 杯身	"	13.0	-	-	底部ロクロヘラケズリ	長石含む	"	ロクロ左回転	39
4	" "	"	15.4	-	-	"	"	"	"	120
5	黒色土器碗	S B10 (pit)	15.8	(6.0)	-	(内)ヘラミガキ (外)弱い指圧	密	黄褐色	黒色土器A類 高台を欠く	33
6	瓦器碗	S K18	15.0	6.4	6.6	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)ヘラミガキ	"	黒灰色	内底に十字のミガキ	70
7	"	"	14.5	5.7	6.5	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)ヘラミガキやや粗	"	"	内底にジグザグ文	53
8	"	S D19	14.4	6.1	5.6	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)ヘラミガキ粗	"	"	内底に連結輪状文	81
9	"	S K18	-	-	5.9		"	暗灰色	内底に格子目文	65
10	"	"	14.6	(5.8)	-	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)ヘラミガキやや粗	"	黒灰色	高台を欠く	69
11	"	"	15.0	-	-	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)ヘラミガキ粗	"	暗灰色	口縁部のヨコナデ明瞭	48
12	"	"	-	-	6.2		"	黒灰色	摩耗著しい 内底に粗い菊花状文	52
13	瓦器皿	"	9.8	1.8	-	(内)ヘラミガキ、 (口縁)ヨコナデ(外底)指圧	"	暗灰色	内底に十字のミガキ	55
14	"	S D19	9.0	1.8	-	(口縁)ヨコナデ後ヘラミガキ (外底)指圧後ヘラミガキ	"	"	内底にジグザグ文	87
15	"	S K18	10.8	-	-	(口縁)ヨコナデ (内)ヘラミガキ(外底)指圧	"	黒灰色	"	54
16	土師器皿	"	15.6	-	-	(口縁)ヨコナデ2段 (外底)ナデ	"	暗褐色		75
17	"	"	16.8	-	-	(口縁)ヨコナデ2段 (外底)ナデ	細粒若干 含む	"		78
18	"	"	17.8	3.2	-	(口縁)ヨコナデ1段 (外底)指圧、ナデ	長石含む	淡褐色	炭化物付着	71
19	土師器小皿	"	9.4	1.0	-	(口縁)ヨコナデ (外底)指圧	長石、雲母 含む	淡黄褐色	「て」の字口縁	67
20	"	"	8.8	1.9	-	(口縁)ヨコナデ (外底)指圧	石英、長石 粒含む	淡黄褐色		59
21	土師器鍋	"	17.6	-	-	(口縁)ヨコナデ、端部 (体部)ナデ	粗	茶褐色		50
22	"	"	24.8	-	-	(口縁)ヨコナデ	"	"		60
23	"	"	(29.8)	-	-	(口縁)ヨコナデ	雲母、砂粒 を含む	暗褐色		62
24	白磁碗	"	-	-	5.8	底部外面のみ露胎	精良	淡灰白色	ケズリ出し高台	46
25	瓦器碗	S K2	15.4	5.6	6.2	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)ヘラミガキ粗、(4単位)	密	黒灰色	内底に連結輪状文 11個	13
26	"	S B1 (pit)	14.8	6.0	6.0	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)指圧後ヘラミガキ粗	"	"	内底に連結輪状文 3個以上	4
27	"	"	15.0	-	-	(内)ヘラミガキ密、沈線 (外)指圧後ヘラミガキ粗	"	暗灰色	いぶし不良	8
28	瓦器皿	"	8.4	1.6	-	(口縁)ヨコナデ、 (内)ヘラミガキ(外底)指圧	"	黒灰色	内底にジグザグ文	3
29	"	"	8.8	1.7	-	(口縁)ヨコナデ (内)ヘラミガキ(外底)指圧	"	"	摩耗著しい	1
30	"	S K2	9.4	1.9	-	(口縁)ヨコナデ、 (内)ヘラミガキ(外底)指圧	"	暗灰色	"	11
31	土師器皿	S B1 (pit)	14.0	3.6	-	(口縁)ヨコナデ1段 (底)ナデ	長石含む	淡黄褐色		7
32	"	"	14.8	(2.7)	-	(口縁)ヨコナデ1段 (底)ナデ	長石、雲母 赤色土粒	黄褐色		5
33	土師器小皿	S K2	9.6	1.5	-	(口縁)ヨコナデ (底)ナデ	細石粒 含む	黄褐色	「て」の字状口縁	10

No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
34	白磁碗	S K 2	-	-	6.0	削り出し高台	精良	灰白色		12
35	瓦器碗	S D 7	13.8	6.5	5.4	(外)摩耗著しく不明 (内)ヘラミガキ密、沈線	"	黒灰色	内底に菊花状文	25
36	土師器小皿	"	9.0	1.5	-	(口縁)ヨコナデ (底)ナデ	良	褐色	「て」の字状口縁	15
37	"	"	9.6	1.4	-	(口縁)ヨコナデ (底)ナデ	"	灰白色		23
38	土師器羽釜	"	22.6	-	-	(口縁)ヨコナデ 鏝貼り付け	石英、長石粒 を多く含む	暗褐色		20
39	"	"	21.8	-	-	(口縁)ヨコナデ 鏝貼り付け	"	"		19
40	山茶碗	"	15.6	5.8	7.0	ロクロナデ 底部糸切り	精良	淡灰色	内面に自然釉	22
41	"	"	15.8	5.4	7.4	ロクロナデ 底部糸切り	"	"	"	24
42	緑釉小碗	包含層	-	-	6.0	ロクロナデ	良	濃緑 (胎)赤褐色	摩耗著しい	140
43	瓦器碗	S K 24	15.0	-	-	(内)ヘラミガキ、沈線、口縁ヨ コナデ(外)指圧後ヘラミガキ	密	黒灰色	口縁1/6残	97
44	"	"	14.8	-	-	(内)ヘラミガキ、沈線 (外)指圧後ヘラミガキ	"	"	内外面とも摩耗	149
45	"	"	-	-	5.4	(内)ヘラミガキ(外)ヘラミガキ (底)不調整、貼付高台	"	暗灰色	5個以上の連結 輪条文	95
46	土師器皿	"	9.8	1.5	-	(内)ナデ (外底)指圧(口縁)ヨコナデ	やや密	黄褐色	1/4残	156
47	瓦器碗	S K 28	14.8	-	-	(内)不明、沈線 (外)指圧後ヘラミガキ	密	黒灰色	内面摩耗 口縁1/7残	150
48	"	"	-	-	5.4	(内)ヘラミガキ(外)指圧 (底)不調整、貼付高台	"	"	高台1/5残 連結輪状文	153
49	瓦器皿	S K 23	8.2	1.8	-	(内)ヘラミガキ (外底)指圧、(口縁)ヨコナデ	"	"	1/8残	155
50	瓦器碗	S D 22	15.0	-	-	(内)ヘラミガキ、沈線 (外)指圧後ヘラミガキ	"	"	口縁1/8残	99
51	瓦器皿	"	8.8	1.5	-	(内底)ヘラミガキ (外底)指圧、(口縁)ヨコナデ	"	"	1/3残、摩耗	101
52	瓦器碗	S B 25	15.0	-	-	(内)ヘラミガキ、沈線 (外)指圧、(口縁)ヨコナデ	"	"	口縁1/8残	94
53	"	"	13.8	-	-	(内)ヘラミガキ、沈線 (外)指圧、口縁ヨコナデ	"	淡褐色	口縁1/10残	93
54	土師器羽釜	包含層	25.4	-	-	口縁ヨコナデ 鏝貼り付け	金雲母 多く含む	淡赤褐色	口縁1/9残	103

第5表 西沖遺跡出土遺物観察表



A区掘立柱建物SB1（西から）



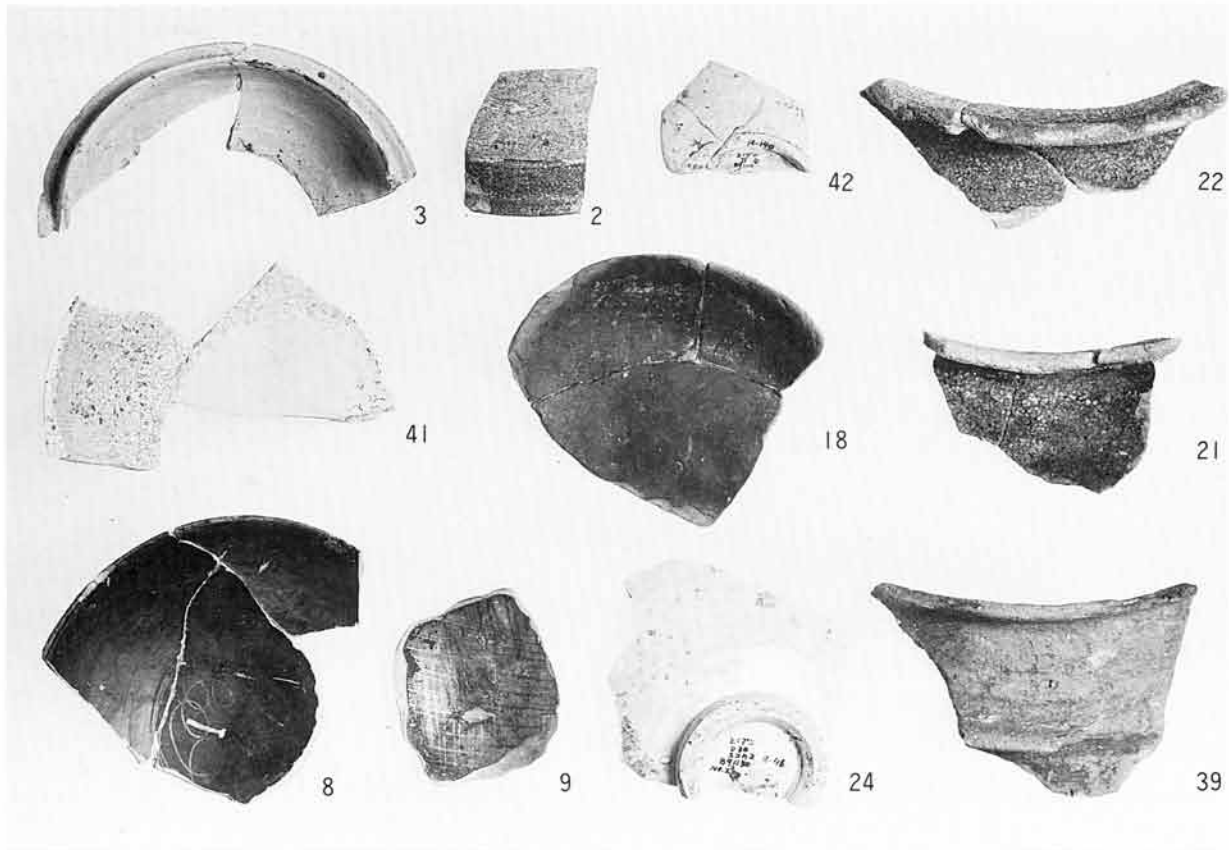
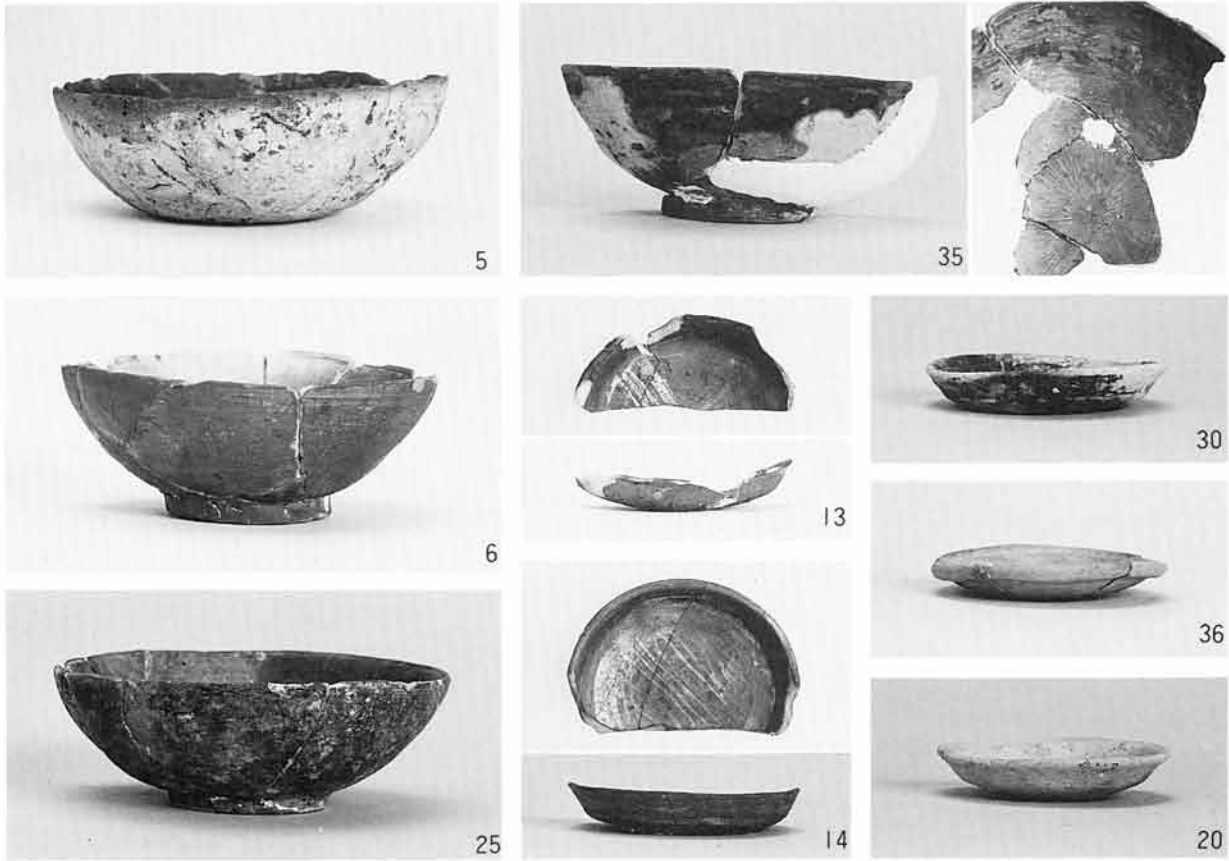
A区掘立柱建物SB10・11（東から）



A区掘立柱建物S B17（東から）



B区調査区全景（東から）



出土遺物 (1 : 3)

Ⅲ 上野市上神戸・下神戸 浮田遺跡・朝神遺跡

1. 位置と歴史的環境

阿山郡大山田村坂下の山中に端を発する木津川は、源流部で里川と称し、南西方向へ流れ、青山町滝・妙楽地を経て阿保川となり、同町と上野市との境界の塚原を経て流路を大きく北へ変える。ここからは長田川と呼称され、上野市西北部・木根の落合で服部川と、さらに京都府相楽郡南山城村で名張川と合流し、下流は八幡市橋本付近で淀川に合流する。

浮田遺跡は、ちょうどこの木津川が北流する左岸、標高160m前後の盆地上に位置し、東側を木津川、西側を標高300m前後の丘陵に挟まれた地理的空間にまとまりのある地域にある。行政上は上野市上神戸から下神戸にまで及び、遺跡範囲は面積約200,000㎡以上と推定される古墳時代から中世にかけての広大な遺跡である。

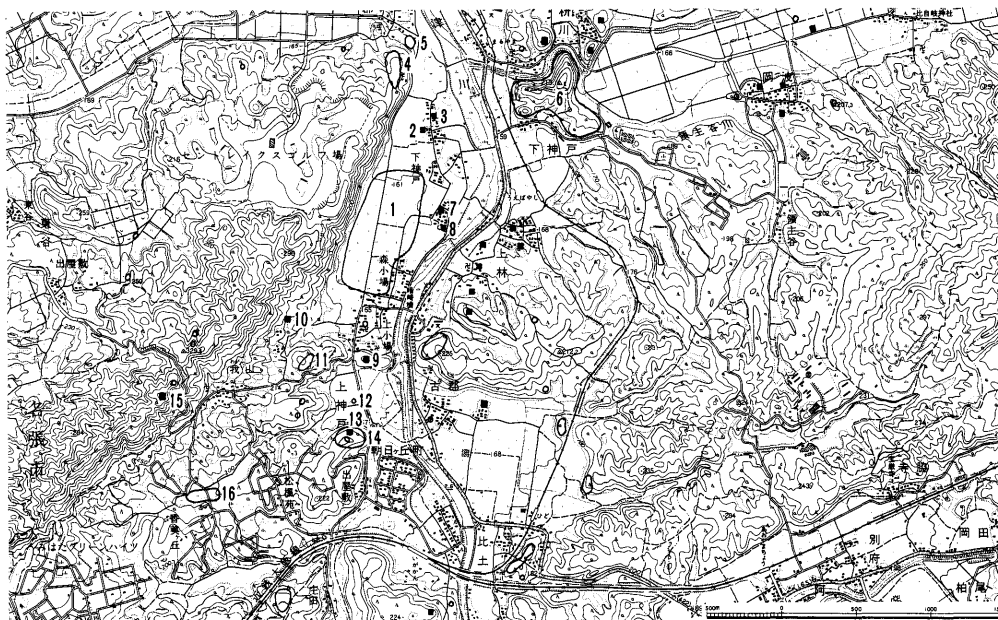
当遺跡をとりまく周辺の歴史的環境については、その詳細を次章の才良遺跡に譲ることとし、ここでは神戸という地名の由来から来る伊勢神宮とのかわりについて簡単に触れておきたい①。

現在、浮田遺跡の中央部東寄りに神戸神社がある。この神社は明治40年～41年に周辺の各村に鎮座する

30数社を当地の穴穂宮に合祀してできた神社である。穴穂宮は、倭姫命が神霊を遷座する場所を求め、伊勢へ向かう途中、一時この宮にとどまり奉斎したと『倭姫命世記』は伝え、当神社一帯がその伝承地となっている。

また古くから伊勢神宮に庸調を貢進した神戸②（伊賀神戸）や伊勢神宮領であった穴太御厨③の比定地も当地辺りに所在したのと考えられている。天仁2年9月26日付官勘状案（東大寺文書）所収の永長2年2月29日の宣旨案によれば「太神宮神戸田本免六十六町七段二百歩、出作公田五百余町」とあり、平安時代末期頃から神民による出作田の拡大が活発であったことが窺える。しかしこれは領地をめぐって神宮側と国衙側との対立を生み、さらに在地土豪層の台頭と共に、室町時代中期以降次第に神戸、御厨の機能は衰退していったものと見られる。

浮田遺跡の北方約300mにある朝神遺跡は、こうした土豪層の館の一つと思われ、現在は土塁が東西約60m程残存するのみである。行政上は上野市下神戸字朝神に位置する。



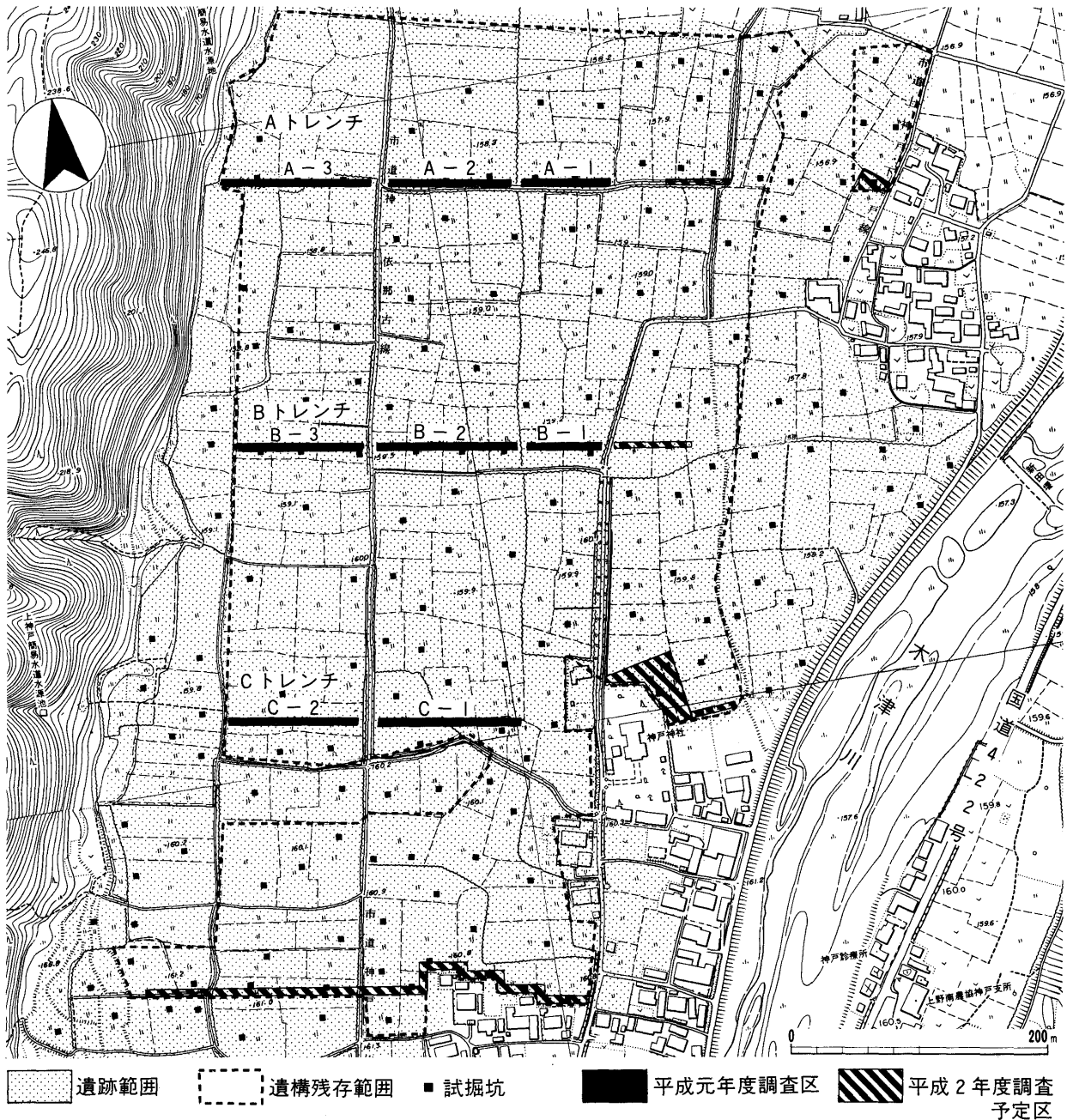
1. 浮田遺跡
2. 朝神遺跡
3. 磯田氏館跡
4. 天童山古墳群
5. 天神遺跡
6. 丸山城跡
7. 広浜氏館跡
8. 古浜氏館跡
9. 夷山氏館跡
10. 永浜氏館跡
11. 西方寺旧墓地
12. 近代1号墳
13. 恩常寺城跡
14. 奥城寺遺跡
15. 我山城跡
16. 高賀遺跡

第13図 遺跡位置図（1：50,000、国土地理院 阿保1：25,000から） ■；中世城館

2. 浮田遺跡

今回の調査は遺構の削平を受ける排水路部分に限られたため、幅3mのトレンチ調査となった。東西方向に3本設定し、総延長は740mに及ぶ。ここでは北から順にAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチと呼称することとし、さらに各トレンチが道路や溝に分断されているため、便宜上、トレンチ毎に東から西の方にA-1、A-2といった枝番号を与えた。なお、各トレンチ間の距離は、およそ210mである。

遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、上から灰色土（耕作土）→黄茶色土（旧耕作土）→茶灰色土（旧耕作土）→暗茶灰色土（旧耕作土）→暗茶褐色土→黄茶色砂質土（地山）の順で、地山までの深さは、トレンチ中央部で40cm～50cmと浅く、東部・西部では70cm～80cmと深い。遺構の多くは、旧耕作土面の少ないやや微高地上となっている中央部で確認された。



第14図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

(1) 遺 構

1. A-1 トレンチの遺構

A. 土坑

SK1 東西4mの不整形土坑で、調査区外の南へ続く。土坑の東側は南北溝SD2に切られる。遺構面からの深さは、土坑の東側で7cm、西側で28cmを測る。黒色土器碗A類(内黒)と土師器小皿が出土。10世紀末葉～11世紀初頭頃と思われる。

B. 溝

SD2 幅30cm、深さ20cm～30cmの小溝。鎌倉時代前半の瓦器碗及び土師器小皿が出土した。

SD4 幅1m、深さ30cm前後の南北溝。溝底のレベルは西から東に向かって低い。12世紀後半頃の瓦器皿が出土した。

C. 井戸

SE3 径2.5m、深さ2mの円形素掘り井戸。埋土は上層が黒灰色粘質土、下層が暗茶灰色粘質土で、礫層に至り底に達する。時期は、出土した瓦器碗からSD2とほぼ同時期と思われる。

2. A-2 トレンチの遺構

A. 竪穴住居

SB8 東西方向が一辺5.5mで、調査区外の北や南へも延びる。東壁はこれより新しい溝に切られ、わずか数cm確認されたのみである。支柱穴や周溝は検出されなかったが、床面のほぼ中央部で炉跡と

考えられる焼土面を確認したほか、住居の南西隅で貯蔵穴と思われる土坑を検出した。土坑や竪穴住居の埋土からは、布留式の土師器小型丸底壺・高杯・甕等が出土しており、時的には、安達・木下編年^①の上ノ井手遺跡井戸SE030下層の一群に相当するものと思われる。

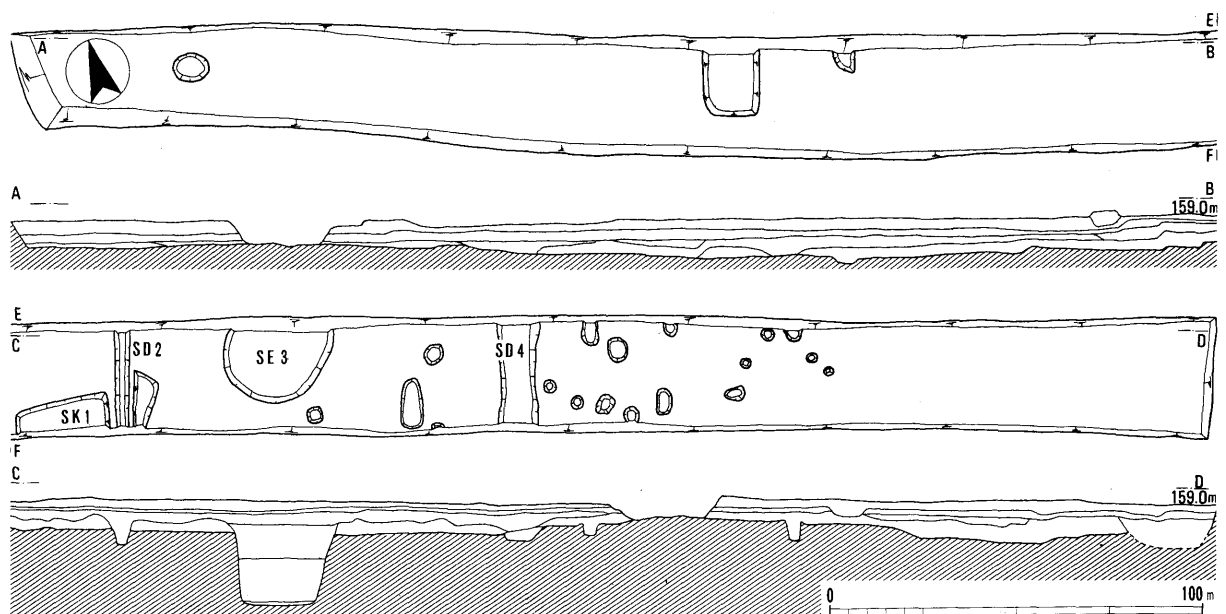
SB10 SB8の東に近接し、東西5.5mを測る。住居の2/3は、調査区外の北へ延びる。貯蔵穴と思われる土坑は、南辺中央部に位置する。出土遺物には、布留式の土師器高杯・小型丸底壺・甕等があり、建物の主軸方向はSB8と異なるものの、これとほぼ同時期とみなされる。

B. 掘立柱建物

SB6 桁行3間の東西棟建物で、調査区外の北へ延びる。柱掘形は径35cm～60cmの円形で、桁行7.5m、桁行柱間2.5mを測る。建物の方向はE23°Sである。時期は不明。

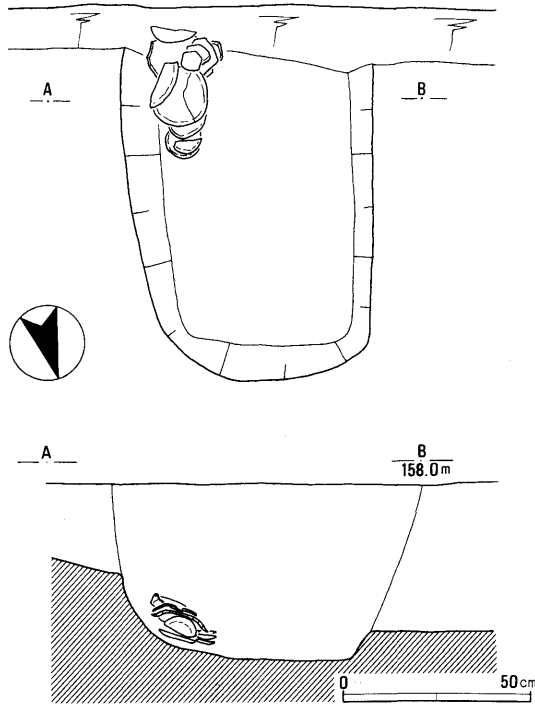
C. 土坑

SK9 南北に長い隅丸方形を呈するもので、土坑墓の可能性が大である。東西0.7m、南北は調査区外へ延び不明。深さは、遺構検出面からは20cm～40cm足らずであるが、トレンチの断面観察により、旧耕土下面から掘り込んでいるので約90cmを測る。東壁際で11世紀代と思われる完形の土師器皿3個、



第15図 A-1 トレンチ遺構平面図 (1:200)

土師器小皿14個が重なるようにまとめて出土した。
おそらく埋葬に伴う副葬品であろう。



第16図 土坑SK9 遺物出土状況 (1:20)

D. 溝

SD5 幅1.3m~1.6m、深さ20cm~30cmの南北溝。溝底のレベルは南が低い。時期は出土遺物がなく不明。

SD7 幅2.8m、深さ30cm前後の南北溝。時期は不明。

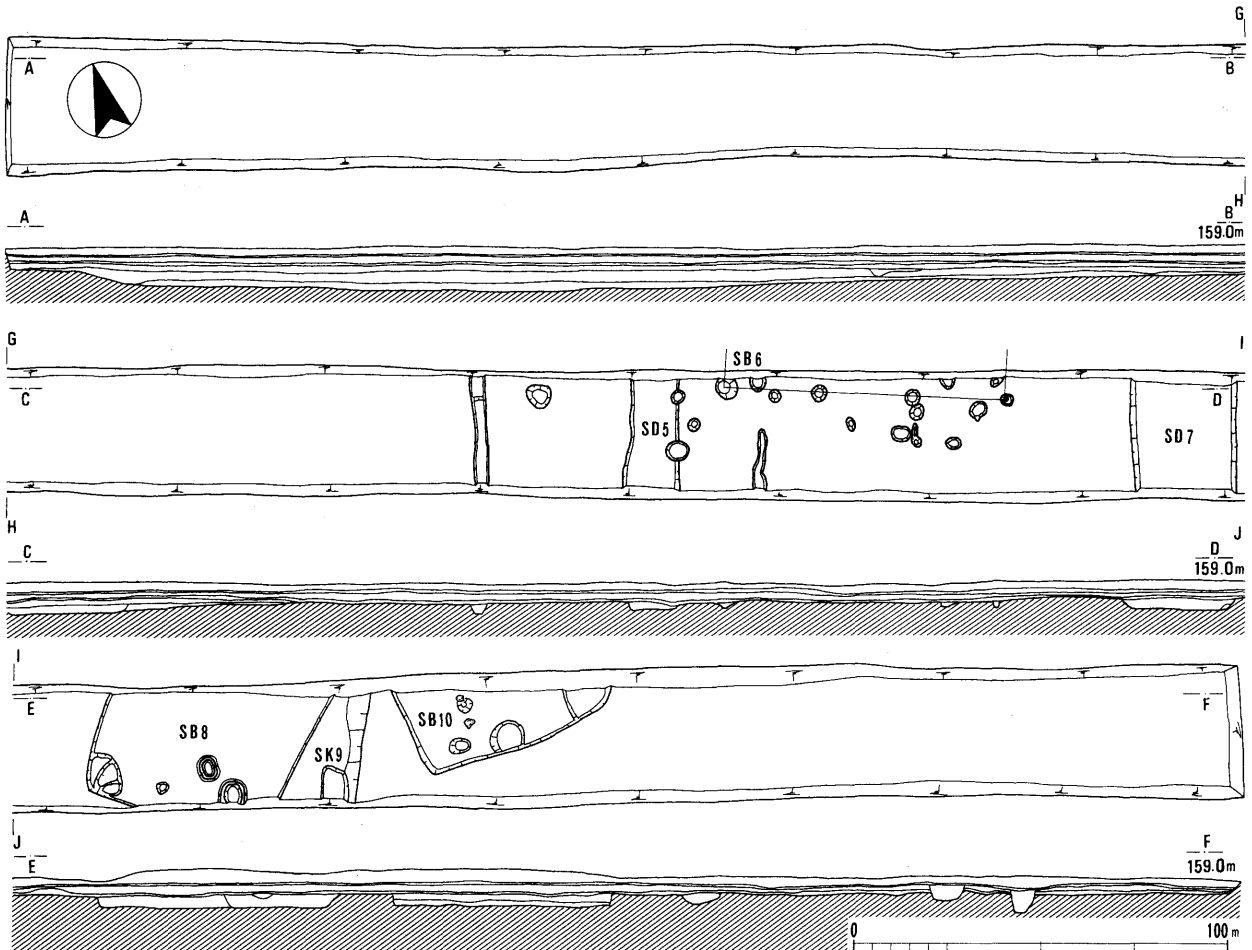
3. A-3 トレンチの遺構

A. 掘立柱建物

SB16 柱間2間分を検出した。ここでは調査区の北へ延びる南北棟と考えたが、土坑SK14を取り込み、南へ延びることも考えられる。柱掘形は径60cmで、柱間は2.5mを測る。この柱通りの西への延長線上にもう1つ柱掘形があり、建物の規模がさらに1間分大きくなる可能性も考えられる。但し柱間は1.9mであるので、この場合は廂となろう。

B. 土坑

SK12 調査区外の北へ延びる径2m程の不整形土坑。深さは7cm前後と浅い。埋土は炭片混じりの灰褐色土で、11世紀後半の瓦器碗片が出土した。



第17図 A-2 トレンチ遺構平面図 (1:200)

SK13 西側が細い南北溝と重複する不整形土坑。深さは10cm程である。土坑内の北側で、口縁部を合わせた2個の土師器皿（杯）が出土。意図的に何かを埋納したと思われる。皿内に残留する土の分析を実施していないので、中身については不明。

SK14 東西5.7m、深さ10cmの方形土坑。大半が調査区外の南へ延びる。掘立柱建物SB16の南側に隣接し、建物方向と土坑の方向が揃うところから、この建物に付随するものとも考えられる。土坑からは12世紀代の瓦器碗、土師器土釜片が少量出土した。

SK17 東西1.8mの方形土坑で、調査区外の北

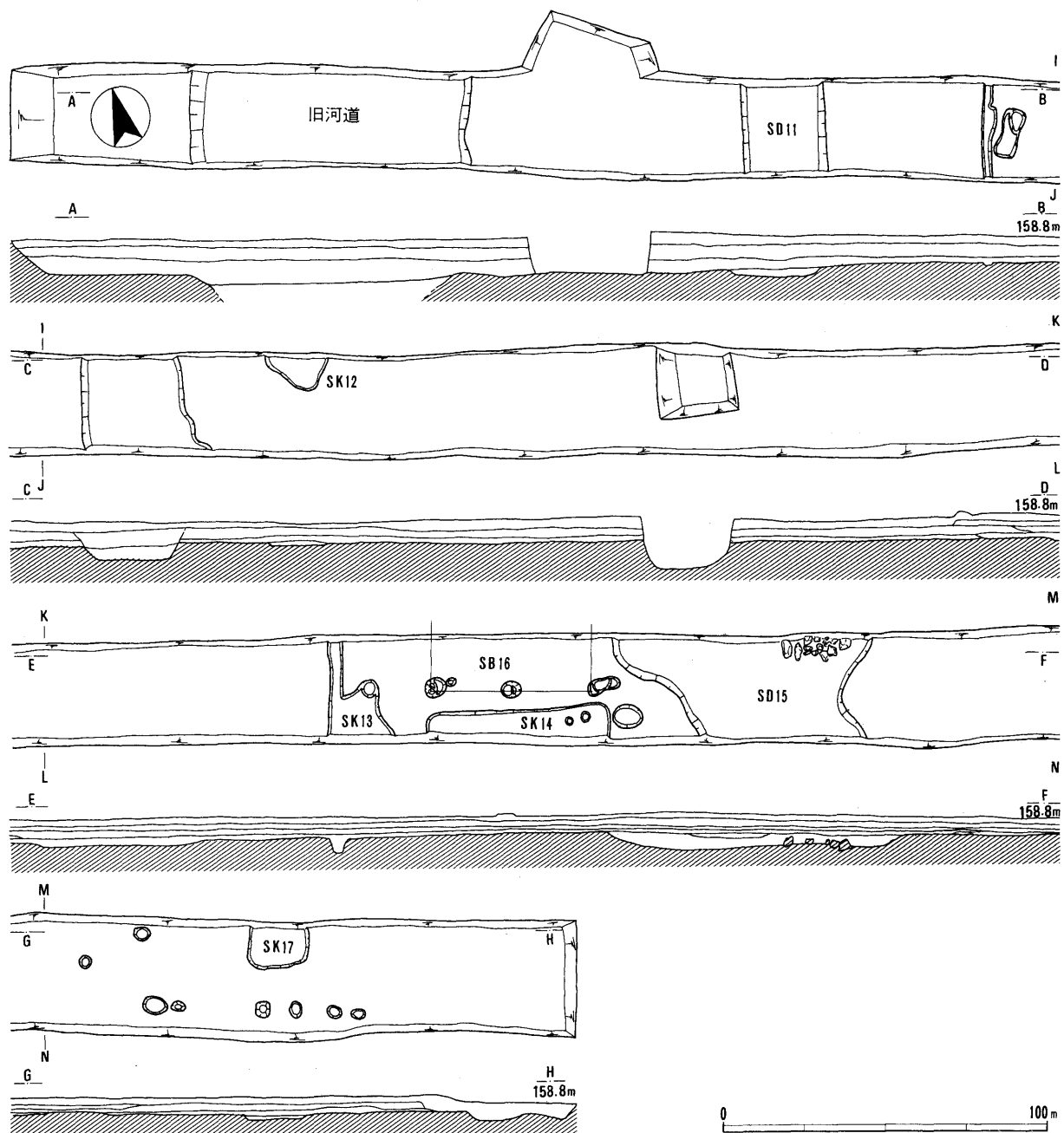
へ延びる。12世紀前半の瓦器碗のほか、瓦器皿、土師器皿・土釜等が出土している。

C. 溝

SD11 幅2.6m、深さ20cm前後の南北溝。時期は不明。

SD15 南北方向に走る幅4.5m、深さ30cm～50cmの溝。11世紀代の土師器皿と布留式の土師器壺・高杯が混在しており、古墳時代前期の竪穴住居との重複も考えられる。トレンチの北壁際で長さ30cm～50cmの石の集まりが認められた。

旧河道 トレンチの西端部で検出した幅8.5mの



第18図 A-3 トレンチ遺構平面図 (1:200)

河道跡。青灰色砂質土が厚く堆積し、湧水が激しかったので、河底まで調査を実施できなかった。埋土から古墳時代初期の土師器片が少量出土したが、明確な時期は不明である。

4. B-1 トレンチの遺構

A. 掘立柱建物

S B 21 桁行4間の東西棟建物。ここでは南へ延びる建物としたが、北へ延びることも考えられる。柱掘形は径40cm前後で、桁行10.1m、桁行柱間2.52mを測る。柱通りの方向はE18°Sを示す。建物の時期は、柱掘形出土の瓦器碗から12世紀前半頃のものと思われる。

B. 土坑

S K 20 調査区の北へ延びる方形土坑。短辺で約1.3m、深さは遺構面から10cmを測る。しかし遺構の掘削は、旧耕土下面からである。埋土から13世紀前半頃の瓦器碗が出土。

S K 23 径1m、深さ10cmの円形土坑。時期は不明。

S K 24 径2.5m前後、深さ30cm程の円形土坑で、調査区の南へ延びる。弥生時代後期の受口状口縁甕の細片が1点出土しているのみで、明確な時期は不明。

C. 溝

S D 18 幅2.3m、深さ10cm前後の南北溝。西の肩はほぼまっすぐであるが、東の肩は弯曲する。出

土遺物がなく時期は不明だが、東側の溝S D 19に切られ、これより古い。

S D 19 幅2m、深さ10cm前後の溝。溝底のレベルは南東から北東方向にかけて徐々に低い。掘立柱建物S B 21の柱掘形は、この溝の埋土を掘り込んでおり、この建物より古いことは分かるが、明確な時期は不明。

S D 22 幅が13.5mもあり、南北に走る旧河道跡と思われる。河道の肩は明瞭でなく、河の中心部に向かって緩やかに傾斜する。深さは、最深部で遺構面から40cmを測る。出土遺物がなく、時期は不明。

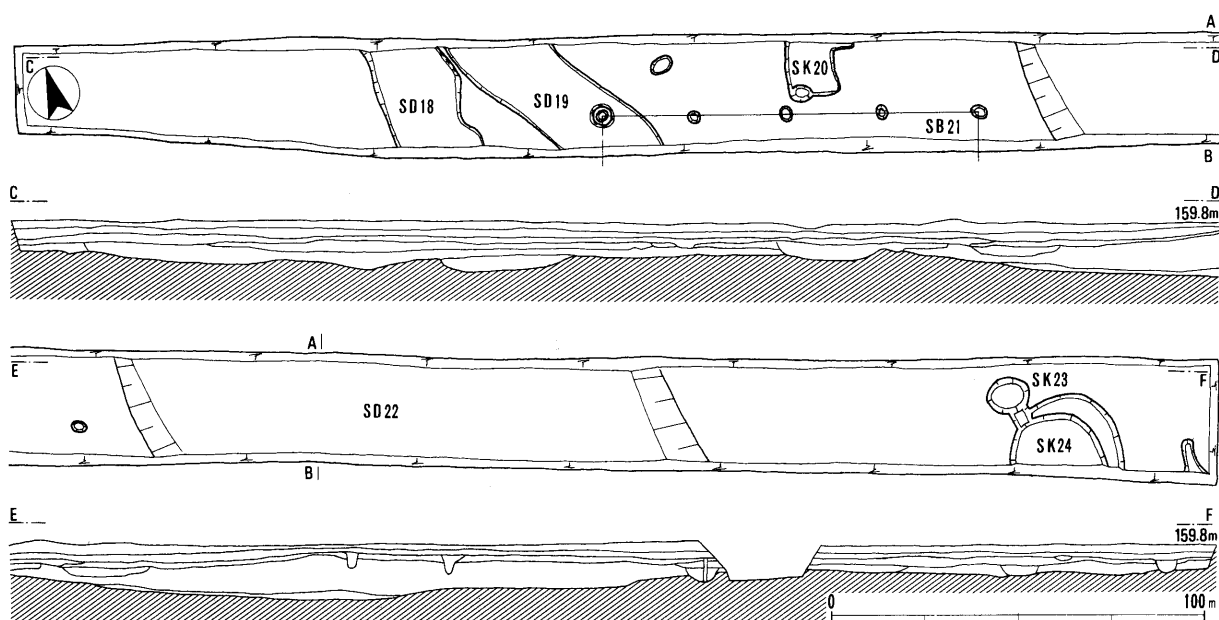
5. B-2 トレンチの遺構

今回調査したトレンチの中で最も遺構密度の高い地区である。しかし狭いトレンチ調査のため、ほとんどの遺構がトレンチ外へ延び、多数検出された柱穴も建物としてまとまったものは数少ない。ここでは、建物以外の遺構については、一覧表としてまとめることにする。

A. 竪穴住居

S B 44 東西の一辺が3m程の小規模なもの。大半が調査区外の北へ延びる。埋土中より、陶邑古窯址群における田辺編年^⑤のT K 209型式相当の須恵器短頸壺が1点出土した。

S B 45 東西の一辺が3.7mの小規模なもの。深さは20cm程で、四隅の主柱穴や周溝は確認されなかった。埋土から須恵器杯身・杯藍・高杯、土師器



第19図 B-1 トレンチ遺構平面図 (1:200)



第20図 B-2 トレンチ遺構平面図 (1 : 200)

鉢が出土。これらは、S B44と同様、TK209型式に相当し、6世紀末葉～7世紀前半に位置付けられる。

B. 掘立柱建物

S B37 桁行3間の総柱東西棟建物。調査区の南へ延びることも考えられる。桁行は6.4mで、桁行柱間は、2.4+1.9+2.1mと不揃いである。梁行柱間は1.8mを測る。柱掘形は30cm～40cmと小さい。棟方向は磁北に対しE20°Sを示す。建物の時期は、柱掘形出土の瓦器碗から13世紀前半頃と考えられる。

S B39 桁行3間の総柱東西棟建物。調査区の北へ延びることも考えられる。桁行は6.3mで、桁行・梁行柱間とも2.1mを測る。柱掘形は径30cm前後で、棟方向はE20°Sを示す。S B37と同位置で重複するものの柱掘形の切り合う箇所がなかったため、切り合いによる新旧関係は不明。柱掘形内出土の遺物は、13世紀中葉～後半の瓦器碗があり、S B39の方が後出の建物と思われる。

S B42 桁行3間の東西棟建物。調査区の南へ延び、総柱建物となることも考えられる。桁行は、すぐ西隣のS B39と同規模で棟方向も同じである。建物の時期は、13世紀後半～14世紀初頭である。

S B51 2間×(2)間の倉庫風建物を想定したが、西へもう一間分延び、調査区の北側へ延びる建物なども考えられる。桁行柱間は2.4m、梁行柱間は2.1mを測る。棟方向は、前述の建物群と大差なくE21°Sを示す。時期は13世紀後半頃である。

S B52 桁行3間以上の東西棟建物。棟方向がE43°Nを示し、他の建物と大きく異なる。また柱掘形も径60cm前後と大きい。桁行柱間は1.6m、梁行柱間は2.1mを測る。時期は13世紀代と思われる。

S B59 桁行4間の東西棟建物で調査区の北へ延びる。棟方向はE17°Sを示し、桁行8.4m、桁行柱間2.1mを測る。柱掘形内出土遺物のなかに黒色土器碗A類(内黒)・B類(内外黒)がみられ、10世紀末～11世紀初頭頃の建物と考えられる。

S B60 桁行5間の東西棟建物。調査区の北へ延びることも考えられる。棟方向はE17°Sを示し、桁行柱間は、西から1.9+1.9+2.1+2.1+2.1mを測る。13世紀後半～中葉の建物と思われる。

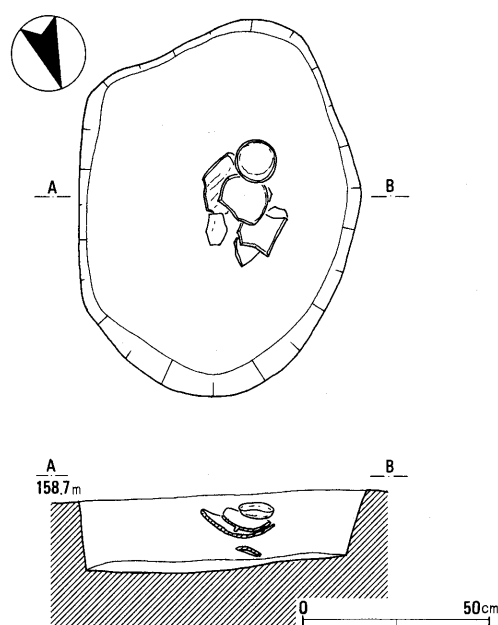
C. 土坑

土坑は20基が確認された。このうち完形もしくは

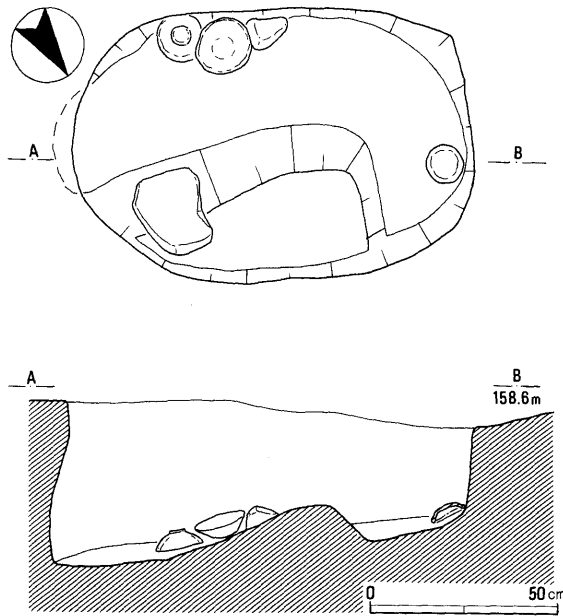
完形に近い瓦器碗、土師器皿等が出土した土坑S K26・46・50・55・57等は、土塚墓の可能性も考えら

遺構番号	形状	規模(cm)	深さ(cm)	年代
S K26	楕円形	75×100	20	11世紀後半
S K28	楕円形	90×120	15	13世紀代
S K29	楕円形	135×-	10	不明
S K30	楕円形	110×65	10	13世紀前半
S K32	溝状	40×-	10	13世紀代
S K33	円形	-×-	10	不明
S K34	円形	180×180	55	13世紀前半
S K38	溝状	60×-	10	13世紀前半
S K40	方形	380×-	10	13世紀中葉
S K41	方形	270×-	15	13世紀中葉
S K46	長楕円形	80×-	40	13世紀前半
S K47	方形	290×-	25	13世紀代
S K50	楕円形	110×70	40	13世紀中葉
S K53	不整楕円形	80×120	35	13世紀前半
S K54	長方形	250×80	30	13世紀後半
S K55	隅丸長方形	70×130	50	13世紀後半
S K56	円形	220×190	50	13世紀代
S K57	不整円形	70×120	30	13世紀中葉
S K58	不明	250×-	20	13世紀前半
S K61	長楕円形	390×-	40	12世紀中葉

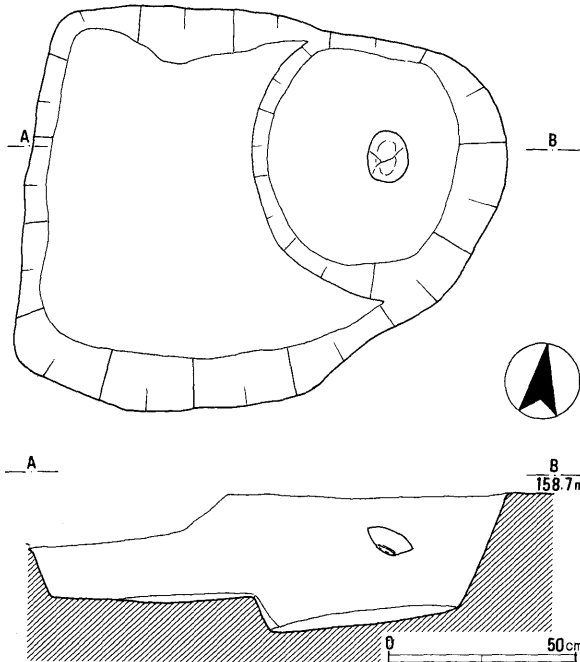
第6表 B-2トレンチ 土坑一覧表



第21図 土坑S K26遺物出土状況(1:20)



第22図 土坑S K 50遺物出土状況 (1 : 20)

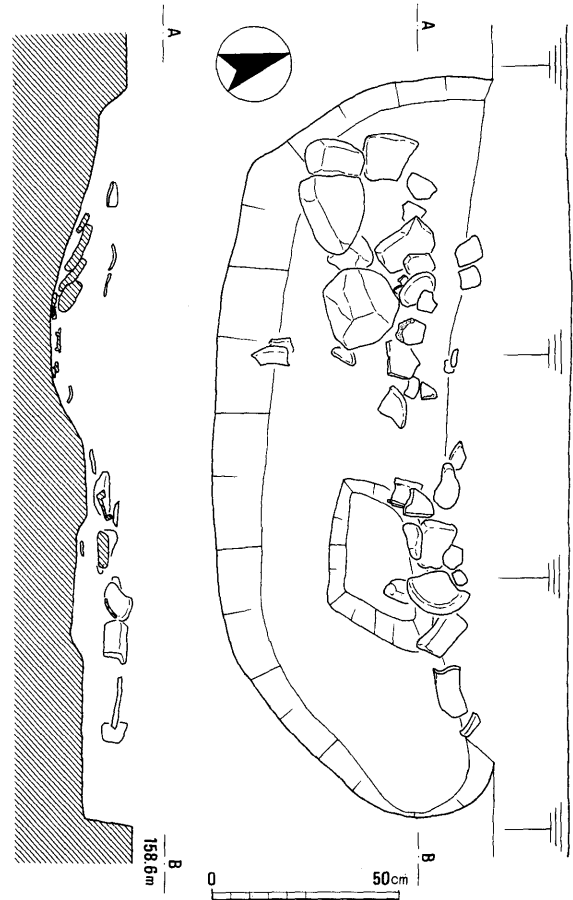


第23図 土坑S K 57遺物出土状況 (1 : 20)

れる。一覧表の土坑の年代については、出土した瓦器碗を基準とし、山田編年^⑥を参考とした。これによると平安時代後期のS K 26、平安時代末期のS K 61を除き、土坑の大半は鎌倉時代のものである。

D. 溝

溝は8条が確認された。溝の時期については、出土遺物が細片で量的に乏しいことから不明なものも多いが、15世紀後半に下るS D 48を除き、概ね掘立柱建物や土坑と同様13世紀代のものであると思われる。なお、S D 27・31・43の溝方向は、掘立柱建物の方向



第24図 土坑S K 61遺物出土状況 (1 : 20)

遺構番号	幅(cm)	深さ(cm)	主軸方向	年代
S D 25	30	10	N20°W	不明
S D 27	200	50	N20°E	不明
S D 31	150	40	N21°E	13世紀前半
S D 35	150	15	N10°E	13世紀代
S D 36	30	8	N26°E	13世紀前半
S D 43	130	30	N17°E	不明
S D 48	70	40	N 5°W	15世紀後半
S D 49	90	50	N32°E	不明

第7表 B-2トレンチ 溝一覧表

とも揃い、あるいは建物を区画する溝となる可能性もあろう。

S D 48からは、土師器皿類に伊勢型鍋が共伴しており、時期の分かる良好な資料が出土した。

6. B-3トレンチの遺構

A. 掘立柱建物

S B 62 桁行6間の東西棟建物で、調査区の南へ延びる。桁行は14.8m、桁行柱間は2.47mを測り、

今回検出した掘立柱建物の中で最も規模が大きい。
建物の時期は、柱掘形から出土の瓦器碗から11世紀後半頃と思われる。

B. 土坑

SK64 短辺1.7mの隅丸方形土坑で、調査区の南へ延びる。溝埋土から12世紀前半～中葉の瓦器碗が出土。

C. 溝

SD63 幅2m、深さ30cmの南北溝。溝の埋没時期は13世紀後半頃と思われる。

7. C-1トレンチの遺構

A. 掘立柱建物

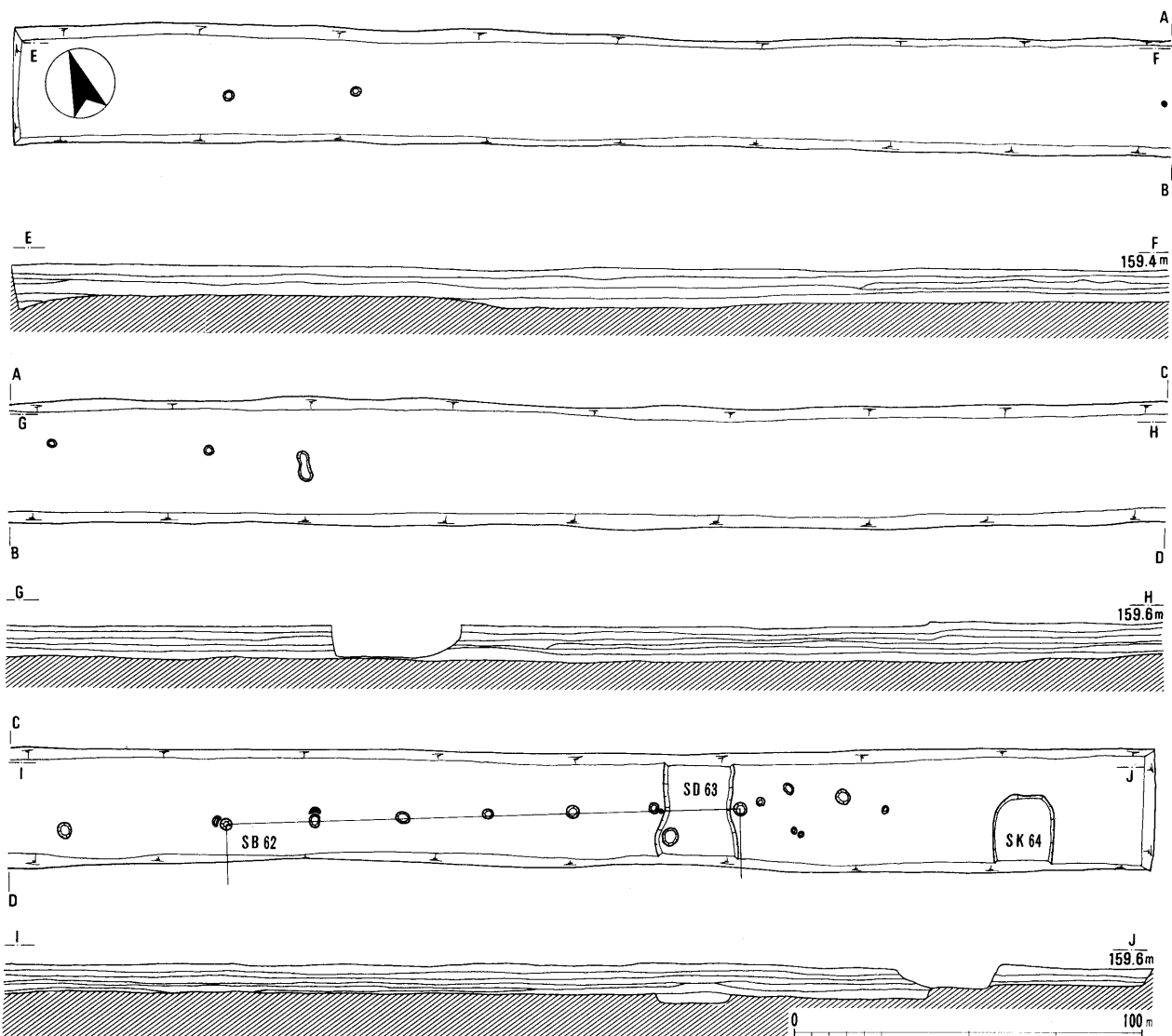
SB66 桁行4間の東西棟総柱建物。調査区の南へ延びることも考えられる。桁行9.6m、桁行柱間2.4m、梁行柱間2.2mを測る。柱掘形は径50cm前

後で、棟方向はE16°Sを示す。建物の時期は、柱掘形出土の瓦器碗から11世紀代と思われる。

B. 土坑

遺構番号	形状	規模(cm)	深さ(cm)	年代
SK65	不整円形	130×140	20	不明
SK67	楕円形	80×100	90	不明
SK70	楕円形	110×60	20	不明
SK71	長方形	190×80	15	不明
SK72	楕円形	260×-	80	13世紀前半
SK80	不整形	-×-	20	12世紀後半
SK81	楕円形	120×90	10	13世紀前半
SK83	楕円形	80×110	10	不明
SK86	方形	190×-	25	不明

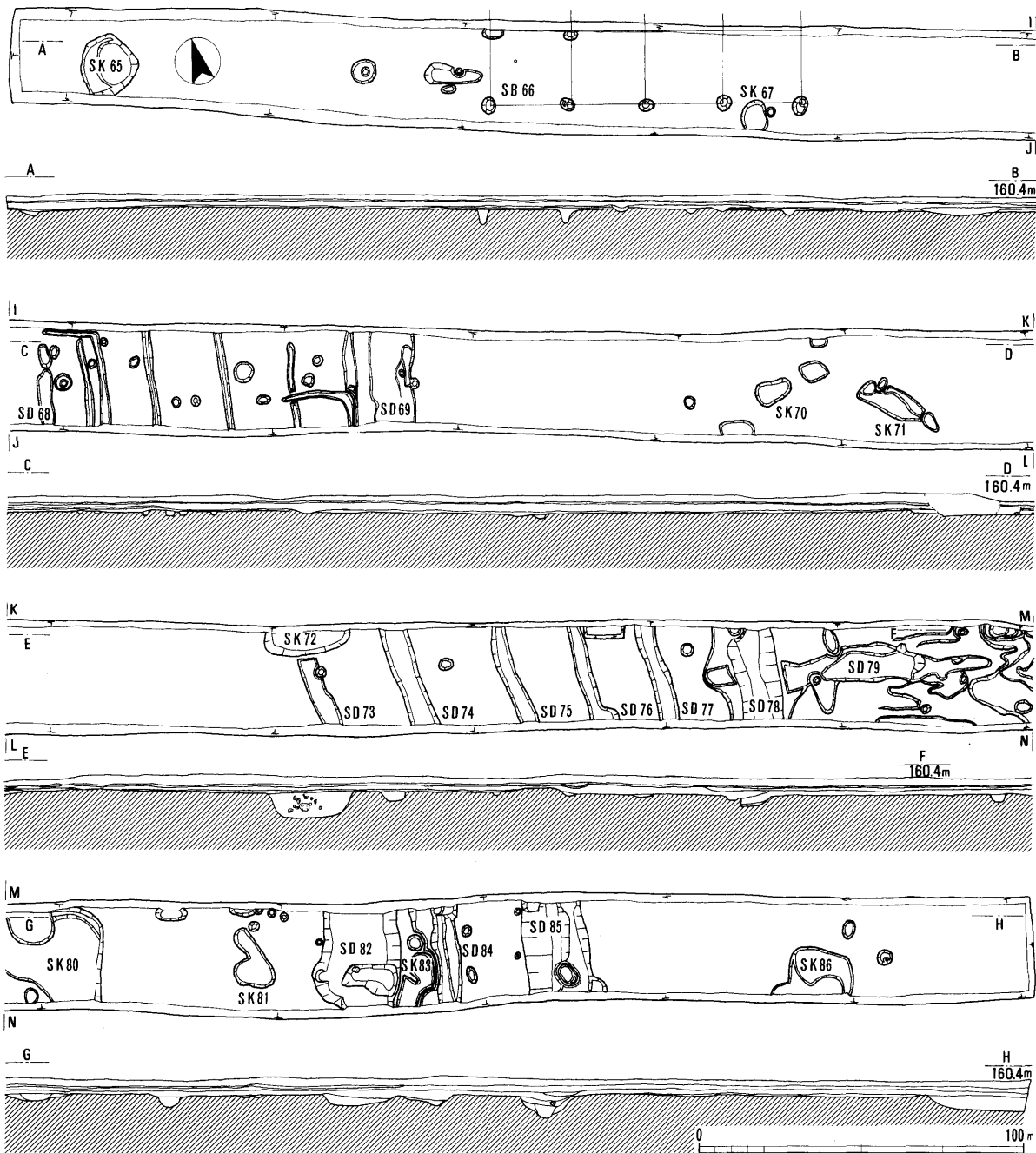
第8表 C-1トレンチ 土坑一覧表



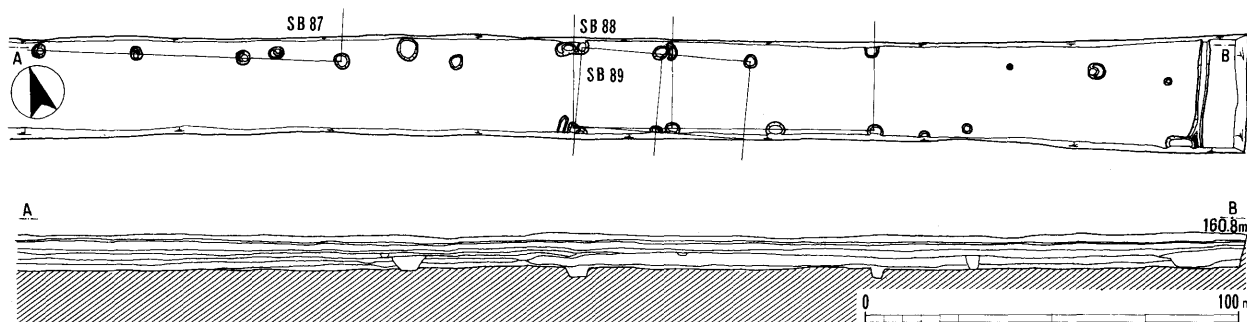
第25図 B-3トレンチ遺構平面図(1:200)

土坑は9基が確認された。平面形態は楕円形、不
 整円形、方形等バラエティーに富む。土坑の年代は、

出土遺物がなかったり、細片のため年代を特定でき
 ないものが多い。



第26図 C-1 トレンチ遺構平面図 (1 : 200)



第27図 C-2 トレンチ遺構平面図 (1 : 200)

C. 溝

溝は12条が確認された。土坑と同様、時期の不明なものが多い。なお、一定の間隔を置いてほぼ並行に走る溝SD73~77は、現在の畑の地割り方向とも一致することから、新しい溝かもしれない。SD85からは、破片ながら信楽焼播鉢がまとまって出土した。その出土のあり方は、中世城館に伴う堀からの出土状況に類似しており、あるいはこうした堀の一部とも考えられる。なお、信楽焼播鉢の時期は16世紀後半代を中心とする。

8. C-2 トレンチの遺構

トレンチの東部で掘立柱建物3棟を検出したのみで、これより西部では顕著な遺構は検出されなかった。

SB87 桁行3間以上の東西棟建物で、調査区の北へ延びる。検出した桁行の柱間寸法は、西から2.6+2.8+2.5mを測る。棟方向はE20°S。時期は不明。

SB88 桁行3間の東西棟建物。桁行8.1m、桁行柱間は2.7mを測り、棟方向はE18°Sを示す。西の間分は廂とも考えられる。柱掘形から黒色土器

(2) 遺物

遺物は整理箱で約50箱分が出土した。大別すると古墳時代前期~後期、平安時代後期~鎌倉時代、室町時代後期の3期に分けられ、中でも鎌倉時代の出土遺物が多くを占める。以下、資料的に一括性の強い堅穴住居、土坑出土の遺物を中心に遺構毎に述べることにする。

1. A トレンチの遺物

SB10出土遺物(1~5)

布留式の土師器小型丸底壺・高杯・甕がある。

小型丸底壺(1・2)は、球形の体部に短く外傾する口縁部が付く。口径は体部最大径よりやや小さい。(1)は口径8.7cmで、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は細かく尖って終わる。口縁部はヨコナデ、体部内面は底部から斜めにヘラで削り、上半は横方向(左回り)にヘラで削る。体部外面は肩部以下全面に細かいハケメを施す。暗赤褐色を呈し、焼成良好な土器である。(2)は体部内面をナデて仕上げ、外面は上半部をハケメの後ナデる。体部下

遺構番号	幅(cm)	深さ(cm)	主軸方向	年代
SD68	40	3	N13°E	不明
SD69	130	10	N15°E	12世紀後半
SD73	60	5	N5°W	不明
SD74	80	35	N2°W	不明
SD75	50	10	N3°W	不明
SD76	30	10	N0°	不明
SD77	60	15	N1°E	不明
SD78	160	40	N5°E	不明
SD79	90	30	E13°S	13世紀前半
SD82	220	40	N24°E	不明
SD84	70	30	N10°E	不明
SD85	200	90	N10°E	16世紀後半

第9表 C-1 トレンチ 溝一覧表

A類のほか11世紀前半~中葉の瓦器碗が出土した。

SB89 2間×(2)間の倉庫風建物と考えられる。桁行柱間は2.4+2.2m、梁行柱間は2.1mを測り、棟方向はE24°Sである。建物の時期は不明であるが、柱掘形の切り合い関係よりSB88→SB89の順である。

半から底部にかけてはヘラケズリする。

高杯は同一個体ではないが、杯部(3)と脚部(4)がある。(3)は杯底部に外反する口縁部が作り足されるもので、内外面を横方向にナデて仕上げる。(4)の脚柱部は、縦方向に弱くヘラケズリし、脚裾部はヨコナデする。内側にはしぼり目がよく残る。杯部との接合は挿入手法によるものと思われる。胎土は砂粒や雲母を含むが、比較的良質である。

甕(5)は、口縁部が「く」字状に曲がり、口縁端部が内側に肥厚して、上端が内傾する面となるもの。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

SB8出土遺物(6~10)

小型丸底壺は球形の体部に外反する短い口縁部が付く。(6)は口縁部をヨコナデし、体部は内外面をナデて仕上げる。口縁部内側には、横方向のハケメが薄く残る。また体部下半には煤が付着する。(7)はやや肩の張った扁平な体部に、口縁部を欠

くが、やや長めのものが付くものと思われる。体部はナデで仕上げ、特に内面には、底部から体部中程にかけて強くナデられた痕跡が明瞭に残る。体部外面には煤が付着する。

高杯(8)は、大きく開いた浅い杯部を有するもので、内外面を粗いハケ調整の後、口縁部をヨコナデする。胎土には砂粒、雲母を含む粗製の高杯である。

甕(9)は、口縁部が「く」字形に外傾し、口縁端部の内側が肥厚して内傾する面をもつもの。器壁は4~5mmでナデで薄く仕上げる。

ミニチュア土器(10)は、手づくねにより成形される。内面はナデで仕上げるが、外面は粗いハケメが施される。

SK 9 出土遺物 (11~27)

土壇墓と思われる遺構から出土の一括資料である。現在、土師器小皿14個、皿(杯)3個が確認されたが、土坑は調査区の南へ続くため、この個数は総数ではないことを予め断っておく。

土師器小皿は、所謂「て」字状口縁の小皿(11)と、口縁部をヨコナデし、弱く外反した口縁端部上面に平坦な面をもつ(12~24)の2種類がある。底部はいずれも指オサエによりでこぼこしている。後者には、口径8.5cm前後、器高1.5cm前後のもの、

口径9cm前後で器高2cm弱のもの、口径10cm前後、器高2.3cmのものが認められる。しかしそれぞれのグループの中でも法量のバラつきがあり、明確な法量分化を意識して制作したかどうかは判然としない。

皿には、口径14.2cm~14.6cm、器高3.0cm~3.3cmで小皿と同形態のもの(25・26)と、口径に対し、底径が小さく、体部から口縁部にかけて直線的に大きく開き、口縁端部を強くヨコナデするもの(27)がある。後者は、「て」字状口縁をなさないが、その形態は「て」字状口縁皿に近く、あるいはこの系統をひくものかも知れない。

SK 13 出土遺物 (28・29)

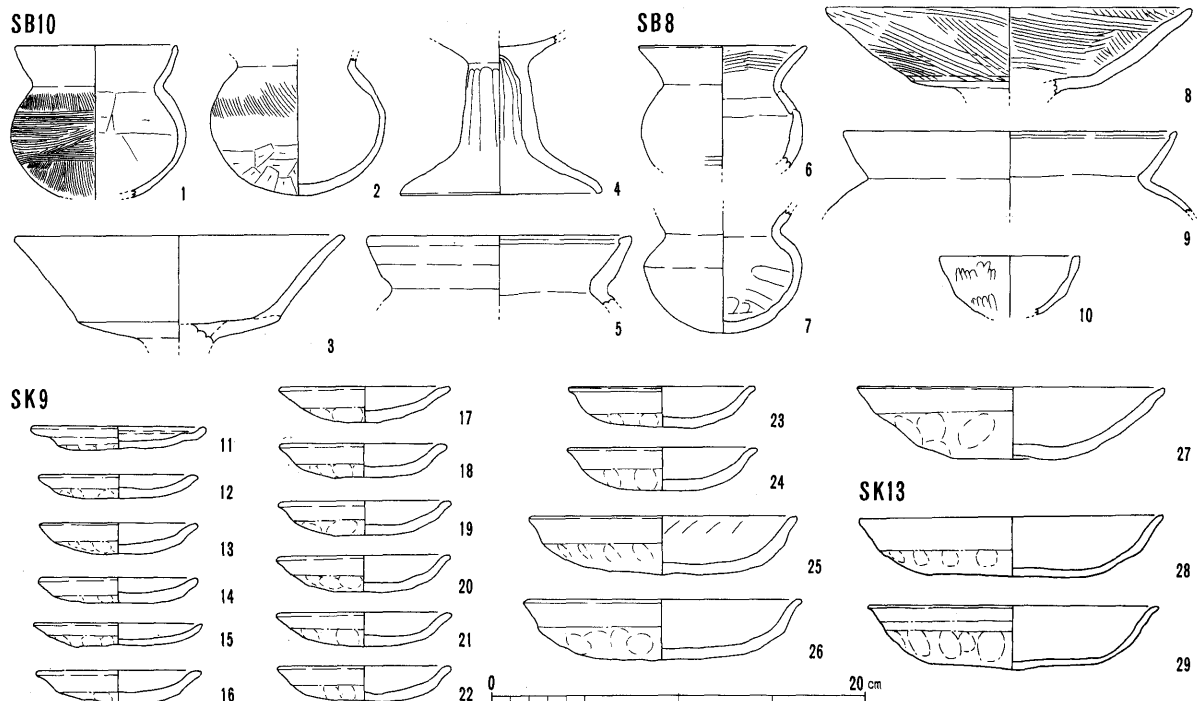
土師器皿(29)の上に蓋として皿(28)が重なって出土したものである。皿(28)はSK 9 出土の皿(25・26)と同形態で、調整手法も同様であるが、これらより一回り大きく口径16.2cmを測る。皿(29)は口縁部を2段にナデるものである。

2. B トレンチの遺物

S B 45 出土遺物 (30~33)

土師器鉢、須恵器蓋杯・高杯がある。

土師器鉢(30)は、半球形の体部に外反気味に立ち上がる短い口縁部が付くもので、口縁端部は細く尖って終わり、内側に内傾する面をもつ。口縁部はヨコナデで、体部外面下半から底部にかけてはハケ



第28図 A トレンチ出土遺物実測図(1:4)

メ、体部内面はナデで調整する。

須恵器蓋杯(31・32)は、田辺編年^⑦のTK209型式に相当するものと思われる。

須恵器高杯(33)は、腰の張った体部に屈折して上方に立ち上がる短い口縁部から成る杯部と、大きくラッパ状に開く脚部からなる。脚端部は下方に尖るように垂下し、外面に内傾する面をもつ。

S B44出土遺物(34)

須恵器短頸壺が1点のみ出土している。肩の張った体部に屈折して立ち上がる短い口縁部が付くもので、口縁の中央部がやや脹らむ。S B45出土の須恵器と同時期であろう。

S K26出土遺物(35~38)

瓦器碗・皿、土師器甕がある。

瓦器碗(35・36)は、腰の張った深い体部に二等辺三角形の高台が付くもので、体部内外面を密にヘラミガキする。底部のミガキは平行線文で、体部のミガキに先行する。口縁端部内側の沈線は端部よりやや下方にある。これらは山田編年^⑧のⅠ段階2型式に相当しよう。

瓦器皿(37)は、内外面を丁寧にヘラミガキするもので、低部内面のミガキは、口縁部内面のミガキに先行する平行線文である。外面のミガキは3単位に分けて施される。

土師器甕(38)は、球形の体部に「く」字形に曲がる口縁部が付くもので、口縁端部は外側に弱く肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部は内外面をナデで仕上げる。器壁は9mm前後の厚手の土器である。

S K61出土遺物(39~51)

瓦器碗・皿、土師器皿・小皿・土釜、山茶碗がある。

瓦器碗(39~45)は、口径14.8cm~15.6cmで、器高指数は(39)が34、(40)は37を示す。体部のミガキの状況や底部のミガキ文から、概ねⅡ段階第2型式に相当するものと考えられるが、その標式となっている上寺遺跡^⑨や西沖遺跡^⑩出土の瓦器碗に比べて(39・40)は腰の張りが弱く、底部にみられる連結輪状文は定型化されたものでなく、粗雑な表現がされている点で若干の相異がある。

瓦器皿(46)は、口縁部が強くヨコナデされ、外反して立ち上がるもので、口縁部内側にヘラミガキ、

底部にジグザグ文がみられる。

土師器小皿(47)は、口縁部が内弯気味に立ち上がるもので、口縁端部は細く尖って終わる。

土師器皿(48)は、ヨコナデされた口縁部が弱く外反して立ち上がるもので、口縁端部は細く丸く終わる。底部には指頭圧痕がよく残る。器壁は8mm前後と厚手である。

土釜(49・50)は、体部下方に最大径をもつ下脹れの体部に「く」字状に曲がる短い口縁部が付くもので、口縁端部は内側に丸く肥厚する。鏝は比較的短いものが体部上方に付く。菅原編年^⑪の大和B型あるいは松本編年^⑫の広口B型に相当する。

山茶碗(51)は、器形、高台の特徴から藤澤編年^⑬のⅡ段階4型式もしくはⅢ段階5型式に相当するものと思われる。

S K46出土遺物(52~56)

瓦器碗(52)は、直線的に開く体部に屈曲して立ち上がる口縁部から成り、三角形の低い高台が付く。外面のヘラミガキはなく、内面のヘラミガキも疎らである。底部内面に簡略化された渦巻文がみられる。山田編年のⅢ段階第1型式に相当しよう。

土師器皿(53~56)は、口径7.8cm~9.0cm、器高1.2cm~1.6cmを測る。口縁部の形態から、外反するもの(53・54)と内弯気味に立ち上がるもの(55・56)とに大きく分類できる。またさらに細かくみると前者には、口縁端部を上方に屈曲させるもの(54)や、底部の形態に着目すれば、(53・55)のように中央部が若干窪むものが認められる。

S K57出土遺物(57・58)

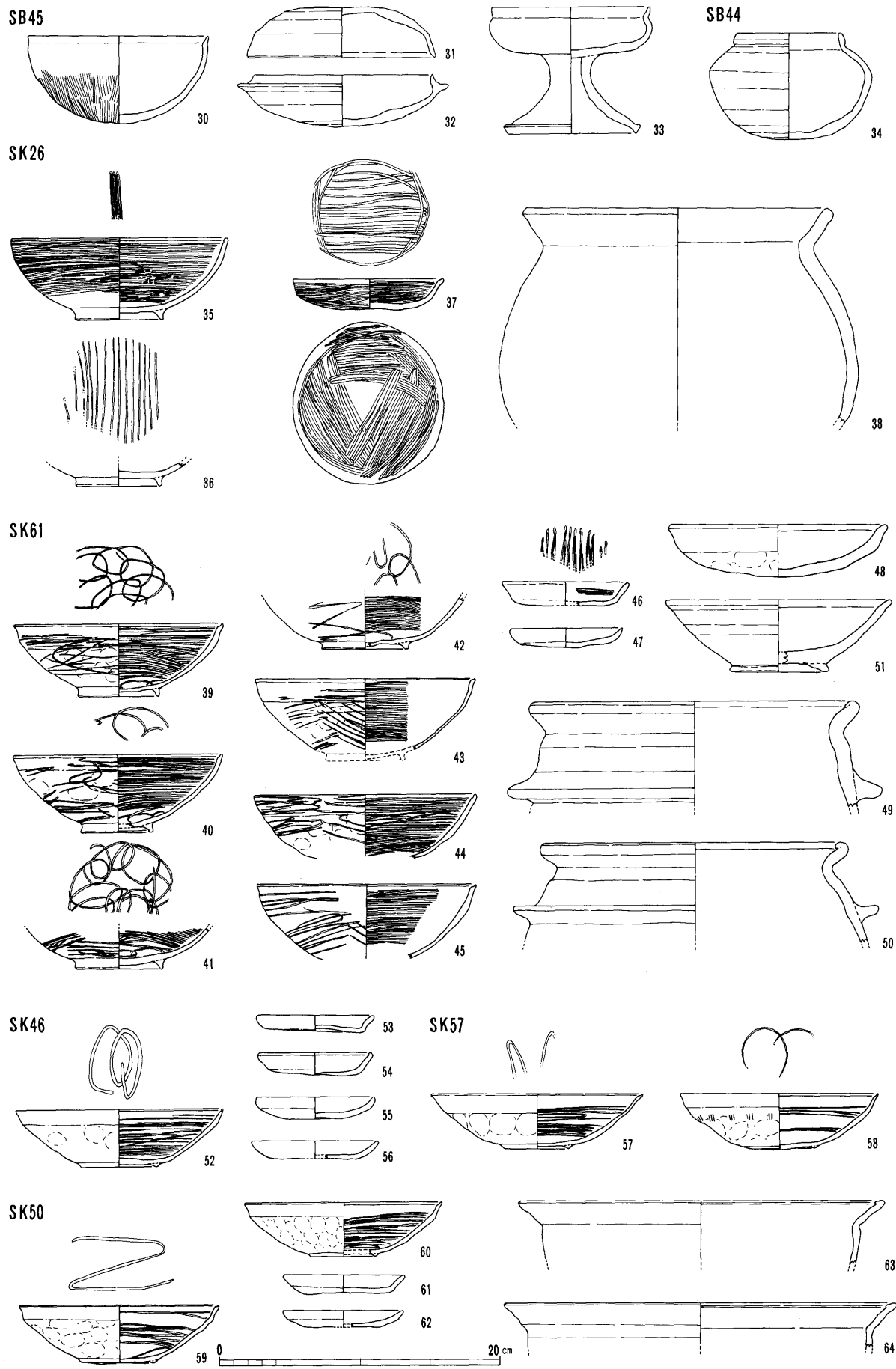
瓦器碗2点がある。いずれも体部外面のミガキはなく、内面のミガキは疎らであるが、口縁端部の沈線や形骸化した高台は残る。Ⅲ段階第1型式~第2型式に相当するものと思われる。

S K50出土遺物(59~64)

瓦器皿、土師器皿、瓦質皿がある。

瓦器碗(59~60)は、口径14.0cm~41.2cm、器高3.9cm~4.1cmで、底部のミガキには簡略化されたジグザグ文や図示しなかったが、l字形ラセン文がみられる。Ⅲ段階第2型式に相当しよう。

土師器小皿は、S K46出土の小皿と同様、口縁部が外反するもの(61)と内弯気味に立ちあがるもの



第29図 Bトレンチ出土遺物実測図(1) (1:4)

(62) がある。

瓦質鍋 (63・64) は、いずれも口縁部がわずかに残る細片である。口縁端部は内側に肥厚し、上端に平坦な面を作る。体部の肩は張りをもたない。

SK 55出土遺物 (65~68)

土師器ミニチュア羽釜 (65) は、丸くて浅い底部に直立する体部、口縁部から成る。全体をナデて仕上げ、器壁は2mm前後の薄いものである。

瓦器碗は、内面に疎らなミガキを施すもので、口縁部内側の沈線は消失しているが、高台は低い形骸化したものが付くもの (66) と高台も沈線も消失し

た (67) がみられる。Ⅲ段階第3型式~第4型式に相当しよう。

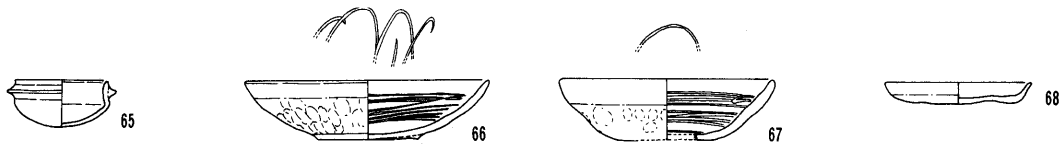
土師器皿 (68) は、口縁部がヨコナデされ弱く外反するものである。

SK 54出土遺物 (69~85)

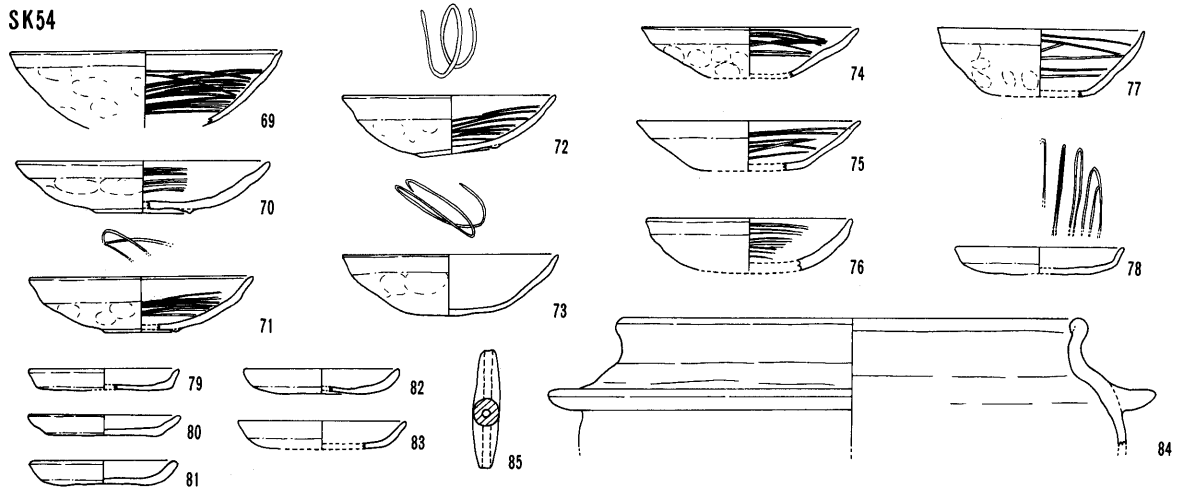
瓦器碗・皿、土師器小皿・土釜、土錘等がある。

瓦器碗は、口径14.4cmで口縁部に段状の沈線を有するもの (69)、口径11.4cm~13.3cm、器高2.7cm~3.1cmで、口縁端部の沈線が消失し、形骸化した低い高台の付くもの (70~72)、口径10.8cm~12.0cm、器高2.6cm~3.5cmで、口縁端部の沈線、

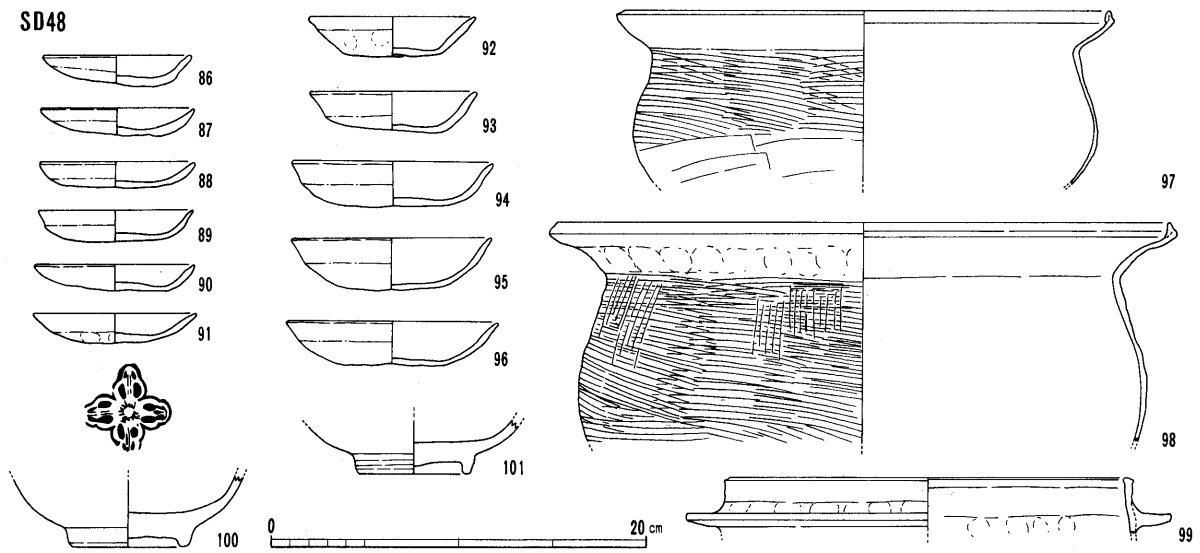
SK 55



SK 54



SD 48



第30図 Bトレンチ出土遺物実測図(2) (1:4)

高台とも認められないもの(73~77)がある。それぞれ山田編年のⅢ段階第1型式、第3型式、第4型式に相当するものと思われる。なお第4型式においては、(74・75)のように体部から口縁部にかけて直線的に大きく開き、器高の浅いものと、(77)のように口縁部が内弯気味に立ち上がり、器高の深いものの2種が認められる。

瓦器皿(78)は、口縁部内面のミガキはなく、底部内面に間隔の粗いジグザグ文が施されるのみである。

土師器小皿は、口径7.5cm~9.0cm、器高1.1cm~1.5cmで、口縁部が強くヨコナデされ、底部と口縁部との境に稜を残しながら外反気味に立ち上がるもの(79・80)と、底部から口縁部にかけて内弯気味に緩やかに立ち上がるもの(80~83)がある。(81・82)は、底部の器壁に比べて口縁部の器壁がやや厚く成形される特徴をもつ。

土釜(84)は、型の張った球形の体部に、外反気味に立ち上がる口縁部が付くもので、口縁端部は丸く肥厚する。鐙の位置は、SK61出土の土釜に比べ、さらに口縁部近くに付く。松本編年^④の広口B型土釜にあたるが、形態的には鐙の位置が異なるものの、広口C型土釜に近い。

土鍾(85)は、長さ6.2cm、最大径1.4cm、孔の径0.4cmを測る。

SD48出土遺物(86~101)

土師器皿・鍋・羽釜、青磁碗がある。

土師器皿は橙褐色を呈する薄手のもので、口縁の異びつなものが多くみられる。また口縁部と底部との境は内面が若干窪み、口縁端部が細かく尖るように終わる特徴をもつ。口径の大きさにより、中皿、小皿の2種に分類できる。

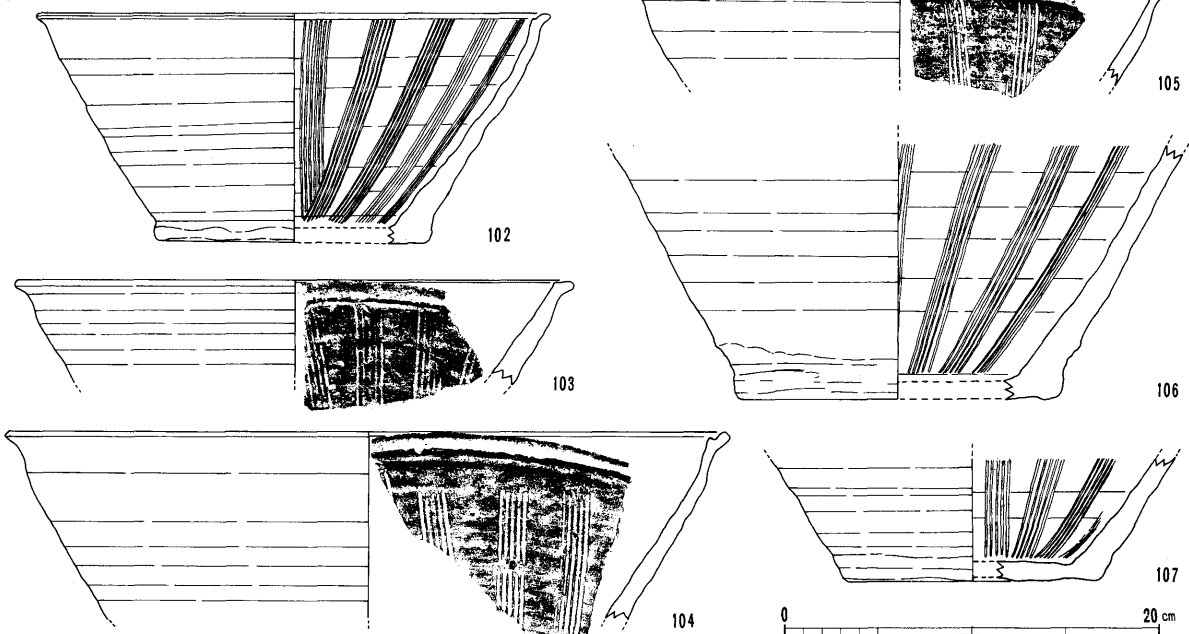
小皿(86~91)は、口径7.9cm~8.6cm、器高1.4cm~1.7cm。中皿は口径8.8cm~8.9cm、器高2.1cmのやや深手のものと、口径10.6cm~11.4cm、器高2.3cm~2.8cmの一回り大きいものがある。

土師器鍋(97・98)は、所謂“南伊勢系鍋”^⑤と呼ばれるものである。口縁端部は折り返されて断面が三角形に上方に尖り、肩はあまり張らない器形である。(97)の口縁は内弯気味に開き、体部外面上半は横方向のハケメ、下半部はヘラケズりする。(98)は頸部に指頭圧痕を留め、体部上半は横方向のハケ目の後、さらに間隔を置いて縦方向のハケメを施す。伊藤編年^⑥の第4段階c型式に相当しよう。

土師器羽釜(99)は、口縁部が直立し、端部が内外に若干肥厚するもので、端部上端は外傾する面を作る。淡黄褐色を呈し、胎土・焼成共良好である。

青磁碗(100・101)は、いずれも底部片で、龍泉窯系の無文タイプのものと思われる。高台は四角い削り出し高台で、底部の器壁は厚い。釉は高台の内

SD85



第31図 Cトレンチ出土遺物実測図(1:4)

側まで厚く施釉される。なお、(100)の底部見込みには、スタンプと思われる花文の施印がみられる。

3. Cトレンチの遺物

Cトレンチでは、遺物の出土量が全体に少なく、11・12世紀代の土師器、瓦器碗、白磁碗等が若干認められたものの、今回取りあげたS D85出土遺物以外ではまとまった資料はない。

(3) 結 語

浮田遺跡は、木津川(長田川)左岸に営まれた面積200,000㎡におよぶ広大な遺跡で、今回はそのごく一部を調査したに過ぎない。したがって遺跡の全体像やその性格を十分把握するまでには至らなかったが、資料的にかかなりの制約があるものの、検出された遺構・遺物からその一端を垣間見ることができた。

当遺跡で検出した最も古い遺構は、Aトレンチの古墳時代前期の竪穴住居である。これ以前にも遺物としては、縄文後期土器片や弥生後期土器がごく少量認められたが、確実な遺構はこの時期からで、4世紀末の石山古墳、時期不詳だが才良山1号墳、観音寺山古墳、5世紀後半の近代1号墳など木津川水系に連綿と前方後円墳が築かれる中で、こうした首長層に支配されていた者達の集落も農耕技術の発達と共に展開していったものと考えられる。Bトレンチでは、古墳時代後期の隣接する竪穴住居が2棟確認された。古墳時代前期から後期にかけて、集落の中心が遺跡の中央部へ移動あるいは、遺跡が中央部まで拡大したと思われる。

しかし、奈良時代から平安時代中期にかけては、遺構・遺物とも認められないので、集落は長期間途絶える。そして再び集落が形成されるのは、平安時代後期になってからである。Cトレンチの掘立柱建物S B66・S B88やAトレンチの土坑S K9等がこれに該当する。以後集落は徐々に拡大し、地形的に微高地状となっているBトレンチ中央部で、平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・土坑・溝等が多数検出されたように、この時期集落としてのピークを迎える。この頃神戸の神民による出作活動が活発となり、しばしば国衙側と対立していたことが文献に散見され^⑧、こうした集落の展開は、このことを裏付けているものであろうか。

S D85出土遺物(102~107)

大半が茶褐色を呈する信楽焼播鉢である。口縁部の形態に型式の規定的要素を求めた山田編年^⑨に従えば、(103)のみⅢb型式に、(102・104~107)はⅣa型式に相当する。このほか底部片に櫛目を施すものが認められるところからⅣb式も見られ、概ね16世紀後半代を中心とした一群である。

その後は、15世紀後半の溝S D48や城館に伴う堀とも考えられる16世紀後半の溝S D85などがわずかに確認されたのみで、次第に現在の水田、畑作地帯へと変貌していったものと考えられる。

ところで当遺跡の所在する神戸地内は、壬申の乱の際、大海人皇子が伊賀駅家を発ち、木津川沿いに北上したルート上にあたり、大和から東国へ貫ける古道の存在が想定されていた。今回の調査目的の一つに、この古道跡の確認があったが、残念ながら明確な道路遺構は確認されなかった。なお、当遺跡の山寄りに、現在あまり利用されていないが、南北方向にまっすぐ走る市道神戸・依那古線があり、歴史地理学上、古道の候補の一つとしてあげておきたい。

遺物は、古墳時代前期・後期の土師器、須恵器のほか、11世紀~13世紀、15世紀の中世土器が多量に出土した。

竪穴住居S B8・10出土の布留式土器は、安達・木下編年^⑩の小型丸底土器Da類、Db類に、甕はAc類に、高杯はAb類にあたり、こうした土器群で構成される上ノ井手遺跡井戸030下層の時期に相当するものと考えられる。

中世の土器については、遺物の章でも概述したように、相伴する瓦器碗や南伊勢系鍋の編年に従えば、S K26出土遺物が11世紀第3四半世紀に、S K61出土遺物が12世紀第2四半世紀に、S K46・57・50出土遺物が13世紀第1四半世紀に、S K55・54出土遺物が13世紀後半~14世紀初頭に、S D48出土遺物が15世紀後半に、位置付けられる。また黒色土器や初期の瓦器碗が伴っていないS K9・13出土の土師器Ⅲの年代については、才良遺跡土坑墓S X2^⑪から、これらより後出の一群と考えられる土師器Ⅲが出土しており、相伴する白磁碗は、横田・森田編年^⑫の

IV-1 a類(11世紀中葉~12世紀初頭)に相当するところから、一応11世紀前半に位置付けておきたい。

ここでは、特に浮田遺跡出土の中世土師器皿を取りあげ、その変遷について見てみることにする。

土師器皿は、法量の違いにより、口径16.5cm、器高3cm~4cmの大形土師皿、口径9cm~11.5cm、器高2cm~3cmの中型土師皿、口径7cm~9cm、器高1cm~2cmの小型土師皿に大別でき、さらに口縁部の形態から、土師皿をA~Eの4型式に細別分類をおこなった。

土師皿Aは、口縁部が所謂「て」字状口縁となるもので、本例(11)は、口縁の退化がかなり進んだ時期のものと思われる。土師皿A'は「て」字状口縁皿ではないが、形態的には、これに近いもの。

土師皿Bは、口縁部が外反し、口縁端部を垂平に近く外側へ引き出すようにヨコナデするもの。口縁

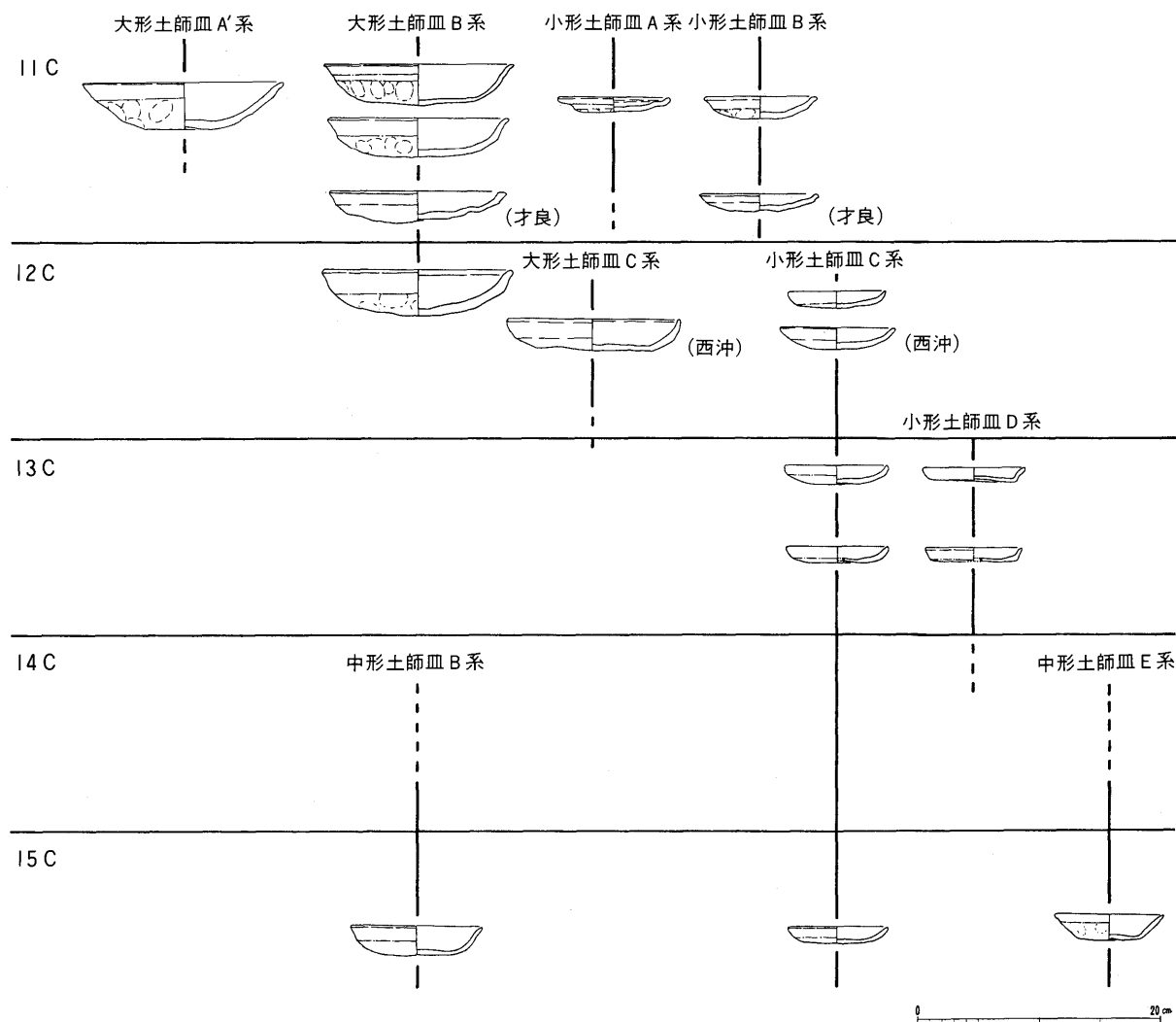
端部の外反度は、時期が下がるに従い弱くなる。口縁部を2段にヨコナデするものは将来新たな型式設定が必要と思われるが、本遺跡の場合量的に乏しいので、一応この類に含めておく。

土師皿Cは、口縁部を内弯気味に立ち上げるもので、口縁端部は細く終わるものが多くみられる。

土師皿Dは、口縁部を強くヨコナデし、底部と口縁部の境に稜をもつもの。底部は平坦である。

土師皿Eは、口縁部が直線的に開き、口縁部の立ちあがりを幅広く成形するものである。

以上の分類をもとに11世紀から15世紀の土師皿について見てみると、11世紀前半では、大形土師皿A'・Bと小形土師皿A・Bが見られる。しかし、「て」字状口縁の土師皿Aの割める割合は大形、小形ともごく少ない。11世紀中葉から12世紀初頭では、才良遺跡SX2の例を見る限り、土師皿Aは姿を消し、



第32図 浮田遺跡における中世土師器皿変遷表(1:6)

大形土師皿Bと小形土師皿Bに集約されている。

そして12世紀には、小形土師皿Bは消失し、大形土師皿B、小形土師皿Cのほか、新たに大形土師皿Cが出現する。Ⅱ段階第2型式の瓦器碗が共伴する西沖遺跡^⑫井戸S E66出土の大形土師皿は、C類が主体的であり、むしろこの時期、大形土師皿C、小形土師皿Cが一般的であったと考えられる。

13世紀に入ると、大形土師皿Bは姿を消し、小形土師皿C・Dがみられる。出土資料中にはないが、大形土師皿は次第に口径を縮小して、中形土師皿へと変わっていくものと思われる。

14世紀代は資料がなく、不明と言わざるを得ない。この時期、大和北部の十六面・薬王寺遺跡では、従

来の中・小形土師皿に加えてヘソ皿と灰白色系中形土師皿が出現し、器種の多様化を迎えるが、伊賀地方では調査例が少なく、空白となっている。

15世紀後半には、小形土師皿Cのほか、新たに中形土師皿B・Eがみられる。小形土師皿は、13世紀代までわずかながら法量の縮小化が認められたが、15世紀の小形土師皿は、口径に大きな変化はないものの、器高は若干増し、器壁は薄手で、口縁に歪みのある粗製のものが目立つ。

以上、制約された資料の中で、浮田遺跡における中世土師皿の変遷をみてきたが、まだまだ不十分なものであり、今後空白を埋める良好な一括資料が蓄積されることを期待したい。

(倉田直純)

〔註〕

- ① 『三重県の地名』日本歴史地名大系24 1983(平凡社)850～851Pを参照した。
- ② 『新抄格勅符抄』大同元年牒に「伊賀廿戸」とある。
- ③ 『神鳳抄』に「穴太御厨二丁、二石井亭、外宮、御費芋菓子」、『外宮神領目録』に「穴太御園 六月亭 九月栗 十二月菓子 但此加進上米分一石近年進之」とある。
- ④ 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第六十号第二巻1974
- ⑤ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966
- ⑥ 山田 猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1986
- ⑦ 前掲註⑤
- ⑧ 前掲註⑥
- ⑨ 「上野市摺見 上寺遺跡他」『昭和54年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1980 所収の瓦器碗No.44
- ⑩ 「阿山郡大山田村 西沖遺跡」『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1981 所収の瓦器碗No.116
- ⑪ 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1983

- ⑫ 松本洋明「中世・近世の出土土器」『十六面・薬王寺遺跡－国道24号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅲ)－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第五十四冊 奈良県立橿原考古学研究所1988
- ⑬ 藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民族資料館1983
- ⑭ 前掲註⑫
- ⑮ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会1990
- ⑯ 前掲註⑮
- ⑰ 山田 猛「下郡遺跡群出土の播鉢」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会1990
- ⑱ 『三国地誌』天喜元年三月二七日付官宣旨案 天仁二年九月二六日付官勘状案(東大寺文書) 所収の永長二年二月二九日の宣旨案 建仁元年三月伊賀国在庁官人解案(東大寺古文書)など
- ⑲ 前掲註⑭
- ⑳ 本報告書に掲載
- ㉑ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- ㉒ 前掲註⑩

3. 朝神遺跡

朝神集落の西方に位置する朝神遺跡は、調査の結果、城館跡であることが確定された遺跡である。

調査前は、東西62m、最大幅6mの土塁状の高まりとして認められていたもので、家畜小屋や、東側は松本氏宅の土塀に転用されるなど、土塁はかなりの削平を受け、原形をわずかに留めるのみであった。

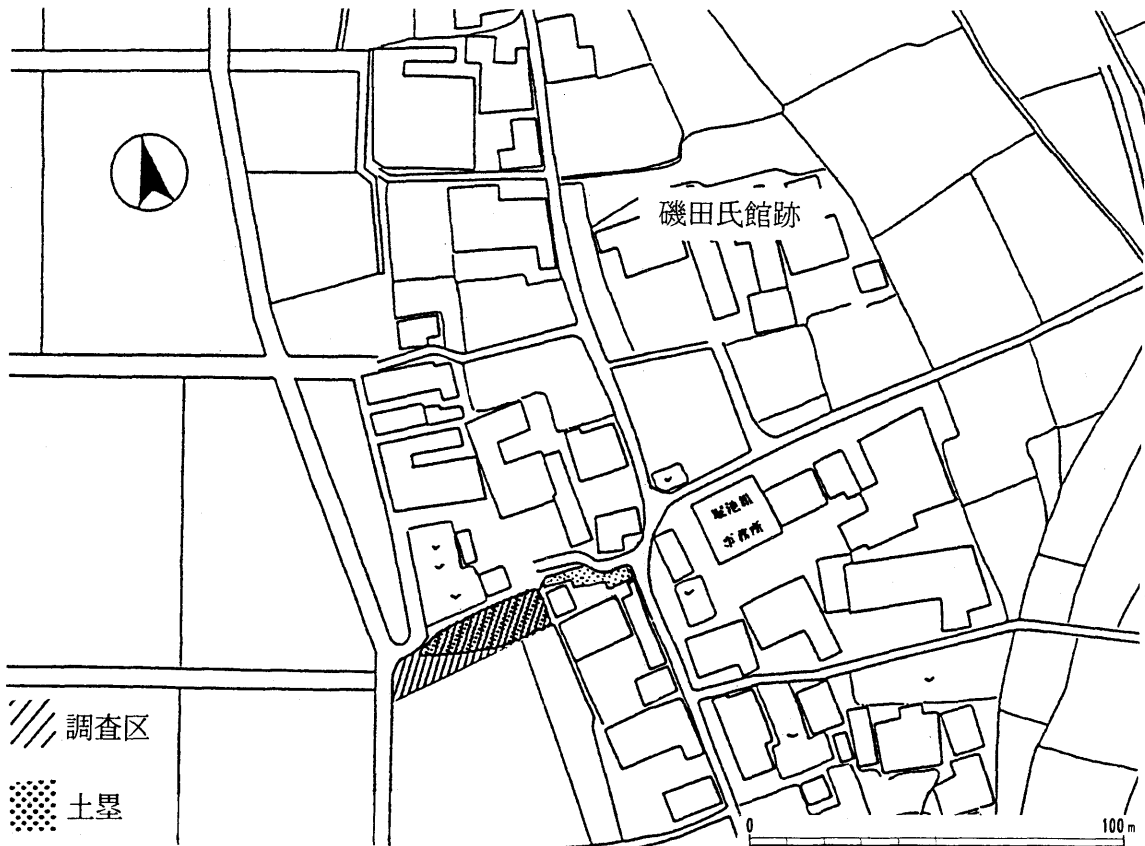
ここでは、小路により分断された土塁の東側を東土塁、西側を西土塁と便宜上呼ぶこととする。今回発掘調査を実施した場所は、この西土塁とその南部の水田約260㎡ほどである。

(1) 遺 構

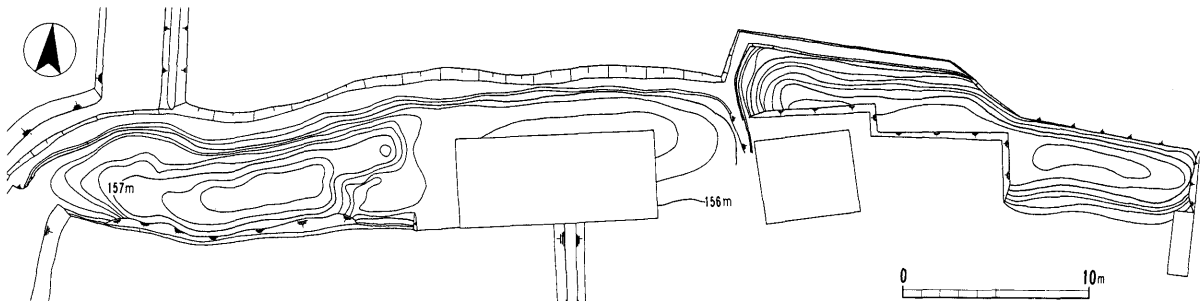
A. 土塁

東土塁は、長さ約25m、基底幅7mで、頂部は削平されたためか丸味を帯びており、絶対高で157.4mを測る。軸方向はE4°Sである。

西土塁は現況で東西38m、幅6m、高さ1.8mを測り、頂部の絶対高は、157.6mで、土塁の軸線はE9°Nである。土塁の構築は、土層断面図を見ると、最下層に灰色粘質土（旧耕作土）、赤茶色砂質



第33図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第34図 調査前の土塁測量図 (1 : 400)

土（旧耕土）が認められ、構築以前は田畑であったことが分かる。この上の土塁下部の層序は、暗赤茶色砂質土や暗茶色土、淡黄色砂質土がブロック状に混在しており、土塁上部は灰茶色砂質土の単一層となっている。従って南側の堀を堀削すると同時に、順次その土を北側へ盛り上げ、土塁を構築したものと推定される。堀と土塁の横断面の面積がほぼ同じであることから、これを裏付けていると言えよう。

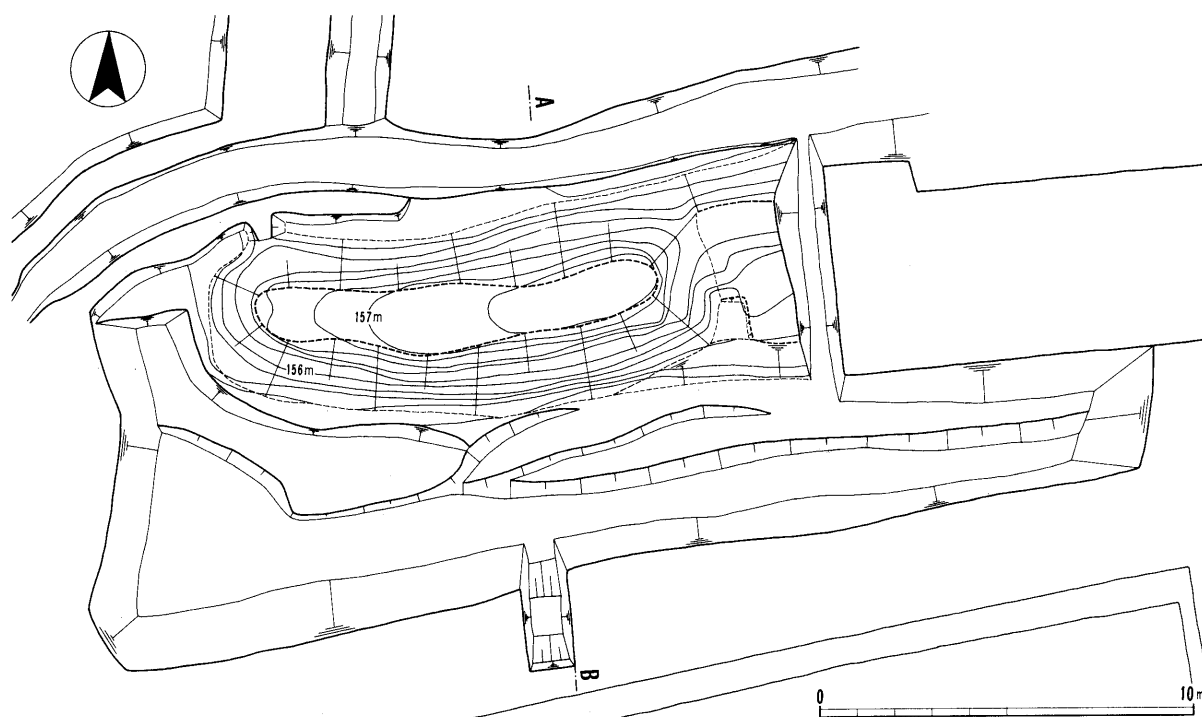
なお、土層断面や調査後の測量図から、土塁の築造当初は、基底幅5.5m、上面の幅1.5m、高さ1.75mである。

B. 堀

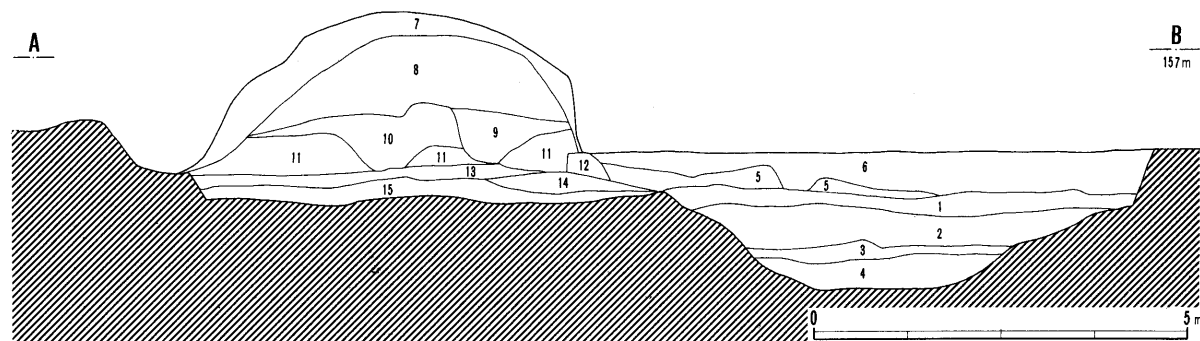
幅6.5m、深さ1.25mを測る。溝埋土は、上から1層～4層に分かれ、第1層からは土師器皿（11）、第2～3層からは信楽焼甕（7）・播鉢（2）・練鉢（3）、第4層からは信楽焼甕（6）、土師質風炉（4）、瓦質火鉢（5）、山茶碗（10）、等が出土。そして堀が完全に埋没した後は、再び田畑として利用され、現在に至る。

(2) 遺物

整理箱で5箱分の遺物が出土した。その多くは堀



第35図 調査後の土塁・堀測量図（1：200）



1層；赤茶色砂質土、2層；赤灰色砂質土、3層；灰色砂質土、4層；青灰色粘質土、5層；茶灰色砂質土（旧耕土）、6層；耕土、7層；表土、8層；灰茶色砂質土、9層；暗茶色土、10層；淡黄色砂、11層；暗赤茶色砂質土、12層；灰色土、13層；灰色粘質土（旧耕土）、14層；淡黄色砂質土、15層；赤茶色砂質土（旧床土）

第36図 土塁・堀土層断面図（1：100）

からの出土遺物で、他に土壘表土を除去した際に出土した遺物が少量ある。

堀第4層出土の信楽焼甕(6)は、受口状に口縁部を「S」字状縁帯にするもので、木戸編年^①のB3類にあたり、15世紀後半頃のものであろう。推定口径38cmを測る。土師質風炉(4)は、大きく張った肩部に直立する口縁部が付くもので、口縁端部と頸部に凸帯を巡らす。頸部には花文のスタンプ文様を押印し、肩部には花形の透孔があく。瓦質火鉢(5)は筒型を呈し、胴部上端、中段、下端に凸帯を巡らすものである。口縁部は短く、内傾して端部は丸くおさめる。16世紀代のものであろう。山茶碗(10)は、押しつぶされたような低い高台が付くもので、13世紀代のもと思われる。おそらく城館跡以前の遺物が混入したのもと思われる。

堀第2～3層出土の信楽焼甕(7)は、B3類に相当し、推定口径54cmを測る。播鉢(2)は推定口径27cmの片口の鉢で、明赤褐色を呈し、櫛目は1.4cm幅に5本確認された。口縁部の形態から山田編年のⅢb式に相当し、16世紀前半のものであろう。練鉢(3)は灰白色を呈する体部片で、内面はよく

使用され平滑である。

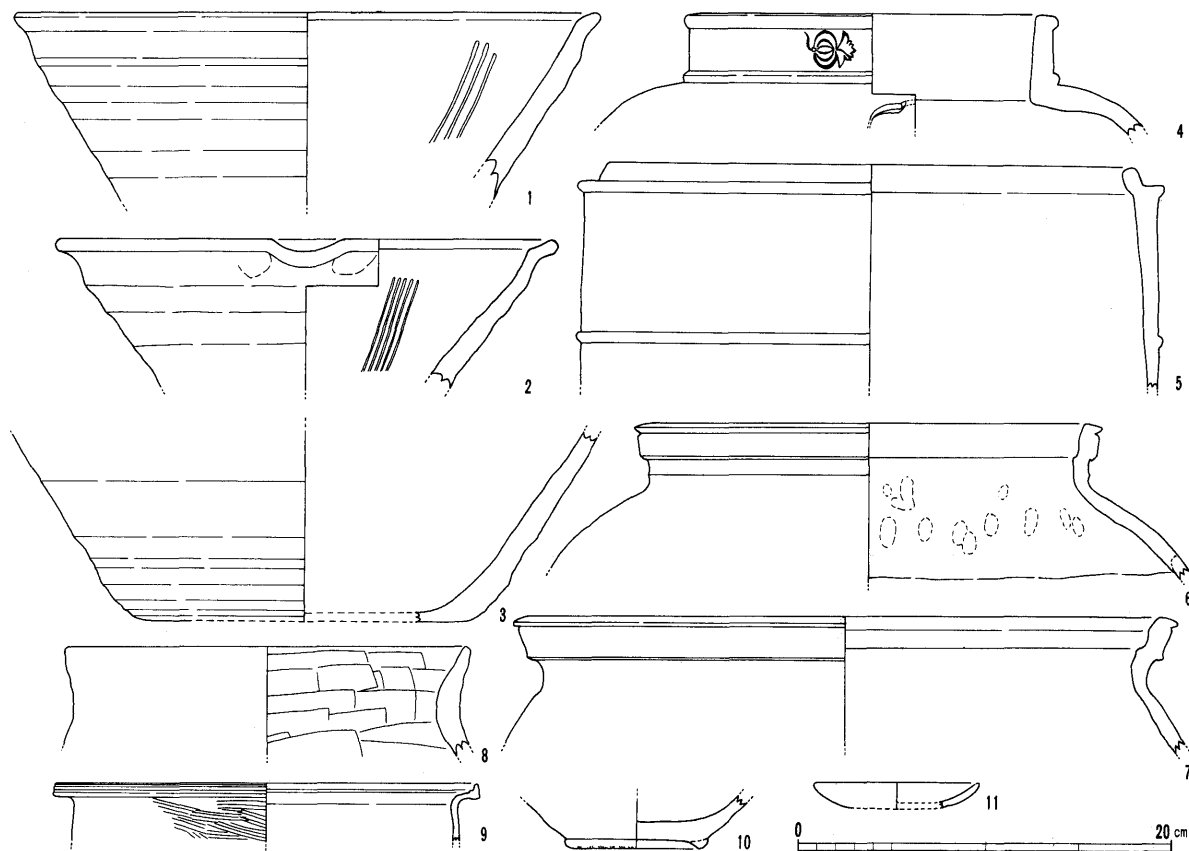
堀第1層出土の土師器小皿(11)は、黄褐色を呈し、口縁端部のみヨコナデし、外面は指オサエ、内面はナデで仕上げるもの。16世紀以降の土師皿と思われる。

その他、土壘の表土からは、Ⅱa型式(14世紀中葉)の信楽焼播鉢(1)や、黒色土器壺(8)、16世紀代の南伊勢系鍋(9)のほか、10世紀後半の黒色土器碗A類、12世紀後半の瓦器碗等が出土している。黒色土器壺(8)は内面のみ黒色化したもので、内面に横方向の板ナデの痕跡がよく残る。あまり例がなく時期不詳。

(3) 小 結

今回の調査により、土壘の南側で堀を確認し、城館跡であることが確定した。

城館の規模は、明らかにできなかったが、西土壘の西端部から直交するように北へ延びる土壘の痕跡とみられる南北方向の細長い畑の地割りが残存していることや、堀も調査区の西端部で北へ曲がるような気配をみせており、今回の調査地が城館の南西部



第37図 堀・土壘・表土出土遺物実測図(1:4、6・7のみ1:6)

分にあたる可能性が非常に大きいと言える。なお、西土壘と東土壘とで軸線が異なる点は疑問として残った。ふつう、平地における伊賀の中世城館は方形プランを呈するのが一般的であり、果たして一連のものか、あるいは別の城館と重複しているものかは結論が出なかった。

城館の築造時期は、土壘表土から出土の信楽焼鉢（1）や、堀第3層出土の練鉢（3）等から、おそ

らく14世紀中頃には成立していたものと考えられる。以後、堀は15世紀代から徐々に埋まり始め、16世紀代にはほとんど埋まってしまい廃絶したものと思われる。

（倉田直純）

〔註〕

① 木戸雅寿「近江における15～16世紀の土器について」『中世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会1989

遺物番号	出土遺構	器種・器形	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	遺存度	備考	実測No.
			口径	器高	底径							
1	SB10	土師器 小型丸底壺	8.7	-	-	口縁ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラケズリ	密	良	橙褐色	底部欠		23
2	"	土師器 小型丸底壺	-	-	-	体部内面ハケ後ナデ 内面ナデ、底部ヘラケズリ	"	"	赤褐色	口縁欠		20
3	"	土師器 高杯	17.6	-	-	内外面ナデ	"	"	淡黄褐色	杯部1/2		18
4	"	土師器 高杯	-	-	10.6	脚柱外面ヘラケズリ 脚裾ヨコナデ	砂粒	"	暗赤褐色	脚部1/2		19
5	"	土師器 甕	14.0	-	-	口縁ヨコナデ	砂粒	"	橙褐色	口縁1/8		21
6	SB8	土師器 小型丸底壺	9.0	-	-	口縁内外面ハケ後ヨコナデ 体部ナデ	密	並	暗黄褐色	1/4		25
7	"	土師器 小型丸底壺	-	-	-	口縁ヨコナデ 体部ナデ	"	"	橙褐色	口縁欠	外面にスス付着	26
8	"	土師器 高杯	19.6	-	-	内外面ハケメ後 口縁ヨコナデ	砂粒 雲母	"	橙褐色	口縁1/4		24
9	"	土師器 甕	17.6	-	-	口縁ヨコナデ 体部ナデ	砂粒	良	橙褐色	口縁のみ	外面にスス付着	27
10	"	土師器 ミニチュア	7.4	-	-	内面ナデ、外面粗いハケメ	密	並	橙褐色			28
11	SK9	土師器 小皿	9.0	1.4	-	口縁ヨコナデ 底部指オサエ不調整	砂粒少	並	淡黄灰色	1/2	「て」字状口縁	9
12	"	"	8.4	1.3	-	"	砂粒少 雲母少	良	橙褐色	完形		16
13	"	"	8.2	1.6	-	"	雲母少	並	明褐色	"		1
14	"	"	8.3	1.5	-	"	砂粒少 雲母少	並	黄褐色	"		2
15	"	"	8.8	1.3	-	"	密	並	黄褐色	"	歪有	13
16	"	"	8.6	1.7	-	"	雲母含	良	橙褐色	"		15
17	"	"	9.0	1.9	-	"	雲母含	良	淡褐色	"		10
18	"	"	8.8	1.8	-	"	砂粒微 雲母	良	橙褐色	"		5
19	"	"	9.2	1.8	-	"	雲母	良	橙褐色	"		17
20	"	"	9.2	1.9	-	"	砂粒少 雲母	良	橙褐色	"		3
21	"	"	9.1	1.8	-	"	長石含 雲母	並	黄褐色	口縁1/4欠		11
22	"	"	9.0	1.9	-	"	雲母	良	橙褐色	完形		4
23	"	"	9.8	2.3	-	"	雲母	良	橙褐色	"		7
24	"	"	10.1	2.3	-	"	雲母	良	橙褐色	1/4		12
25	"	土師器 皿	14.2	3.0	-	"	砂粒 雲母	良	黄褐色	完形		6

第10表 浮田遺跡出土遺物観察表（1）

遺物 番号	出土遺構	器種・器形	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	遺存度	備 考	実測 No.
			口径	器高	底径							
26	S K 9	土師器 皿	14.6	3.3	-	口縁ヨコナデ 底部指オサエ不調整	雲母	良	橙褐色	完形		8
27	"	"	16.5	3.9	-	"	雲母	並	淡褐色	"		14
28	S K 13	土師器 皿	16.2	3.2	-	口縁ヨコナデ 底部指オサエ	密	並	淡黄褐色	"		37
29	"	"	15.5	3.4	-	"	密	良	淡黄褐色	"	口縁2段ナデ	38
30	S B 45	土師器 鉢	12.6	6.2	-	口縁ヨコナデ 体部下半ハケメ	砂粒	良	橙褐色	口縁3/4欠	底部にスス 附着	145
31	"	須恵器 杯蓋	14.2	3.5	-	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	砂粒少	並	暗灰色	1/3		142
32	"	須恵器 杯身	12.8	3.7	-	内外面ロクロナデ 底部ロクロヘラケズリ	砂粒少	並	灰色	完形		143
33	"	須恵器 高杯	11.0	9.0	9.0	ロクロナデ	砂粒少	良	灰色	杯4/5欠		144
34	S B 44	須恵器 短頸壺	7.4	7.5	-	ロクロナデ 底部ロクロヘラケズリ	密	良	淡青灰色		ロクロ圧回転	148
35	S K 26	瓦器 碗	15.2	5.8	6.4	内外面密なヘラミガキ 底部密な平行線文	密	良	黒灰色	1/2		124
36	"	"	-	-	5.8	内外面ヘラケズリ 底部平行線文	密	良	黒灰色	口縁欠		127
37	"	瓦器 皿	10.6	2.3	-	内外面ヘラミガキ 底部平行線文	密	並	淡灰色	完形	底部外面ミガキ 3単位	123
38	"	土師器 甕	21.3	-	-	口縁ヨコナデ 体部ナデ	砂粒	並	暗橙褐色	1/3	外面スス附着	125
39	S K 61	瓦器 碗	14.8	5.1	5.8	口縁ヨコナデ、外面指圧 内外ヘラミガキ	密	良	暗灰色	1/4	連結輪状文	52
40	"	"	14.8	5.5	-	"	砂粒微	並	暗灰色	1/5	"	149
41	"	"	-	-	6.0	"	密	良	暗灰色	底部1/2	"	152
42	"	"	-	-	6.2	"	密	良	暗灰色	底部1/10	"	153
43	"	"	15.6	-	-	"	密	並	暗灰色	口縁1/5		150
44	"	"	15.6	-	-	"	密	良	暗灰色	口縁1/6		154
45	"	"	15.6	-	-	"	密	良	暗灰色	口縁1/6		53
46	"	瓦器 皿	9.0	1.7	-	口縁ヨコナデ 底部ジクザク文	密	並	灰色	口縁1/3	口縁内側ミガキ	51
47	"	土師器 小皿	7.9	1.4	-	口縁ヨコナデ 底部外面不調整	密	良	橙褐色			54
48	"	土師器 皿	15.0	3.8	-	口縁ヨコナデ 底部指オサエ	砂粒少	並	明褐色	口縁1/6欠		155
49	"	土師器 土釜	22.4	-	-	口縁折り返し、ヨコナデ 体部ナデ	砂粒少	並	暗褐色	口縁1/6		156
50	"	土師器 土釜	21.4	-	-	口縁折り返し、ヨコナデ 体部ナデ	砂粒少	並	暗灰色	口縁1/10		157
51	"	陶器 山茶碗	16.0	5.1	6.6	ロクロナデ 底部糸切り	砂粒少	並	淡灰色	1/3		151
52	S K 46	瓦器 碗	14.6	4.1		口縁ヨコナデ、内面粗いミガキ 体部外面指オサエ	密	並	暗灰色	口縁3/4欠	底部㊂字形 ミガキ	141
53	"	土師器 小皿	8.2	1.2	-	口縁ヨコナデ 底部不調整	砂粒少	並	淡橙褐色	2/3		138
54	"	"	7.8	1.6	-	"	砂粒 雲母	良	黄褐色	口縁1/3欠		137
55	"	"	8.3	1.6	-	"	雲母	良	橙褐色	1/3		139
56	"	"	9.0	1.2	-	"	密	良	橙褐色	口縁1/6		258
57	S K 57	瓦器 碗	15.0	3.9	4.6	口縁ヨコナデ、内面ミガキ 体部外面指オサエ	密	良	暗灰色	1/3	底部疎らな ジクザク文	59

第10表 浮田遺跡出土遺物観察表(2)

遺物 番号	出土遺構	器種・器形	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	遺存度	備 考	実測 No.
			口径	器高	底径							
58	S K57	瓦器 椀	14.0	4.1	5.0	口縁ヨコナデ、内面ミガキ 体部外面指オサエ	密	不良	暗灰色	完形	底部の字形 ミガキ	58
59	S K50	瓦器 椀	14.2	4.1	5.2	口縁ヨコナデ、内面粗い ミガキ、外面指オサエ	砂粒少	並	暗灰色	完形	簡略化した ジクザク文	178
60	"	"	14.0	3.9	4.6	"	砂粒少	並	暗灰色	口縁1/3		249
61	"	土師器 小皿	8.6	1.5	-	口縁ヨコナデ 底部不調整	砂粒 雲母	良	黄褐色	完形		179
62	"	"	8.6	1.2	-	"	密	良	橙褐色	口縁1/4		260
63	"	瓦質 鍋	(26.0)	-	-	口縁ヨコナデ 体部ナデ	粗	良	灰色	口縁1/6		261
64	"	瓦質 鍋	(28.0)	-	-	口縁ヨコナデ 頸部指オサエ	密	良	灰色	口縁1/16		262
65	S K55	土師器 ミニチュア羽釜	4.8	2.5	-	内外面ナデ	密	並	淡黄褐色	1/2		99
66	"	瓦器 椀	13.0	3.1	5.3	口縁ヨコナデ内面ミガキ 外面指オサエ	雲母	不良	暗灰色	1/3	沈線なし 高台有	248
67	"	"	11.3	3.2	-	口縁ヨコナデ 底部指頭圧痕	密	並	淡青灰色	1/3	沈線、高台なし	100
68	"	土師器 小皿	7.8	1.2	-	口縁ヨコナデ 底部不調整	砂粒少	並	淡黄褐色	1/2		98
69	S K54	瓦器 椀	14.4	3.1	-	口縁ヨコナデ、内面ミガキ 外面指オサエ (弱い)	密	良	暗灰色	口縁1/5	沈線有	64
70	"	"	13.3	2.7	-	"	密	不良	黒灰色	1/6	沈線なし 高台有	70
71	"	"	12.0	3.0	-	"	密	並	灰色	1/4	沈線なし 高台有	67
72	"	"	11.4	3.1	-	"	密	不良	灰白色	口縁1/2欠	沈線なし 高台有	63
73	"	"	11.5	3.2	-	" (弱い)	密	不良	淡青灰色	1/2	沈線なし 高台なし	71
74	"	"	11.6	-	-	"	密	並	灰色	口縁1/3	"	75
75	"	"	12.0	-	-	"	密	並	黒灰色		"	76
76	"	"	10.8	-	-	"	密	並	淡灰色		"	78
77	"	"	11.0	-	-	"	密	並	灰色		"	77
78	"	瓦器 皿	8.8	1.4	-	口縁ヨコナデ 底部指オサエ	密	並	暗灰色	1/4	ジクザク文 ミガキ	66
79	"	土師器 小皿	8.0	1.1	-	口縁ヨコナデ 外面不調整	砂粒少	並	淡灰色	1/2		69
80	"	"	8.2	1.1	-	"	砂粒少	良	淡黄褐色	1/5		263
81	"	"	7.5	1.3	-	"	密	並	淡赤褐色			80
82	"	"	8.2	1.3	-	"	砂粒少 雲母	並	明黄褐色			68
83	"	"	9.0	1.5	-	"	密	並	赤褐色			79
84	"	土師器 土釜	24.3	-	-	口縁折り返し、ヨコナデ 体部ナデ	砂粒 雲母	並	橙褐色	口縁1/5		65
85	"	土錘	長 6.2	径 1.4	-	ナデ	密	良	青灰色		須恵質	81
86	S D48	土師器 小皿	7.9	1.5	-	口縁ヨコナデ 底部指圧不調整	砂粒少	並	橙褐色	1/3欠	歪有	183
87	"	"	8.2	1.5	-	"	砂粒少	並	明黄褐色	完形	"	180
88	"	"	8.2	1.4	-	"	砂粒少 雲母	並	橙褐色	1/4欠	"	182
89	"	"	8.2	1.7	-	"	砂粒少	並	橙褐色	1/3	"	189

第10表 浮田遺跡出土遺物観察表(3)

遺物 番号	出土遺構	器種・器形	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	遺存度	備 考	実測 No.
			口径	器高	底径							
90	S D48	土師器 小皿	8.5	1.5	-	口縁ヨコナデ 底部指圧不調整	砂粒少 雲母	並	橙褐色	1/4欠	歪有	184
91	"	"	8.6	1.6	-	"	砂粒少 雲母	並	淡黄褐色	1/5欠		192
92	"	土師器 中皿	8.8	2.1	-	"	雲母	並	淡橙褐色	1/5		190
93	"	"	8.9	2.1	-	"	砂粒少 雲母	並	橙褐色	1/3欠	歪大	181
94	"	"	10.7	2.4	-	口縁ヨコナデ 底部指圧不調整	砂粒少 雲母	並	明黄褐色	完形	歪有	185
95	"	"	10.6	2.8	-	"	砂粒少 雲母	並	明黄褐色	1/6	"	186
96	"	"	11.4	2.3	-	"	砂粒少	良	橙褐色	1/5		187
97	"	土師器 鍋	25.6	-	-	口縁折り返し、ヨコデ 外面ハケメ、ヘラケズリ	密	良	淡黄褐色	口縁1/2	外面スス附着	195
98	"	土師器 鍋	(34.6)	-	-	"	"	並	淡黄褐色	口縁1/3	外面スス附着	196
99	"	土師器 羽釜	(21.4)	-	-	口縁ヨコナデ 内面指圧、ナデ	密	並	淡黄褐色	1/8	外面スス附着	191
100	"	青磁 碗	-	-	6.0	ロクロナデ ケズリ出し高台	密	良	暗緑色	底部のみ	花文スタン プ有	193
101	"	青磁 碗	-	-	6.0	ロクロナデ ケズリ出し高台	密	良	淡青緑色	底部のみ		194
102	S D85	信楽焼 播鉢	27.4	12.1	-	ロクロナデ、底不調整 櫛目(6本/1.3cm)	砂粒	良	赤褐色	1/3		198
103	"	"	(29.0)	-	-	ロクロナデ 櫛目(5本/1.4cm)	砂粒	並	淡黄褐色	口縁1/10		200
104	"	"	(38.0)	-	-	"	砂粒多	良	橙褐色	口縁1/8		199
105	"	"	(28.6)	-	-	櫛目(5本/1.3cm)	砂粒	良	明褐色	口縁1/10		202
106	"	"	-	-	(17.0)	ロクロナデ、底不調整 櫛目(5本/1.1cm)	粗	並	明褐色	底1/10		201
107	"	"	-	-	(13.4)	ロクロナデ、底不調整 櫛目(5本/1.3cm)	粗	良	明褐色	底1/8		203

第10表 浮田遺跡出土遺物観察表(4)

遺物 番号	出土遺構	器種・器形	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	遺存度	備 考	実測 No.
			口径	器高	底径							
1	土壘表土	信楽焼 播鉢	(31.0)	-	-	ロクロナデ 櫛目(3本)	粗	並	淡黄褐色	1/10		008-03
2	堀2~ 3層	"	(26.3)	-	-	ロクロナデ 櫛目(5本/1.4cm)	長石含	並	赤褐色	1/8	片口	006-03
3	堀3層	信楽焼 練鉢	-	-	-	ロクロナデ 櫛目なし	密	並	灰白色	1/10	外面に炭化 物附着	004-01
4	堀4層	土師質 風炉	(17.6)	-	-	ナデ	密	並	淡褐色	1/4	花文スタン プ透孔有	002-03
5	堀4層	瓦質 火鉢	28.0	-	-	外面ロクロナデ、貼付凸帯 内面ナデ	密	良	黒灰色	1/3		003-01
6	堀4層	信楽焼 甕	38.0	-	-	外面ロクロナデ 頸部内面指オサエ	長石含	硬	淡赤褐色	1/4		001-02
7	堀2~ 3層	"	(54.0)	-	-	ロクロナデ	長石含	硬	赤褐色	1/4		001-01
8	土壘表土	黒色土器 壺	(21.4)	-	-	口縁ヨコナデ 内面板ナデ	砂粒 長石	並	黄褐色	1/5	内面黒色	009-02
9	土壘表土	土師器 鍋	(22.6)	-	-	口縁ヨコナデ 外面ハケメ、内面ナデ	密	良	黄褐色	1/8		009-01
10	堀4層	陶器 山茶碗	-	-	6.7	ロクロナデ 高台にもみがら痕	密	硬	淡灰色	口縁欠		002-02
11	堀1層	土師器 皿	(8.8)	-	-	口縁端部ヨコナデ 底部指オサエ	密	並	黄褐色	1/4		004-02

第11表 朝神遺跡出土遺物観察表



遺跡全景（北から）



A-2 トレンチ全景（東から）



竪穴住居SB10（東から）



B-2 トレンチ SB59・60 (東から)



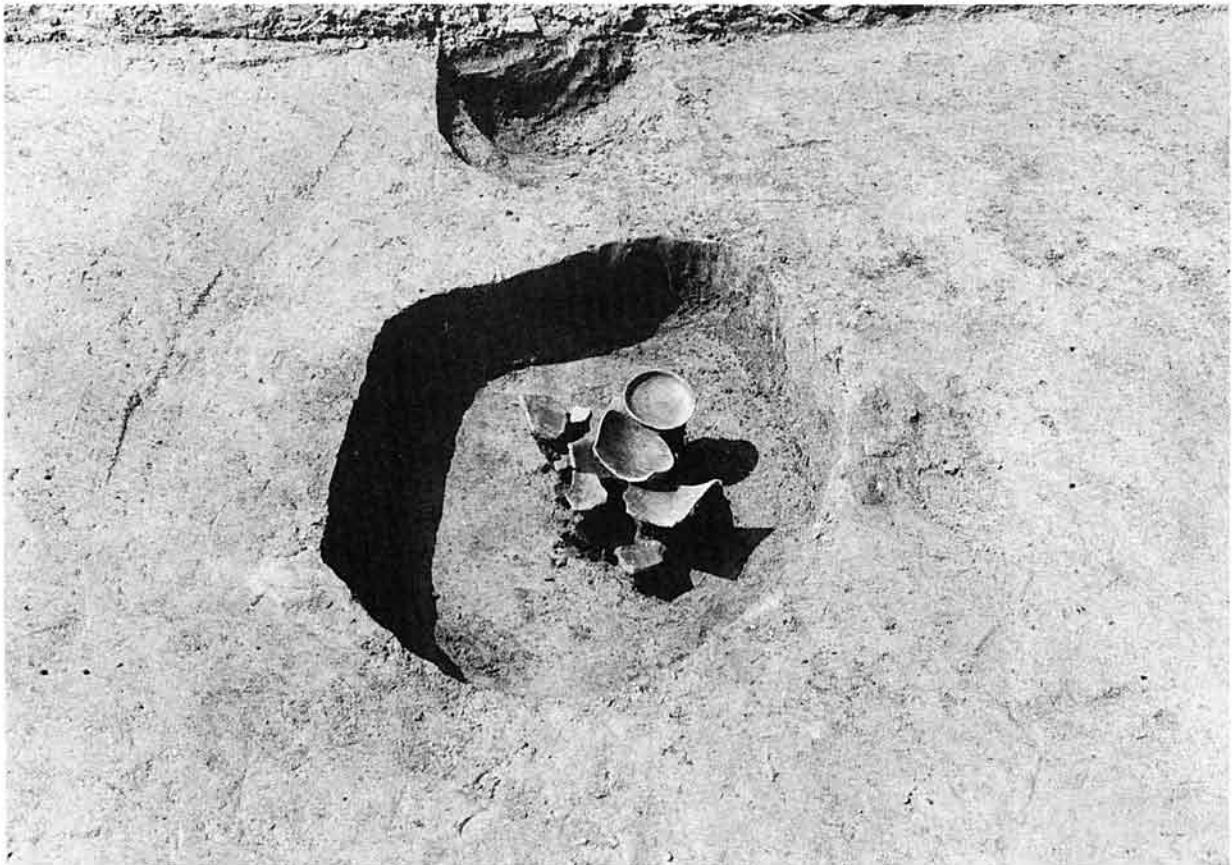
B-2 トレンチ 柱穴群 (東から)



C-1 トレンチ 全景 (西から)



C-2 トレンチ 全景 (東から)



土坑S K 26遺物出土状況（北から）



土坑S K 50遺物出土状況（東から）



31



32



30



33



11



16



12



17



13



23



27



25



29



26



35



59



37



65



53



61



調査前の朝神遺跡（西から）



調査後の土壘・堀（西から）

IV 上野市才良・市部 才良遺跡・澤田遺跡

1 位置と歴史的環境

第3紀層及び第4紀層からなる四周を山地に囲まれた伊賀盆地は、第4紀中期（50万年～30万年前）に古琵琶湖から陸化し、上野・山田・名張などの小盆地と、木津川・柘植川・服部川流域の小平野とからなる。青山高原に源を発する一級河川木津川は、上野盆地を北流して柘植川・服部川と合流し、京都府を下り淀川と合流の後、大阪湾に至る。

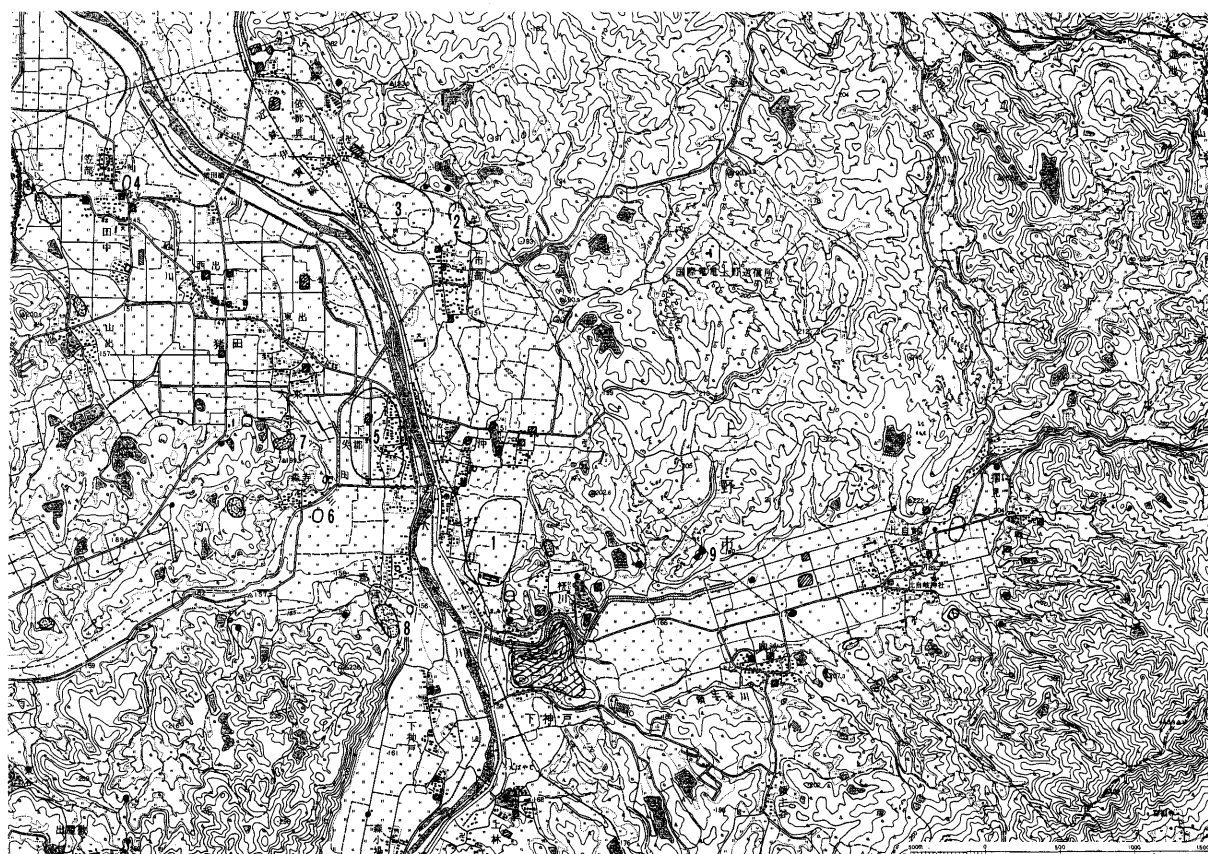
才良遺跡（1）・澤田遺跡（2）は、この木津川流域の上野市南部・才良・市部地内に所在し、上野盆地のほぼ中央部に位置する。

地形上は、木津川が比自岐川と合流して北へ流れる地点のやや下流東岸の微高地上（盆地低部との比高20m）にあり、才良遺跡はこの微高地の南端に、澤田遺跡は北端に位置する。どちらの遺跡も、間近に標高170～190mの丘陵が迫る。

才良遺跡・澤田遺跡を含む依那古から市部にかけての一带は、伊賀の中央部にあたり、古くから栄えたところで、特に、木津川に沿って、縄文時代から中世・近世に至る各時代の遺跡が数多く存在する。

縄文時代の遺跡としては、木津川西岸で前期の大歳山類似の瓜形文などを出した田中遺跡（4）、後期中津式土器や石棒を出土した清水北遺跡などが点在し、才良遺跡でも石鏃・土器が出土している。

弥生時代に入り、唐古第V様式の影響を強く受けた土器群を出土する田中遺跡、山の川遺跡、下部遺跡（5）、才良遺跡や木製長柄鋤を出土した森寺遺跡（6）など数多くの遺跡が平地に出現し、地域的規模での広がりを見せてきた。特に才良遺跡では、近年の中学校の改築にともなう調査で、136個体の弥生土器が出土している^①。各遺跡から出土する



第38図 遺跡位置図（1：50,000 国土地理院 伊勢路1：25,000から）

● 古墳 ○ 古墳群 ▨ 城館址

遺物には、いずれも畿内的な色彩が見られ、木津川をルートとする畿内とのつながりが想定される。

さらに、古墳時代に入り、才良遺跡の東方2kmの地に、三重にめぐる埴輪列・三つの粘土槨をもち、多量の遺物を出土した4世紀末前後と考えられている全長120mの前方後円墳・石山古墳(9)が築造される。後期には、木津川西岸の丘陵地に天童山古墳群(8)、猪田神社古墳群(7)など数多くの古墳が築造されるなど、伊賀を代表する一大政治勢力が存在した事がうかがわれる。また、木津川西岸の北堀池遺跡^②では、古墳時代の水田や竪穴住居群が検出されている。

奈良時代前期には財良寺が建立され、「延暦」銘の墨書のある木簡が出土した下部遺跡付近は、伊賀郡衙が置かれたと推定されている。

平安時代に入ると藤原摂関家をはじめ東大寺・興福寺などによる荘園支配が各地でおこり、この荘園

体制の中から中小の土豪がしだいに台頭し始めるようになる。下郡遺跡を含む伊賀郡猪田郷は、藤原摂関家による荘園支配が行われた地であり、木津川をはさんで対岸に位置する澤田遺跡・森脇遺跡(3)の近くのたれその森(垂園森、誰其森)やあわれその森(哀園森・哀其森)は、枕草子・八雲御抄・夫木和歌集・謡曲などにうたわれ、紀貫之や西行法師をはじめ多くの歌人が来遊したとされている。

中世に入り、伊賀地方でおおよそ500を数える城館が造られたが、その中でも伊賀の中央部にあたるこの木津川沿い一帯には、極めて多くの城館が造られ、在地勢力の自立化が見られるようになった。しかし、これら中世城館も、天正9年(1581年)の織田信長の侵攻により中世的秩序が解体され、幕藩体制社会の中で伊賀藤堂藩によって藩体制に組み込まれていった。

(山岡裕之)

2 才良遺跡

才良遺跡は、丸山中学校敷地造成や付近の畑地耕作に伴い、弥生土器、瓦器、古瓦等が採集されたことで知られ、同中学校の改築工事に伴う事前調査^③では、多量の弥生後期土器(畿内系・近江系)が一括で出土するなど、畿内の影響を強く受けながらも、近江の文化も受容した伊賀独自で発達した弥生文化を考えるうえで重要な遺跡として位置付けられている。また中学校西方の畑地では、川原寺式の複弁蓮

華文軒丸瓦も出土しており、天武天皇御願の財良寺は、当畑地一帯に比定されている。

丸山中学校北部に広がる田畑を対象とした試掘調査の結果、ほ場整備事業予定地内55,000㎡が遺跡範囲として確定した。今回実施した調査は、その中の排水路部分である。ここでは、集落に近いL字形のトレンチをA地区、山側のトレンチをB地区と呼ぶことにする。

(1) A地区の遺構

遺構の検出される地山までの基本的な層序は、耕土→床土→黄灰砂質土→灰褐粘質土→黄褐砂質土→地山(明褐色砂質土)の順で、地表から地山までは、50cm~80cmの深さがあった。

検出したおもな遺構には、弥生時代後期の溝1、竪穴住居1、土坑1、奈良時代の掘立柱建物2、溝1、平安時代後期の土壇墓1、鎌倉時代の土壇墓2、土坑6、掘立柱建物2、溝1などがある。

A 弥生時代後期の遺構

SD4 南北トレンチ、東西トレンチのそれぞれで確認。両者は一連のものと思われ、北西-南東方

向に走る溝である。両溝の底のレベルは、ほとんど差がなく、いずれの方向に流れていたかは不明。溝幅は南下するにつれ、広くなるようである。深さは、遺構面から15cm~40cmを測る。溝からは、弥生時代後期の長頸壺をはじめ、高杯・甕・器台など、当時使用されていたあらゆる器種の土器が、短期間に一括投棄された状況で出土した。

SB8 東西トレンチの中央やや西寄りで見出した竪穴住居。大半が鎌倉時代の土坑に切られ、わずかに外周の壁面近くが原形を留める。東西4.6m、深さ15cmで方形プランを呈する。

SK12 一辺2.9m、深さ10cm前後の浅い不整形土坑。北側は調査区外へ延びるため不明。弥生後期壺片がわずかに出土したことにとどまる。

B 奈良時代の遺構

SB3 桁行3間以上の南北棟建物。東側柱列しか確認できなかったので全体の規模は不明。柱掘形は南北に長く掘られ、大きなもので1.2m×0.7m、深さ40cmを測る。柱痕跡は径25cm前後でほぼ一列に並ぶ。柱通りの方向はN14°Eを示す。柱間は1.8mの概ね6尺等間である。

SB21 東西トレンチの東端郡で検出した(2)間×2間の南北棟建物。柱通りの方向は、N15°Eを示す。柱掘形は、大きなもので84cm前後の方形を呈し、深さは40cm～50cm。柱痕跡は精査したが確認することができなかった。柱掘形内の出土遺物はごく微量の土師器細片に限られたため、建物の時期を確定し難いが、SB3とほぼ同一方向であることや、柱掘形の規模からこの時期のものとした。

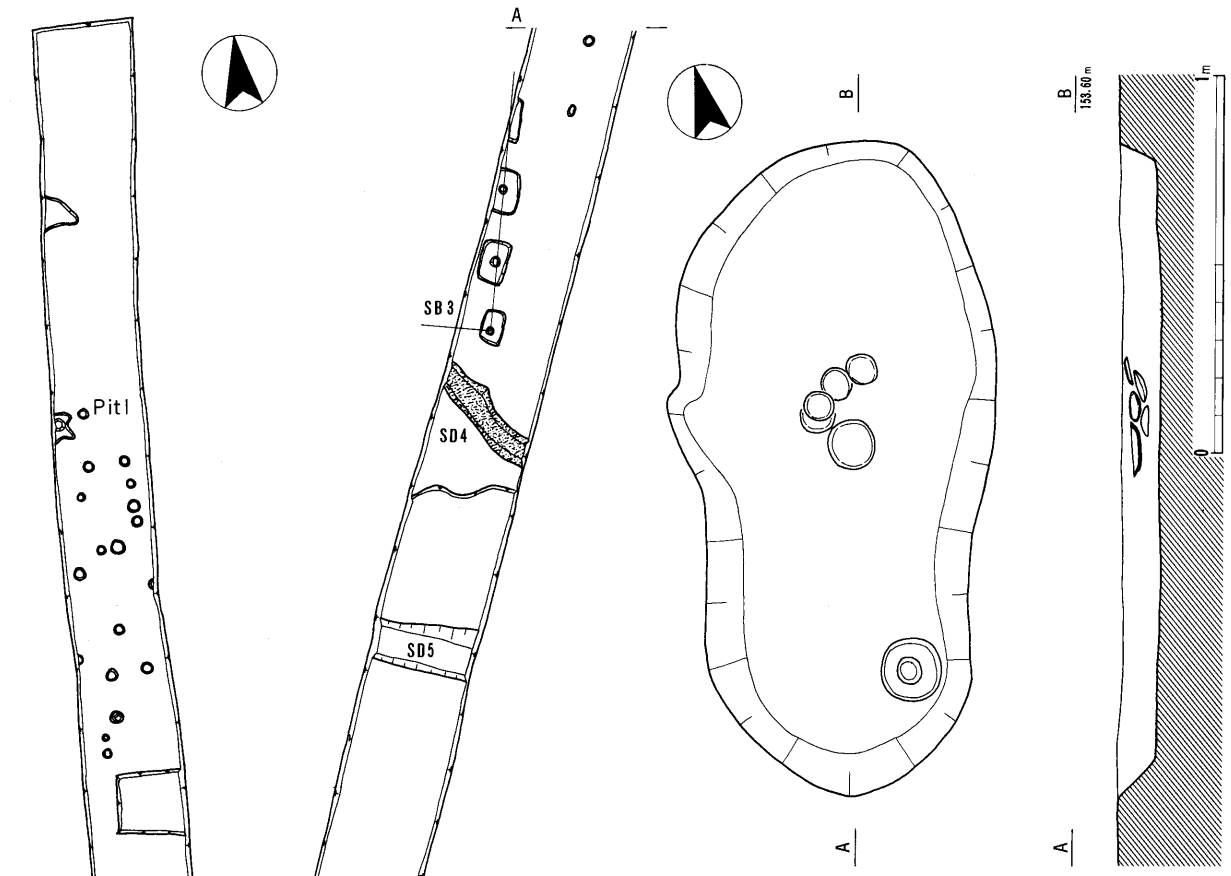
SD5 南北トレンチの南部で検出した東西溝。弥生時代の遺構面を追求するあまり、遺構の大半を削平してしまい、溝底のみ検出したものである。土層断面から幅1.8m、深さ50cmの溝であったことがわかる。溝埋土は一様に暗灰色粘質土で、溝底のみ、灰白色砂の堆積が認められた。出土遺物は少なく、布目平瓦片や須恵器片が出土し、この時期のものと考えたが、溝埋土の色から中世に下る可能性もある。

C 平安時代後期の遺構

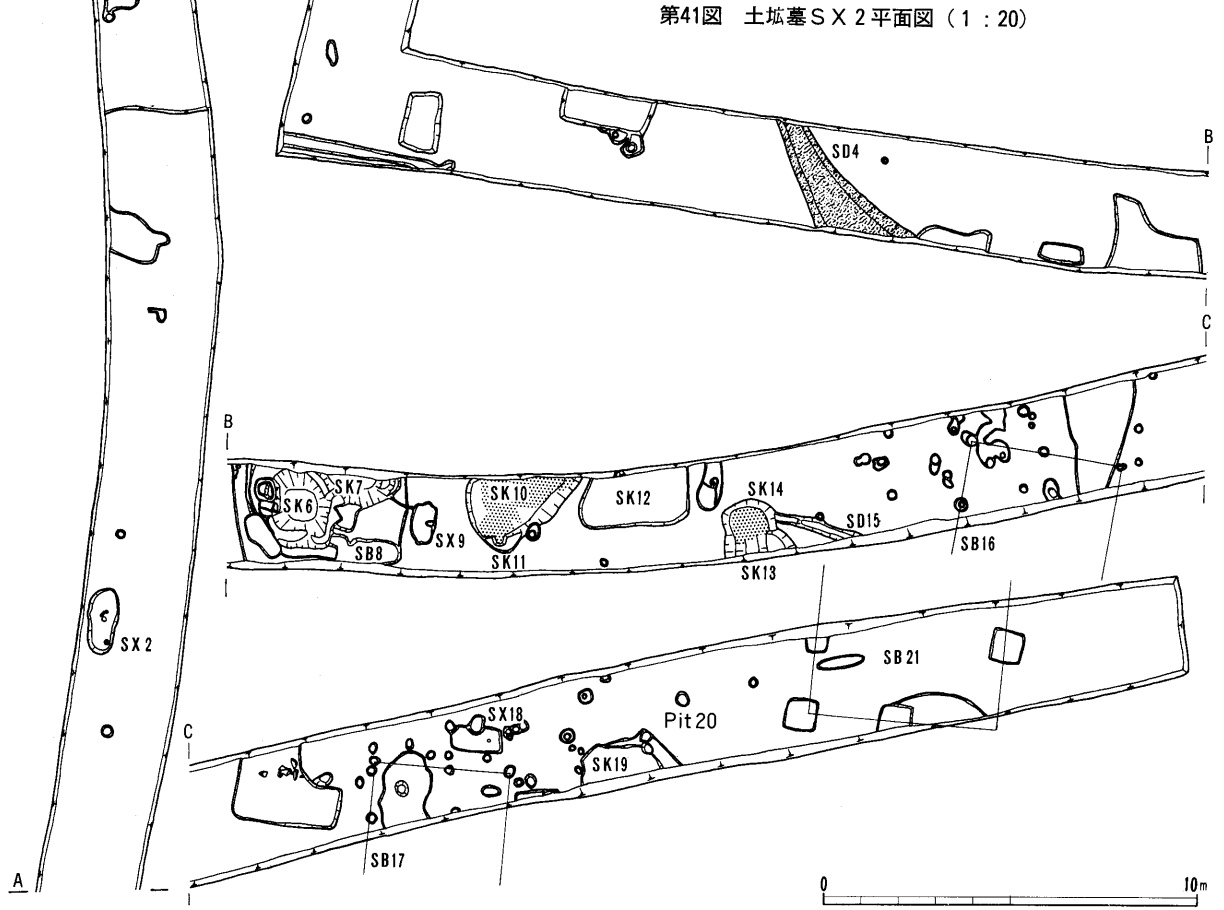
SX2 南北トレンチのほぼ中央部で検出した土壇墓。174cm×70cmの南北に長い楕円形を呈し、深さ10cmを測る。土壇中央部で土師器皿1枚、小皿4枚が完形で出土したほか、南東隅で白磁碗が俯せた状態で出土した。ちなみにこの白磁碗は、横田・森田氏による中国陶磁の編年^④ではIV-1・a類に属し、11世紀中葉～12世紀初頭の年代が与えられている。中国陶磁は伝世するとは言え、土壇墓の年代の一端を知るうえで参考となろう。



第39図 調査区位置図(1:2,000)



第41图 土坟墓SX 2平面图 (1 : 20)



第40图 A地区遺構平面图 (1 : 200)

D 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構が最も多い。遺構に伴う瓦器碗は、Ⅲ段階1～2型式^⑥に相当し、13世紀前半～中頃のものである。

S B 16 (2)間×2間の南北棟建物。南は調査区外へ延びる。柱通りの方向はN14° Eで、柱間は桁行2.0m、梁行1.9mを測る。柱掘形は径30cmと小さい。

S B 17 S B 16の東にある(2)間×2間の南北棟建物、南は調査区外へ延びる。柱通りの方向はN19° Eで、柱行1.9m、梁行1.5mを測る。柱掘形は28cmと小さい。柱掘形から遺物が1点も出土していないが、一応この時期のものと考えた。周辺には、他にいくつも柱穴と思われる小穴があるが、建物としてまとまらなかった。

S B 18 S B 17の北で検出した土坑墓。136cm×68cmの長方形を呈し、深さは約20cm。長軸は東西方向を向く。完形の土師器小皿1点が出土したほか、同様の小皿片2点、龍泉窯系の青磁碗片、瓦器碗片が出土した。

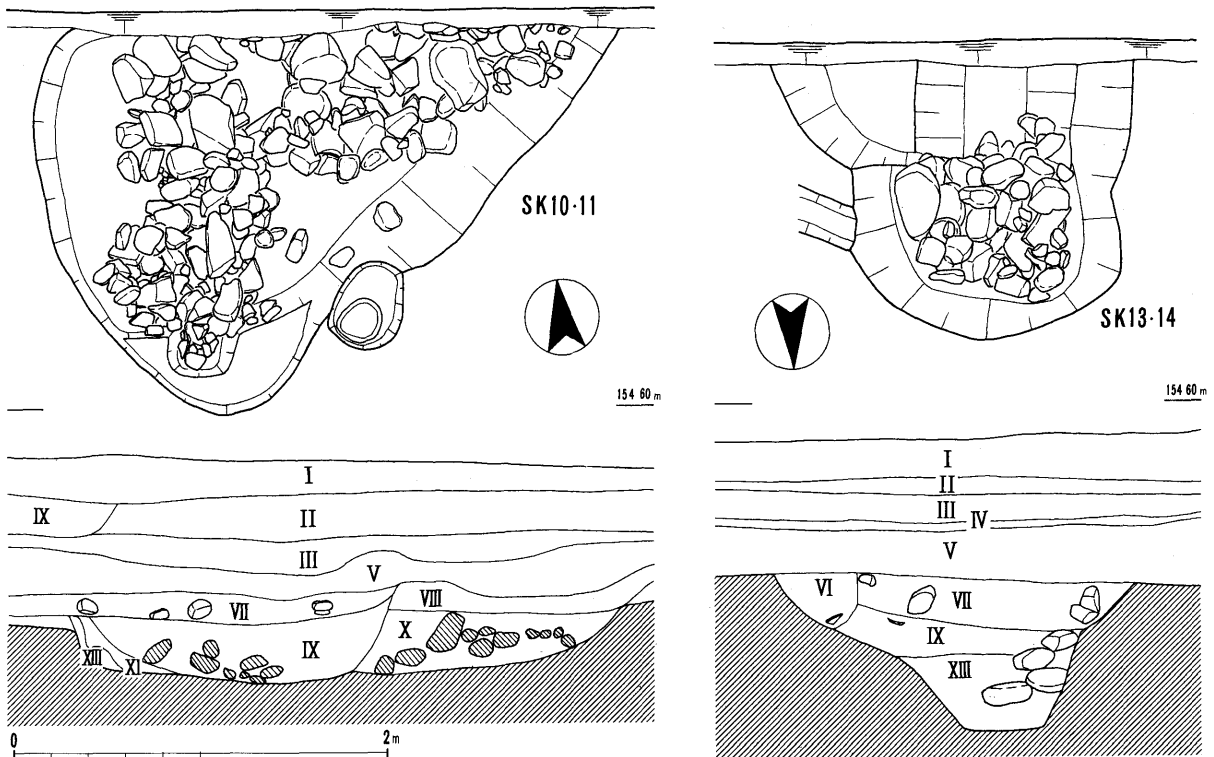
S X 9 94cm×64cm、深さ15cmの長方形を呈す

る土坑墓。長軸は南北方向を向き、北側と南側に小さな張り出し部が付く。棺を土坑内におさめる際に、棺自体に突起物があったためと思われる。土坑内からは、多量の炭と少量の骨片が出土したが、副葬品は全く出土していない。この場所で火葬をし、その後盛土をして墓を築いたものと思われる。時期を決める根拠は何らないが、一応この時期のものと考えておきたい。

S K 6 弥生後期の竪穴住居S B 8の中心部を掘り貫く隅丸方形土坑、一辺1.6m、深さ50cmを測る。土坑の大きさの割りに出土遺物に乏しく、瓦器碗・皿、白磁碗、須恵質布目平瓦などの小片がわずかに出土したにとどまる。

S K 7 S K 6に切られ、大部分が調査区外へ延びる土坑。S K 6と同様の遺物に加え、厚手の土師器小皿、須恵器甕が出土している。

S K 10 東西1.7mの方形土坑。同位置で重複する土坑S K 11の埋土を切り、これより新しい。深さは約30cmで、土坑の底に10cm～30cmの河原石が堆積していた。しかしこれらの石は、その出土状況から、この土坑より前のS K 11が掘られた際、投げ込



第42図 S K 10・11、S K 13・14遺構実測図及び土層断面図
 I. 耕土 II. 黄灰砂質土 III. 黄灰粘質土 IV. 黄褐粘質土
 V. 暗茶褐砂質土 VI. 褐灰粘質土 VII. 黄灰土 VIII. 暗茶褐土
 IX. 暗灰粘質土 X. 暗茶褐粘質土 XI. 青灰粘質土 XII. 暗茶褐砂
 XIII. 暗灰砂
 (1:40)

まれたものと思われる。出土遺物には、瓦器碗・皿、土師器小皿、羽釜等が少量ある。

SK11 長辺2.9m以上の不整形土坑。深さは30cmで、前述の河原石がほぼ底全面に投げ込まれている。土坑埋土からは、瓦器碗の細片や土師質布目平瓦が少量出土。

SK13・14 SB16の西にある重複する土坑。いずれも調査区の南へ延び、全体の規模は不明。切り合い関係からSK13がSK14より新しい。SK14に

投棄された石の大きさは10cm～40cmで、底に隙間なく堆積していた。土坑の深さは、SK14が14cm、SK13が南壁の断面で40cmを測る。SK13の下では、これより古い南へ延びる溝状の遺構も検出した。幅85cm、深さ40cm。

SD15 SK14に切られる幅30cm、深さ20cmの小溝。

SK19 径2.2m、深さ15cmの円形土坑。南側は調査区外へ延びる。瓦器碗・皿が少量出土。



第43図 溝SD4遺物出土状況(1:30)

(2) A地区の遺物

出土遺物の大半は、溝SD4出土の弥生時代後期の土器で、幅の狭いトレンチ調査ではあったが、個体数にして70個体以上を確認している。このほかに、土壇墓、土坑、Pitなどに伴う平安時代後期～鎌倉時代前期の遺物や奈良時代の布目瓦などが少量ある。ここでは、溝、土壇墓等の一括資料を中心に述べることにする。

A. SD4出土土器(1~62)

溝に廃棄された一括資料である。おもな器種に広口壺、細頸壺、長頸壺、短頸壺、無頸鉢、台付無頸鉢、台付細頸壺、甕、鉢、高杯、器台などがある。

広口壺(1~4) 口縁部を垂下させ、外縁帯を設ける大形のもの(1・2)と口縁端部を丸くおさめる小形のもの(4)がある。

(1)は、外縁帯を円形浮文や波状文で飾り、口縁部内側も外縁に沿って波状文、刺突文で加飾する。器面は内外面ともハケ調整である。(2)の外表面はミガキ調整である。(3)は、体部が大きく張り出し、突出した不安定な底部を有するもので、これは大形広口壺の底部となろう。

細頸壺(5) 口縁部外縁に4条の擬凹線を巡らせ、以下を縦位にミガキ調整する。体部を欠くが、扁平なものが取り付くものであろう。

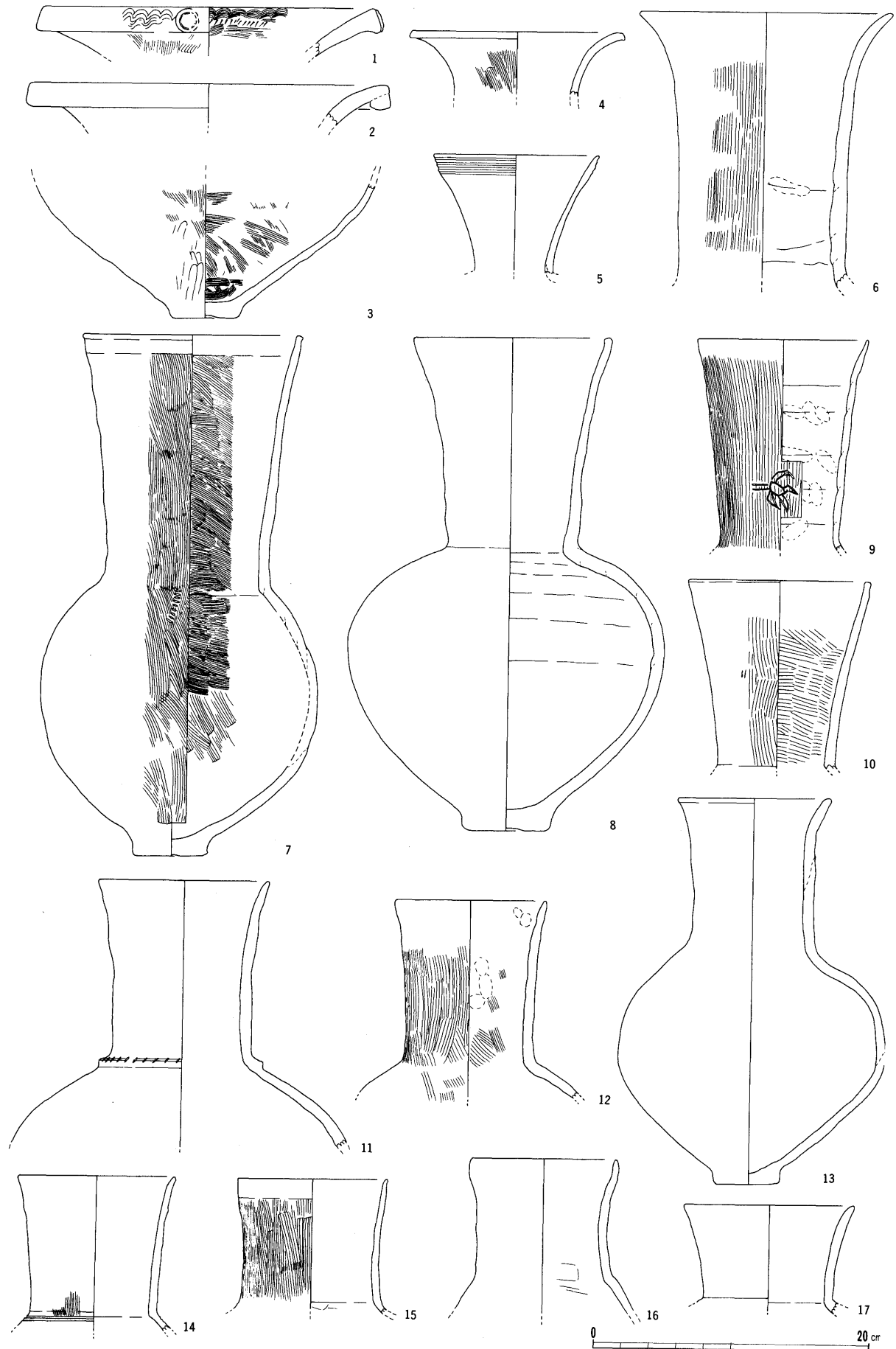
長頸壺(6~16・18~28) 最も出土量が多かった器種である。しかし、そのほとんどが、体部と頸部とに分離しており、全形を窺うことができたのは(7・8・13)のみである。頸部の比較的長いもの(6~13)と短いもの(14~16)があり、器面の調整は、内外面ハケ調整するもののほか、外面をハケ調整、内面をナデ調整するものや、外面をミガキ調整するもの(6・24・27・28)がみられる。また口縁部の形態や仕上げに注目すれば、弱く外傾して、ほぼまっすぐに立ちあがるもののほか、外反するもの(6・13)や内湾するもの(16)も若干認められる。また口縁端部を丸くおさめるもの(7・8・10・13)細く終わらせるもの(6・9・11・12・14~16)があり、バラエティーに富む。(7)は、球形の体部にやや外傾する頸部が付き、口縁端部はヨコナデして丸くおさめる。底部は、突出した小さなもので

中央部が若干へこむ。内外面をハケ調整するが、体部中央下半は、ハケ原体が異なり、分割成形されたものと思われる。肩部に一ヶ所爪形状の刻み目がある。頸部は器高の48%である。(8)は、肩の張った扁平な体部に(7)より細く締まった頸部が付く。頸部は器高の43%である。(13)は、やや小ぶり、体部中央が張り、口縁部が弱く外反する。底部は突出するが、中央部のへこみは認められない。器面は内外面とも板ナデされる。頸部は器高の40%である。(11)は頸部の付け根に刻みをもつ凸帯が巡りやや古相を呈する。(9)の頸部には、動物(鳥?)と思われる絵画文が描かれている。(18~28)は、頸部を欠いた体部で、一部短頸壺の体部が含まれるかも知れないが、ここではすべて長頸壺の体部として取り上げた。体部の法量の差により、およそ大・中・小の3種が認められる。また器形では、体部中央が外側へ大きく張り出し、やや扁平な体部を呈するもの(18~20)、これより体部の張りが弱く、体部最大径が中ほどにあるもの(21・22)、最大径が体部中央あるいはこれより上部にあり、肩部が弱く張る無果花型のもの(23~27)、体部が球形のもの(28)がある。大型の体部を呈するものは、底部の突出が顕著で、底部中央部がへこむものが多い。頸部と肩部の付け根肩側に楕円直線文や弧状文で飾るもの(21・24・20)や半截竹管を刺突回転したような円形刺突文で飾るもの(28)もみられる。(20)や(22)は、体部下方とこれより上方で、ハケ原体が異なり、断面からも分割成形の痕跡が明瞭に認められる。

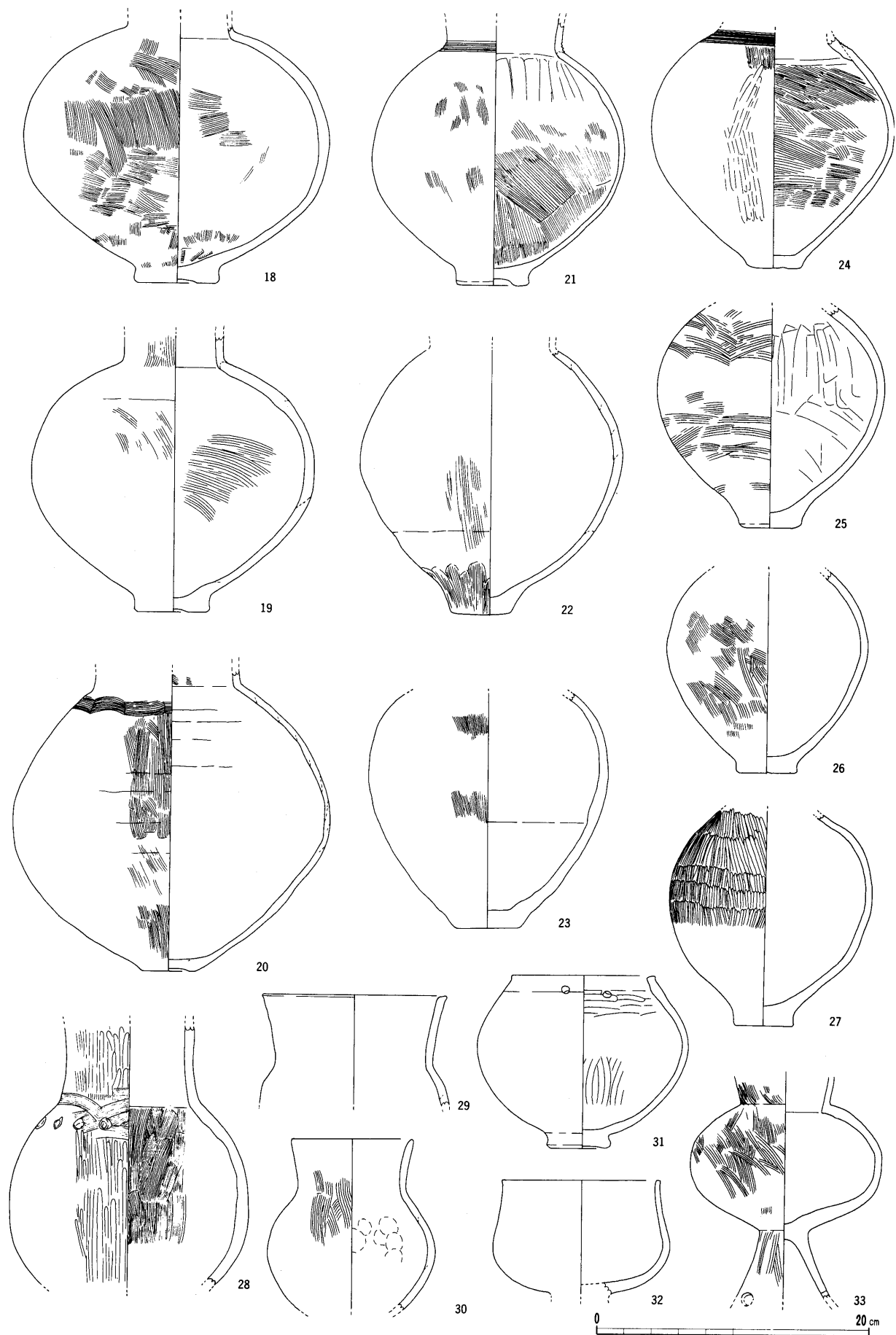
短頸壺(17・29・30) 肩の張りが弱い小形品である。内外面ナデ調整するものと外面をハケ調整するものがある。

無頸鉢(31) 丸い体部に突出した底部が付くもので、口縁部は丁寧なヨコナデし、端部は丸く仕上げられる。器面の調整は、外面を縦方向に、口縁部内面を横方向にミガキ調整を行うが、器面の保存が悪くその痕跡は明瞭でない。

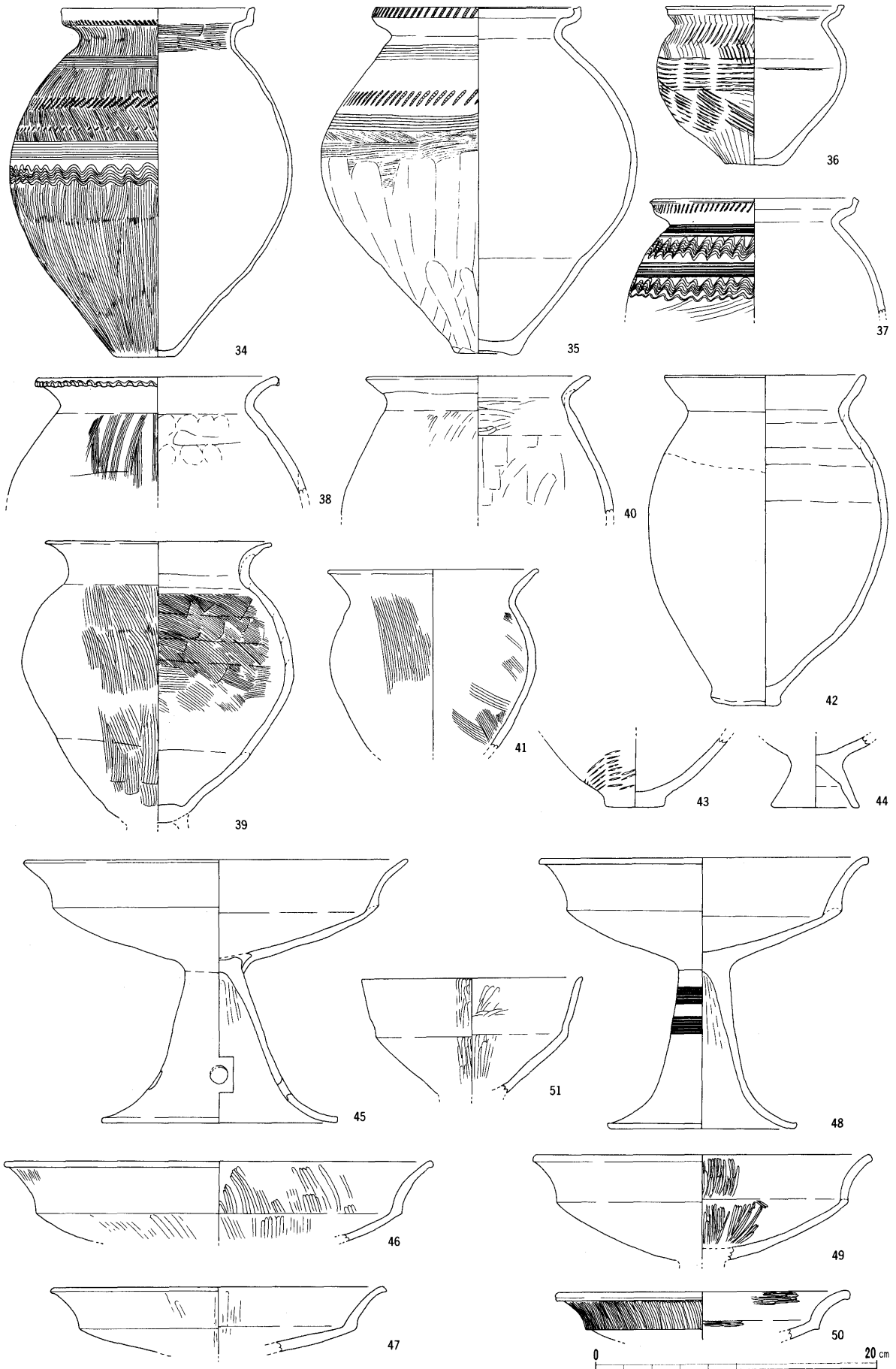
台付無頸鉢(32) 腰の張った腰部に弱く外反気味に立ち上がる口縁部が付く。器面の調整は摩滅の



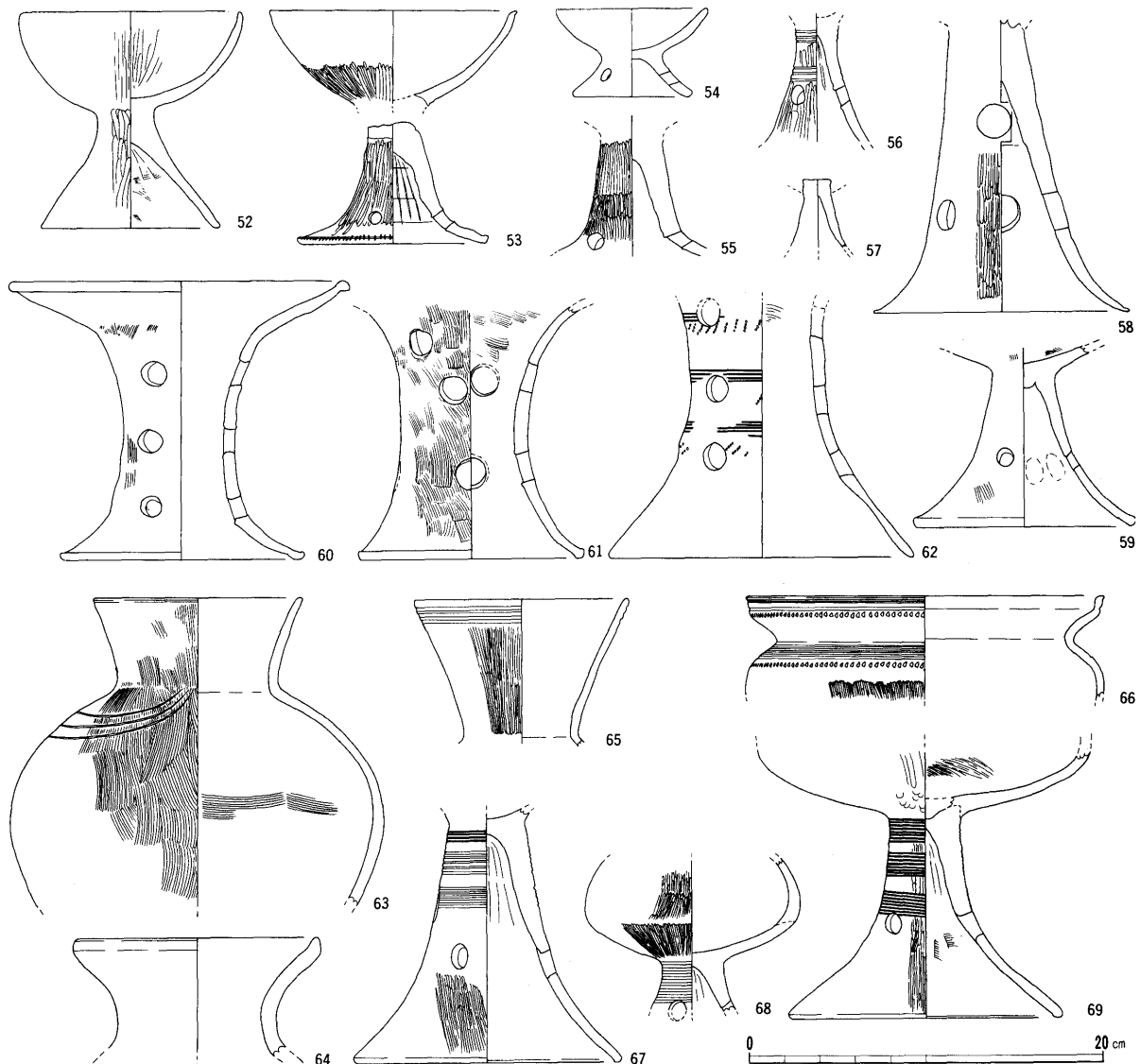
第44图 SD4出土遺物実測図(1) (1:4)



第45图 SD4 出土遺物実測図(2) (1:4)



第46图 SD 4 出土遺物実測図 (3) (1 : 4)



第47図 SD 4・SB 8 出土遺物実測図 SD 4 ; 52~62、SB 8 ; 63~69 (1 : 4)

ため不明。

台付細頸壺 (33) 偏平な体部に外傾する口頸部、ラッパ状に開く脚部が付く。外面はハケ調整が施される。

甕 (34・35・37~44) 受口状口縁甕 (34・35・37) と「く」の字状口縁甕 (38~43) がある。前者は体部最大径がほぼ中央部にあり、小さな平底の底部から成る。口縁部を櫛による刺突文、体部上半を直線文、刺突文、波状文、刺突列点文で飾る。但し、(35)の施文原体は、ハケと同一工具によるものと思われる、体部下半は板状工具でナデるものである。後者の甕には、肩の張らない胴長のもの (42) と体部が無花果形を呈するもの (39) がある。(42)の外面はススが付着し調整不明であるが、内面はナデて仕上げるもので、このような甕は、山城V-3様

式に位置付けられている^⑥長刀鉾町弥生溝1出土の甕に型態的に類似する。(39)は底部外縁を欠いているところから、おそらく低い脚台が剥落したものである。内外面ハケ調整し、分割成形の跡が明瞭に残る。(38)は口縁下端部に刻み目を施したあまり例を見ないものである。近江地方でも特異な存在とされている近江V-3様式相当の大東遺跡SX2出土のNa415・416の甕^⑦が、この(38)・(39)の甕に類似する。ただ近江のものは、口縁端部がわずかに肥厚しており、若干異なる。(43)は、体部外面をタタキ調整する畿内型の甕底部片で、出土量は少ない。(44)は甕の脚台となろう。

高杯 (45~59) 杯部が浅い皿状のもの (45~50) と杯部が深い椀状のもの (52~54) がある。また (51) は両者の折衷型と考えられるものである。前

者は、盤状の浅い底部に強く外反する口縁部が付き、脚裾部が外側へ大きく開くラッパ状の脚部から成る。口径21.2cmから30cmのものまで、大小様々なものがある。器面の保存が悪いため調整不明なものもあるが、たいてい内外面をミガキ調整している。(45)は杯部と脚部との剥離状況から、分割成形したことが窺われる。脚部には4個の透孔があく。(48)は脚柱部に6条の櫛描直線文が2段に施されている。こうした高杯脚部への施文は、伊勢湾地方の影響が強いものと思われる。杯部が椀状を呈する後者の高杯は、口径12.7cm～14.0cmの小形品で、径8.6cmの超小形品もある。(52)の脚部は直線的に開き、口縁端部は上方に尖る。一方(53)の脚部は、裾部が屈折して外側へ大きく開くもので、裾端部に細かい刻み目がみられる。器面の調整はふつう内外面を縦位にミガキ調整する。(55～59)は、高杯脚部片である。大小様々なものがあり、外面をミガキ調整するもののほか、ナデ調整するもの(57)やハケ調整するもの(59)が認められる。脚柱部の長い(58)は、下方に3方の透孔を配し、さらにその上段に1個の透孔があく。(59)は、円盤充填により底部を作り上げたものであるが、高杯全体で見れば、杯部と脚部との接合部分が中身状となるものが多い。

器台 (60～62) 3点とも筒状の器台で、受部と脚部の境界は未分化である。(60・62)は縦に3個並ぶ透孔が3方にあき、(61)は下2段が4方向に、最上段に2個ないし1個の透孔があく。また(62)は櫛描直線文や刺突文で飾られる。器面の調整は、いずれも保存状態が悪くはっきりしないが、(60・61)は外面をハケ調整するようである。

B. SB8 出土土器 (63～69)

竈穴住居と思われる遺構の床面付近から出土した一括土器である。おもな器種に広口壺、細頸壺、鉢、高杯、台付無頸鉢などがある。長頸壺がみられないが、SD4出土の土器群とほぼ同時期と思われる。

広口壺(63)は、球形の大きな体部に外傾してまっすぐに延びる口縁部が付く。外面全面と、体部内面中央を細かいハケ調整が施される。肩部には3条の弧状ヘラ描き沈線がみられ、畿内の影響を受けているが、器形はむしろ伊勢湾地域のものに類似する。(64)は口縁端部が弱い受口状となる。受口状口縁

鉢(66)は、口縁部外縁と肩部を櫛描直線文やヘラ刻みで飾るもので、体部はミガキ調整している。高杯や台付無頸鉢は全形を窺えないが、その脚部はラッパ状に大きく開くもので、脚柱部上方に3段あるいは幅の広い櫛描直線文で飾り、外面は丁寧にミガキ調整される。

C. Pit 20出土土器 (70～72)

調査区東部で検出した径30cm、深さ20cmの小さなPitから、図示した黒色土器椀2個、土師器椀1個が重なった状態で出土した。

黒色土器椀 (70・71) 内面と口縁部外縁を黒色化した黒色土器椀A類である。腰の張った深い体部に、比較的高くて器壁の厚い高台が付く。高台の乾燥が不十分であったためか、端部が八の字形に開いたり、上方へ押し潰され、いずれも異びつである。内面は、幅2mm弱のハケメを横方向に6単位以上に分けて左回りに施す。底部や体部外面は、ナデで仕上げ、所々に指頭圧痕をとどめる。口縁端部内側には、浅い沈線が一周する。

土師器椀 (72) 底部片のみである。高台は、黒色土器椀に比べてやや高いが、高台接合後、高台内外面を強くヨコナデする点や、底部内面に指頭圧痕が見られる点など、黒色土器の製作と共通した技法が見られる。色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成共に良好。

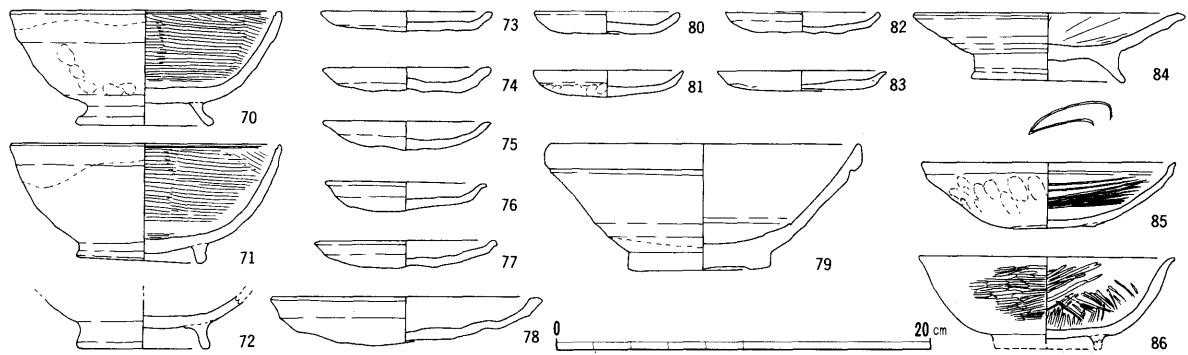
D. SX2 出土土器 (73～79)

土墳墓から出土した一括副葬品である。土師器皿類は、土壇のほぼ中央部から、白磁椀は南東隅から出土している。

土師器小皿 (73～77) 口径8.6cm～9.8cm、器高1.0cm～1.4cmを測る。口端部はヨコナデし、他はナデで器面を調整する。底部外面に指頭圧痕をとどめるものが多い。口縁端部は、外方につまむようにヨコナデされるため、端部上面に平坦な面ができる。色調は赤褐色ないしは淡褐色を呈し、胎土は良好。胎土に非常に細かい雲母粒の混入が目立つ。

土師器皿 (78) 口径14.6cm、器高2.4cmで、器形の特徴、器面の調整法共に、土師器小皿と共通する。

白磁椀 (79) 口径16.6cm、器高6.7cm。調査時に破損したが、元は完形品である。口縁部は大き



第48図 遺物実測図 Pit20; 70~72, S X 2; 73~79, S X 18; 80~83, その他; 84~86 (1:4)

な玉縁状を呈し、体部は直線的に大きく開き、高台は幅広で、削り出しが浅いための底部の器壁も厚い。胎土は灰色で、釉は灰色味を帯びた白色を呈し、厚めに施釉されるが、体部下半と底部外面には施釉されない。なお、口縁部から体部中ほどまで釉の垂下が見られる。底部内面に削り出しによる一条の沈線が巡る。こうした特徴をもつ白磁碗は、大宰府出土の中国陶磁に関する横田・森田編年^⑨では、IV-1・a類に相当し、第Ⅱ期（11世紀中葉～12世紀初頭）に属するものとされている。

E. S X 18出土土器 (80~83)

土墳墓の副葬品と思われる土師器小皿のほか、埋葬の際の混入品と考えられる瓦器碗、土師器鍋、龍泉窯系青磁碗等の細片が出土した。

土師器小皿 (80~83) 口径8 cm~9 cm、器高1.1 cm~1.5 cmで、S X 2出土の土師器小皿に比べて一回り小さい。底部は扁平で、内弯気味に斜め上方に立ち上がる浅い口縁部が付く。口縁部はヨコナデされ、端部は細く終わる。色調は淡赤褐色ないしは淡褐色を呈し、胎土は比較的精良である。共伴する瓦器碗、及び青磁碗は、それぞれ、山田編年^⑩の瓦器碗3段階1型式、横田・森田編年の青磁碗I-4類に相当するものと考えられ、両者に年代の矛盾はなく、これらの土師器は、13世紀初頭頃のものと思われる。

F. その他の土器 (84~86)

土師器台付皿 (84) 南北トレンチの北部で検出したPit群の1つ、Pit 1から出土。皿の底部は平坦

で、体部は直線的に大きく開く。口縁端部は水平近くまで挽き出され、端部上面に平坦な面を作る。高台は外反気味に八の字形に開く厚手のもので、皿部との接合面が広い。器面の調整は、口縁部及び高台をヨコナデし、他はナデて仕上げる。また体部内面にヘラ先のあたりが数ヶ所で認められた。他に共伴遺物がなく、この時期の伊賀地方での土師器編年が進んでいないため、一応平安時代後期～末期のものと考えておきたい。

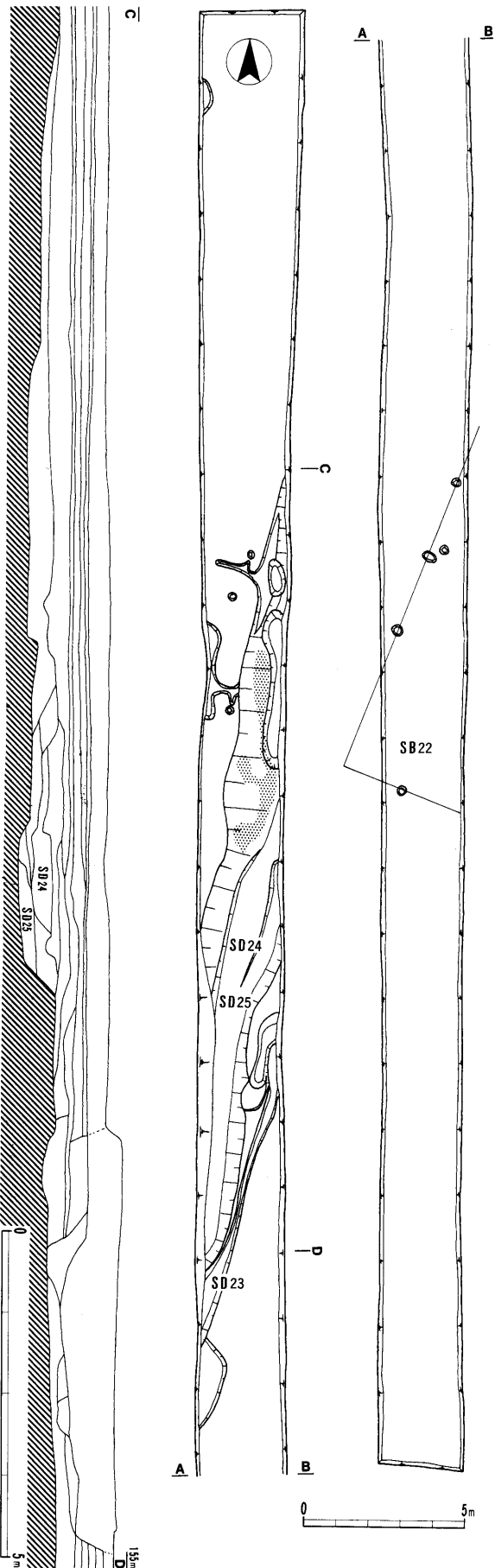
瓦器碗 (85) 土坑S K19から出土。口径13.5 cm、器高3.5 cmで、底部に痕跡をとどめる程度のごく浅い高台が付く。体部は直線的に開き、口縁部は強くヨコナデされて、体部との境が明瞭である。体部外面は指頭圧痕がよく残り、内面のヘラミガキは粗い。底部のヘラミガキは、器面がマメツのため、はっきりとしないが、簡単なㄷ字形ラセン文となるようである。13世紀中頃のものであろう。

黒色土器碗 (86) 腰の張った深い体部、弱い外反する口縁部から成る。高台端部は欠損のため不明。口縁部内側の一部が黒色化されているのみで、内面は黄褐色、外面は明茶褐色を呈する。胎土は精良で、底部及び体部内外面は、細かいヘラミガキが密に施される。なお、底部のヘラミガキは、体部内面のヘラミガキに先行し、ジクザクに透き間なくヘラミガキした後、さらに乱方向に粗いミガキが施される。体部内面のミガキは、4~5分割で施されるようである。特殊な土師器かとも考えたが、ここでは調整法の特徴から一応黒色土器の範疇で取り上げた。

(3) B地区の遺構

A地区の東方150 mで、幅3 mの南北トレンチを設定し、約270 m²の調査を実施した。調査の結果、

平安時代後期の掘立柱建物1棟と平安時代末期～鎌倉時代の溝3条を検出した。



第49図 B地区遺構平面図（1：200）土層断面図（1：100）

SB22 調査区南部で検出した（4）間×（2）間の南北棟建物。桁行2.4m、梁行2m弱である。柱通りの方向はN21°Eを示す。柱掘形は約30cm前後と小さい。出土土器が細片のため時期は不明確であるが、柱掘形内から土師器片のほか、黒色土器片が出土しているので11世紀前後のものかと思われる。

SD23 SD24・25の東側にあり、これと並行する小溝である。幅30cm、深さ20cmを測る。出土遺物はほとんどなく、時期の特定は難しいが、瓦器碗片はⅢ段階1型式に相当し、13世紀前半頃かと思われる。

SD24 SD25と重複し、ほぼこの溝の中央部を掘り貫く幅1.3m、深さ30cmの溝。埋土は灰色粘質土である。溝埋土出土遺物は、大半が瓦器碗で、これに少量の瓦器皿、土師器皿・羽釜、播鉢、白磁碗、龍泉窯系青磁碗が伴う。瓦器碗はⅡ段階3型式及びⅢ段階1型式が認められ、溝の時期を12世紀中頃～13世紀前半に求められよう。

SD25 溝の中央部がSD24に切られるため、溝の両肩付近と底面の一部が残存するのみである。幅2.6m、深さ30cmで、溝埋土は茶褐色系の砂質土である。西側壁面の傾斜は東側に比べて緩やかで、意図的なものかどうかはわからないが、この壁面に沿うように拳大の石が随所に認められた。時期的には、Ⅱ段階2型式～3型式に相当する瓦器碗が多く出土しており、12世紀中頃前後の溝と思われるが、量的に少ないものの、Ⅰ段階2型式～3型式の瓦器碗も認められ、溝の上限は11世紀代に遡ることも考えられる。

上記の溝SD23～25は、現在の畑の境に沿って南北方向に走る農道の東側溝のほぼ真下で検出されたもので、これと同位置、同方向に走る溝であることが確認された。したがって中世以降、当地区周辺の地割りに大きな改変はなかったものと思われる。

(4) B地区の遺物

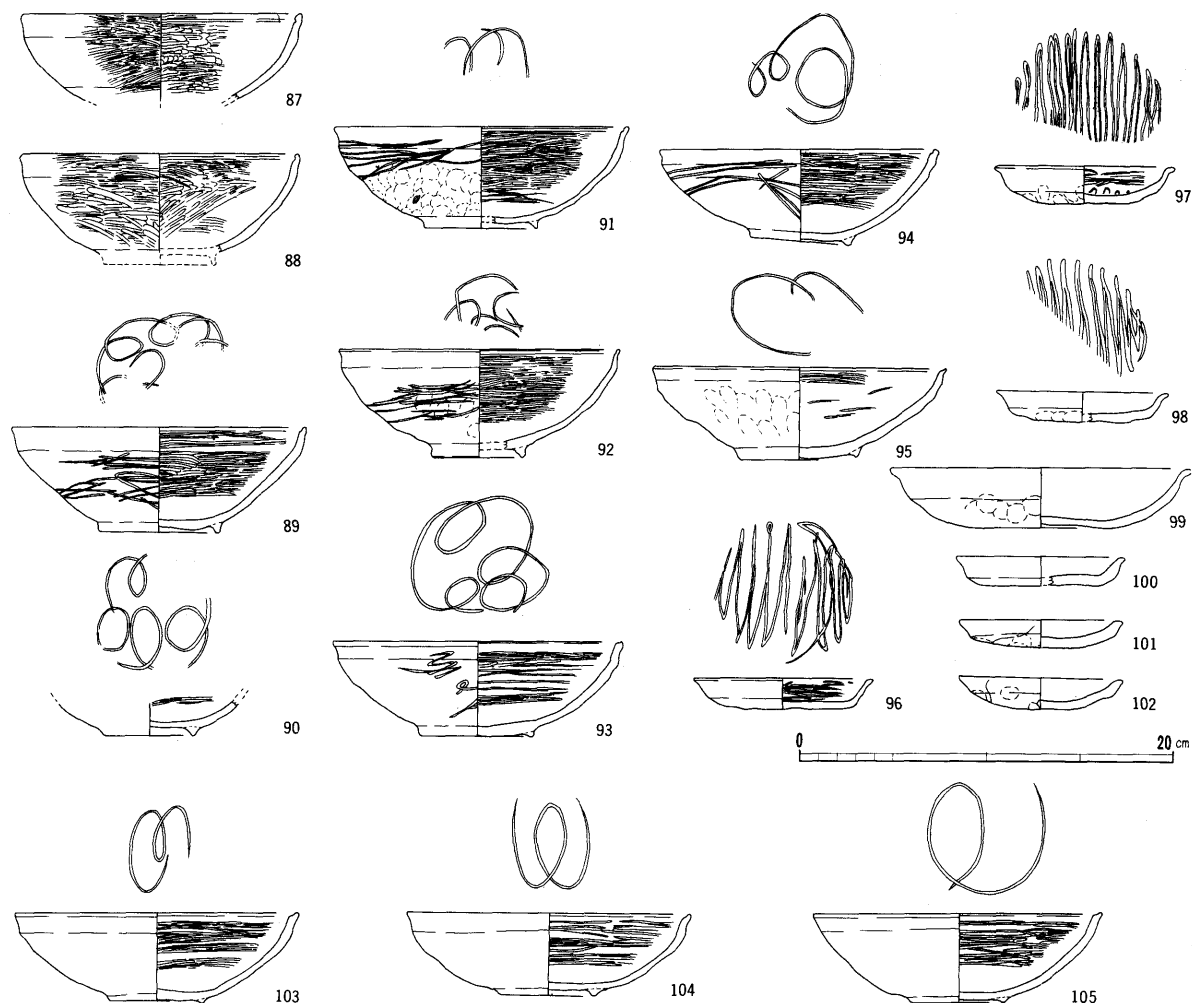
出土遺物の大半が、溝SD24・25からのもので、
 テン箱にして7箱分が検出した。その多くは瓦器碗
 で、瓦器皿、土師器小皿・羽釜、青磁碗・白磁碗等
 が少量これに伴う。なお溝埋土の切り合い関係より、
 SD25→SD24の順が確認されているが、SD24出
 土の遺物の中には、SD25に伴うと思われる瓦器も
 若干混在するようである。

A SD25出土土器 (78~102)

瓦器碗A (87・88) いずれも体部から口縁部にか
 かけての破片で、底部を欠く。口径は15cm前後で、
 器高は(88)で5.8cm以上を測る。体部は丸味があ
 り、口縁部はやや屈曲して立ち上がる。ヘラミガキ
 は、内外面とも、非常に密に施す。ミガキの幅は
 (87)が1mm前後、(88)が2mm~2.5mmで、
 内面のヘラミガキは、一本で一周せず短い。外面の
 ヘラミガキは、体部と口縁部とが一体とならず、体

部をヘラミガキした後、口縁部に平行するミガキ施
 す。なお、ヘラミガキの単位は破片のため不明確で
 ある。わずかに残る(88)の底部内面には、体部内
 面のヘラミガキに先行する渦巻状のヘラミガキが薄
 く認められる。内縁部内面の沈線は、端部よりやや
 下った位置にある。これらの瓦器碗は山田編年でI
 段階1型式に位置付けられた川久保遺跡出土の瓦器
 碗と類似した諸特徴を備える。但し、口縁部が弱く
 屈曲する点で若干異なる。

瓦器碗B (89~92) 口径15cm~15.8cm、器高
 5.4cm~5.6cmで、器高指数は34~37である。体部
 はやや丸味をもち、口縁部は強くヨコナデされて、
 やや外反気味に立ち上がる。口縁部内側の沈線は端
 部にあり、段状をなす。高台は断面が三角形で低い。
 体部外面は指頭圧痕をとどめ、その上を粗雑なヘラ
 ミガキを施す。内面のヘラミガキは密で、ミガキ幅



第50図 B地区出土遺物実測図 SD25; 87~102、SD24; 103~105 (1:4)

は1mm～2mm弱である。底部は、体部内面のヘラミガキのあと、連結輪状文のミガキを行う。これらの一群は、Ⅱ段階2型式に相当しよう。

瓦器椀C (93・94) 口径15cm～16cm、器高5cm前後で、器高指数32である。瓦器椀Bに比べ、口縁部ヨコナデの範囲がやや狭く、体部外面のヘラミガキはさらに疎で、体部上半に限られる。底部には、3～4個の連結輪状文のヘラミガキを施す。これらは、Ⅱ段階3型式に相当しよう。

瓦器椀D (95) 瓦器椀Cに比べ、器形、法量において大差はないが、底部内面のヘラミガキは2個程の連結輪状文になるものと思われる。体部内外面のヘラミガキは、器面の保存状態が悪いため明瞭でない。器高指数は32。Ⅱ段階4型式に相当するものと思われる。

瓦器皿A (96・97) 口径9.7cm、器高1.6cm～2.0cm。底部が平坦なもの(96)とやや丸味のあるもの(97)がある。口縁端部は水平に近く外反する。口縁部はヨコナデして仕上げるが、底部は未調整で指頭圧痕がよく残る。内面のヘラミガキは、底部をジクザク文、口縁部を円周に沿った横方向のヘラミガキで調整する。これらは、瓦器椀Ⅱ段階2型式に伴うものと思われる。

瓦器皿B (98) 瓦器皿Aに比べ一回り小さく、口径9.2cmを測る。器形は瓦器皿Aと大差ないが、

口縁部内面のヘラミガキは認められない。瓦器椀Ⅱ段階3型式に伴うものであろう。

土師器皿(99) 口径16.2cm、器高3.2cm。口縁部はヨコナデにより外反し、底部外面は指オサエのため器面がでこぼこする。色調は、淡灰色を呈するが、内面は瓦器風に焼成され、暗灰色を呈する。

土師器小皿(100～102) 口径8.8cm～9.2cm、器高1.5cm前後である。底部が平坦なもの(100)とやや丸いもの(101・102)がある。口縁部はヨコナデし、他はナデて仕上げる。特に(101)は、口縁端部上面をヨコナデするので、平坦面ができる。

ほかにSD25からは、緑釉陶器片、玉縁状口縁の白磁椀片、馬歯等が出土している。

B SD24出土土器(103～105)

瓦器椀E(103～105) 瓦器椀Dに比べ、口径がやや縮小し、口径15.2cm～15.6cm、器高4.2cm～4.7cmで、器高指数30前後である。体部はまだ丸味が残っており、口縁部は強くヨコナデされ外反する。口縁端部は、端部内側直下に沈線が巡り、段状をなす。高台は、断面が三角形の低いものが貼り付く。体部外面のヘラミガキはなく、指頭圧痕がよく残る。内面のヘラミガキは粗く、底部中央にℓ字形のらせん文が施される。Ⅲ段階1型式の中でも古い方^⑩に相当するものと思われる。

(5) 結 語

才良遺跡の調査は、幅2.5m～3mの狭いトレンチ調査ではあったが、注目すべき成果がいくつかあった。

集落に近いAトレンチでは、弥生時代後期、奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代の遺構が重複し、長期間にわたって人々の生活の場となっていたことが確認された。中でも幅0.8m～1.4mの溝SD4から出土の多量の土器群は、伊賀地方の弥生後期の土器を考えるうえで好資料となろう。このSD4は、溝の形状、土器の出土状況が今回の調査区南部にある丸山中学校改築に伴う事前調査で確認されたSD1^⑩と非常によく似ており、両者は一連の溝となる可能性が高い。

奈良時代では、大型の柱掘形をもつ掘立柱建物や、

溝の一部が確認されたが、財良廃寺との関係を見出すまでには到らなかった。

平安時代末期～鎌倉時代にかけては、土墳墓や掘立柱建物があり、当地区一帯が一般集落となっていたことがわかる。

山裾部に近いBトレンチでは、平安時代後期～鎌倉時代の遺構、遺物が主体を占め、この頃から河岸段丘全面に集落が拡大していったものと考えられる。

遺物では、前述の弥生後期の土器について簡単にまとめておきたい。伊賀地方への影響が強いと考えられる大和地域の土器について最近、従来の第五様式を二分し、前半を新第五様式と呼び、古式土師器出現の前段階となる後半を第VI様式とする編年案^⑪が提唱されている。そして第VI様式の特徴として、

分割成形技法の普及、規格的な土器作りの発達、無分化等があげられている。こうした点に着目しSD4出土の土器を見た場合、長頸壺や甕において明らかに分割成形の痕跡が認められるものが何点もあり、法量に一定の規格が認められるなど、第VI様式に共通する点が見い出される。とりわけ高杯の形態は、大和VI-2様式からVI-3様式に相当する。しかしながら、甕や鉢は、この時期に大和で盛行したタタキ調整のものは、ほとんど見られず、受口状口縁を

呈する近江型の甕や、「く」の字状口縁を呈する甕の中に、山城地域の甕とも似たものが認められるなど違いをみせている。受口状口縁ながら体部はタタキやハケ調整する鉢(36)の存在は、近江と大和地域の影響を受けており、興味深い。一方、高杯脚部に櫛描直線文を多用化するのは、伊勢湾地域の影響が強いものと考えられる。こうした土器に見られる相違点、特徴こそが、弥生時代後期における伊賀独自の土器諸相として把握されよう。

(倉田直純)

〔註〕

- ① 『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 1983
- ② 『北掘池遺跡発掘調査報告-第一分冊-』三重県教育委員会 1981
- ③ 前掲①
- ④ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- ⑤ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 1986 以下伊賀の瓦器に関する型式分類とその編年については、これによる。
- ⑥ 森岡秀人「山城地域の様式編年」『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅱ-』木耳社 1990 294P
- ⑦ 兼康保明「近江地域の様式編年」『註⑥と同じ』404P
- ⑧ 前掲④
- ⑨ 前掲⑤
- ⑩ 前掲⑤の中で、山田は、Ⅲ段階Ⅰ型式が法量の矮小化の程度により、2つに細分化される可能性を示唆しており、これに従うならば、瓦器碗Eは古相を呈している。
- ⑪ 前掲①
- ⑫ 藤田三郎・松本洋明「大和地域の様式編年」『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅰ』木耳社 1988

第12表 才良遺跡A地区出土遺物観察表

No.	器種	出土遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	備考	実測No.
			口径	器高	底径					
1	広口壺	SD4	24.0	-	-	内外面ハケ	石英、長石粒含む	橙色	外縁帯に円形浮文波状文	061-02
2	"	"	26.4	-	-	口縁端部垂下 外面ミガキ	"	黒灰色		061-01
3	"	"	-	-	4.4	底部近くミガキ 他はハケ	"	淡黄橙色		033-01
4	"	"	15.6	-	-	外面ハケ	"	"		073-02
5	細頸壺	"	12.0	-	-	外面ミガキ 内面ナデ	"	橙褐色	口縁に4条の擬凹線	058-03
6	長頸壺	"	18.4	-	-	外面ミガキ 内面ナデ	"	淡黄橙色		035-03
7	"	"	15.8	37.4	5.2	内外面ハケ	"	橙褐色	黒斑有り、完形	052-01
8	"	"	14.4	35.4	5.6	不明	"	赤褐色		041-01
9	"	"	12.2	-	-	外面ハケ 内面ナデ	"	橙色	動物の絵文有り	034-02
10	"	"	13.2	-	-	内外面ハケ	"	淡橙褐色	黒斑有り	042-01
11	"	"	12.4	-	-	不明	"	赤褐色	頸部下端に刻み目凸帯	060-01
12	"	"	11.0	-	-	口縁ヨコナデ 内外面ハケ	"	淡黄橙色		055-03
13	"	"	11.0	27.8	4.6	口縁ヨコナデ 外面細かいハケ	"	赤褐色	黒斑有り	040-01
14	"	"	11.2	-	-	不明	"	淡黄橙色		034-01
15	"	"	10.8	-	-	外面ハケ 内面ナデ	"	淡黄褐色		062-02
16	"	"	10.6	-	-	不明	"	橙色	口縁端部内弯	060-02
18	"	"	-	-	5.8	内外面ハケ	"	赤褐色	底部中央へこむ	059-02

No	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
19	長頸壺	SD 4	-	-	10.0	内外面ハケ	石英、長石粒含む	淡黄褐色	底部中央へこむ	054-03
20	"	"	-	-	4.0	外面ハケ、内面ナデ 底部分割成形	"	淡黄橙色	肩部に櫛描弧状文	056-01
21	"	"	-	-	5.2	内外面ハケ	"	淡褐色	肩部に櫛描直線文	038-02
22	"	"	-	-	4.4	外面ハケ、内面不明 分割成形	"	"	黒斑有り	038-01
23	"	"	-	-	4.6	外面ハケ、内面ナデ 分割成形	"	赤褐色		033-04
24	"	"	-	-	3.8	外面ミガキ 内面ハケ	"	橙褐色	肩部に櫛描直線文	043-01
25	"	"	-	-	3.6	外面ヨコハケ 内面板ナデ	"	黄橙色	黒斑有り	039-01
26	"	"	-	-	4.0	外面ハケ 内面ナデ	"	淡褐色		053-01
27	"	"	-	-	4.2	外面上半ハケ、下半ナデ 内面ナデ	"	橙色		053-03
28	"	"	-	-	-	外面ミガキ 内面ハケ	"	"	肩部に円形刺突文	050-03
17	短頸壺	"	12.3	-	-	内外面ナデ	"	"		057-02
29	"	"	13.4	-	-	"	"	淡褐色		057-06
30	"	"	9.0	-	-	外面ハケ 内面ナデ	"	淡黄褐色	黒斑有り	054-02
31	無頸鉢	"	10.4	12.6	4.0	外面ミガキ 内面上部ヨコのミガキ	"	明褐色	"	032-02
32	台付無頸鉢	"	11.6	-	-	不明	"	淡黄褐色	脚部を欠く	054-01
33	台付細頸壺	"	-	-	-	外面ハケ	"	橙色	口縁、脚裾部を欠く	051-01
34	甕	"	13.8	24.6	4.2	外面ハケ 内面頸部ハケ	"	暗褐色	受口状口縁	037-02
35	"	"	14.5	24.4	4.4	外面ヨコハケ、内面ナデ 分割成形	"	"	"	036-01
36	鉢	"	12.7	11.2	4.0	外面ハケ、タタキ 内面ナデ、頸部ハケ	"	淡黄橙色	"	035-02
37	甕	"	14.5	-	-	外面ハケ 内面ナデ	"	淡黄褐色	"	053-02
38	"	"	17.6	-	-	外面ハケ 内面ナデ	"	褐色	口縁下端部刻み目	073-01
39	"	"	16.0	-	-	内外面ハケ 分割成形	"	淡黄褐色	脚台部を欠く	032-01
40	"	"	16.0	-	-	内外面ミガキ	"	黒褐色	スス付着	058-02
41	"	"	15.0	-	-	内外面ハケ	"	"	"	075-01
42	"	"	14.0	23.3	4.2	外面不明 内面ナデ	"	明茶色	"	037-01
43	"	"	-	-	4.2	外面タタキ 内面ナデ	"	暗赤褐色		057-04
44	"	"	-	-	6.0	内外面ナデ	"	灰黄褐色	脚部片	049-03
45	高杯	"	27.0	18.5	16.8	杯部と脚部分割成形 内外面不明	"	白褐色	透孔4方	045-01
46	"	"	30.0	-	-	内外面ミガキ	"	淡黄褐色		035-01
47	"	"	24.0	-	-	"	"	淡黄褐色		073-03
48	"	"	23.1	19.0	13.2	不明	"	白褐色	脚柱部に櫛描直線文	036-02
49	"	"	23.6	-	-	内外面ミガキ	"	橙褐色		046-01
50	"	"	20.6	-	-	外面タテミガキ 内面ヨコミガキ	"	灰褐色		033-05
51	"	"	15.8	-	-	内外面ミガキ	"	淡褐色		062-01
52	"	"	12.7	12.1	10.1	"	"	褐色		056-02

No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
53	高杯	S D 4	14.0	-	10.8	外面ミガキ 内面不明	石英、長石粒含む	橙色	透孔3方 脚裾部に刻み目	049-01
54	"	"	8.6	4.9	6.4	内外面ナデ	"	赤褐色	透孔4方	057-05
55	"	"	-	-	-	外面ヘラミガキ	"	"	" 3方	053-04
56	"	"	-	-	-	"	"	橙色	" "	051-02
57	"	"	-	-	-	外面ナデ	"	"		074-02
58	"	"	-	(脚高) 16.4	14.4	外面ヘラミガキ	"	橙褐色	透孔3方+1方	042-04
59	"	"	-	(脚高) 8.4	12.0	外面ハケ	"	赤褐色	透孔3方	051-03
60	器台	"	18.9	15.6	13.4	外面ハケ	"	灰白色	透孔3方に9個	034-03
61	"	"	-	-	12.8	内外面ハケ	"	淡黄褐色	透孔4方に8個 最上段に1~2個	058-01
62	"	"	-	-	17.4	外面に櫛描直線文 刺突文	"	白褐色	透孔3方に9個	044-01
63	広口壺	S B 8	11.7	-	-	外面ハケ 内面ナデ、一部ハケ	"	暗褐色	肩部にヘラ描き沈線文	048-01
64	"	"	12.0	-	-	内外面ナデ	"	橙色		074-01
65	細頸壺	"	12.0	-	-	外面ミガキ 内面ナデ	"	淡橙褐色	口縁に3条の擬凹線	047-03
66	鉢	"	20.0	-	-	口縁ヨコナデ 体部ミガキ	"	"	櫛描直線文 ヘラ刻み有り	047-01
67	高杯	"	-	(脚高) 13.4	14.8	外面ミガキ 櫛描直線文3段	"	暗橙褐色	透孔3方+1方	046-02
68	台付無頸鉢	"	-	-	-	外面ミガキ	"	橙褐色	透孔3方 脚部に櫛描直線文	047-02
69	"	"	-	(脚高) 11.4	15.6	"	"	"	透孔3方 脚部に3段の櫛描直線文	076-01
70	黒色土器碗	P i t 20	14.4	6.1	6.8	外面ナデ、一部指圧痕 内面ハケ	細砂含む	淡赤褐色		071-01
71	"	"	14.4	6.2	6.7	" "	"	"		071-02
72	土師器碗	"	-	-	6.8	内外面ナデ	"	"		071-03
73	" 小皿	S X 2	8.8	1.1	-	口縁ヨコナデ 底部ナデ、指頭圧痕	密	淡黄褐色		069-04
74	" "	"	8.6	1.3	-	" "	"	"		069-06
75	" "	"	8.8	1.5	-	" "	"	"		069-05
76	" "	"	8.6	1.5	-	" "	"	赤褐色		069-03
77	" "	"	9.4	1.4	-	" "	石英、長石 若干含む	"		069-07
78	" 皿	"	14.3	2.4	-	" 口縁部肥厚 "	密	橙色		069-02
79	白磁碗	"	16.4	6.7	7.6	口縁ヨコナデ 削り出し高台	"	淡緑灰色	完形	069-01
80	土師器小皿	S X 18	7.8	1.2	-	口縁ヨコナデ 底部ナデ	"	橙色	器壁厚い	079-01
81	" "	"	8.0	1.4	-	" "	"	灰褐色	"	079-04
82	" "	"	7.0	0.9	-	" "	"	黄灰色		070-02
83	" "	"	9.0	1.0	-	" "	"	黄褐色	器壁厚い	079-03
84	" 台付皿	P i t 1	14.1	3.6	8.2	外面ナデ 内面ヘラナデ	"	橙褐色		070-01
85	瓦器碗	S K 19	13.5	3.5	4.4	口縁ヨコナデ 体部ナデ、指頭圧痕	"	黒灰色	痕跡程度の高台	072-01
86	黒色土器碗	包含層	13.6	(4.6)	-	内外面密なミガキ	"	淡褐色	高台を欠く	063-02

3 澤田遺跡

本遺跡は森脇遺跡の東方に隣接し、標高150m前後の丘陵裾野に広がる緩やかな段丘上に位置する。昭和63年度に実施した事業地内の試掘調査の結果、遺跡範囲は中世を中心とし、12,000㎡に及ぶことが確

認されていた。本年度はその内の排水路部分、約500㎡について調査を実施した。正興寺西側のジクザクのトレンチをAトレンチ、南側の東西トレンチをBトレンチと呼称し、その概要を述べることにする。

(1) Aトレンチの遺構

検出した遺構には、掘立柱建物、溝、土坑等がある。しかし全体に出土遺物に乏しく、しかも遺物は細片で保存状態が悪いため、遺構の年代を決め難いものが多い。

SA1 トレンチ西端で柵列4間分を検出した。柱間は62.5cmで掘形の径は20cm前後である。時期は不明。

SD2 SD3・4の埋土を切り、これより新しい溝。幅60cm深さ35cm前後である。時期は不明。

SD3・4 並走する幅40cm、深さ10cm～30cmの2条の溝。両溝の間隔は心々で1.3m～1.6m。溝埋土から弥生時代後期と思われる土器片が少量出土しており、一応この時期のものと考えた。

SK5・6 重複する2つの土坑である。両者の切り合い関係は不明瞭であった。SK6の規模は、径1m前後の不整形円で、深さは70cmを測る。土坑内から弥生時代後期の土器片が少量出土している。

SB7 4間×1間の南北棟建物。桁行柱間は1.8m、梁行柱間は3.8mを測る。柱掘形は径30cm～40cm、深さ30cm前後である。北東隅の柱掘形内には、径16cm程の朽ちた柱材が残存していた。柱通りの方向は、北に対し西へ23°ほど偏る。柱掘形から弥生時代後期とおもわれる土器片が出土しており、この時期の建物と考えられる。

SK8 短径1.4m、深さ50cmの楕円形土坑。南半分は調査区外へ延びる。弥生時代後期土器片が少量出土している。

SK9 SK10の埋土を知り、これより新しい楕円形土坑。径3m×2m、深さ35cmを測る。瓦器片が少量出土したのみで時期の特定は難しいが、鎌倉時代前半頃のものであろう。

SK10 SK9の東に隣接する南北に長い楕円形

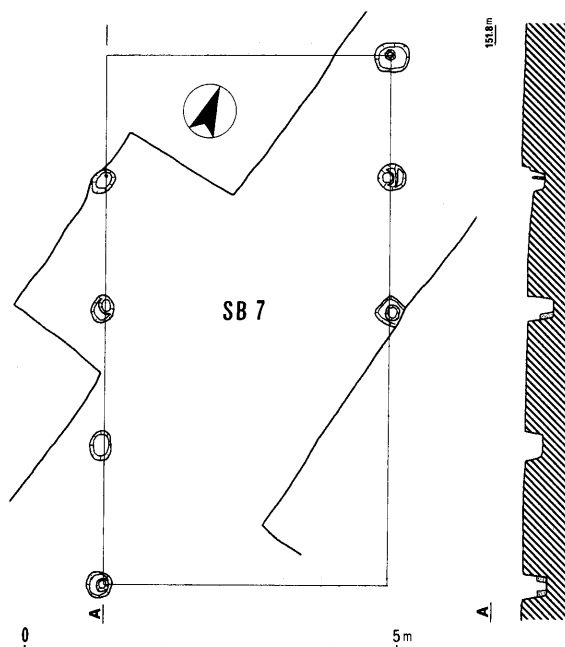
土坑。径2.6m×1.8m、深さ60cmを測る。弥生時代の土器片と瓦器片が少量出土しているが、新しい方を取り、一応鎌倉時代の土坑としておく。

SK11 南北に長い楕円形土坑。1.6m×0.8m。深さ10cmを測る。土坑の形状から土塚墓の可能性はある。鎌倉時代の瓦器片が少量出土した。

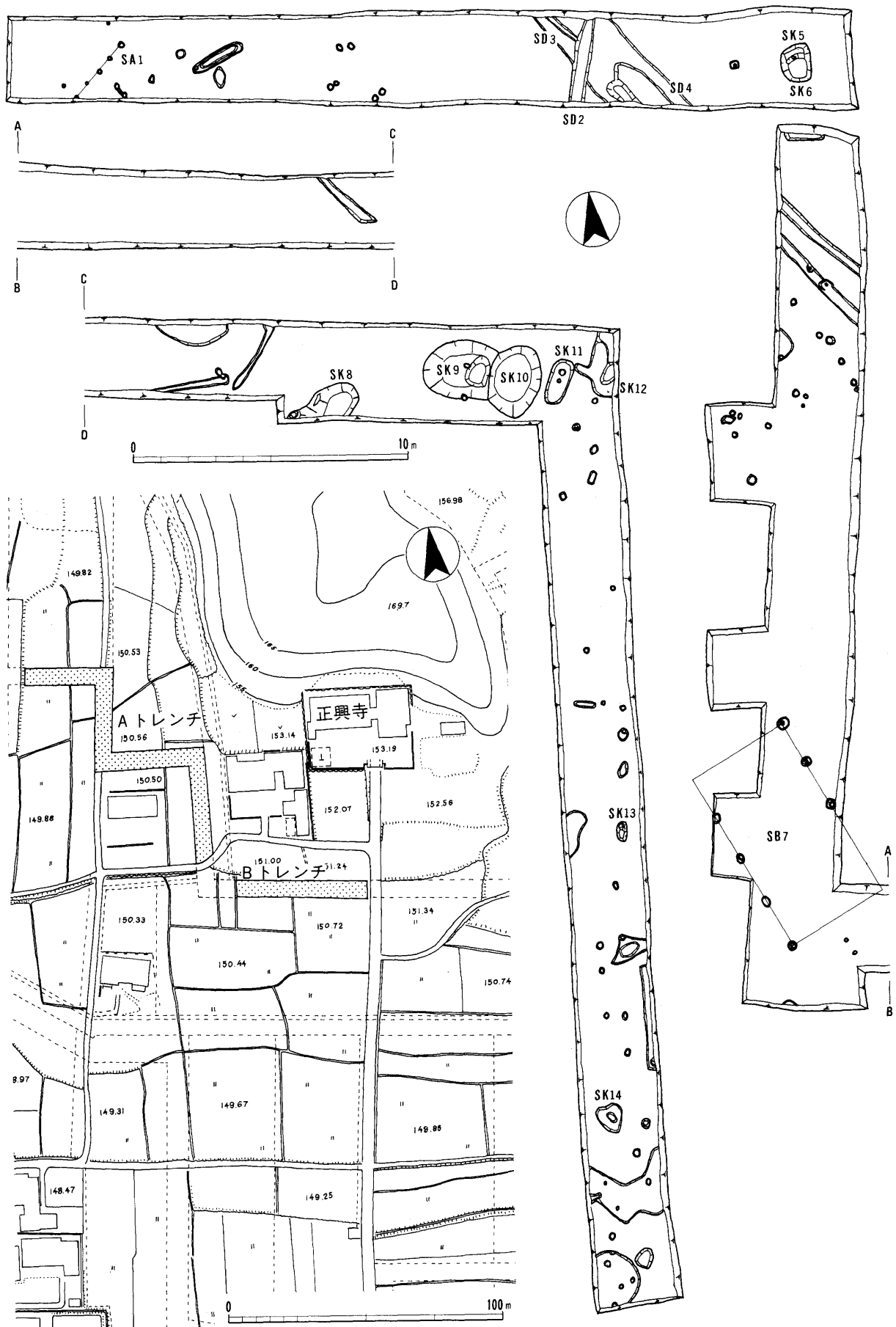
SK12 東側が調査区外へ延び、全体の規模、形状は不明。深さは5cm前後と浅い。埋土の色はSK9・10に似ており、鎌倉時代のものと考えている。

SK13 径60cm×40cm、深さ35cmの土坑。土坑の北壁近くで完形の瓦器椀が1点出土した。この椀は伊賀地方の瓦器編年に従えば、Ⅲ段階第3型式に相当し13世紀後半のものである。おそらく土塚墓であろう。

SK14 径1.1m×0.9m、深さ15cm前後の不整形土坑。弥生時代後期の壺・甕片が少量出土した。



第51図 SB7遺構実測図(1:100)



第52図 調査区位置図 (1 : 2,000)、第53図 Aトレンチ遺構平面図 (1 : 200)

(2) Bトレンチの遺構

トレンチの西半分で鎌倉時代の土坑1基 (SK15)、掘立柱建物3棟 (SB17~19)、及び室町時代後半の掘立柱建物1棟 (SB16) を検出した。但し、遺構の時期については、出土遺物が細片のため明確でないことを予め断っておきたい。

SK15 南北に長い溝状の土坑である。長さ2.5m、幅0.6m、深さ10cmで、鎌倉時代の土師器小皿片が少量出土したにとどまる。SB16の柱掘形はこの土坑の埋土を切っており、これより新しい。

SB16 桁行16間 (16m) × 梁行1間 (2.6m) の東西に長い掘立柱建物で、棟方向はE6°Sを示す。柱掘形は一辺30cm~50cmで比較的方形に近くて浅い。中には、柱痕跡や根固め石が認められたものもいくつかあった。柱間寸法はやや不揃いである。柱掘形からは、瓦器片のほか、瓦質平瓦、16世紀代

の伊勢型鍋口縁部が出土しているところから、室町時代後半に下る建物と考えられる。

SB17 3間以上×2間の南北棟建物。柱掘形は30cm前後の円形を呈し、柱間は桁行、梁行とも1.4mを測る。棟方向はN41°Eを示す。

SB18 2間以上×2間の南北棟建物で、南は調査区外へ延びる。桁行柱間は1.8m、梁行柱間は1.25mで、棟方向はN36°Eを示す。SB17と重複するが、その新旧関係は不明。

SB19 2間×2間の総柱建物と思われる。桁行柱間は2.9m、梁行柱間は2.7mで棟方向はN32°Wを示す。柱掘形内に偏平な石を据えるものや、根固め石を入れた柱穴も認められた。SB23と重複し、これより新しい建物である。

(3) 遺物

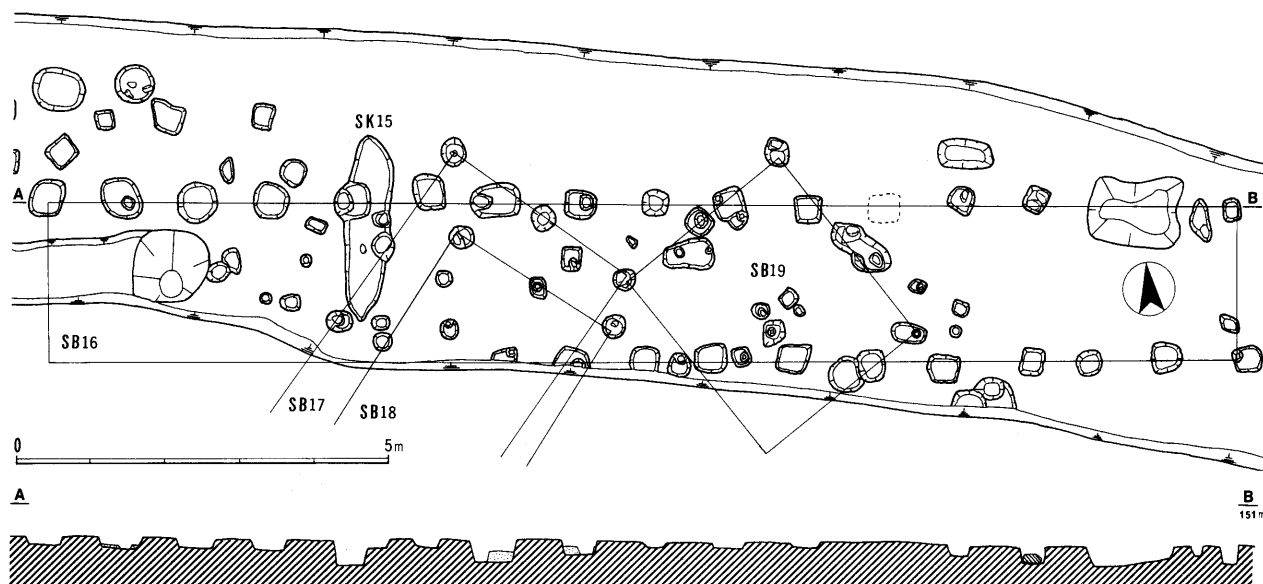
弥生時代から近世に至る各時期の遺物が出土している。しかしそのほとんどが細片で、遺構に伴う遺物も量的に乏しい。そのため、ここでは、A・B両トレンチ出土の図示し得た遺物のみを取り上げ述べることにする。

弥生壺 (1) 底部径5.4cmの壺底部片である。器面の調整は保存状態が悪く不明。外面は灰褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土に石英や白色の小石を

多く含む。

弥生高杯 (2) 口縁のわずかな破片であるが高杯杯部と思われる。器面の保存が悪く調整は不明。胎土に細かい石英、長石、雲母粒を多く含む。壺 (1) とともに土坑SK8から出土。いずれも弥生時代後期に属するものであろう。

須恵器高杯 (3) 接地面の比較的広い安定した高台の付く杯身片。底部は糸切り痕が残り未調整で



第54図 SB16・17・18・19遺構平面図 (1:100)

ある。底部の器壁は最大9mmと厚い。内面に濃緑色の釉が厚くかかり、外面にも釉の垂下が認められる。奈良時代後半頃のものであろう。

土師器皿(4・5) 皿(4)は口径約13cm、器高2.9cm。体部はナデで仕上げ、口縁端部はていねいにヨコナデする。胎土は比較的精良で暗茶灰色を呈する。皿(5)は口径11.4cm、器高1.9cm。口縁部はやや内弯気味に立ちあがり、端部はヨコナデされて細く終わる。底部中央は内側にへこむ。色調は全体に白っぽく、胎土に砂粒を多く含む。型式的にみて皿(4)より後出のものと思われる。いずれもBトレンチ包含層から出土のものである。

捏鉢(6) 約1/5が残存する。推定口径31cm、器高11.7cmを測る。底部成形後、これに粘土ひもを巻き上げて体部を作り、ロクロナデにより器面を平滑に仕上げる。口縁端部は外方へ強くヨコナデされ、上面に平坦面をつくる。焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈する。内面には多量にこげかすが付着する。形態的に信楽産捏鉢A2類^①に類似する。

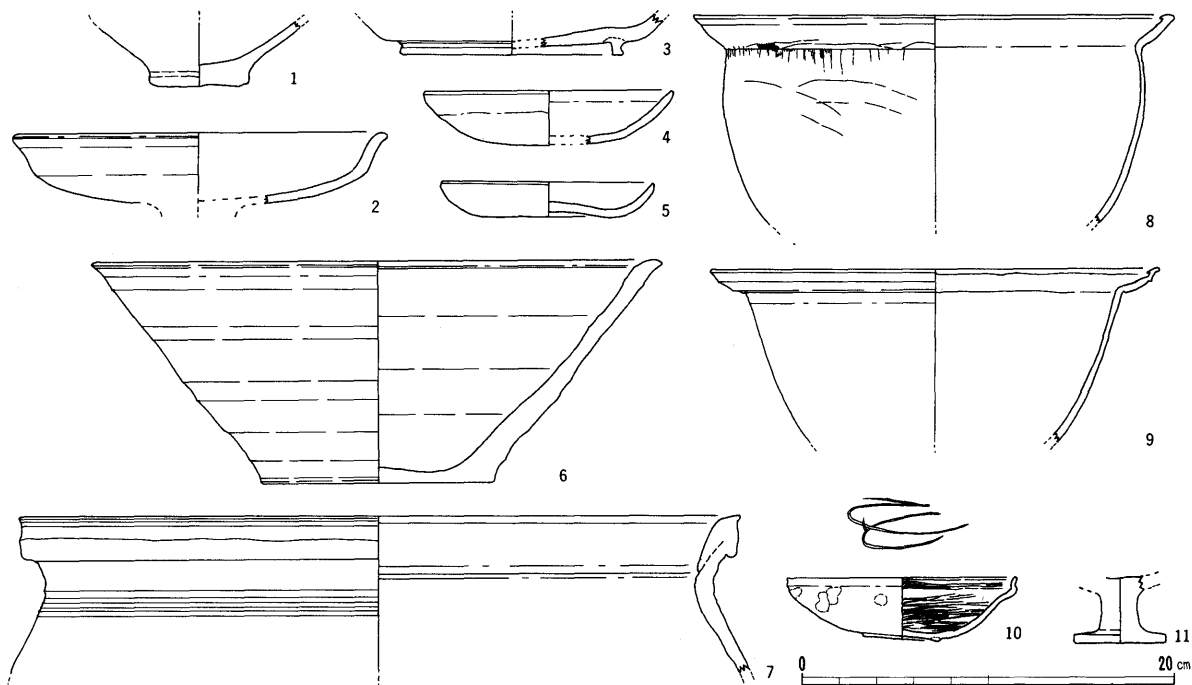
甕(7) N字状口縁を呈する信楽産の甕で、推定口径39cmを測る。口縁部はヨコナデして仕上げ、端部内面は、相当乾燥した段階で円周に沿って横方向にヘラケズリする。また頸部の接合に際し、外面にハケ目を施す。胎土は白っぽく石英粒を含むもよ

く精製されている。

瓦質鍋(8・9) 鍋(8)は口径26cm。丸味のある体部に内弯気味に開く口縁部がつく。口縁端部は内側に折り返され。上面に平坦部をつくる。口縁部はヨコナデし、体部は板ナデする。胎土は精良で、外面は淡灰褐色、内面は黒色を呈する。器壁は3mm前後と薄い。鍋(9)は、(8)に比べて体部の丸味は少なく、外傾度が大きい。体部外面には、ススが多く付着する。いずれもB地区包含層から出土しており、14世紀初頭から15世紀にかけてのものと思われる。

瓦器碗(10) 口径12.1cm、器高3.3cmを測る。口縁部は強くヨコナデされ、上方に屈曲する。口縁端部の沈線はないが、底部には退化した低い高台が付く。体部内面のヘラミガキは、この時期のものとしては比較的密に施され、ミガキ幅は1mmと細い。底部にはℓ字状のミガキが施される。土坑SK13からほぼ完形の状態出土しており、墓に伴う埋納品と考えられる。伊賀地方における瓦器編年のⅢ段階第3型式に相当し、13世紀後半頃のものであろう。

施釉陶器高杯(11) 中身の脚部片である。底部は糸切りのままで、底部を除く全面に淡灰緑色の釉が施釉される。おそらく仏具として使用されたものであろう。



第55図 澤田遺跡出土遺物実測図(1:4)

(4) まとめ

排水路部分のみの限られたトレンチ調査であったため、遺跡の全容を把握するまでには到らなかったが、出土遺物、検出された遺構から、弥生時代後期、奈良時代、鎌倉～室町時代のおよそ3時期に、当遺跡において生活が営まれたことが確認された。

弥生時代では、後期の掘立柱建物と考えた4間×1間のSB7の検出は、昔見で知り得る限り、伊賀地方では初例と思われる。遠く伊勢湾西岸地方の松阪市草山遺跡^②では、竪穴住居と共にこの時期の掘立柱建物が54棟検出されている。4間×1間ないし3間×1間の建物で、SB7と同様妻柱を持たない建物である。しかしその規模は、桁行柱間が1.1m前後、梁行柱間3m前後のものが多く、桁行柱間1.8m、梁行柱間3.8mを測る今回のSB7の規模がはるかに上まわっている。これが地域差によるものか、時期差によるものかは、まだ結論付けられないものの、当地区を含めた一帯に弥生集落の存在する可能性は高いものと思われる。

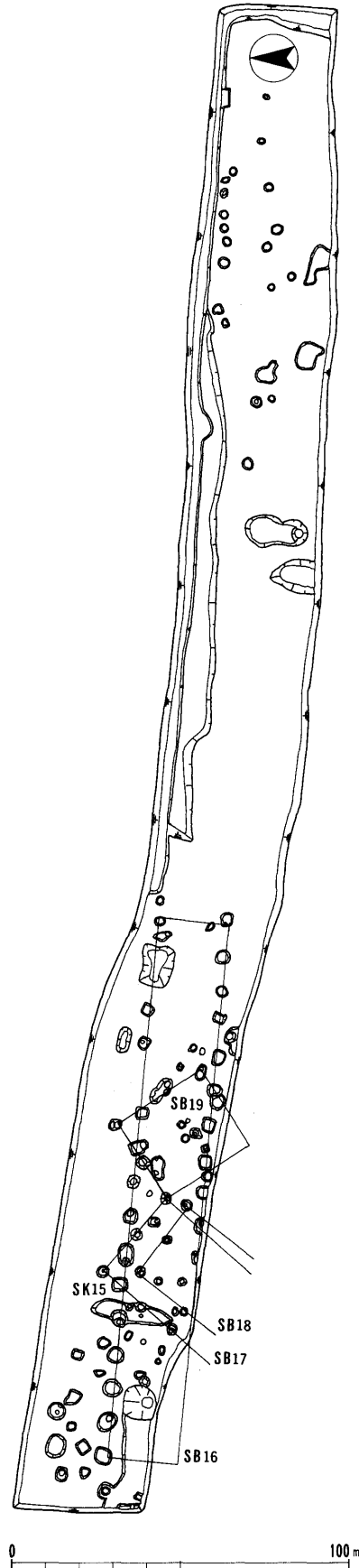
奈良時代は、遺物のみで明確な遺構が検出されていないが、隣接する森脇遺跡では、郡衛もしくはこれに匹敵する建物群が検出されており、これに関連する集落の存在の可能性は否定できない。

鎌倉時代～室町時代では、特にBトレンチで検出した桁行16間×梁行1間の東西に細長い掘立柱建物の検出が注目される。こうした建物は、一般集落の建物では例がなく、また仏具と思われる施釉された小さな高杯が遺物包含層から出土しているところから、寺院に関する建物ではないかと思われる。Bトレンチでは、この時期の掘立柱建物が、ほかに3棟確認されており、おそらく建物群は、さらにこの調査区の南部に広がっているものと思われる。

(倉田直純)

註

- ① 木戸雅寿「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会 1989
- ② 『草山遺跡発掘調査月報』No.1～No.9 松阪市教育委員会 1982～1984



第56図 Bトレンチ遺構平面図(1:200)



A地区全景（東から）



溝SD4遺物出土状況（東から）



掘立柱建物S B 3 (南から)



掘立柱建物S B 21 (東から)



土塚墓SX2 (西から)



土坑SK10・11 (南から)

溝 S D 24・25 (北から)



日地区全景 (北から)



才良遺跡

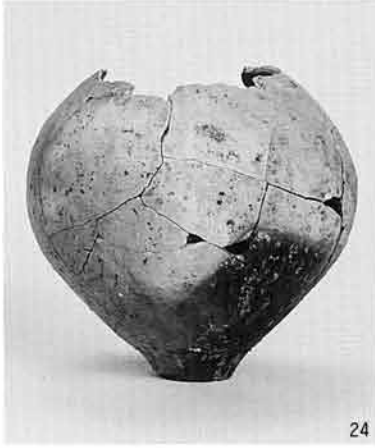
PL 12



A地区溝SD4出土遺物(1) (1:4、9のみ1:3及びび1:1)



19



24



33



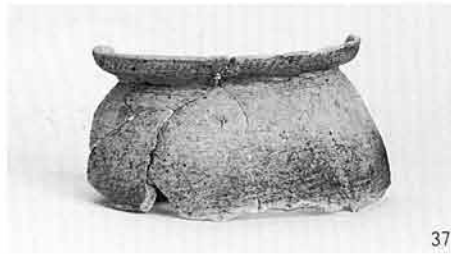
21



27



32



37



36



31



43



34



35

A地区溝SD4出土遺物(2) (1:4)



39



42



48



45



52



58



60



54



61

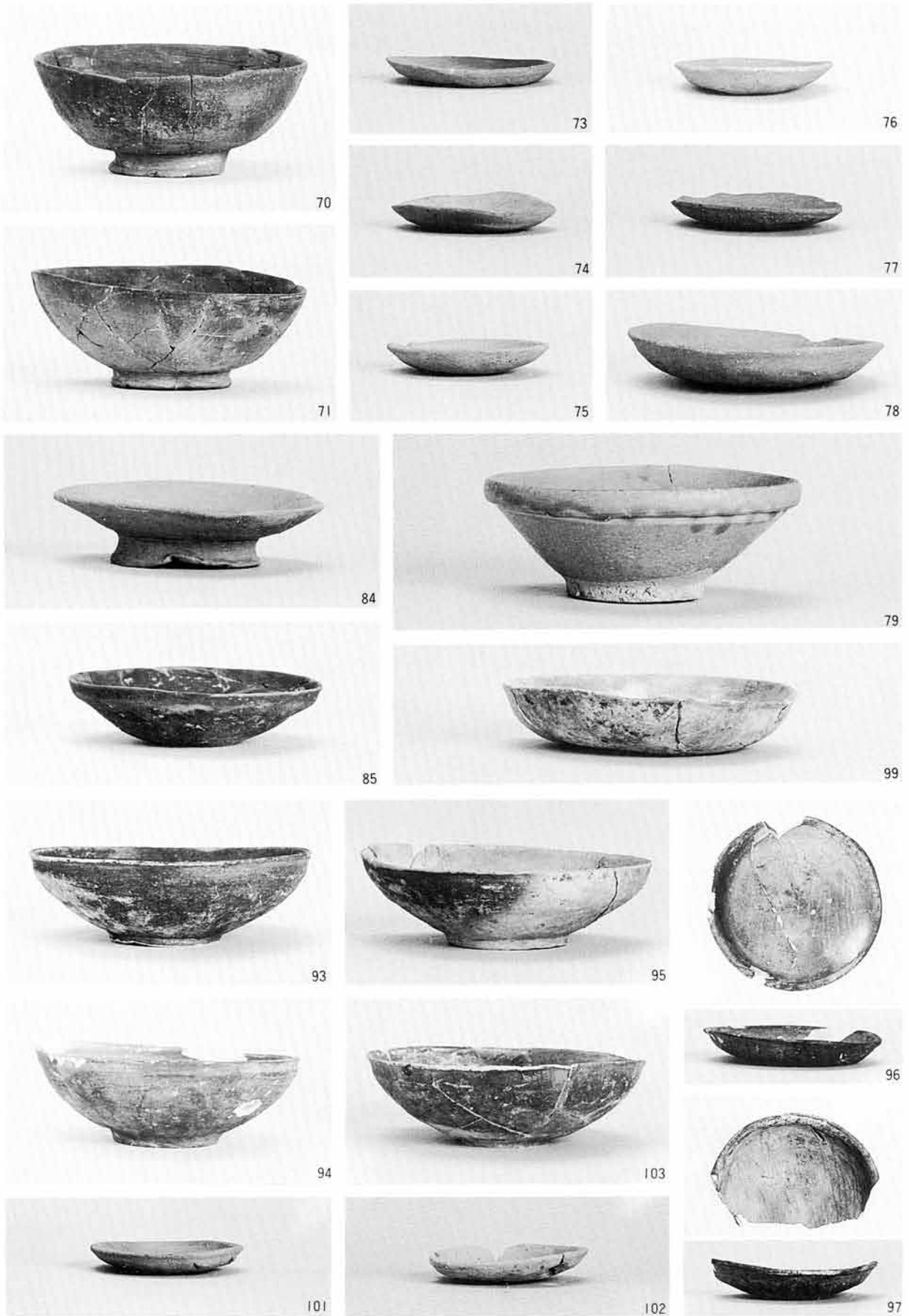


62



59

A地区溝SD4出土遺物(3) (1:4)



A・B地区出土遺物 (1:3)



A トレンチ北部全景 (北東から)



B トレンチ全景 (西から)



A トレンチ南部全景 (北から)



掘立柱建物S B 7 (北西から)



土坑S K 13遺物出土状況 (南西から)

V 三重郡菰野町下村 山之東遺跡

1 位置と歴史的環境

山之東遺跡(1)は、御在所岳山麓に源を発する海蔵川と竹谷川に挟まれた標高48m前後の台地上に位置し、行政上は、四日市市と菰野町との境に近い、菰野町下村字山之東に位置する。

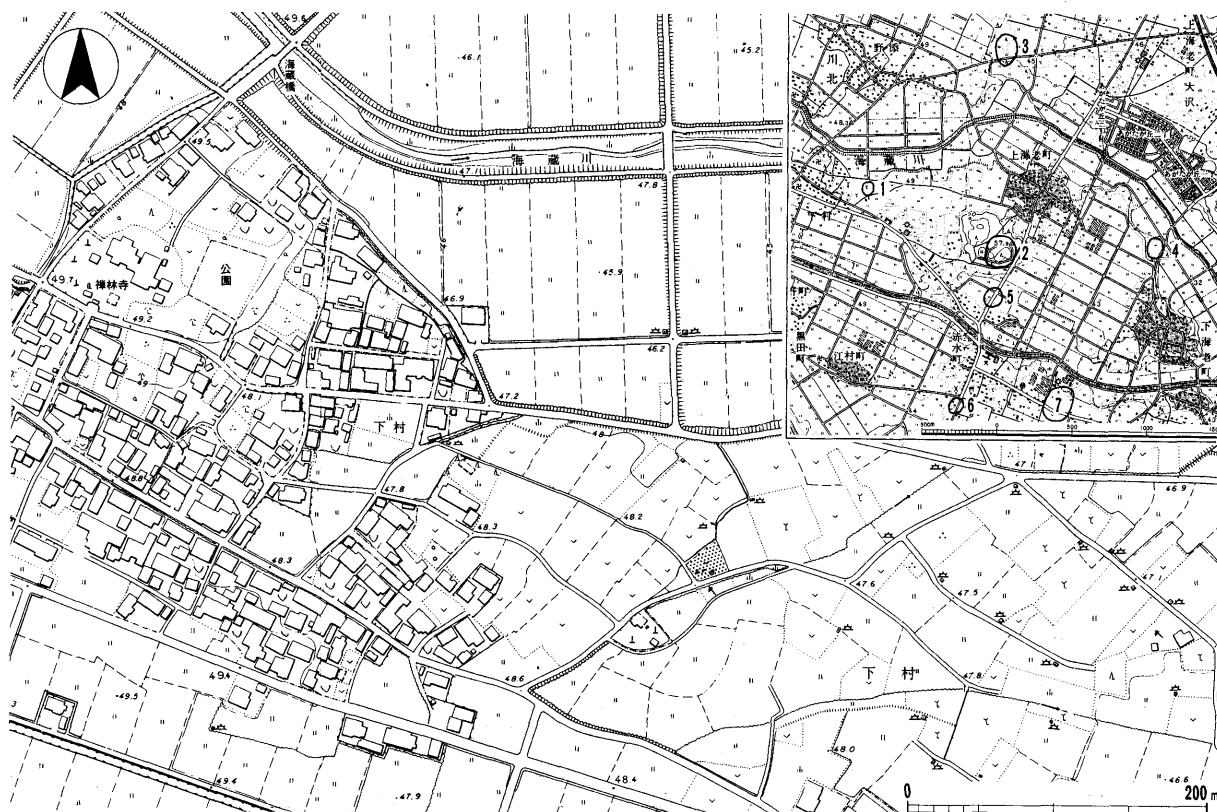
当遺跡の東方1kmには、北勢地方の一大窯業地であった岡山古窯跡群^①全7基(2)が存在する。昭和35年・40年・44年の発掘調査で、6世紀代に操業を開始し、奈良時代～平安時代を通じて、須恵器・灰釉陶器が焼成されていたことが確認された。特に2号窯では、須恵器のほか、円面硯、陶塔、瓦も併焼されており、寺院造営にかかわる密接な関係があったことが想定されている。しかしその供給先については、まだ十分解明されていない。

これ以外の周辺の遺跡については、遺物の表面採集による遺跡確認のため、その詳細はよくわかっていない。

古墳時代では、岡山古窯跡群の東方1kmの台地縁辺部で土師器・須恵器片が採集された衣比原神社北遺跡(4)がある。これ以外の大口遺跡(3)、北裏遺跡(5)、沢ヶ上遺跡(6)、南かに島遺跡(7)は、室町時代～江戸時代に下る遺跡である。

ところで本遺跡の所在する下村は、かつて鶴河原村と称し、文献によると伊勢神宮領大強原御厨の一部となっていた。また東方の上海老町、下海老町一帯は、9世紀後半頃、衣比原御厨となっていたが、中世には、智積御厨に組み込まれていたことが知られる。^②

江戸時代は神宮支配から幕府支配に移行し、赤水村、江村、下海老原村、平尾村と鶴河原村の一部が津藩領となっていたほか、上海老原村や鶴河原村の大半が立ち変わり幕府領、大和郡山領、忍藩領などとなり、村落支配が目まぐるしく変遷した。



第57図 遺跡地形図(1:5,000)、右上;遺跡位置図(1:50,000 国土地理院 菰野 1:25,000から)

2 遺構と遺物

検出した遺構には、周溝をもつ土壇墓2基がある。調査区西側のS X 1は、東西66cm×南北86cmの隅丸方形土壇で、深さは遺構面から8cmを測る。周溝は北側と東側で検出された。西側は調査区外へ延びて不明だが、おそらくコの字形に墓壇を取り囲んでいたものと考えられる。溝幅は25cm、深さ6cm前後で、墓壇の中心から溝の中心線までの距離は、北側、東側とも1.7mを測る。

調査区東側のS X 2は、東西84cm×南北110cm、深さ20cmを測る隅丸方形土壇で、S X 1より墓壇掘形が一回り大きい。S X 1と同様、これを取り囲むように巡る周溝が確認されたが、全周するか否か

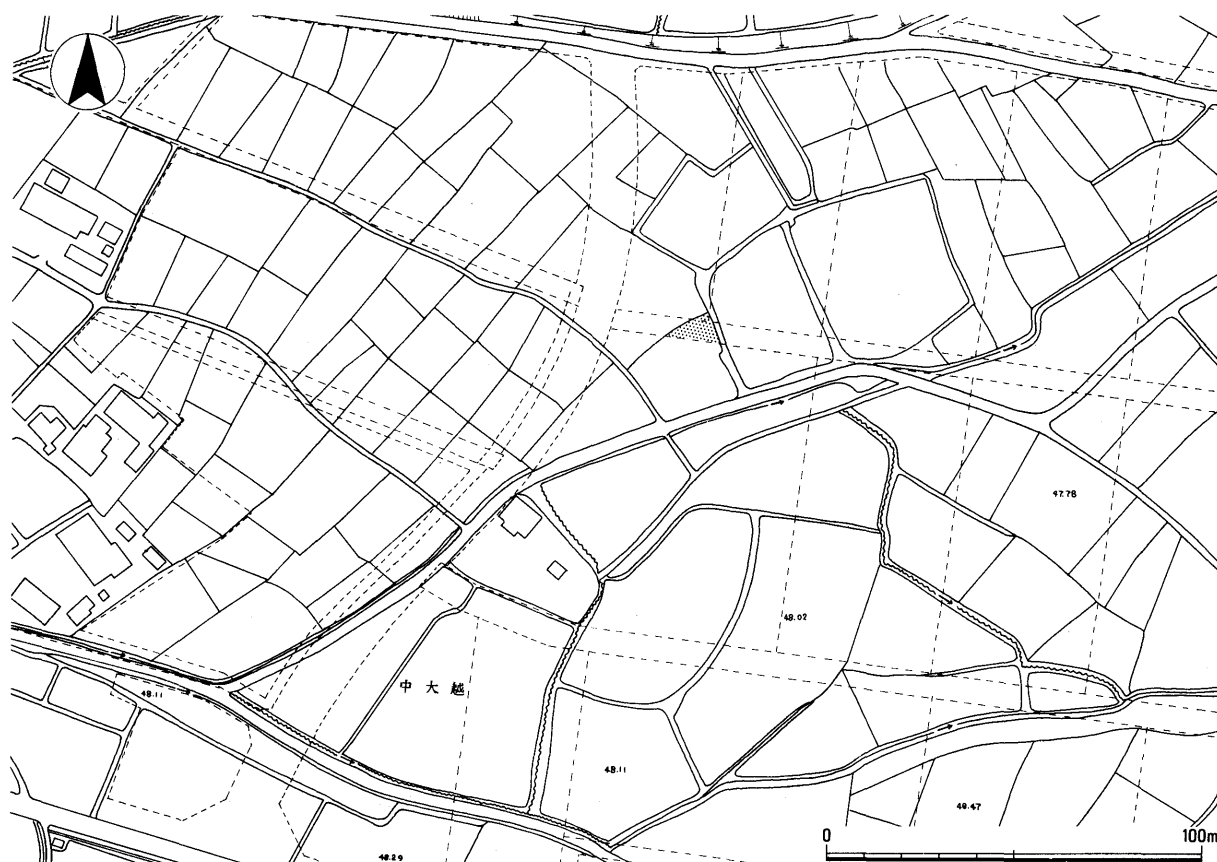
は不明。溝幅は35cm、深さ4cm～8cmを測る。東側と西側の溝の心々距離は、3.5mである。墓壇は、溝に囲まれた中央部よりやや北西寄りに位置する。

墓壇からは、炭と骨片が多量に出土したほか、木棺に使用した鉄製釘が出土した。焼土は床面と壁面の一部で認められ、炭は、床面焼土上面で多く認められた。このことから、現地で墓壇を掘って火葬をおこない、その後土盛りをして墓を築いた火葬墓と考えられる。土器、陶器等の副葬品はなかったが、S X 2から銭のかたまりが出土している。錆と癒着が著しいため、文字の判読や枚数は不明。おそらく宋銭であろう。

3 小 結

調査は、遺構の削平される排水路部分約70㎡に限られたため、検出した遺構は土壇墓2基のみである。いずれも土壇墓の周囲を小溝で区画し、個々の墓域

を明確にした墓である。こうした例は、明和町古里遺跡C地区^③の土壇墓S X 28や、明和町金剛坂遺跡Bトレンチで検出の土壇墓^①に類例が求められる。



第58図 調査区位置図 (1 : 2,000)

鎌倉時代後期とされるSX28の規模は1m×1.7m。後者は、長辺1.6mで、墓壇内より出土した山茶樹から平安時期末期～鎌倉時代初期と考えられている。両者とも、今回の土壇墓に比べて規模が一回り大きく、火葬の痕跡は認められていない。

一方、こうした周溝を伴う土壇墓の検出例はまだ数少ないが、松阪市横尾中世墓B地区^⑤や四日市市丸岡遺跡^⑥のように、副葬品に乏しく、墓壇内に焼土、炭、骨片が多量に入り、中には焼土壁を有する土壇墓群の検出例は、近年の調査で増加しつつある。横尾中世墓の場合、墓壇の規模は、平均93.3cm×

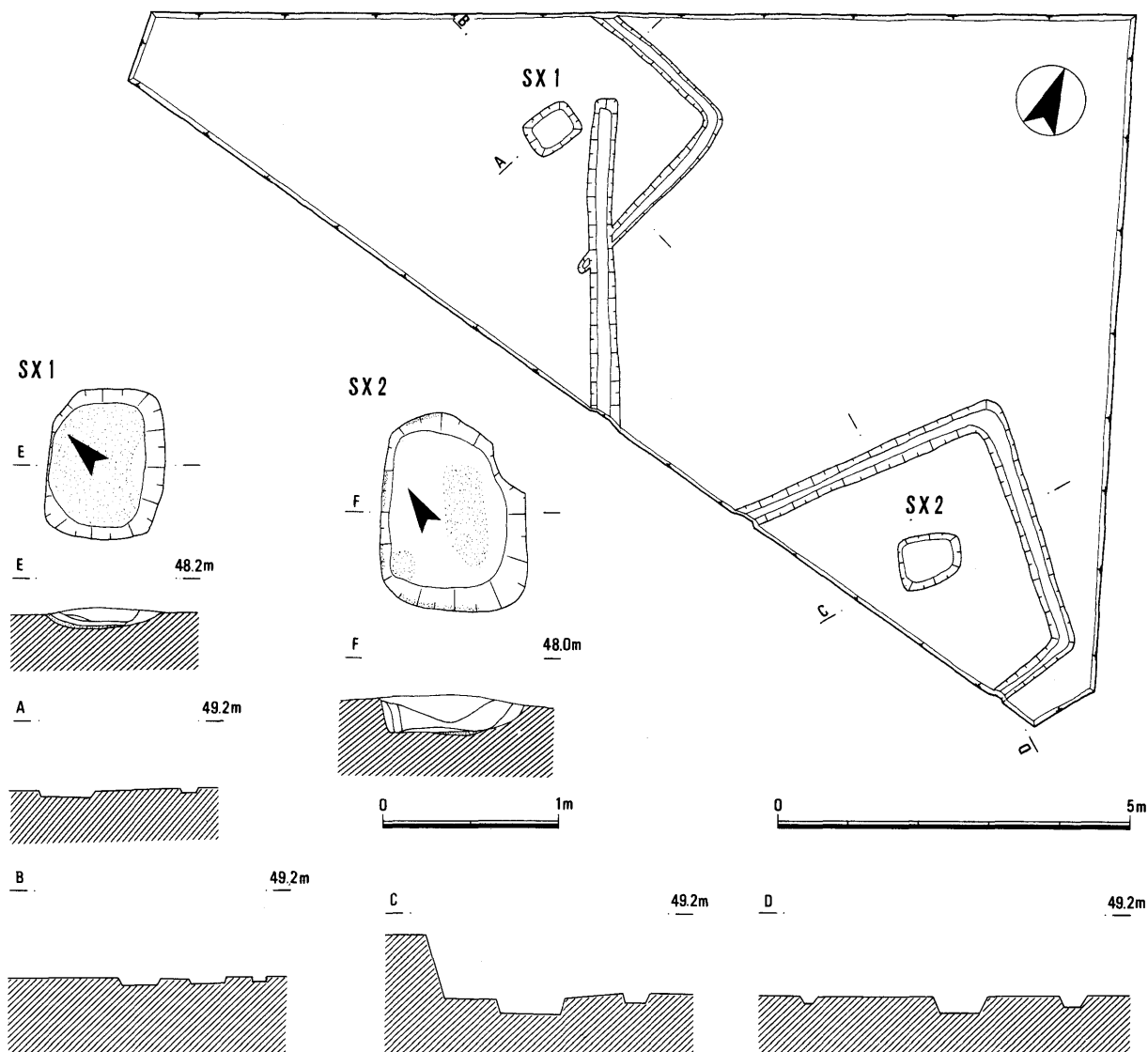
〔註〕

- ① 『岡山古窯址群発掘調査報告』四日市市教育委員会 1971
- ② 『三重県の地名』日本歴史地名大系24 1983を参照
- ③ 『古里遺跡発掘調査報告-C地区-』三重県教育委員会 1973
- ④ 昭和59年度 県営ほ場整備事業に伴う事前調査で確認

70.4cm、深さ28.7cmで、時期的に13世紀～16世紀におさまるものと考えられている。丸岡遺跡の場合は、径50cm前後の楕円形を呈する小規模なものもあり、墓壇の形状や規模にバラエティーがある。時期は共伴遺物が皆無のため、不明である。

以上のことから、今回の土壇墓は、規模や検出状況から横尾中世墓の例に近いが、その葬り方は、集団墓地でありながら、個々の墓地の範囲を明確にしている点で異なる。これが被葬者の階層差によるものか、時期差か、地域差なのかは、今後の類例の増加を待って明らかにしてゆきたい。（倉田直純）

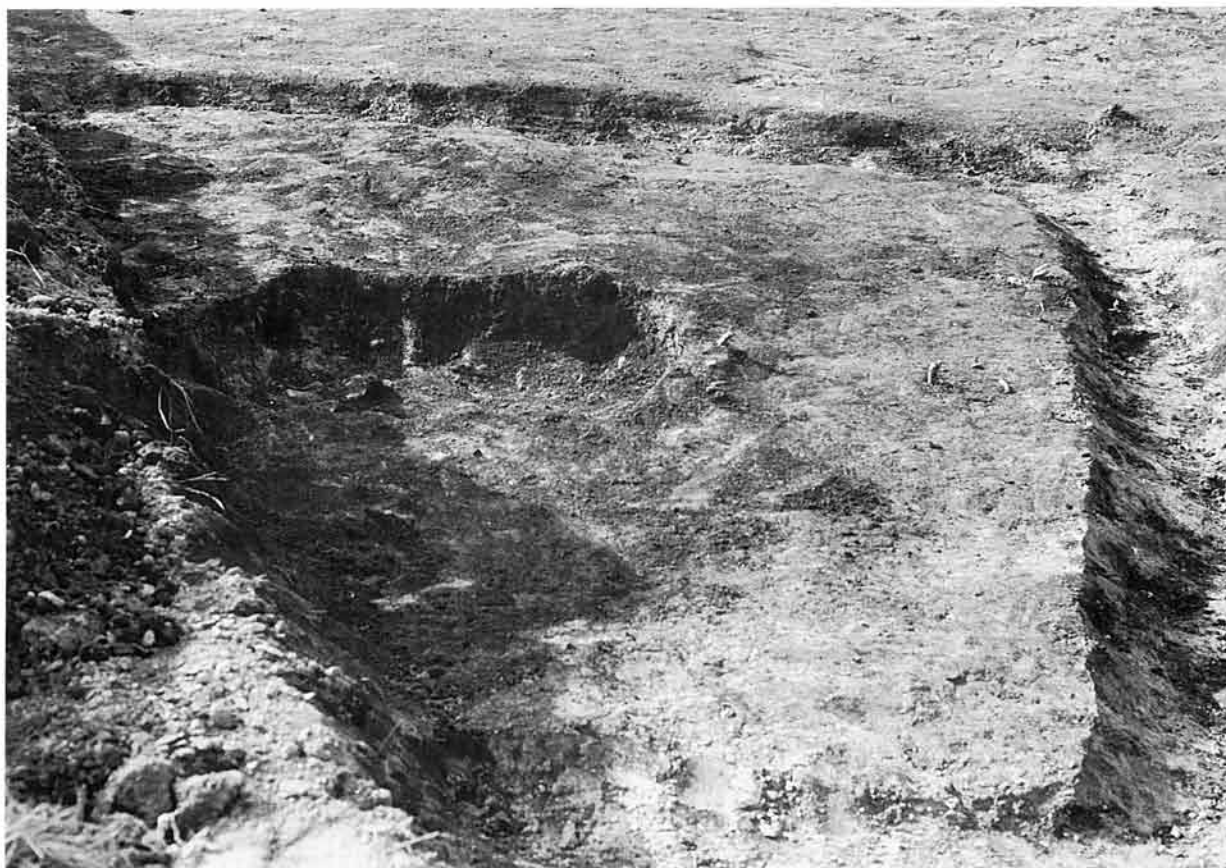
- ⑤ 『近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報II』三重県教育委員会 1986
- ⑥ 『丸岡遺跡試掘調査概要報告』四日市市教育委員会 1974のほか、1987年に三重県教育委員会が追加の試掘調査を実施し、数基の火葬墓を確認している。



第59図 遺構平面図(1:100)、土壇墓SX1・SX2遺構実測図(1:40)



調査区全景（西から）



土塚墓SX2（南東から）

VI 四日市市山田町 中尾山遺跡

1 位置と歴史的環境

四日市市南部を東流する内部川は、鈴鹿山系に源を發し、いくつかの中小河川を集め、河口近くで鈴鹿川と合流し伊勢湾に注ぐ。その支流である足見川、鎌谷川は、中流域で蛇行しながら洪積台地を開折し、南東方向に帯状に延びた低丘陵突端付近で内部川に合流する。

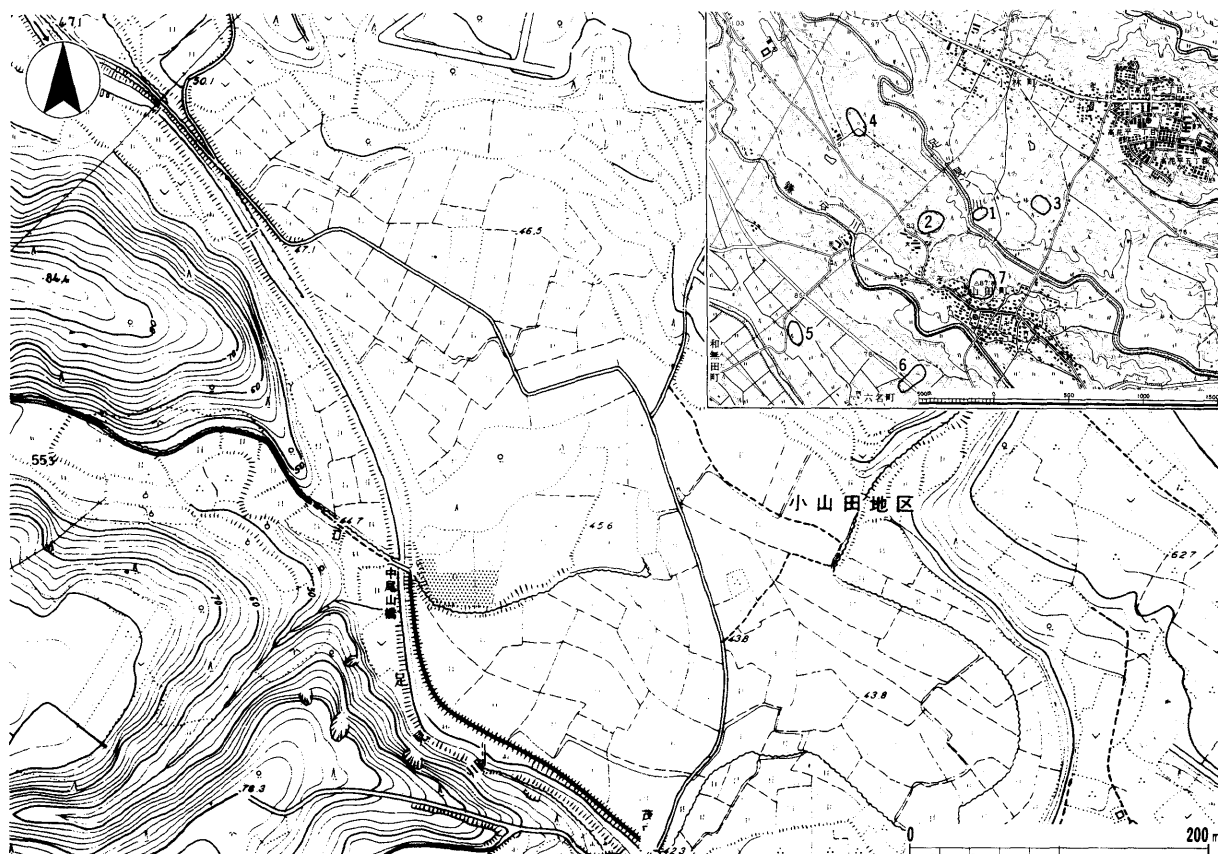
中尾山遺跡は、この足見川中流の左岸、標高48m前後の狭小な台地上に位置し、周囲の田面とは約3m～4mの比高差を測る。西側には、標高56mの独立丘陵が迫る。試掘調査はこの台地一帯と丘陵上で実施したが、わずかに遺物が確認された台地南部の約700㎡について立会い調査を実施した。

中尾山遺跡（1）では、かってすぐ南の谷間を流れる足見川の河川改修の際、有舌尖頭器が表採されている^①。またこれより西へ約300m、足見川右岸

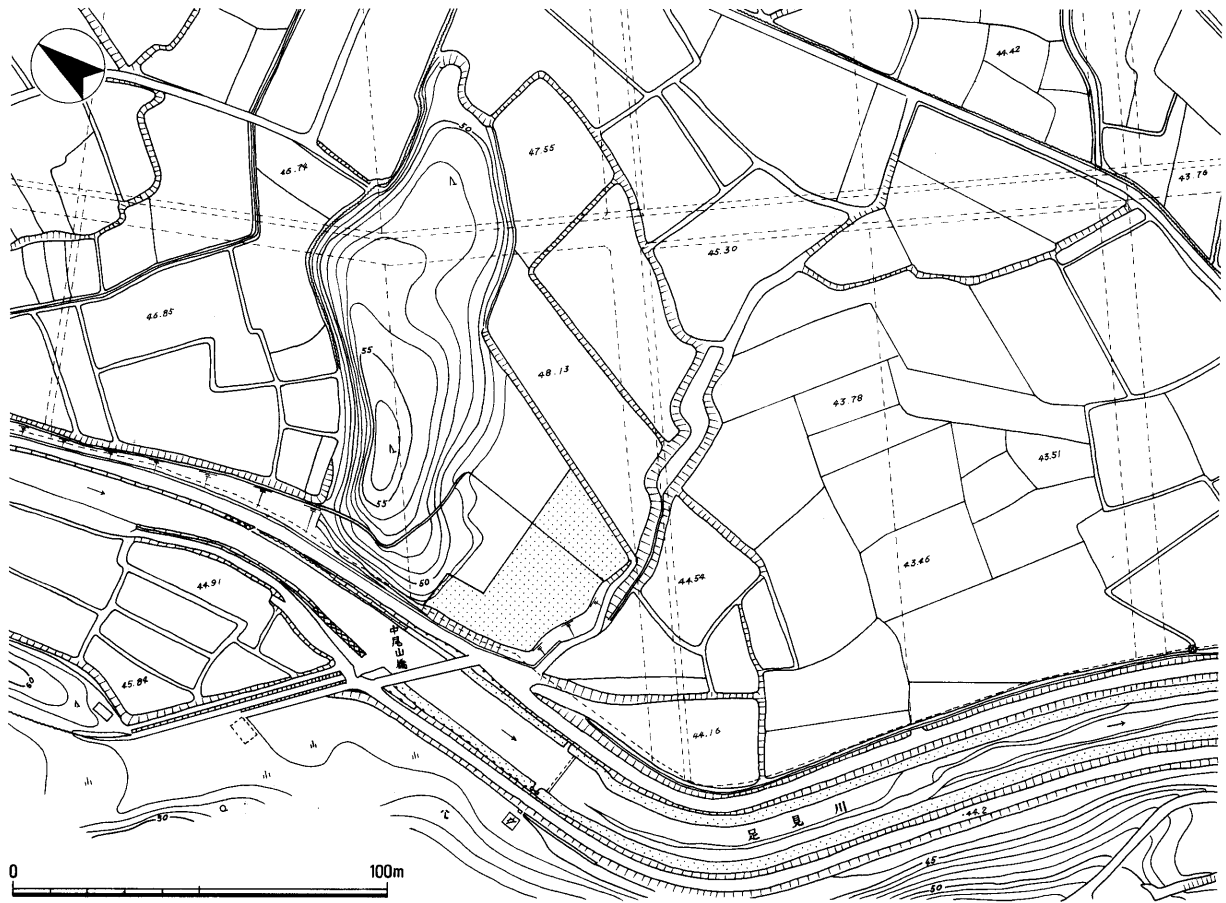
の台地上に位置する大畑遺跡（2）では、有茎石鏃や石錘が、左岸の宮蔵遺跡（3）では、弥生土器片のほか、無茎石鏃や旧石器時代のナイフ形石器が確認されており、当地が早くから狩猟採集の場であったことが窺われる。

古墳時代では、それぞれの川を臨む台地縁部に和田ヶ平古墳群（4）、六名山添古墳群（5）、向山古墳群（6）など数基からなる後期と思われる古墳群が点在する。唯一調査されているのは、和田ヶ平1号・2号墳^②で、いずれも横穴式石室を有し、特に1号墳からは多量の須恵器をはじめ、金環、玉類、鉄製品等が出土した。

中世の遺跡としては山田城（7）^③がある。応仁年間に矢田堅物が丹波の国から来住築城したとされるが、採土のため実体は不明である。



第60図 遺跡地形図（1：5,000） 右上；遺跡位置図（1：50,000 国土地理院 四日市西部 1：25,000から）



第61図 調査区位置図（1：2,000）

2 遺 構

室町時代の土坑4、溝1のほか、時期不明の小穴、土坑、溝等を若干検出した。

SK1 5m×3.6mの方形土坑で深さは約30cm。北側に半円形の張り出し部があり、内側に30cm前後の石を弧状に配列する。あるいはこの部分のみ、SK1と切り合う別の遺構の可能性もある。

SK2 長さ3.2m、幅0.8mの溝状土坑。深さは20cmと浅い。

SK3 1.8m×1.9m、深さ45cmの方形土坑。北片、西片の内側にL字形に曲がる石組を配し、壁

面をつくる。基底面には比較的大きな石を並べ、その上に拳大の石を積む。現状で4段が確認された。

SK4 2.8m×3.0m、深さ40cmの不整形土坑。北片で20cm前後の粒の揃った石が積まれた壁面らしきものが確認されたが、他辺では認められず、壁面が崩れたためか、石が床面に散在する。

SK5 並列する長さ1.6mの石列。暗渠の一部と思われる。

SD6 幅2m、深さ10cm前後の浅い溝で、長さは4mまで確認された。

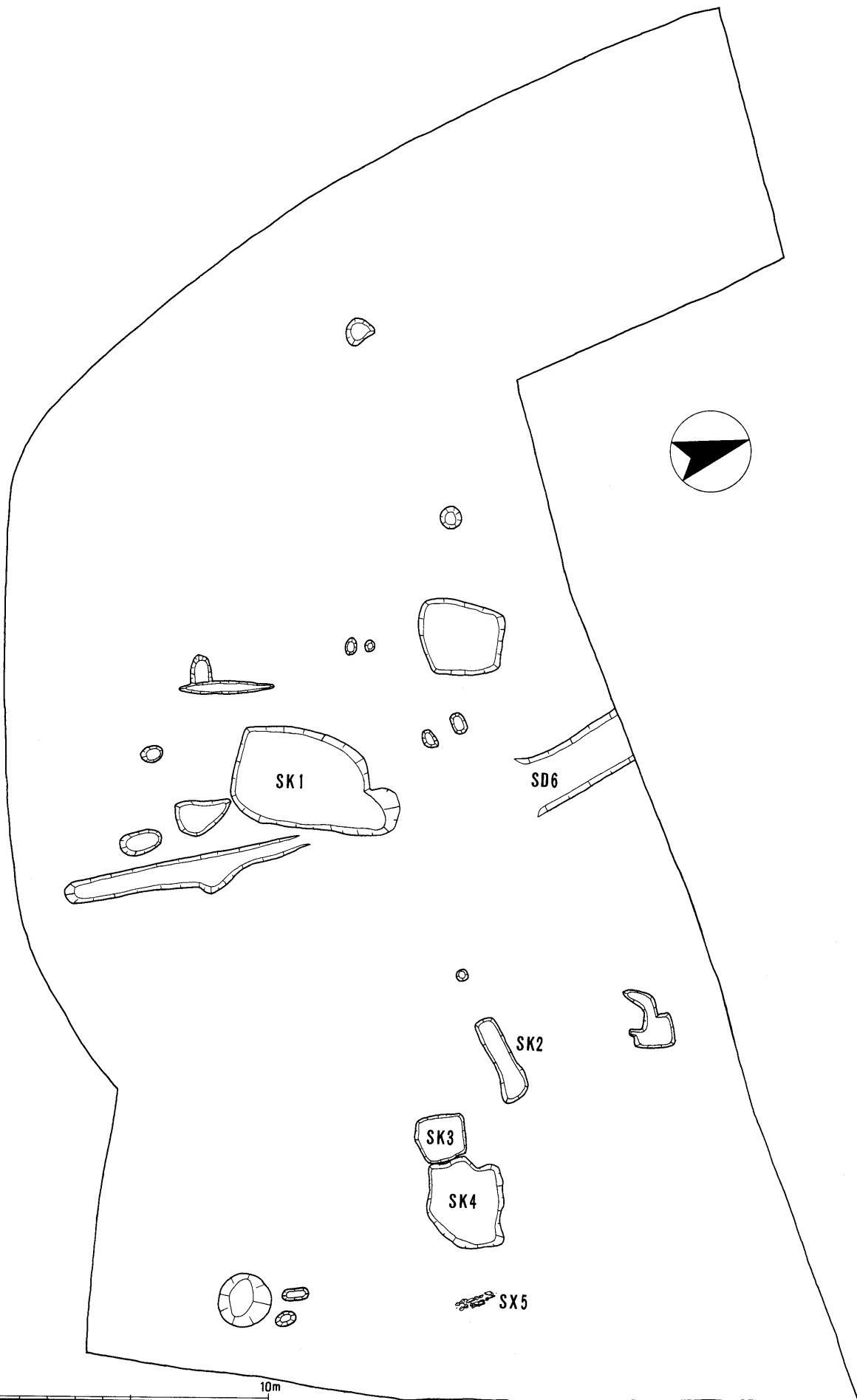
3 遺 物

遺物包含層からは、奈良時代の須恵器片や鎌倉時代の山茶碗片が出土したが、遺構に伴う遺物は、奈良時代の遺物が混在するものの、時期的には、天目茶碗、茶釜形土器、播鉢など、室町時代の遺物が少

量出土したにとどまる。

A. 奈良時代の土器

須恵器杯蓋（1）、杯身（2・3）、土師器杯（11・12）、土師器小碗（13）がある。



第62図 遺構平面図 (1 : 200)

須恵器杯蓋は天井部が1/2ほど残存するが、高台の付く杯身は底部片のみである。いずれも右回転のロクロヘラケズリで天井部や底部を調整する。還元不足のためか赤紫色を呈する。

土師器杯(11・12)は、口縁部の細片で推定口径約13cm。口縁部は内弯して立ち上がる。器面の保存悪く、調整不明。

土師器小碗(13)は、口径4cm、器高3.7cmで、黒灰色を呈する粗製の碗。円盤状の底部に口縁部を接合し、なでて仕上げる。

B. 鎌倉時代の土器

山茶碗(4~7)と鉢(8)がある。いずれも底部の細片で全形を窺えるものはない。山茶碗底部の器壁は比較的厚く、内面中央部がやや窪み、低い貼り付け高台が付く。高台にはもみがら痕が付着する。4のみ底部は糸切りのままである。8は須恵質の片口鉢と思われる。

C. 室町時代の遺物

SD6から出土した天目茶碗(9・10)、茶釜形

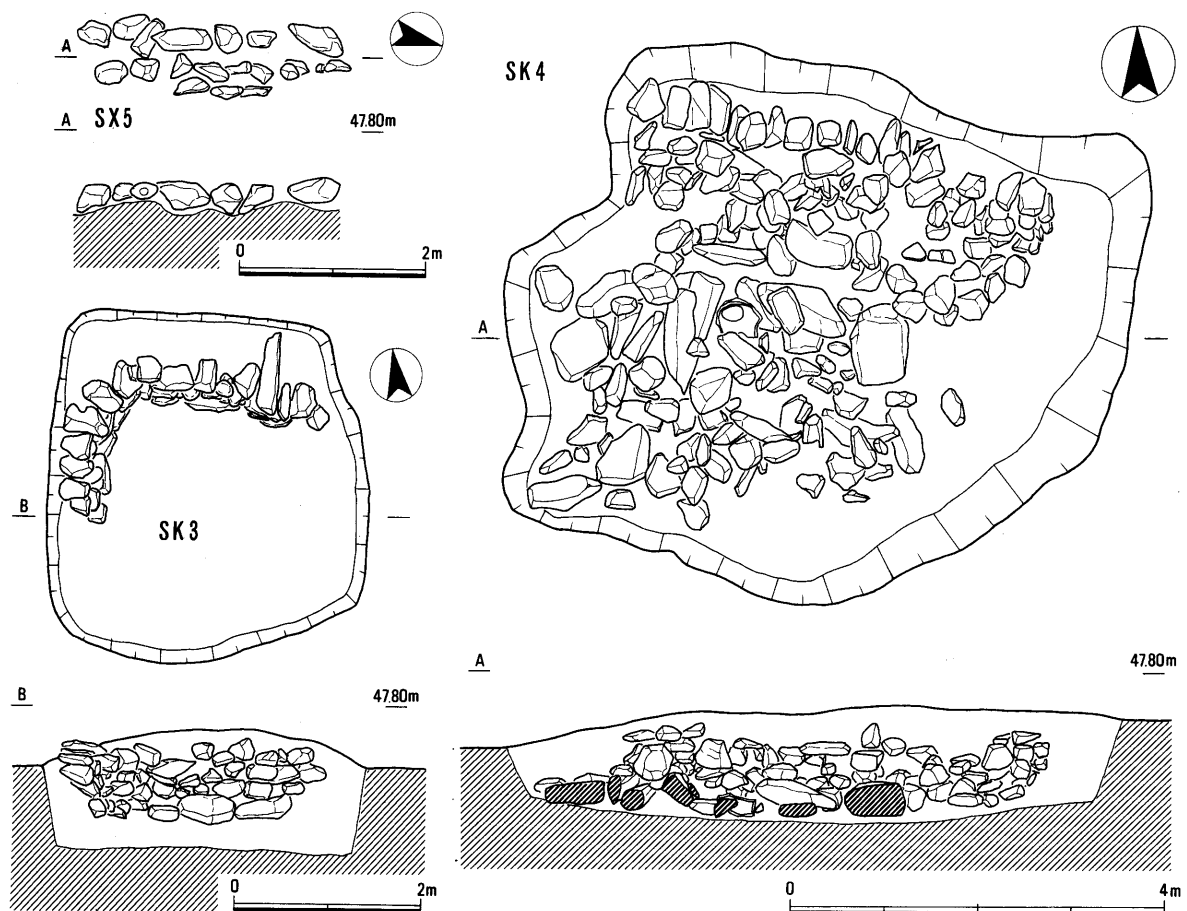
土器(4)、SK4から出土した播鉢(15)、SK2から出土した石硯(16)がある。

天目茶碗は、口径12cm前後。口縁部が外反気味に立ち上がるもので、茶褐色ないし黒褐色の鉄釉が厚く施釉される。底部は、欠損のため不明。

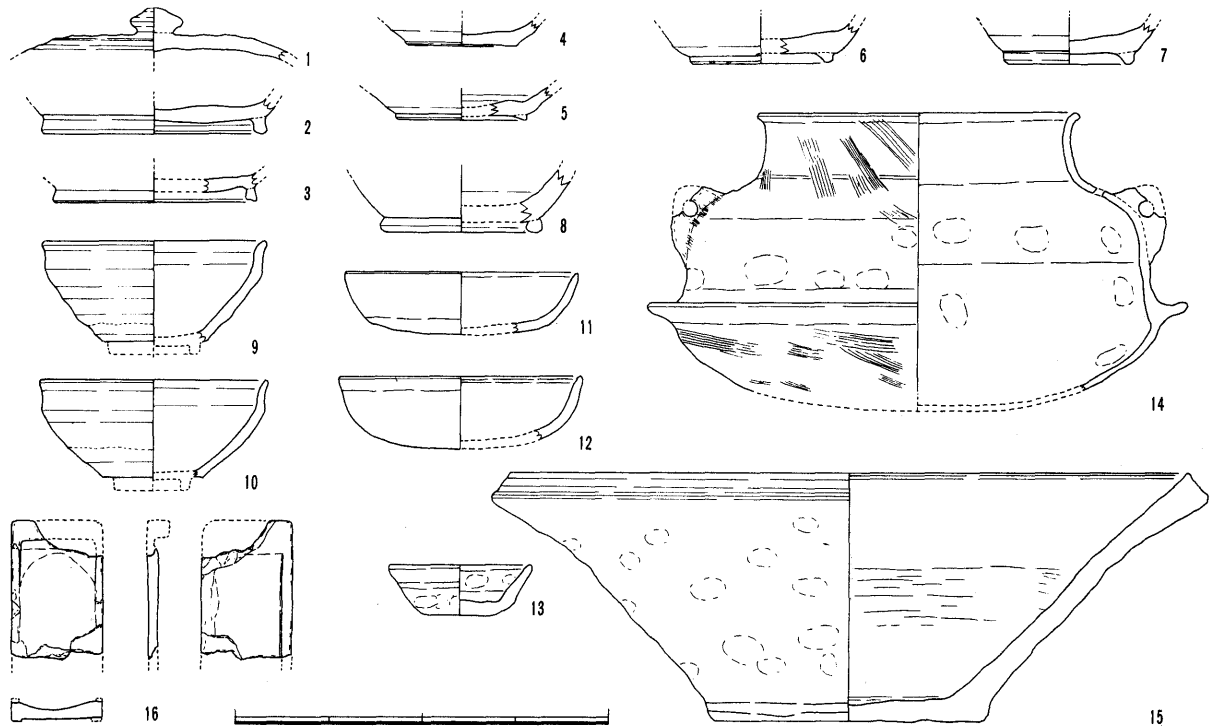
茶釜形土器は、口径16.6cmで、肩部に一对の環状把手が付き、その上に小孔があく。底部は偏平で、鐳は体部中央より下半に付く。鐳より上面を斜めのハケメ、下面を横方向にハケメ調整する。内面は板状工具でなでて、器面を平滑に仕上げる。赤褐色を呈し、胎土は比較的良好。

播鉢は、口径36cm、器高13cmで、口縁部2/3を欠く。口縁端部は器壁が厚く、内傾する平坦面をもち、底部にはロクロのゲタ圧痕が付く。淡い赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。内面に横方向の擦痕が認められる。常滑窯の製品であろう。

石硯は幅4.9cmの方形硯で、底部の周囲に低い高台を削り出す。陸部はよく使用され、その中央部はよく窪む。石材は粘板岩である。



第63図 SK3・SK4・SX5遺構実測図(1:80)



第64図 遺物実測図 (1 : 4)

4 小 結

試掘調査では奈良時代の遺物が出土したため、この時期の遺構が検出されるものと当初予想していたが、調査の結果、これに反し、16世紀以降の遺構が検出された。その多くは石組みをもつ土坑であるが、その性格については不明である。

遺物はこれらの土坑に伴い少量出土しているが、鉄釉天目茶碗や石硯の出土は、本遺跡の性格を語るうえで注目される。当時、天目茶碗や石硯の受容層

がどの位の階層まで浸透していたのか明確なデータを持ち合わせていないが、例えば、石硯は、古里B遺跡、小判田遺跡^①、戸木城址^②、殿畑遺跡^③、山添遺跡^④、山田城跡^⑤など、城館址やこれと関係が深いとされる集落跡からの出土例が多く、その点では本遺跡を一般の農村集落の一部と位置付けするのは早計であろう。しかし建物の遺構が検出されていない現時点では、これ以上の憶測は避けたい。

(倉田直純)

(註)

- ① 『四日市市史』第二巻 考古 I 資料編 四日市 1988
- ② 『和田ヶ平古墳群発掘調査概要-1号墳・2号墳-』
四日市市教育委員会 1964
- ③ 『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
- ④ 『小判田遺跡』四日市市教育委員会 1978

- ⑤ 『戸木城址発掘調査報告』久居市教育委員会 1979
- ⑥ 『殿畑遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
- ⑦ 『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1979
- ⑧ 『山田城跡発掘調査報告』東員町教育委員会 1984



土坑SK3 (南から)



土坑SK4 (東から)

VII 鈴鹿市徳居町 敷田遺跡ほか

1 位置と歴史的環境

中ノ川は関町南方の山岳地帯にその源を発し、亀山市南部の丘陵地帯を浸食しつつ、ほぼ東流し、中流域の鈴鹿市三宅町付近で緩やかな河岸段丘を形成する。そして下流域の御園町付近から蛇行しながら、肥沃な沖積平野を通過、磯山南方で伊勢湾に注ぐ。鈴鹿川に比べれば狭小な河川であるが、中・下流域には、数多くの遺跡が知られており、古代から人々の営みの足跡をたどることができる。

郡山遺跡群に含まれる追谷遺跡(1)^①では、縄文時代前期の爪形文土器をはじめ、多量の石器類やその剥片が表採されたほか、西川遺跡(2)^②では、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居が2棟検出されており、豊かな自然の恵みを包蔵する丘陵地を後背地とし、生活の上で好条件を備えていた郡山の台

地が早くから開かれていたものと考えられる。

生活基盤を稲作に求めた弥生文化が大陸から北部九州に伝えられると、またたく間に、西日本に波及し、伊勢湾西岸では中ノ庄遺跡→納所遺跡を経て、鈴鹿川流域の上箕田遺跡に伝播して次々に拠点集落が築かれていった。やがてここを母胎とし各河川の低湿地を求めて米作りが拡大していったものと考えられている。中ノ川流域では、三宅西条城(11)の調査の際検出された弥生時代中期の竪穴住居^③が現在のところ最も古いが、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての遺跡は、畑遺跡^④(3)、中瀬古南遺跡^⑤(4)、大門遺跡、松山遺跡など郡山町から中瀬古町にかけての台地縁辺部に集中する。

農耕技術の発展と労働力の集約化は著しく生産力



第65図 遺跡位置図(1:50,000、国土地理院 椋本・白子 1:25,000から)

を向上させた。しかしその一方で、支配者階層は増々富を蓄積し、有力豪族による部落の統合も進められた。明治年間に三角縁神獣鏡を出土したとされる秋永町字赤郷の「アカゴ塚」^⑥や鉄製武具、農工具類を多量に副葬し、帆立貝式前方後円墳と確認された経塚古墳^⑦（5）の存在は、その証でもあり、畿内政権と密接に結びついていた初期首長層の姿が浮かぶ。

古墳時代後期になると、中流域の段丘上や台地縁部にも多くの遺跡が見られるようになる。それは、右岸の別所古墳群（9）、徳居古墳群（8）、左岸の長法寺古墳群、御蘭古墳群（19）など、群集墳の拡がりとの関連からも理解できよう。特に調査が進んでいる郡山遺跡群では、6世紀後半から8世紀にかけて爆発的に住居が増加しており、郡山町、河芸町、徳居町にまたがる丘陵地帯につくられた徳居古窯址群の必然性を需要層の拡大と、郡山町内に比定されている奄芸郡家との関連でとらえられている。この地域は、茶臼山古墳群（21基）（6）、大野古墳群（46基）（7）の二大古墳群があり、せいぜい数基から成る他の群集墳とはその数、規模の点で格段の差があり、前述の前期古墳の分布状況からも、郡山に郡家が置かれる事前の環境が十分整っていたことが理解できよう。

平安時代末期から室町時代にかけての中世の遺跡についても、昭和61年以来の県営ほ場整備事業に伴

う事前調査により徐々に判明している^⑧。三宅町から徳居町の河岸段丘上に営まれた橋門遺跡（12）、西之垣内遺跡（13）、桑名垣内遺跡（14）、加和良神社遺跡（15）などでは、井戸、溝、総柱建物などが検出され、中世農村の一端が明らかになってきた。近くにある三宅城（18）や三宅西条城（11）との関連が今後の課題となる。

今回報告する敷田遺跡（16）、口北台遺跡（17）は、中ノ川が中流から下流域に転ずる付近にあたり、標高10～11mの左岸段丘上に位置する。行政上は鈴鹿市徳居町字敷田及び字口北台である。また敷田遺跡の西方1.5kmにある西条遺跡（10）は、中ノ川に隣接する標高13mの右岸段丘上にあり、行政上は、鈴鹿市三宅町西条に位置する。

〔註〕

- ① 『鈴鹿市史』第一巻 第一章 鈴鹿市教育委員会 1980
- ② 中森成行『西川遺跡』『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』鈴鹿市教育委員会 1983
- ③ 『三宅西条城跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1983
- ④ 仲見秀雄「畑遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会 1967
- ⑤ 中森秀行「東進入道路建設に伴う発掘調査概要」鈴鹿市教育委員会 1981
- ⑥ 前掲① 第二章
- ⑦ 真田幸成「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会 1967
- ⑧ 『三重県埋蔵文化財年報』17号～19号 三重県教育委員会 1987～1989

2 敷田遺跡

（1）遺 構

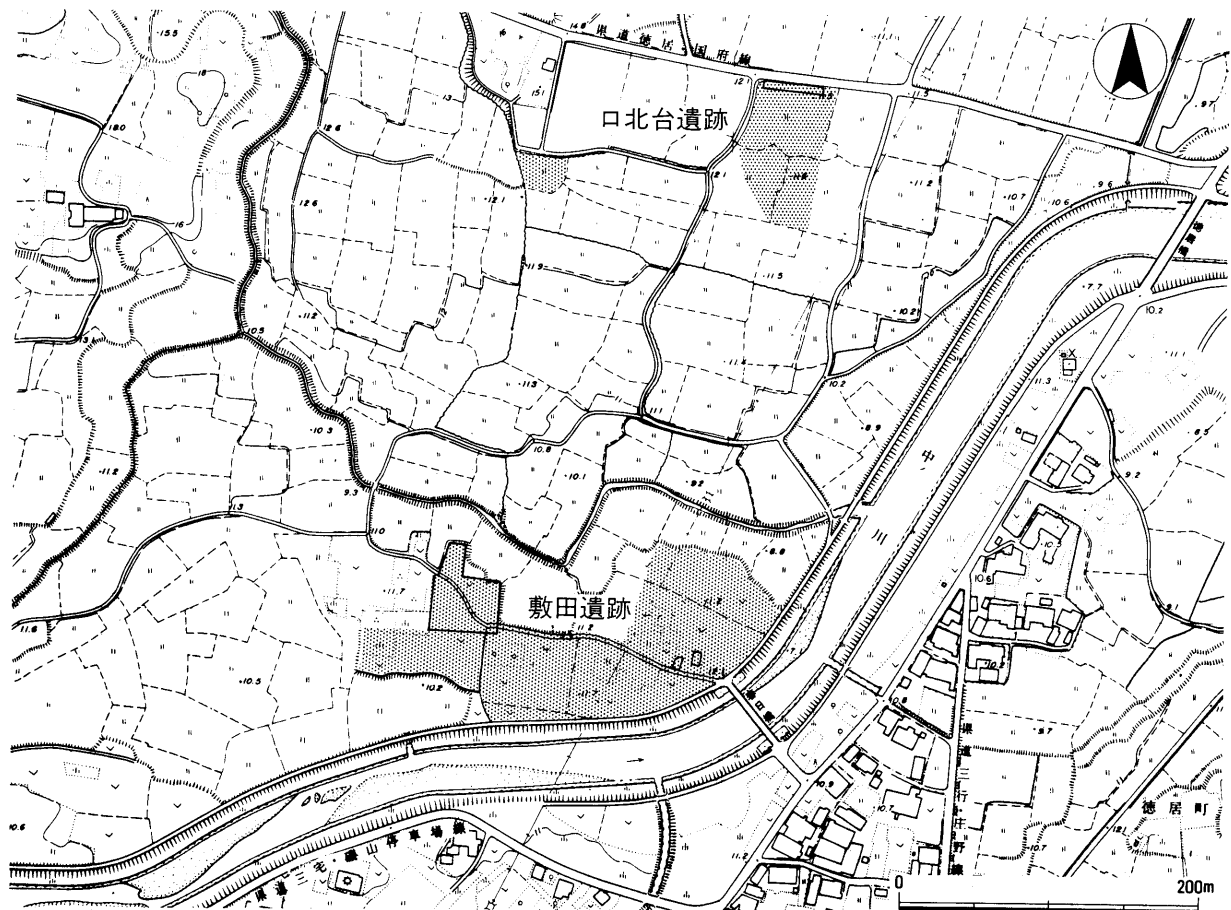
敷田遺跡は、中ノ川左岸に接する標高10.4m～11.6mの自然堤防上に営まれた面積19,000㎡に及ぶ中世の遺跡である。工法上やむを得ず削平される約1,900㎡について調査を実施した。遺構の検出される地山面までの基本的層序は、調査区北部では、耕土直下が地山であったが、調査区南部では、耕土→旧耕土（暗褐色砂質土）→地山（黄褐色砂質土）の順で、表土から約50cmの深さがあった。

検出した遺構は、平安時代後期から末期にかけての溝数条、掘立柱建物1棟、土坑3、若干の小穴な

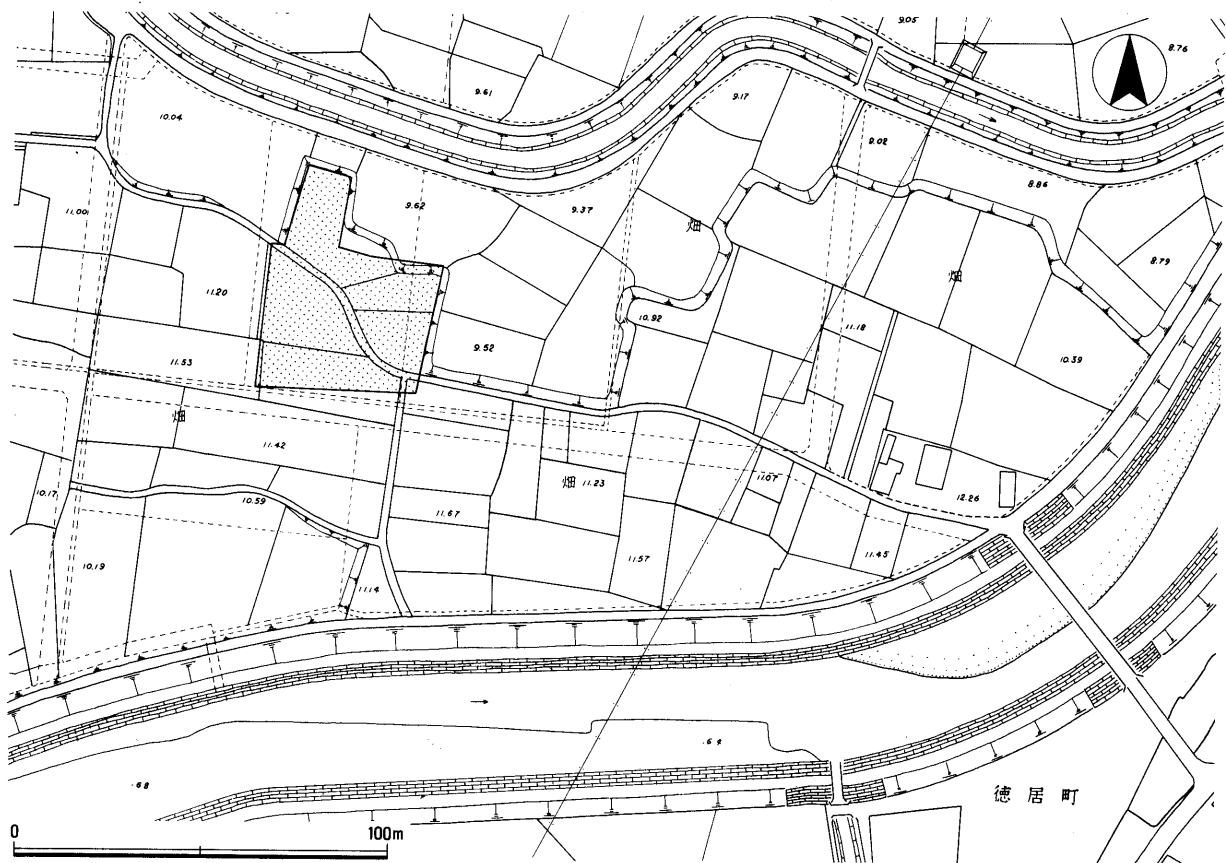
どで、調査面積の割には遺構は少なかった。

SK1 調査区北部にある楕円形の小土坑。長径52cm、短径38cmを測り、壁面は垂直に近く掘られる。確認された深さは遺構面から9cmで、黒色土器碗3点（1～3）、土師器碗1点（4）が、うつぶせの状態出土した。骨の残骸は認められなかったが、墓としての性格を有するものと思われる。時期的には平安時代後期の古い段階、11世紀前半頃のものと思われる。

SK2 短径1.8m、深さ25cmの不整形土坑、東



第66図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第67図 調査区位置図 (1 : 2,000)

側が調査区外へ延びる。土師器小皿（11）、土師器甕（8）などが出土しており、時期的には、SK1よりやや下り11世紀後半の土坑であろう。

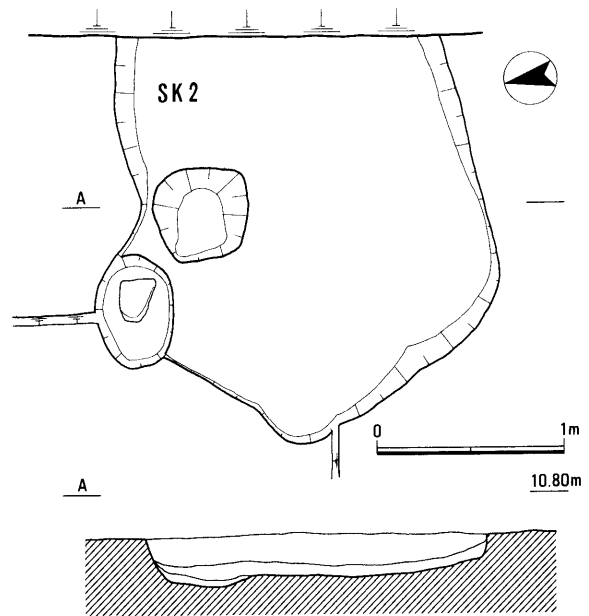
SK3 径2.1m×2.4m、深さ25cm前後の不整形土坑。平安時代末期の山茶碗（19、33）が出土。

SB4 4間×2間の総柱東西棟建物。南西側に1間分（1.08m）の張り出し部をもつ。入口であろうか。柱間寸法は桁行1.79m、梁行1.72mを測り、柱掘形は30cm前後と小さい。柱掘形からほとんど遺物が出土していないため、時期を決定し難いが、周囲の溝との関係で、平安時代末期の建物と考えたい。

Pit5 掘立柱建物SB4の南にある径18cm、深さ17cmの小穴。小穴内より須恵器短頸壺が完形で出土した。SB4に関係するものか否かは、短頸壺の年代観ともからみ不明と言わざるを得ないが、意図的に埋納されたと考えて差し支えないだろう。

SD6 SB4の西側柱列から西へ約4m隔て、これとほぼ並行する南北方向の溝。幅60cm、深さは15cm前後と浅い。おそらく建物を区画した溝であろう。溝から山皿（36）が出土しており、平安時代末期と考えられる。

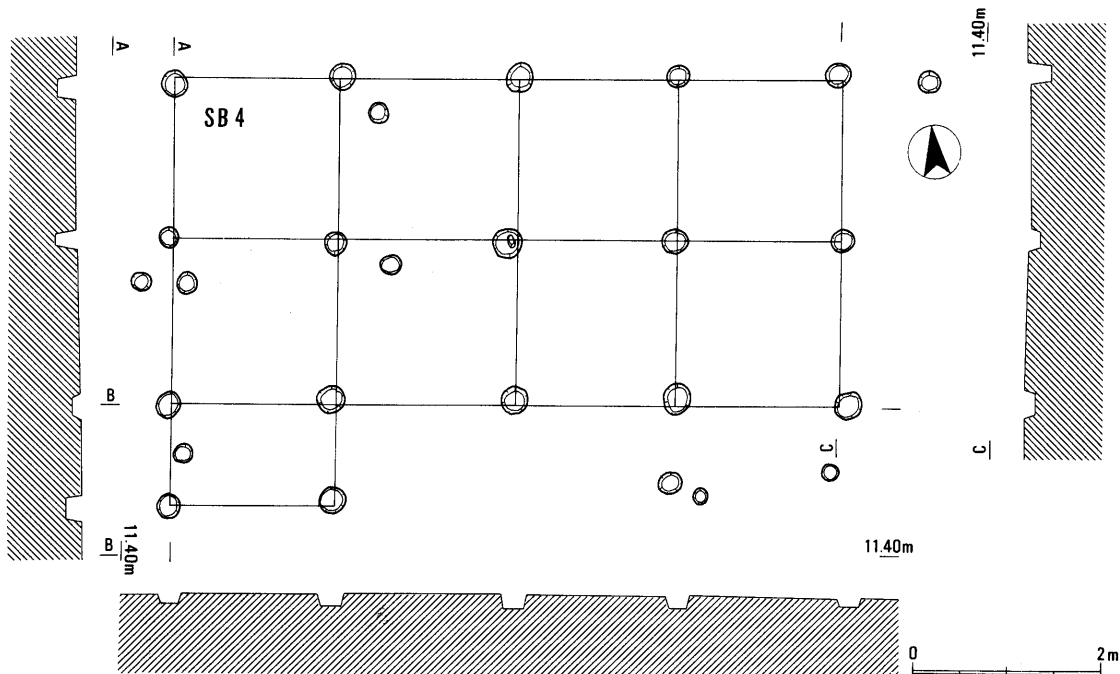
SD7 幅1.2m、深さ40cm前後の南北溝。溝底のレベルは北に向かって徐々に低くなり、SD8に注ぐ。灰釉手付水注の把手（41）が出土しており、



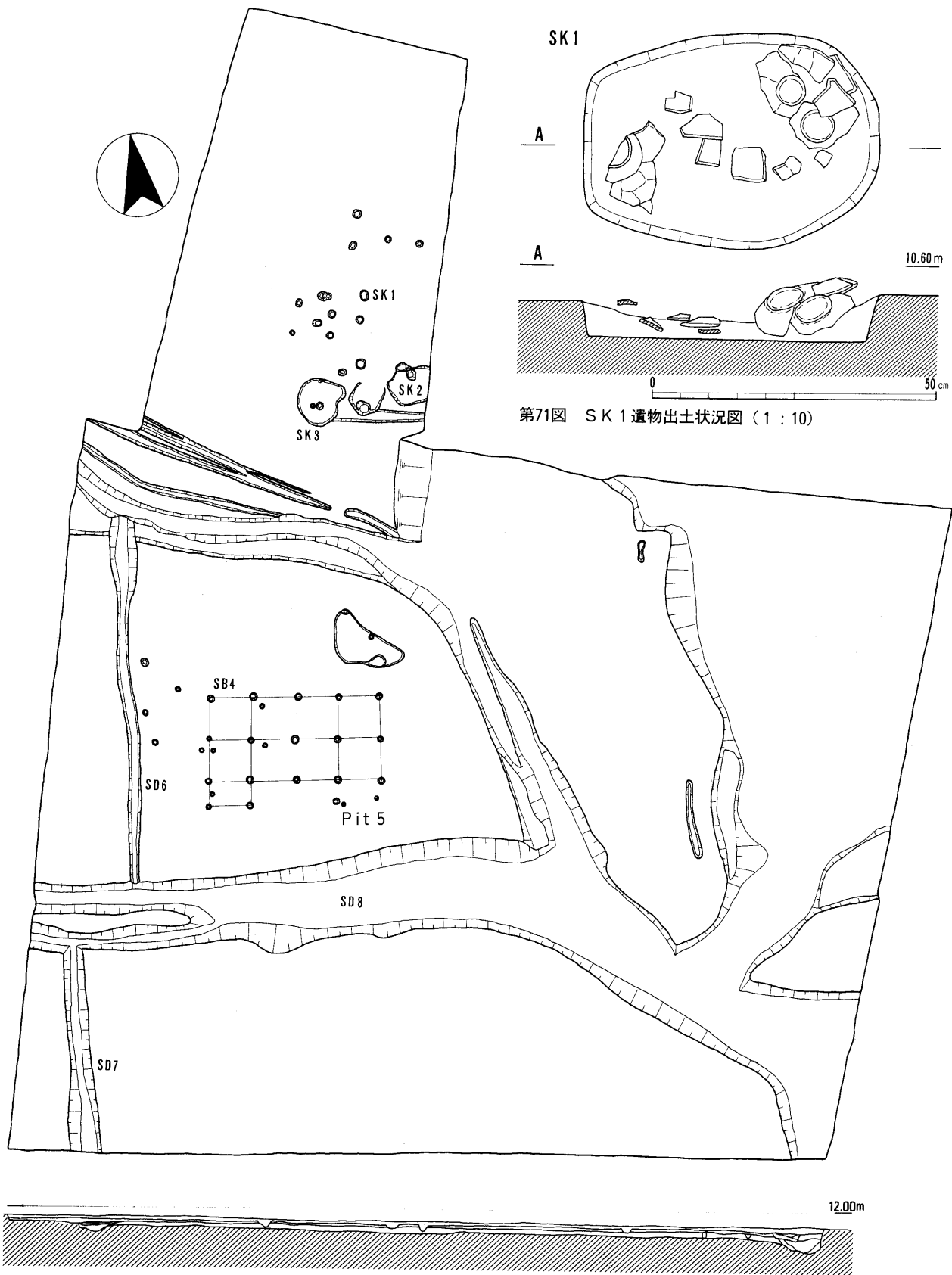
第69図 SK2遺構実測図（1：40）

平安時代後期～末期の溝と考えられる。

SD8 掘立柱建物SB4の南側を東西に走る溝で、幅4.5m、深さ35cm～60cmで東へ向かって深くなる。この溝はSB4の北側から東側へと屈曲する溝と合流し、さらに調査区の南東隅に向かって流れる。また一部は流路を変更し、北東側の低湿地帯に流入する。溝埋土からは、平安時代末期の山茶碗（16、26）が出土。SD8が人為的に掘られた溝か自然流路かは決め難い。



第68図 SB4遺構実測図（1：80）



第71図 SK 1 遺物出土状況図 (1 : 10)

第70図 遺構平面図 (1 : 300)

(2) 遺物

遺構に伴う遺物は少なく、大半が遺物包含層出土の土器である。中でも平安時代後期～末期の土師器皿・甕、山茶碗、山皿などの出土量が多い。土師器は概して器面の保存状態が悪く、調整の不明なものが多い、以下一括して概述することにする。

A. 平安時代後期の土器

黒色土器碗 (1～3) いずれも内面を黒色化するA類の碗である。全形を窺えるのは(1)のみで、内面は円周に沿って幅2mm前後の密なミガキをおこない、底部はやや粗いミガキを施す。器壁は5mm前後と比較的厚く、高台は幅が太めで作りがやや雑である。口縁部内側には、細い一条の沈線が巡る。(3)の高台は、やや外傾し、断面が二等辺三角形を呈する。すべてSK1から出土。

土師器碗 (4) 高台径の割に口縁部が大きく外へ開く。高台は比較的高くて細長い。器面の調整は剥落著しく不明。黒色土器と共にSK1から出土。

土師器台付皿 (5) 平坦な底部と直線的に大きく外へ開く口縁部から成るロクロ製の皿に、高くて八の字形に開くしっかりとした高台を貼り付ける。

土師器皿 (6) 器面の残りが悪いが、底部に糸切り痕をとどめるところからロクロ製である。(5)の皿部に比べ、口径は小さく。口縁の外傾度も弱い。

須恵器短頸壺 (9) 偏平な球状の体部に短い頸部と削り出しの低い高台が付く。胎土は非常に精良で緑釉陶器の素地の可能性もある。底部内面に白色の付着物が認められる。Pit5から単独かつ完形で出土した。

緑釉陶器碗 (14) 高台の内側に段を有する底部片。胎土は灰褐色を呈し、焼成は硬質で、黄緑色の釉が底部外面を除き施釉され、近江産と思われる。

灰釉陶器皿 (15) 口径11.9cm、器高2.4cmを測る。底部の外側に低い高台が付き、その際、底部の糸切り痕はほとんどナデ消される。灰釉は、透明感の強い淡緑色で、口縁の内外面につけ掛けされる。猿投窯編年の東山72号窯期^①に相当するものと思われる。

以上の土器は、時期的に斎宮跡土師器編年^②の平安時代後I期、11世紀前半頃に相当するものと思わ

れる。

土師器甕 (7・8) 口縁部を強くヨコナデし、口縁端部は内側に折り返されて丸く肥厚する。体部はナデや粗い横方向のヘラケズリを施す。

土師器皿 (10～13) 口径9.2cm～9.8cm、器高1.5cm～1.8cmにおさまる。色調は淡褐色系で胎土は砂粒少なく良好である。

灰手付水注把手 (41) 粘土紐を三つ編みし把手としたその一部で、淡緑色の灰釉が薄くかかる。

以上の土器は、斎宮跡土師器編年の平安時代後II期、11世紀後半頃に相当するものと思われる。

B. 平安時代末期の土器

山茶碗 (16～33) ほとんどが包含層出土土器で出土量も多い。腰部が緩やかに張り、口縁部は弱く外反する。底部の器壁は比較の厚手で、内面見込みが窪むものとそうでないものが認められる。高台は低くて逆台形状を呈し、もみがら痕の付着するものが多い。これらは、藤澤氏編年^③のⅢ-5型式に相当するものと思われる。

山皿 (34～40) 口径7.8cm～9.4cm、器高2.1cm～2.5cmの中におさまる。(34)のみ低い高台が付くが、他は底部が糸切りのままである。口縁から内面にかけて、淡緑色の自然釉が付くものが多い。器形から判断し、山茶碗と同時期であろう。

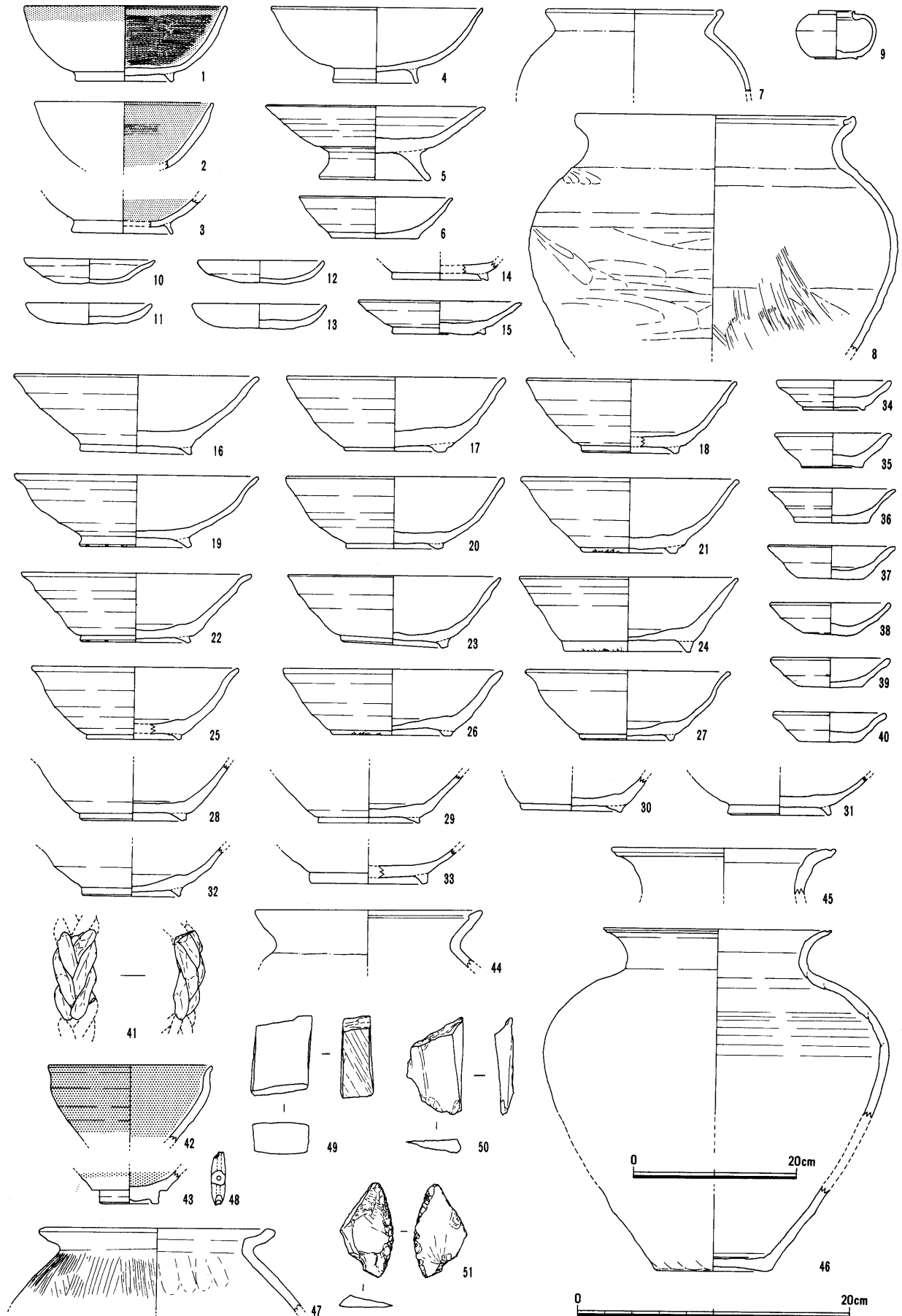
土師器甕 (44) 口縁端部が内側に折り返されて肥厚し、端部上面に内傾する面をもつ。胎土は長石のほか砂粒を多く含む。

常滑甕 (45・46) 口縁部は強く外反し、口縁端部は外方につまみ出されて細く終わる。口縁端部上面にやや窪んだ面をもつ。口縁部から肩部にかけて濃緑色の釉が厚くかかり、体部下半は赤紫色に焼き締まった素地を露呈する。12世紀後半頃の典型的な常滑甕の特徴をもつ。

C. その他の遺物

天目茶碗 (42・43) 黄白色の素地に黒褐色の釉が厚くかかった口縁部片と底部片である。室町時代後半の美濃窯産と思われる。

土師器台付甕 (47) 所謂S字状口縁甕と呼ばれるもので、口縁部の形態からみて、一般に須恵器が



第72図 遺物実測図 (46は1:6、他は1:4)

共伴し始める6世紀前後のものであろう。

土錘 (48) 両端部を若干欠く。長さ3.9cm、径1.0cm、重さ4g。

砥石 (49・50) 49は上面と下面に使用痕が認め

られるが、50は剥片のため、片面しかわからない。

スクレーパー (51) サヌカイト製の縦長剥片で、一側縁の背腹両面に調整を施す。時期は不明。

(3) 小 結

敷田遺跡は、第1章でも若干ふれたように中ノ川左岸の自然堤防上や河岸段丘上に点在する中世村落の一つであることがわかった。

調査区が遺跡の北縁部に位置したため、検出した遺構は、平安時代末期の掘立柱建物1棟、この建物を意図的に区画したと考えられる溝、及び平安時代後期の土坑等にとどまった。

遺物も当然ながら平安時代後期～末期のものが大半を占める。なお平安時代末期では、山茶碗、山皿の出土量が目立ち、土師器皿類の量が少ない。地域によっては、この割合が逆転するところもあり、今後山茶碗・山皿の普及度、需要度の差といった観点に着目し、この時期の土器組成の割合を遺跡毎に検討していく必要がある。また今回の調査で特に注目される遺物に、小穴から完形で出土した須恵器短

頸壺がある。その年代については、積極的な根拠に乏しいが、平安時代中期に位置付けられている斎宮跡S E 4050中層^④から類似の緑釉小壺が出土しており、この時期か、次の平安時代後I期に属するものと思われる。当時いかなる埋納儀礼が存在したのか、その考察については、今後底部の付着物の化学的分析と類例を待って明らかにしていきたい。

(倉田直純・服部芳人)

註

- ① 檜崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会 1983
- ② 「斎宮跡の土師器」『史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県斎宮跡調査事務所 1984
- ③ 藤澤良祐『研究紀要I・II』瀬戸市歴史民族資料館 1982・1983
- ④ 『史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県斎宮跡調査事務所 1985

3 口北台遺跡

口北台遺跡は、敷田遺跡の北方約350mの位置にある。試掘調査の結果、遺構は検出されなかったが、山茶碗、土師器、近世陶磁器等が出土。そのため遺

構面が削平される排水路部分、約135㎡について立会調査を実施した。その結果、この部分については遺構、遺物とも確認されなかった。



第73図 調査区位置図(1:2,000)

4 西条遺跡

(1) 遺 構

西条遺跡は、三宅町の集落の北西端部に位置し、中ノ川右岸に接する標高14m前後で幅の狭い段丘上にある。本遺跡の南西には、標高43mの丘陵が迫り、その頂部に位置する三宅西条城を望むことができる。事業地内の4カ所で試掘調査を実施したところ、いずれも遺構・遺物を確認できなかったが、周囲の田畑より1m程高い今回の調査地については、遺物の散布が多量であったため、地山面の削平される290㎡を立会調査することにした。

遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、淡灰褐砂質土→淡黄褐色土→赤褐色土混入明灰褐粘質土(地山)で、表土から約60cmの深さがある。調査区の北約1/3は既に開墾により削平を受けていた。

検出した遺構には、縄文時代中期末葉の竪穴住居1及びずっと時代は下り室町時代の土坑4、井戸1などがある。

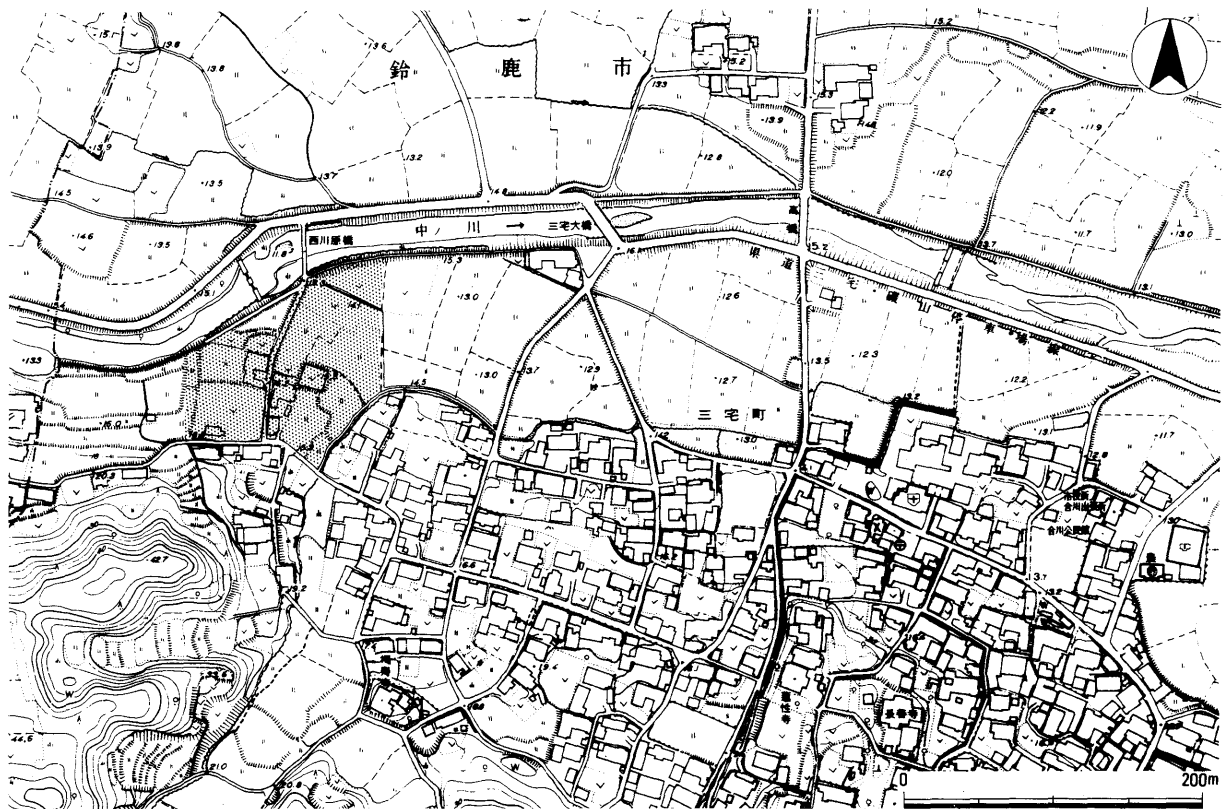
SB1 調査区南西にある隅丸形状の土坑で、調査区外へ延び全容は不明だが竪穴住居と思われる。深さは15cm前後で、床面に長さ1m、幅30cmの並行する2条の小溝が認められた。埋土から縄文時代中期末葉の深鉢が出土している。

SK2 調査区南端にあり、全容は不明。幅1.4m、深さ50cmで2段に掘られる。

SK3 径2.5m×2m、深さ1.5mの楕円形土坑。比較的壁面は斜めに掘られる。土坑の規模の割には出土遺物に乏しく、土師器の細片が少量出土したにとどまる。

SK4 70cm×60cmの方形土坑。両隣のSK3、SK5との切り合い関係は不明。あるいはSK5に付随するものか。土師器皿、火舎等が出土。

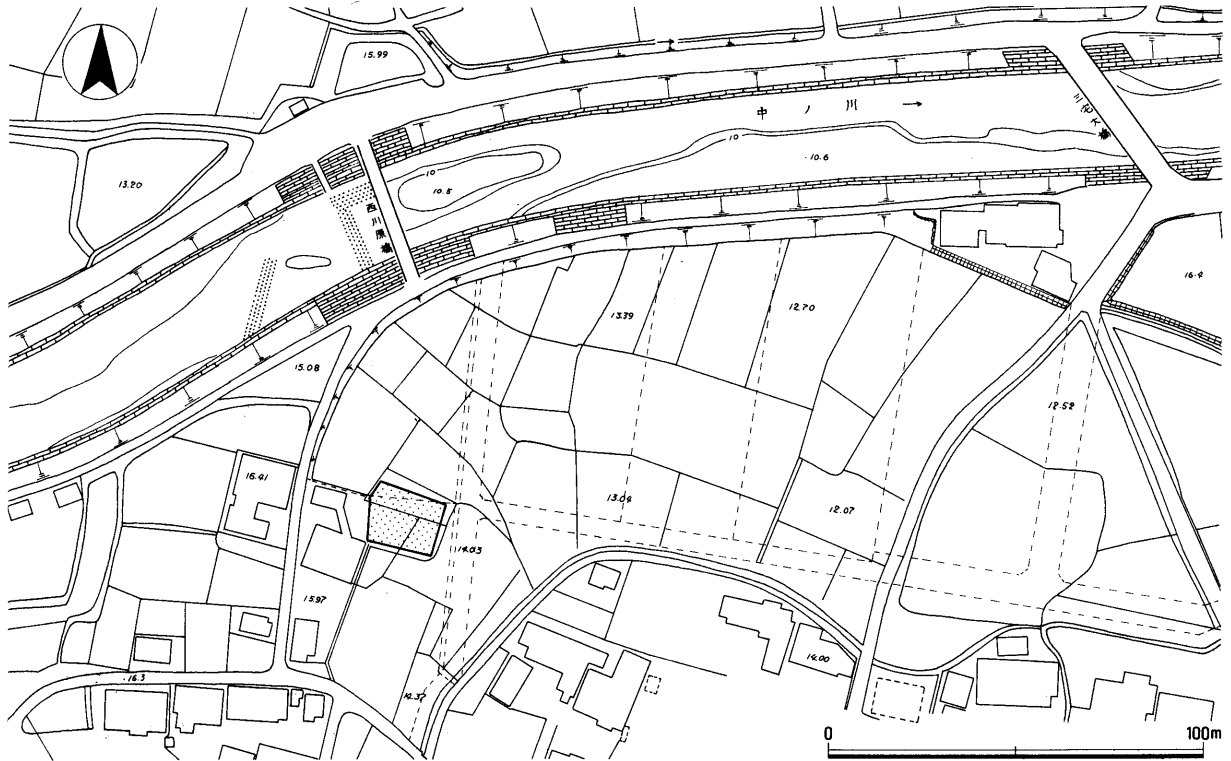
SK5 東西2.5m×南北1.8m、深さ20cmの方形土坑。壁面は垂直に近く掘られる。土師器羽釜、常滑甕等が出土。



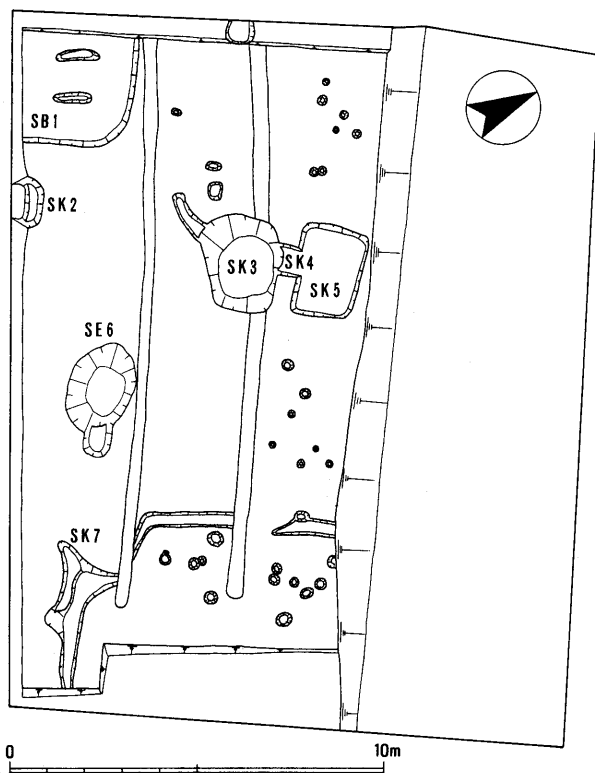
第74図 遺跡地形図(1:5,000)

SE 6 2.5m×1.7m、深さ1.8mの楕円形を呈する素掘り井戸。遺構面から深さ70cmまでは挿鉢状に掘られるが、以下はほぼ垂直に掘られる。東側の一部で壁面の崩れが認められた。土層の堆積状況

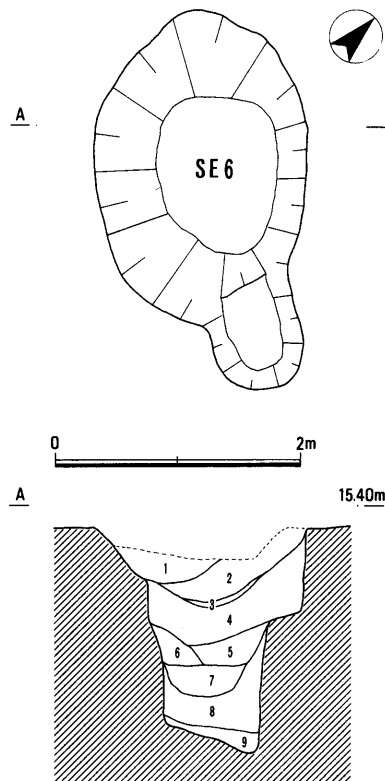
からそれぞれ第9層、第7層、第3層を底とする時期の3回の埋没過程をたどることができる。残念ながら層位的に遺物を取り上げることができなかったが、土師器皿・羽釜がまとまって出土。



第75図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第76図 遺構平面図 (1 : 200)



第77図 SE 6 遺構実測図・土層断面図 (1 : 60)

- 1層 灰褐粘質土
- 2層 淡灰粘質土
- 3層 炭土
- 4層 2層と同じ
- 5層 褐色粘質土
- 6層 暗灰粘質土
- 7層 黒灰粘土
- 8層 淡灰色砂土
- 9層 暗灰粘土

(2) 遺物

出土遺物はテンバコで9箱分あり、1箱が縄文土器で、他は中世の土器である。中世の土器はバラエティーに富み、土師器皿・小皿・鍋・羽釜、山茶碗、天目茶碗、三足盤、常滑壺、捏鉢、火舎、青磁碗、白磁碗がある。この内、土師器皿・羽釜が半分以上を占め、その大半が井戸SE6から出土のものである。ここでは、山茶碗を除くと、ほぼ近似した時期におさまるものと考えられたので、器種別に概述することにする。なお図示した中で、SE6出土遺物は、3・5・9・13・15・25・27・31、SK2出土遺物は26、SK3出土遺物は1・20、SK4出土遺物は2・7・21、SK5出土遺物は22・23・32で、他は遺物包含層出土遺物である。

A 縄文時代の土器

堅穴住居SB1から出土。破片はかなりあるが、器面の風化が著しく。概要の知り得る4点についてのみ述べることにする。

1は、深鉢形土器の口頸部片で、口径が約33cmに復元できる。口縁部は、横「S」字形の沈線文の下に隆帯と沈線とで渦巻区画文を描き、その区画内に横「八」字形の横位羽状沈線文を施す。胴部以下は不明であるが、指頭圧痕文を施した1本の隆帯で口縁部と胴部とが明確に区画される。

これは口縁部文様帯の退化に伴って、口縁部と胴部の器形上の区分が不明瞭となりつつあったため、隆帯を巡らせることによって、両者の分帯意識を高めようとした結果であろう。

2も口縁部破片である。緩やかな波状口縁の波頂部付近と考えられる。沈線による渦巻文様が見られるが、風化が著しく、縄文の有無

は不明である。

3は、深鉢形土器の脚台部の破片である。円孔と縦方向の隆帯で飾る。近くでは、東庄内B遺跡に類例が求められる。

4は底部の破片で、推定底径11cmを測る。特に網代痕は認められない。

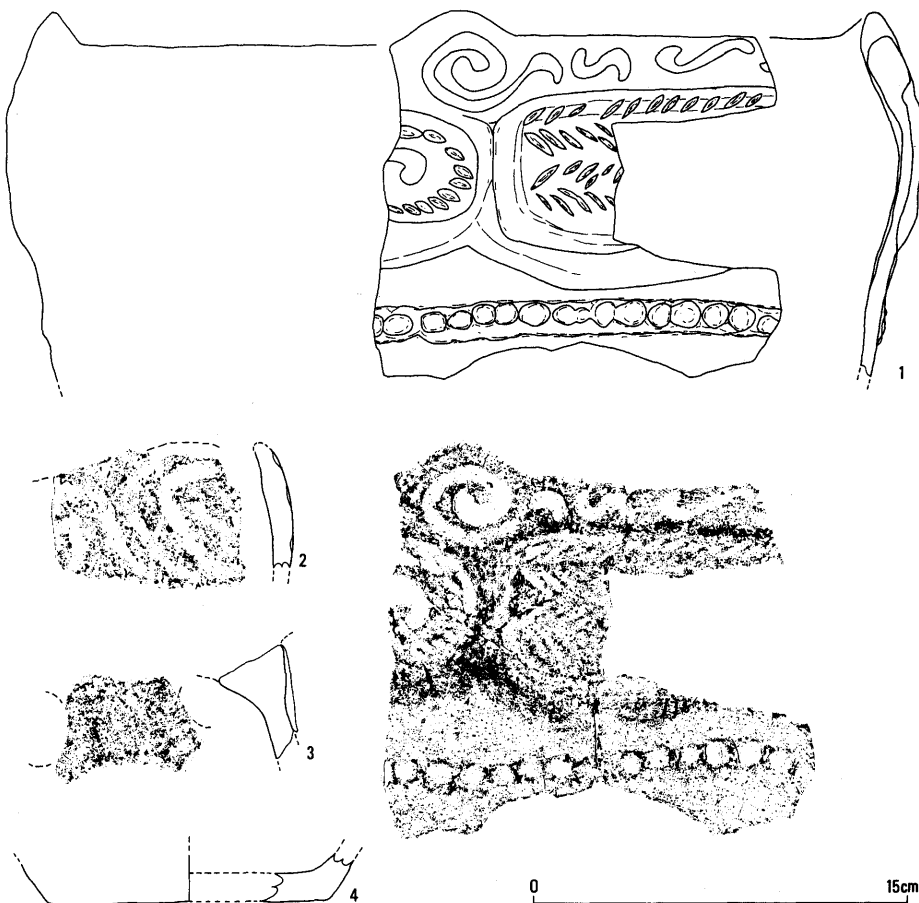
これらの所属時期については、比較的残りの良い1について考えてみれば、上記の諸特徴より、関東地方中期末の加曾利EⅢ式の存続時期に年代の一端が求められるであろう。(穂積裕昌)

B 鎌倉時代前半の土器

山茶碗(20~23) 口径17cm前後、器高5cm前後、腰部がやや張り、口縁部は弱く外反する。底部内面見込み部がへこみ、高台は低くて粗雑なものが付く。いずれも遺物包含層から出土している。

C 室町時代の土器

土師器小皿(5・6) 口径8cm、器高1.2cmの浅い皿。口縁端部のみヨコナデし、他はナデで器



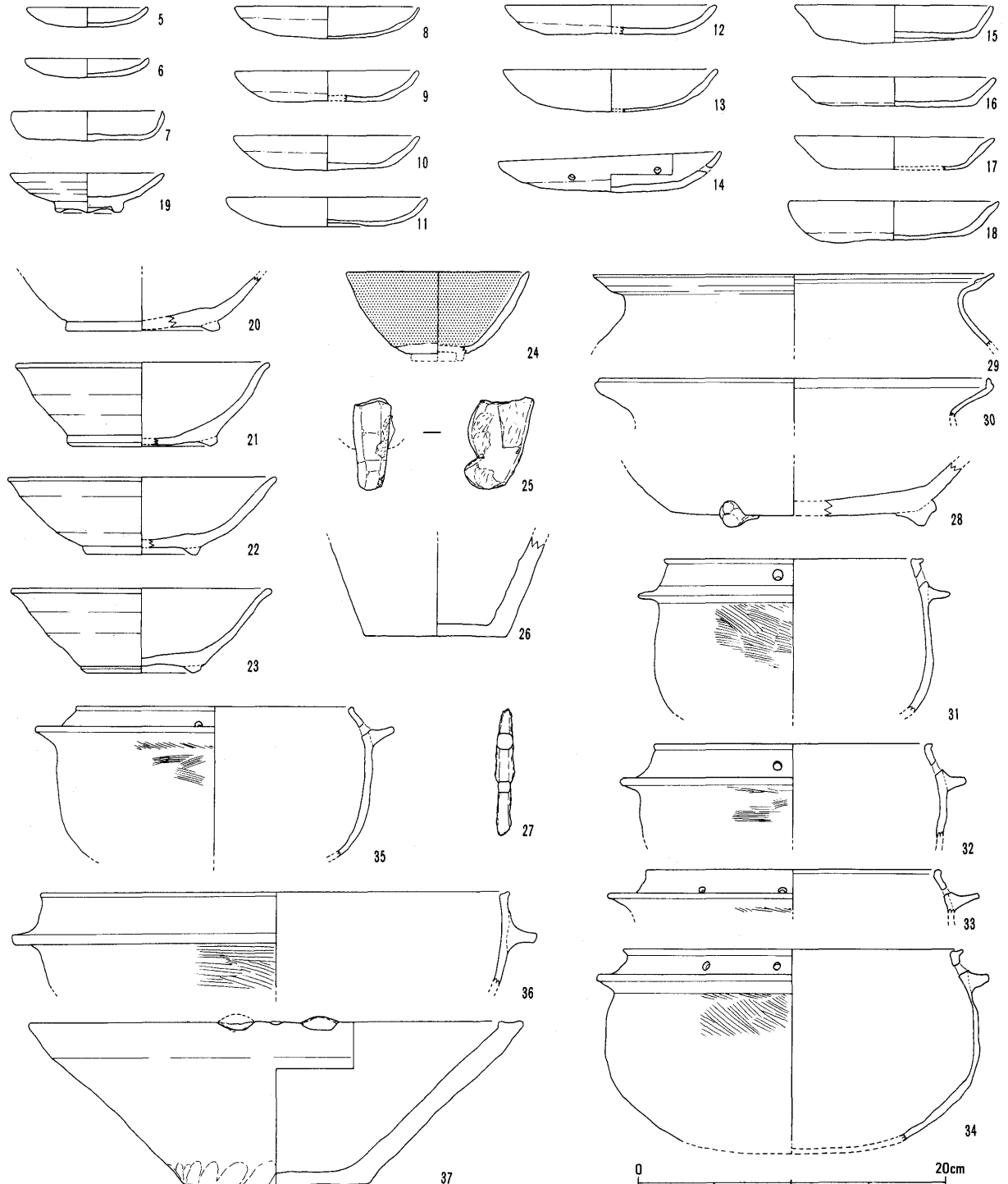
第78図 SB1出土遺物(1:3)

面を調整する。

土師器皿 (7~18) 器形により、A類、B類、C類の3種がある。A類は、平坦な底部と内弯しながら立ち上がる口縁部から成り、口縁端部はヨコナデして外側に内傾する面を持つもの(7)。B類は、底部と口縁部が弧状を描いて緩やかにつながるもの(8~14)。口径12cm~14.6cm、器高1.9cm~2.5cmを測る。全体に色調は、淡褐色や白色系で、胎土は

比較的精良である。器壁は3.5mm~4mmで、底部の方がやや薄手である。14は口縁部が異びつで2個の穿孔があく。C類は、平坦な底部にほぼまっすぐに外傾する口縁部が付くもの(15~18)。口縁部は底部に比べ若干肥厚し、口縁端部が弱く外反するものも認められる。

土師器鍋 (29・30) いずれも口縁部片である。29は口縁端部が内側に折り返され、内側に段をもつ。



第79図 遺物実測図 (1:4)

折り返し幅は約1.2cmを測る。30は口縁端部が上方につまみ上げられて断面三角形となり、外側に内傾する面をもつ。

土師器羽釜 (31~36) 器形よりA類、B類の2種に分かれる。A類は、口径17cm~22cm。口縁部が内傾し、体部下半が下膨れとなるもの(31~35)。鏝は短く、水平もしくはやや上方を向く。口縁部は2個1対の透孔があり、吊り下げ用の把手を付けたものと考えられる。体部上半に斜め方向のハケメを施し、底部はヘラケズリすると思われるが、ススが厚く付着するため、調整の不明確なものが多い。口縁端部を水平に挽き出し、端部上面に幅1cm前後の平坦面を意図的に作り出すもの(31・34)もある。B類は、口縁部が垂直に立ち上がり、体部下半が膨れないもの(36)で、口径はA類に比べ大きい。

陶器皿 (19) 高台を除き、内外面に灰白色の釉が厚く施釉される。高台は波状の丁寧な削り出し高台で、接地面が4ヶ所にある。胎土は白色で精良。

天目茶椀 (24) 口縁部の外反が見られず、口縁端部内側に内傾する面をもつ。茶色と黒色に発する

斑点状の釉が、内外面に厚く施釉される。

三足盤 (28) 底部片のみである。足は粘土塊を指で整形した小さなものを貼り付ける。胎土は精良で白っぽい。外面はロクロヘラケズリし、内面はナデで器面を平滑に仕上げる。瀬戸産であろう。

壺 (26) 底部は平坦で、体部下半は直線的に開く。底部は未調整。体部内外面を粗くヘラケズリする。常滑産か。

捏鉢 (37) 底部は平坦で、体部から口縁部にかけて、まっすぐ外方へ大きく開く片口鉢である。口縁部外面と上端面を強くヨコナデし、内面はナデで仕上げるが、他は未調整で器面がざらざらしている。口縁端部を外側から指で押さえ片口とし、片口の中心に口縁部と直交して1条の沈線が付く。常滑産であろう。

火舎 (25) 両側の雲形が剥落した瓦質の脚部片。外面はヘラで面取りされる。

鉄製品 (27) 現存長8.1cm。断面が方形でおそらく釘であろう。

(3) 結 語

西条遺跡は、当初、試掘調査の結果から判断して、遺構はほとんどないものと思われていたが、調査の結果、予想外に遺構・遺物が検出され、改めて安易に試掘結果だけで遺跡の取り扱いを判断するのは、危険であるということをも再認識させられた。

遺構では、縄文時代中期末の堅穴住居が確認されたことが注目される。中ノ川流域では、郡山遺跡群中の西川遺跡について2例目であり、河川に近い低い段丘上でも確認されたことにより、今後さらに縄文時代の遺跡が本流域で発見される可能性が高くなったと言えよう。

これ以外の遺構は室町時代後半まで下り、調査範囲が狭かったため、建物は検出されなかったが、これに付随する井戸や土坑が検出された。遺跡は立地

から見て、当地域の中世村落はさらに南方へ拡がり、現在の三宅集落とかなり重複することが予想される。なおこの村落と南西の丘陵頂部に位置する三宅西条城とがいかなる関係にあったのかは、今後の課題としたい。

遺物は、井戸や土坑から出土の土師器が大半を占める。土師器皿は、口縁部内側に明瞭な稜をもつものが少ないものの、三宅西条城や、関氏正法寺山荘跡出土のものに類似しており、量的に乏しかったが、土師器鍋の口縁形態は、室町時代中頃から後半のものである。したがって、これらの所属年代については、概ね15世紀後半か16世紀前半の中におさまるものと考えられる。

(倉田直純、服部芳人)

〔註〕

- ① 『三宅西条城跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1983
- ② 『史跡正法寺山荘跡発掘調査・整備報告(56~61年度)』関町教育委員会 1982~1987

第13表 敷田遺跡出土遺物観察表

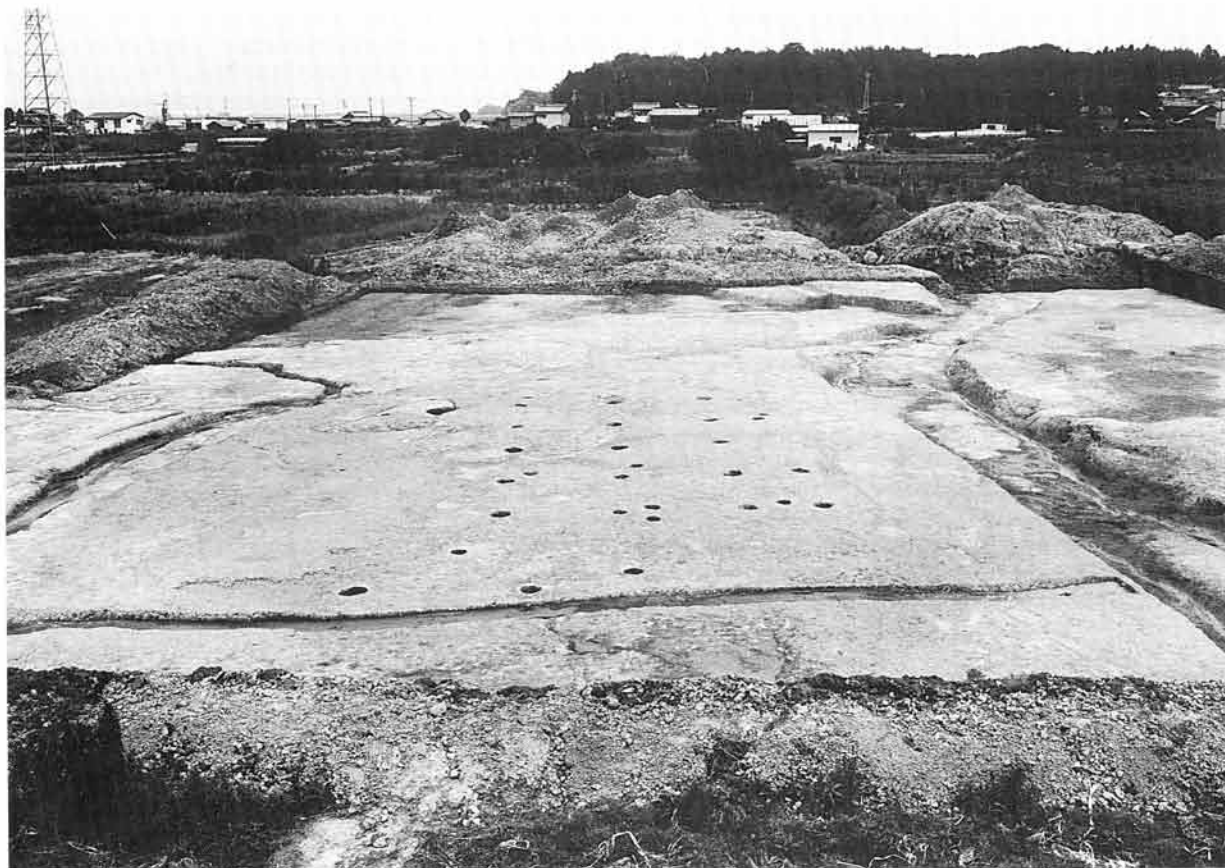
No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
1	黒色土器碗	SK 1	14.8	5.5	7.4	口縁端面沈線 口縁ヨコナデ	良	淡黄褐色	黒色A類	50
2	〃	〃	(13.0)	—	—	口縁端面沈線 口縁ヨコナデ	良	淡褐色	黒色A類 1/6残存	42
3	〃	〃	—	—	7.4	ハリツケ高台	砂粒含む やや粗	暗褐色	黒色A類 1/6残	49
4	土師器碗	〃	15.4	5.5	6.2	ハリツケ高台	良	淡褐色	1/3残	15
5	〃 台付皿	包	16.0	5.35	8.45	ロクロナデ ハリツケ高台	良	暗褐色	ロクロ製 1/2残	26
6	〃 皿	包	11.2	3.0	6.2	ロクロナデ 底部糸切り	粗 (長石含)	淡黄色	ロクロ製 1/2残	41
7	〃 甕	包	(23.0)	—	—	口縁内側へ折り返し 頸部強いヨコナデ	粗 (長石含)	淡橙色	1/4残	39
8	〃 〃	SK 2	10.4	—	—	口縁ヨコナデ 外面ナデ、ケズリ	密	淡黄褐色	外面スス付着	48
9	須恵器 小型短頸壺	Pit 5	2.6	3.5	3.1	高台ケズリ出し	良	暗灰色	ロクロ製	28
10	土師器・小皿	包	9.6	1.7	—	口縁端部ナデ	良	桃白色	1/2残	27
11	〃	SK 2	9.2	1.5	—	器面の保存状態悪く、 調整不明	良	淡橙色	2/3残	16
12	〃	包	9.3	1.7	—	口縁ヨコナデ	良	淡赤褐色	口縁若干欠く	34
13	〃	包	9.8	1.8	—	器面の保存状態悪く 調整不明、口縁ナデか?	良	淡褐色	1/3残	40
14	緑釉陶器碗	包	—	—	7.2	ハリツケ高台	良	素地-灰褐色 釉-黄緑色	近江産? 1/8残	18
15	灰釉陶器皿	包	11.9	2.4	6.8	ハリツケ高台 底部内面ナデ	良	素地-淡灰色 釉-淡緑乳色	1/3残	23
16	陶器碗 (山茶碗)	SD 8	17.9	5.8	8.2	ロクロナデ	良 (長石含)	淡灰色	1/3残	24
17	〃	包	16.0	5.3	7.2	ロクロナデ	良 (長石含)	灰白色	2/3残 ロクロ回転時計回り	2
18	〃	包	(15.4)	5.3	7.2	ロクロナデ	良 (長石含)	淡灰色	1/4残 高台にモミガラ痕	10
19	〃	SK 3	17.8	5.2	8.2	ロクロナデ	良	淡黄褐色	1/2残 高台にモミガラ痕	14
20	〃	包	16.0	5.2	7.2	ロクロナデ	やや粗 (長石、小石含)	淡灰色	1/3残 高台にモミガラ痕	38
21	〃	包	16.0	5.4	6.3	ロクロナデ	粗 (長石含)	灰白色	2/3残 高台にモミガラ痕、 重ね焼き痕	4
22	〃	包	16.8	5.0	8.0	ロクロナデ	密 (黒色粗粒)	淡灰色	1/3残 高台にモミガラ痕	9
23	〃	包	15.5	5.0	7.8	ロクロナデ	やや粗	淡灰色	2/4残 高台にモミガラ痕	31
24	〃	包	16.0	5.4	9.0	ロクロナデ 見込みにヌタ痕	良 (長石含)	灰白色	2/3残 高台にモミガラ痕	1
25	〃	包	15.2	5.2	6.9	ロクロナデ	粗 (長石、砂粒含)	淡灰色	1/2残 高台にモミガラ痕	11
26	〃	SD 8	16.0	4.7	8.6	ロクロナデ 見込み中央窪む	やや粗 (長石含)	灰白色	2/3残 高台にモミガラ痕	7
27	〃	包	15.0	5.0	6.8	ロクロナデ 見込み一方向ナデ	良	淡灰色	2/3残 高台にモミガラ痕	32
28	〃	包	—	—	7.8	ロクロナデ	良	淡灰色	1/2残	12
29	〃	包	—	—	7.5	ロクロナデ 見込み一方向ナデ	粗 (砂粒含)	淡灰色	1/2残 高台にモミ痕	13
30	〃	Pit	—	—	7.3	ロクロナデ 見込みヌタ痕	粗 (長石含)	淡灰色	底部完形 高台にモミ痕	3
31	〃	包	—	—	7.6	ロクロナデ	良	淡灰色	底部完形	29
32	〃	包	—	—	7.2	ロクロナデ 見込み一方向ナデ	良	淡灰色	底部完形 高台にモミ痕	30
33	〃	SK 3	—	—	8.2	ロクロナデ	良	淡灰色	1/3残 高台にモミ痕	6
34	陶器皿(山皿)	包	7.8	2.1	4.5	ロクロナデ	やや粗 (長石含)	淡灰色	口縁1/6を欠く 高台にモミ痕	44

No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
35	山皿	包	8.6	2.5	4.5	ロクロナデ	良	淡灰色	2/3残 底部糸切り痕	21
36	〃	SD 6	9.2	2.5	5.4	ロクロナデ 体部強いヨコナデ	良	淡灰色	1/3残	35
37	〃	包	9.4	2.4	4.8	ロクロナデ	良	淡灰色	1/2残 底部糸切り痕	19
38	〃	包	8.8	2.3	3.7	ロクロナデ 体部強いヨコナデ	やや粗 (砂粒含)	淡灰色	口縁1/6欠く 底部糸切り	33
39	〃	包	8.8	2.1	4.8	ロクロナデ 体部強いヨコナデ	やや粗 (砂粒含)	淡灰色	1/2残 底部糸切り	22
40	〃	包	8.4	2.1	4.0	ロクロナデ 体部強いヨコナデ	やや粗 (長石、砂粒含)	淡灰色	1/2残 底部糸切り	20
41	灰釉水注把手	SD 7	長さ (6.5)	(幅) 3.2	(高さ) 2.2	手づくね	良	淡灰色	淡緑灰の釉がかかる	36
42	天目茶碗	包	(12.0)	—	—	ロクロナデ	良	素地乳白色 釉黒褐色	1/6残存	17
43	〃	包	—	—	4.3	ロクロナデ 高台ケズリ出し	やや粗	素地淡褐色 釉黒褐色	底部完形	25
44	土師器甕	包	(16.4)	—	—	口縁ヨコナデ	やや粗 (長石含)	淡橙褐色	1/4残	45
45	陶器甕	Pit	(16.3)	—	—	ロクロナデ	やや粗 (砂粒含)	暗赤褐色	1/4残 常滑産	5
46	〃	包	24.7	37.0	12.8	口縁ナデ 外面基底部ヘラケズリ	やや密	茶褐色	1/3残 〃	47
47	土師器台付甕	包	(17.5)	—	—	口縁ヨコナデ 体部外面タテハケ	やや粗 (長石含)	淡褐色	1/4残	37
48	土師質・土錘	包	長さ 3.9	径 1.0	孔径 0.3	器面の保存状態悪く、 不明ナデ?	良	淡黄褐色	完形	51
49	砥石	包	長さ (5.9)	幅 4.1	厚さ 2.3	上、下面—使用痕 側面・切り出し痕		灰黄色		43
50	砥石	包	長さ (7.0)	幅 (4.0)	厚さ 1.1	片面—剥離 片面—使用痕		青黒色		46
51	スクレーパー	包	長さ 6.7	幅 3.8	厚さ 0.85	縦長別片			サヌカイト製	8

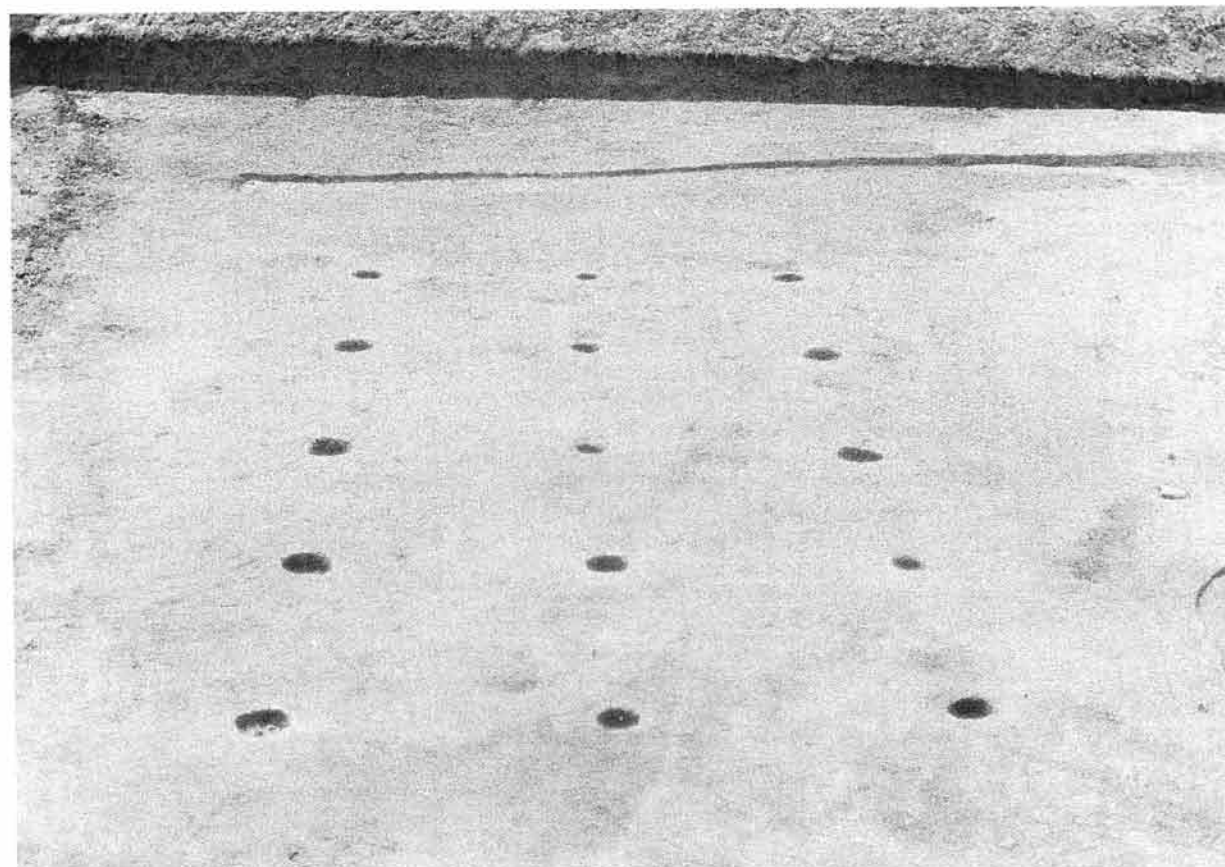
第14表 西条遺跡出土遺物観察表

No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
5	土師器小皿	SK 3	7.8	1.25	—	口縁端部ヨコナデ 外面未調整	良	淡黄色	1/3残	6-10
6	〃	SK 4	8.0	1.2	—	口縁端部ヨコナデ 外面未調整	良	灰白色	ほぼ完形	3-2
7	土師器皿A	SE 6	10.0	1.9	—	口縁ヨコナデ 底部外面指オサエ	良	乳褐色	1/2残	3-4
8	土師器皿B	〃	12.0	2.0	—	器面の保存状態悪く不明	良	淡黄褐色	1/4残	3-6
9	〃	〃	12.0	1.9	—	口縁ナデ 外面指圧痕	良	明赤灰色	1/4残	5-4
10	〃	包	12.0	2.2	—	口縁ヨコナデ	良 (長石含)	にぶい橙色	ほぼ完形	5-5
11	〃	SK 4	13.0	1.85	—	器面の保存状態悪く不明 口縁ナデ?	良 (砂粒含)	灰白橙色	2/3残	6-1
12	〃	包	13.6	1.9	—	口縁ヨコナデ 底部外面未調整	良	淡黄橙色	1/3残	5-3
13	〃	SE 6	14.0	2.5	—	口縁ヨコナデ	良	淡黄橙色	1/4残	3-3
14	〃	〃	14.6	2.2	—	口縁ヨコナデ 底部外面未調整	良	灰白色	完形 体部2つ穿孔	3-5
15	土師器皿C	SK 4	12.8	2.5	—	口縁ヨコナデ	良 (小石含)	灰白橙色	ほぼ完形	6-2
16	〃	包	13.2	1.8	—	口縁ヨコナデ	良 (小石含)	内—淡黄色 外—灰黄色	ほぼ完形	5-6
17	〃	SE 6	13.0	2.1	—	口縁ヨコナデ	良	淡黄橙色	1/4残	3-7
18	〃	〃	13.6	2.4	—	口縁ヨコナデ 底部外面未調整	良 (砂粒含)	褐灰色	完形	3-1

No	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
19	陶器皿	〃	10.0	2.5	4.1		良	釉-灰白色 素地-灰白色	完形	3-8
20	陶器碗 (山茶碗)	包	-	-	10.0	ロクロナデ	良	灰白色	1/4 残 高台モミガラ痕	5-2
21	〃	包	16.4	5.4	8.8	ロクロナデ	良	灰白色	1/3 残 高台モミガラ痕	8-3
22	〃	包	17.6	4.9	7.0	ロクロナデ	良 (小石含)	灰白色	1/2 残	8-2
23	〃	包	17.0	5.4	6.8	ロクロナデ	良 (小石含)	外-灰白色 内-淡黄色	1/2 残	8-1
24	陶器碗 (天目茶碗)	SK 3	11.8	-	-	ロクロナデ	良 (砂粒含)	釉-黒褐色 素地-灰白色	1/4 残	6-9
25	火舎・脚	SK 4	長5.9	-	-	ヘラケズリによる面取り	良	灰色	両側の雲形が剥離	6-3
26	陶器壺	SK 5	-	-	9.2	内外面ヘラケズリ 底部未調整	良	暗赤褐色	1/4 残 常滑産	6-5
27	鉄製釘	〃	-	-	-				現存長8.1cm	6-4
28	陶器三足盤	包	-	-	15.8	ロクロケズリ	良	灰白色	2/5 残、ロクロ石回転 足は張り付け指ナデ	7-1
29	土師器鍋	SE 6	26.0	-	-	口縁ヨコナデ 口縁-内側へ折り返し	良	外-橙褐色 内-褐色	外面スス付着	3-9
30	〃	SK 2	25.0	-	-	口縁-ヨコナデ 〃-折り返し立ち上がる	良	橙褐色	1/8 残	6-8
31	土師器羽釜	SE 6	16.8	-	-	口縁ヨコナデ 口縁に穿孔1個残	良 (砂粒含)	明褐灰色	2/5 残 ハケ6本/cm外面スス付着	7-2
32	〃	〃	18.0	-	-	口縁ヨコナデ 口縁に穿孔1個残	良 (小石含)	内-ぶい 橙色 外-淡黄褐色	1/4 残ハケ7本/cm 外面スス付着	4-2
33	〃	SK 5	19.0	-	-	口縁ヨコナデ	良 (小石含)	淡黄褐色	1/8 残 外面スス付着	6-6
34	〃	SE 6	22.0	-	-	口縁ヨコナデ 口縁穿孔2個対	良 (小石含)	内-ぶい 橙色 外-淡黄褐色	1/4 残外面スス付着 ハケ7本/cm	4-1
35	〃	〃	18.0	-	-	口縁ヨコナデ 口縁穿孔1個残	良 (小石含)	明褐灰色	1/4 残 ハケ5本/cm外面スス付着	5-1
36	〃	SK 5	30.4	-	-	内外面ヨコナデ	良	淡褐色	1/8 残 ハケ目5本/cm	6-7
37	捏鉢	包	32.0	10.4	12.0	内面ナデ 底部外面-指頭圧痕	良 (小石含)	にぶい 橙色	1/2 残 口縁端2個片口	8-4



調査区南部全景（西から）



掘立柱建物SB4（東から）



土坑SK1遺物出土状況（南から）



口北台遺跡調査風景（西から）



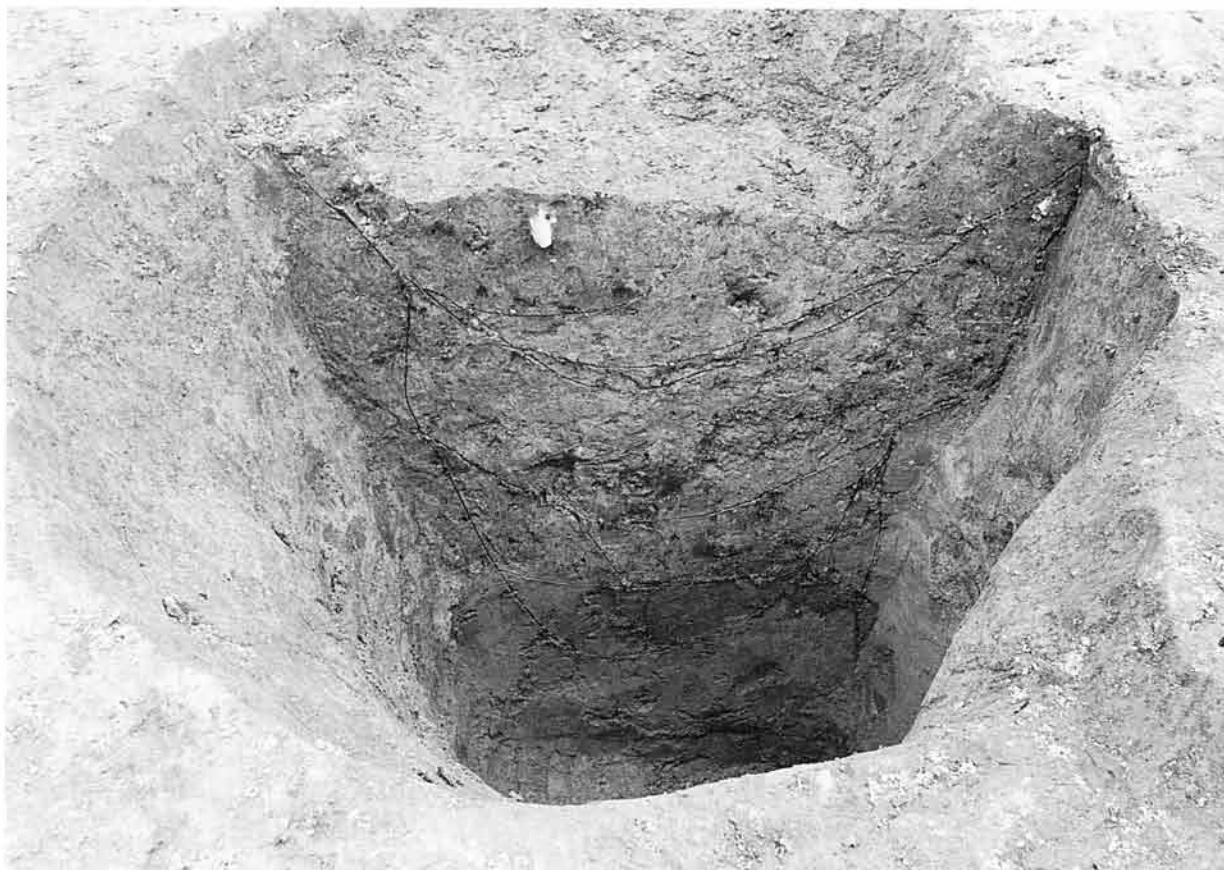
出土遺物 (1 : 3、46は1 : 6)



調査区全景（南東から）



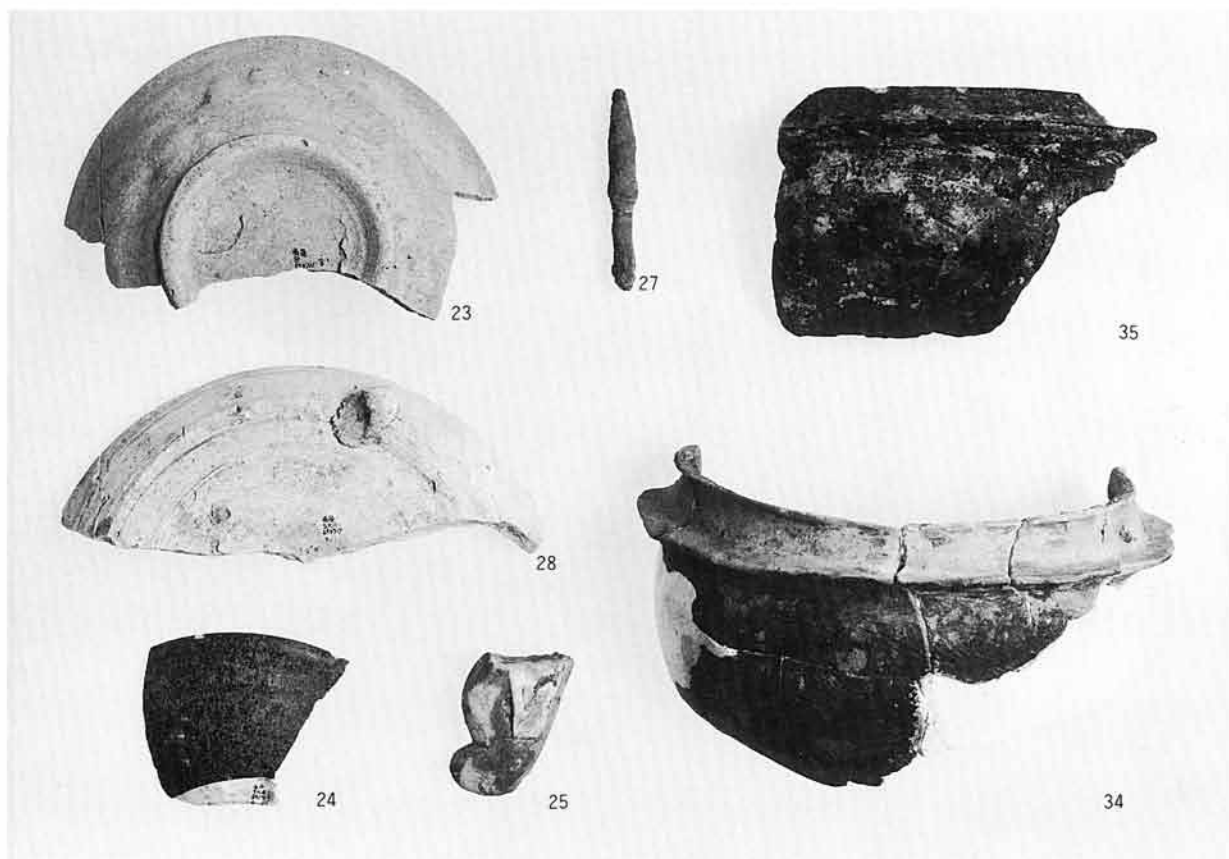
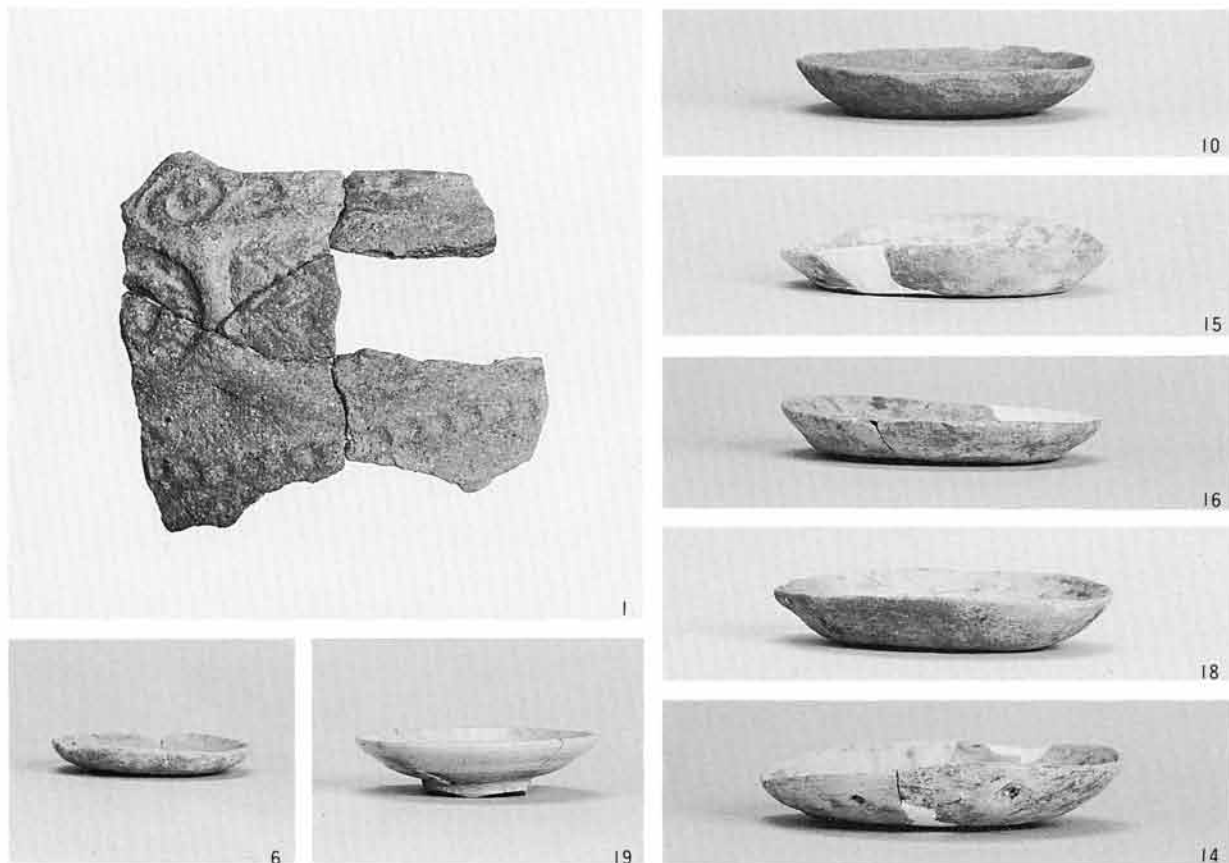
竪穴住居SB1（西から）



井戸SE6 (東から)



土坑SK3 (北東から)



出土遺物 (1 : 3)

VIII 津市大里睦合町 河崎遺跡

1 位置と歴史的環境

津市北部を流れる志登茂川は、芸濃町の丘陵地に端を発し、蛇行を繰り返しながら高野尾、大里地区の洪積台地を開析し、大里窪田町を境に川幅を徐々に広げ、沖積平野を形成しながら、河口は津市の中央部を流れる安濃川に接して伊勢湾に流入する。河崎遺跡(1)はちょうど志登茂川が平野部へ向けて流れ出す入口付近に当たり、その左岸標高7m前後の河岸段丘上に位置する。行政上は、津市大里睦合町字河崎である。

志登茂川流域には、弥生時代後期より数多くの遺跡が知られている。その多くは台地縁部や丘陵裾部に位置している。

本遺跡近辺の弥生時代の遺跡として、西垣内遺跡(6)、南浦遺跡(8)、塩部遺跡(9)、山の脇遺跡(20)などがあるが、その内容については不明なものが多く、発掘調査で明らかになったものは、東豊野遺跡(19)と中鳶遺跡^①(14)のみである。昭和37年に調査をした東豊野遺跡では、弥生時代後期の土器がV字溝や竪穴住居から多量に出土している。中鳶遺跡は古墳時代前期の集落が主体をなす遺

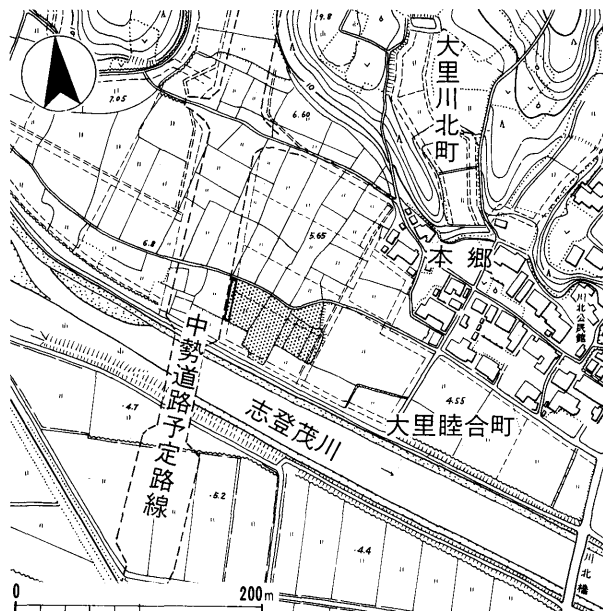
跡ではあるが、弥生時代後期の隅丸方形プランの竪穴住居も1棟確認されている。

古墳時代の遺跡は、志登茂川右岸で多く見られ、前出の中鳶遺跡をはじめ、睦合北遺跡(5)、向沖遺跡(7)、窪田遺跡(13)、六大A遺跡(16)、六大B遺跡(17)、大古曾遺跡(12)など中小規模の遺跡が点在する。また左岸の川北遺跡(18)でも、城跡の調査に伴い古墳時代前期の竪穴住居や、同時期の方形周溝墓が多数検出されている。

一方古墳は、志登茂川左岸に多く分布しており、山室町、川北町の標高40m~50mの丘陵尾根部に数基の古墳からなる古墳群を形成する。古墳の規模は径4m~10mの円墳で大部分が木棺直葬墳と考えられている。このうち古墳群中に小形前方後円墳を含むものとして菖蒲古墳群(2)、小野田古墳群(3)がある。菖蒲3号墳が全長18.6m、小野田2号墳が全長22.6mを測る。また古墳群を形成せず規模も不明であるが、天堤古墳(4)も前方後円墳と考えられている。いずれも後期古墳と思われるが、限られた狭い地域で3基の小規模な前方後円墳が所在して



第80図 遺跡位置図 (1 : 50,000、国土地理院 白子・椋本)



第81図 遺跡地形図 (1 : 6,000)

おり、前方後円墳を築造でき得る階層が、畿内との政治的なかわりの中で、有力な家父長層まで拡大したものと理解できよう。志登茂川右岸の窪田町でも墓の谷古墳群（10）、菅ヶ谷古墳群（11）が確認されている。このうち墓の谷1号墳^②は当地域で調査した唯一の古墳で、棺外から鉄鏃が1本だけ出土した薄葬の木棺直葬墳であることが判明している。

奈良・平安時代の遺跡はまだはっきりしていない。中郷遺跡で平安時代の方形素掘り井戸や緑釉陶器が、安養院跡（15）で軒丸・軒平瓦が確認されているにとどまる。ところで「和名抄」に記される「窪田郷」は、伊勢別街道に沿った現在の大里窪田町の集落を中心とした一帯と推定されており、中世にはこれが窪田庄となり、その後地頭職の大江広元の子親広が後鳥羽院方についたため処分を受け、この時伊勢神宮へ寄進され、「神鳳鈔」に記載の「本御贄窪田御厨三石、六九十二月」となったとみられている。^③

今井集落の北方の丘陵上にある川北城（18）は、長野野藤氏の一族川北式部少輔が築城し、正平年中（1346～70）に土岐右馬頭に攻められ落城したとの伝承がある。昭和53年と59年の2回にわたり、津市教育委員会の手で計23,000㎡の発掘調査^④が実施さ

れ、空堀と土塁に囲まれた8つの郭と掘立柱建物、門址、土橋などが確認された。主郭は東西70m、南北50mで堀が一周する。

一方中世の農民の方に目を向けてみると、志登茂川から引いた灌漑用水路の利権をめぐり、旧窪田村と一身田村とで紛争がたびたびあったことが、「披露事記録」や下津家文書の口上書に記録として散見せられる。これは、一身田村が沼田を麦田に土地改良したことによる水不足が原因とされている。河崎遺跡の試掘調査による土層断面を検討すると灰色系の粘土が何層も認められ、たびたび志登茂川の氾濫があったことが推察される。また地山と考えた黄色粘土層は、これを掘り込んで中世の遺構が確認されており、この層が認められる場所とそうでない場所があったり、この層の下でさらに暗灰色粘土層が認められる点などから、中世のある時期^⑤に沼田に盛土をして土地改良をおこなったものと考えられ、上記の文書に見られる記述とも符号するようにも思われる。以後志登茂川をめぐる田畑の景観は、現代の土地改良である県営ほ場整備事業が施行されるまでの間は大きな変化はなかったであろう。

2 遺構と遺物

河崎遺跡は試掘調査の結果、事業地内の約3,500㎡が遺跡範囲とされたが、協議の結果、大部分は盛土保存されることになり、排水路部分60㎡についてのみ、調査を実施した。

調査区の基本的な層序は、耕土（灰色土）→茶灰色土の順で黄色粘質土の地山に達する。この地山面までは地表から30cmと浅い。確認した遺構は、調査区中央部を北東から南西方向に走る幅30cm、深さ10cmの小さな溝1条（SD1）のみである。

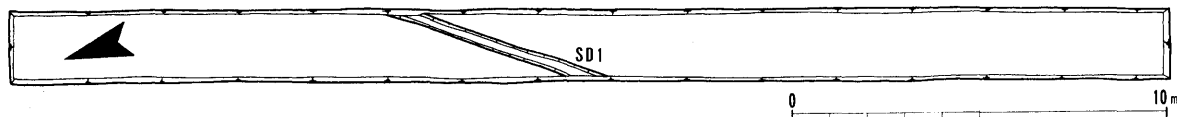
溝からは、山茶碗、土師器鍋・小皿の細片が、わずかに出土したにとどまる。そのため図示できなかったが、山茶碗は底部が糸切りのままの無高台で、内

面見込み部がくぼみ、底部と腰部の境が鋭く屈曲するものである。土師器鍋は通称「伊勢型」鍋と呼ばれるもので、口縁部の細片ではあるが、新田洋氏編年の鍋5類に相当する。したがって時期的には鎌倉時代後半頃と考えられよう。

（倉田直純）

〔註〕

- ① 『中郷遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1977
- ② 『墓の谷1号墳発掘調査報告』津市教育委員会 1976
- ③ 『三重県の地名』日本歴史地名大系24 平凡社1983を参照
- ④ 『三重県埋蔵文化財年報8』『同14』『同15』三重県教育委員会 1978、1984、1985
- ⑤ 今回の調査で黄色粘土層を掘り込む溝SD1が、鎌倉時代後期の遺構であるところから、これより以前と考えられる。



第82図 遺構平面図（1：100）

IX 安芸郡安濃町 光明寺遺跡ほか

1 位置と歴史的環境

三重県のほぼ中央部に位置する津市を南東に貫流している一級河川安濃川は、水源を鈴鹿山系錫杖が岳に発し、その支流であり穴倉川は、経が峰にその端を発し、津市西郊にて、安濃川と合流する。

この安濃川は、中流域から下流域にかけて沖積平野を形成しており、その平野を見下ろすかのように何条もの低位丘陵が東に延びており、左岸には標高50m前後の見当山丘陵、右岸には、標高321mの長谷山から東に延びる丘陵や、半田丘陵がある。

これら安濃川流域と、東方の美濃屋川流域や、それらの微高地、背後の低位丘陵には、各時代にわたって多数の遺跡が分布している。

縄文時代の遺物出土地としては、辻の内遺跡(6)、多倉田遺跡(7)納所遺跡から晩期の土器が出土しており、最近の調査では、松ノ木遺跡より、晩期の堅穴住居と土器が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、前期のものとして、安濃川左岸の自然堤防上に形成された大規模な集落で



第83図 遺跡位置図 (1 : 50,000、国土地理院 津西部・棕本 1 : 25,000から)

ある納所遺跡があり、半田丘陵では、上村遺跡が知られている。中期には美濃屋川沿いに北端遺跡(9)、亀井遺跡(10)、長遺跡、安濃川沿いには、多倉田遺跡(7)があり、亀井遺跡からは、土坑に伴う土器の一括資料が、長遺跡では、中期後半の堅穴住居13棟が確認されている。後期になると、それまで低湿地にあった遺跡が美濃屋川流域や半田丘陵上に移動し、小規模化して多数分布するようになる。美濃屋川流域には、養老遺跡、桐山遺跡、森山遺跡などがあり、最近では、森山東遺跡、太田遺跡、松ノ木遺跡等が調査されている。半田丘陵では、堅穴住居31棟、弥生墳丘墓等が確認された一大集落である半田高松遺跡、小規模な集落跡としては、野田大が瀬遺跡、平栄遺跡(12)などが知られている。またこの付近からは、2個の銅鐸が出土している。中期に製作されたと考えられる外縁紐式銅鐸が、神戸地内から、後期に製作されたと考えられる地方色の強い三遠式銅鐸が、野田地内より出土している。特に神戸銅鐸は、大阪府八尾市恩智銅鐸と同じ鑄型で作られたものである。また最近では、太田遺跡より銅鐸型製品が、津市高茶屋地内より銅鐸が出土している。

古墳時代になっても安濃川流域には、多数の遺跡があり、その多くが弥生時代から引きつづいて営まれるものが多く、沖積地の近くまで遺跡が進出してくる傾向にある。特に安濃川と穴倉川に囲まれた地内には、中井藤が森遺跡(13)、浄土寺南遺跡(14)といった古墳時代以降に中心を持つ遺跡が存在している。安濃川流域に存在する最古の古墳としては、3基の円墳、5基の方墳からなる坂本山古墳群(15)があげられ、出土土器より、前期古墳でも古い段階に築造されたものと考えられる。中期になると大規模な古墳が出現してくる。明合古墳は、一辺60m、高さ8.5mの大型方形墳の南北辺に造り出しを持つ2段築成の双方中方墳であり、葺石、埴輪を伴い周辺には、方墳の陪塚を配している。また下流域の垂水には、池の谷古墳があり、これら2基の古墳は5世紀前半代に位置づけられ、安濃川流域首長墓であるといえよう。古墳時代後期には、小規模な古墳が山麓や、丘陵上に次々と築造される。長谷山周辺には、数基の前方後円墳を中心に総数400基以上と推

定される長谷山古墳群(17)があり、数基~数十基で支群を形成している。平田古墳群では、埴郭墳や、朝鮮系横穴式石室を持つA5号墳が知られており、見当山丘陵の君が口古墳の横穴式木芯室と共に特殊な埋葬施設を持っており、埴化系氏族との関係が考えられる。5世紀末から6世紀前半を中心とする鎌切、稲葉古墳群(19)、方墳のメクサ古墳群(20)、横穴式石室を埋葬施設とする中大谷古墳群(21)などの古墳群や、調査が行われた堂山1号墳(22)、日余1号墳(23)などは、当地域の代表的な後期古墳である。

歴史時代以降の調査例は少なく、実態は不明な点が多かったが、県営ほ場整備事業にともなって、調査例も増加しその実態が徐々に明らかにされつつある。調査例としては、北浦遺跡(24)、浄土寺南遺跡、多倉田遺跡、中井藤が森遺跡などがある。安濃川流域には兩岸の丘陵、頂部を中心に中世城館も多く所在しており、上流では、雲林院城、中流域では安濃城、波見砦跡などがあげられる。

今回調査を行った光明寺遺跡(1)は、安芸郡安濃町光明寺字東戸部に所在し、安濃川支流の穴倉川右岸の標高64mほどの長谷山東麓に位置している。これより北東700mにあり迎山遺跡(2)は、安芸郡安濃町今徳字迎山に所在し、穴倉川右岸の標高22m程の河岸段丘上に位置している。当遺跡の南方には、平田古墳群がある。

また三垣内遺跡(3)は、安芸郡美里村北穴倉字三垣内にあり穴倉川上流の左岸、標高160m程の台地上に位置し、大垣内遺跡(4)は安芸郡美里村北穴倉字大垣内に所在し三垣内遺跡の150m程南東の標高155mの台地上に位置している。

西田遺跡(5)は、安芸郡美里村家所字西田に所在し、久保川の左岸の河岸段丘に位置している。

これら3遺跡が所在する穴倉川上流や久保川流域では、ほとんど遺跡の確認がされておらず、調査例も少なく、今後の調査例、資料の増加を待たねばならないが、同村内の長野川流域では県営ほ場整備事業に伴い調査例が増えてきており、縄文時代早期の遺構遺物が確認された西出遺跡や、中世の遺構・遺物が確認された東出遺跡、中ノ垣内遺跡などがある。

2 光明寺遺跡

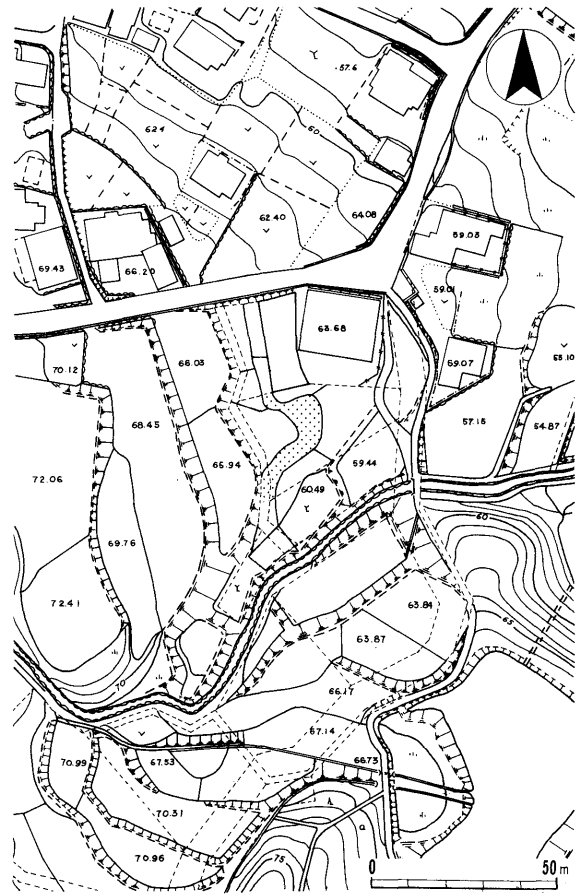
光明寺遺跡は、安濃町光明寺東戸部、標高22m程の長谷山東麓の丘陵上に位置しており、約6,000㎡の範囲にわたって遺物の散布がみられた。今回県営ほ場整備事業に先立ち、175㎡につき本調整を、300㎡につき立会い調査をおこなった。なお立会い調査部分については遺構、遺物ともに見られなかったため、以下では、本調査をおこなった部分についてのみ記述したい。

(1) 遺構

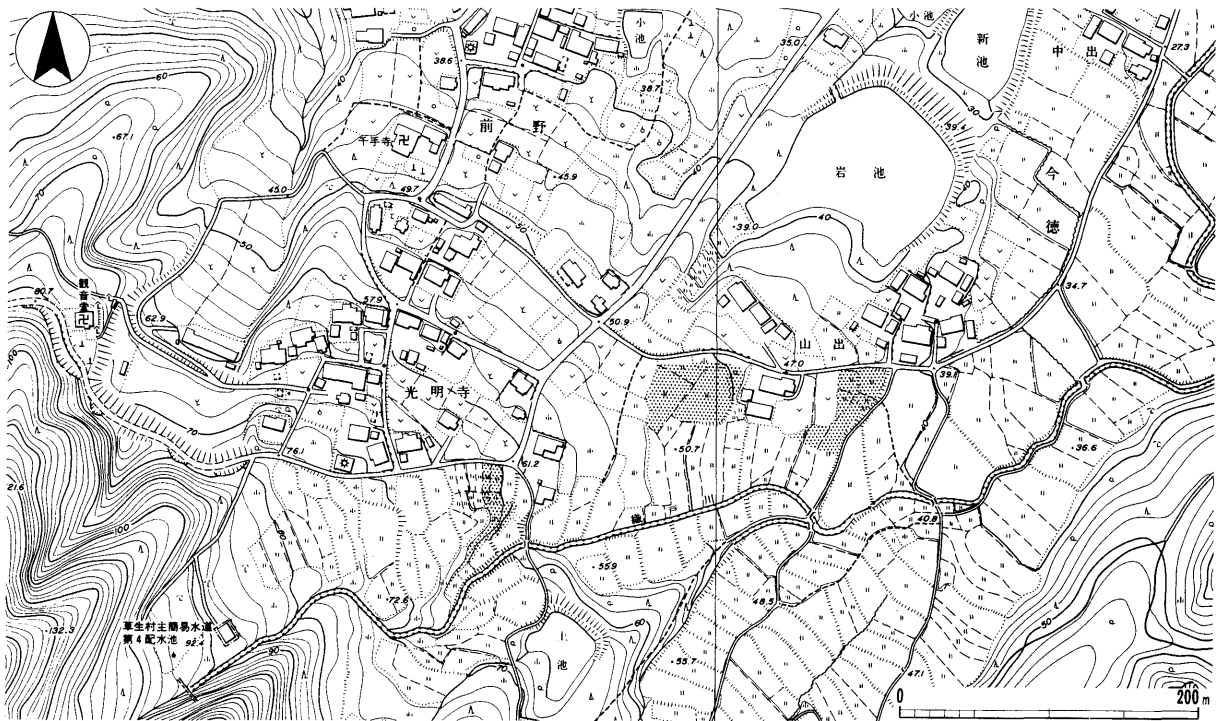
今回の調査区の北東部では、黒灰色の耕作土の下に暗褐色の包含層が認められたが、それ以外では黄褐レキ混じりの地山か、灰色の客土であった。主な遺構としては、弥生時代後期の溝SD2、土坑SK1と、出土遺物が微量なため、時期決定はし難いが、古墳時代の溝SD1が検出された。

SD1 最大幅1.2m程、深さ30cmから40cm程、埋土は黒褐色土であった。埋土中より、おそらく流入であると思われるが、古墳時代須恵器杯身片、杯蓋片が出土している。

SD2 南北方向に調査区東壁に沿い、その一部



第85図 調査区位置図(1:2,000)



第84図 遺跡地形図(1:5,000)

が検出された。深さ10cm程、東に向かい徐々に深くなっている。×地点より、台付甕（1）、受口状口縁甕（2）、（3）、高杯（4）、（5）が出土している。

SD3 調査区北壁に沿ってその一部が検出された。埋土中より、壺（6）が出土している。

その他時期不明の落ち込みや、ピットがあるが、埋土より判断すると他の遺構より相当新しいものと考えられる。

（2） 遺 物

遺物は、弥生時代後期後半の土器が中心であり、壺、台付甕、受口状口縁甕、高杯などが出土した。

A. SD2出土遺物（2～5）

台付甕（1） 口縁部から体部にかけての残存は、1/5ほどであるが、台部はほぼ完形である。口径14.4cm、高さ18.8cm、胎土はやや粗い。色調は内面明褐色、外面褐灰色、口縁部付近は、煤のため黒色を呈している。内外面ともヨコナデを施し外面には、指頭圧痕を残す。台部はゆがみが大きい。

受口状口縁甕（2・3）（2）は、口縁部のみの小片であるが、口径12.2cm、他は不明である。胎土は緻密、色調は内外面とも黄灰色。断面は、黒褐色を呈す。内外面にヨコナデを施している。たいへんもろい。（3）も、口縁部のみの小片であるが、口径17.8cm、他は不明である。胎土は、やや粗い。色調は内面褐灰色、外面黄灰色で、口縁部外面に煤が付着している。内外面共ヨコナデを施し、口縁部外面に櫛状工具による刺突文を施す。

高杯（4・5）（4）は、杯の口縁から体部1/3、底部1/5ほどの残存で、口径26cmを測る。胎土は、かなり密であり、色調は、内外面、断面ともに赤褐色を呈している。内外面共丁寧なヘラミガキが施されている。（5）は杯部残存1/3、脚部は端部を欠いている。口径は19.9cm、他は不明である。胎土は、かなり密。色調は、内外面ともに黄灰色であり、ところどころ、褐色が混じる。杯部外面には丁寧なヨコナデの後ヘラミガキを施しているが、摩耗しているため、はっきりしない。杯部内面も丁寧なヨコナデが施されているが、摩耗激しくヘラミガキの有無は不明である。脚部も同様である。

脚部上半に、櫛描横線が3条巡っており、上から3状目に円孔が3個うがたれていたものと思われる。また2条目には、1個うがたれている。

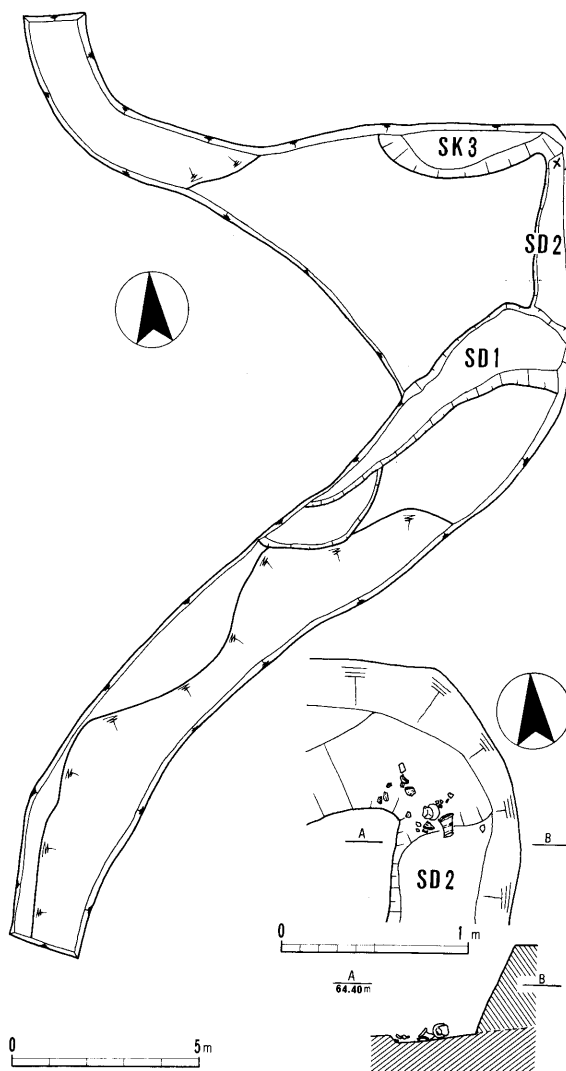
B. SK3出土遺物（6）

壺（6）は底部片で、胎土はかなり密であり、色調は、内外面ともに黄灰色を呈す。底部外面には上から下へのヘラケズリとハケメが入る。

C. NO.13試掘坑出土遺物（7～12）

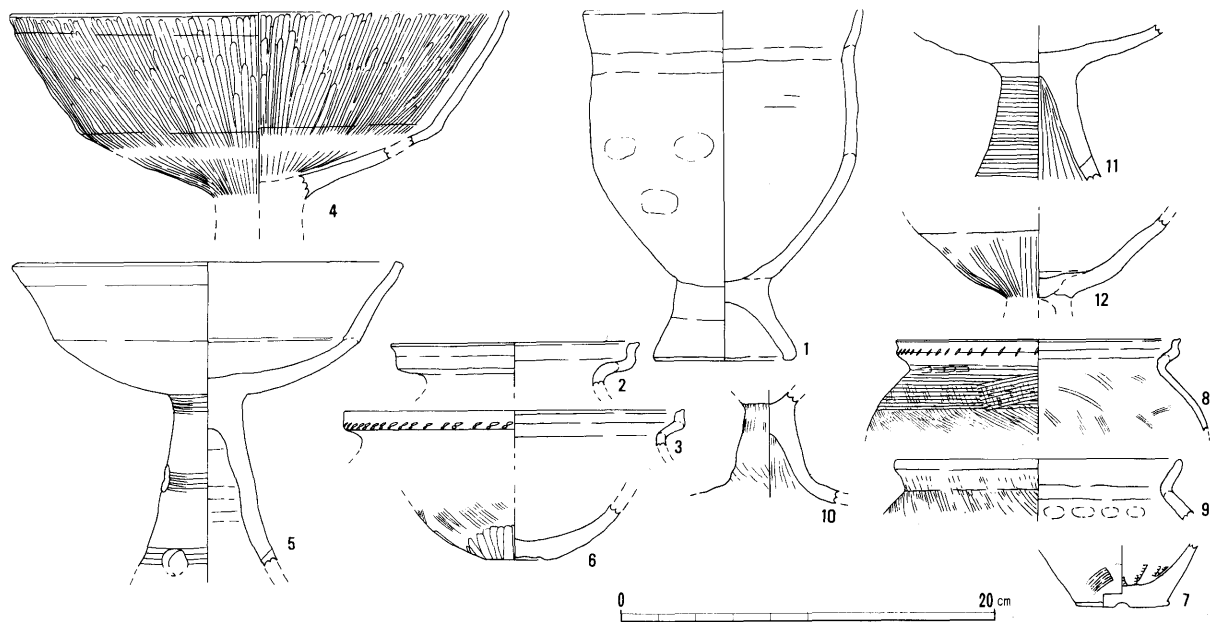
土坑、あるいは堅穴住居と考えられる黒褐色土中から出土したものである。

壺（7） 底径4.9cmを測る壺の底部である。胎土は密、色調は乳褐色を呈している。外部は、かなり摩耗が激しいがハケメがみられ、内面にはヘラ状工具による横方向のケズリがみられる。また底部中央は、浅く窪む。



第86図 遺構平面図（1：200）

SD2遺物出土状況（1：40）



第87図 遺物実測図(1:4)

受口状口縁甕(8) 口縁部残存1/4程で、復元口径は15cmである。胎土は密であり、色調は内外面共に黄灰色を呈し、断面の中心部が淡黒灰色である。口縁部外面にヘラ状工具による刺突文を持ち、頸部は左横方向にヘラ状工具で削られる。肩部は斜めにハケメを施した後、1.4cmの範囲で横方向に楕円横線が入る。

高杯(10~12) いずれも破片ばかりであるが、(12)の内面底部には脚部との接合時に杯底部より脚部に粘土を押し込んだ痕跡がみられる。(4)の高杯もこれと同様の方法で、接合を行っていると思われる。

(3) 結語

今回の調査では、良好な遺構は確認できず、わずかに溝2条と土坑1基のみであった。しかも遺物が集中して出土した地点は調査区の北東隅の部分であり、また今回あわせて掲載した遺物が出土したNO13試掘坑は、調査区の20m程北方に位置している。また、農作業中に弥生後半の土器が出土している地区はもっと北方である。これらのことから、今回の調査区は、遺跡の周辺地域に当たり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡は、調査区北方

〔註〕

① 『西ヶ広遺跡』『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1970

の標高60m前後の丘陵部にあるものと考えられる。

次に出土遺物について若干触れておきたい。SD2出土遺物は、高杯の形態から弥生時代後期後半に位置付けられるものである。このような高杯について、かつて谷本氏は、四日市市西ヶ広遺跡^①の調査をふまえ、杯部が欠山期より浅く、脚部も山中期と欠山期の中間的な様相を示すとして、山中期と欠山期の中間的な土器群が存在することを指摘した。その後これを裏付けるように、松阪市草山遺跡堅穴住居SB18の調査^②で、層位的にも型式学的にも下層出土土器→上層出土土器が明らかとなった。また堅穴住居SB38上層土器^③は、SB18上層土器と一部共通するものが認められるものの全体としてSB18上層土器の方が古く、SB18下層→SB18上層→SB38上層という編年案が示された。これに従えばSD2出土の高杯(5)、(4)はそれぞれSB38上層出土の高杯A類、B類に相当する。

今回中勢地区でも山中期と欠山期を結ぶ一群が確認された。従って西ヶ広、草山で提示された編年は伊勢湾西岸において、ほぼ普遍的なものとして理解できよう。

(堀田隆長、倉田直純)

② 『草山遺跡発掘調査報告NO1』松阪市教育委員会 1982

③ 『同上 NO7』松阪市教育委員会 1982

3 迎山遺跡

迎山遺跡は穴倉川の右岸標高20mの河岸段丘上の畑地に位置し、約3000㎡にわたり、遺物の散布が見られた。今回県営ほ場整備事業に伴い、約330㎡につき立会い調査をおこなった。なお調査区が田面2枚に及ぶため、北側をA地区、南側をB地区とした。

(1) A地区の遺構

顕著な遺構は検出されなかったが、黒灰色の耕作土下、80cmほどの黒色土より、埴輪片が多量に出土した。その範囲は、遺構平面図でスクリーンで示した内である。

(2) B地区の遺構

中世の土坑SK1、溝SD2、ピット群が検出された。ピット群は調査区の南東隅に集中しており、それを取り囲むような形で幅40cm弱、深さ10cm程のSD2が巡っている。ピット群より、土師器片、山茶椀片の他に、埴輪片が出土している。

SK1は、長径5.5m、短径3.5m程の楕円形を呈し、深さは最大1.2m程であった。床面には、15cmから30cm程の石が多数確認できたが、意識的に配

列されたものではないと考えられる。埋土より山茶椀片、土師器皿、羽釜片、練鉢片といった中世遺物の他に、埴輪片の混入も認められた。

(3) 遺物

今回出土した遺物は、埴輪片と山茶椀、羽釜などの中世遺物である。このうち、埴輪片はSD1、ピットからも出土しているが、その下位レベルより中世遺物が出土しており、明らかに流入である。そのため埴輪については地区、遺構の区別をせず記述する。

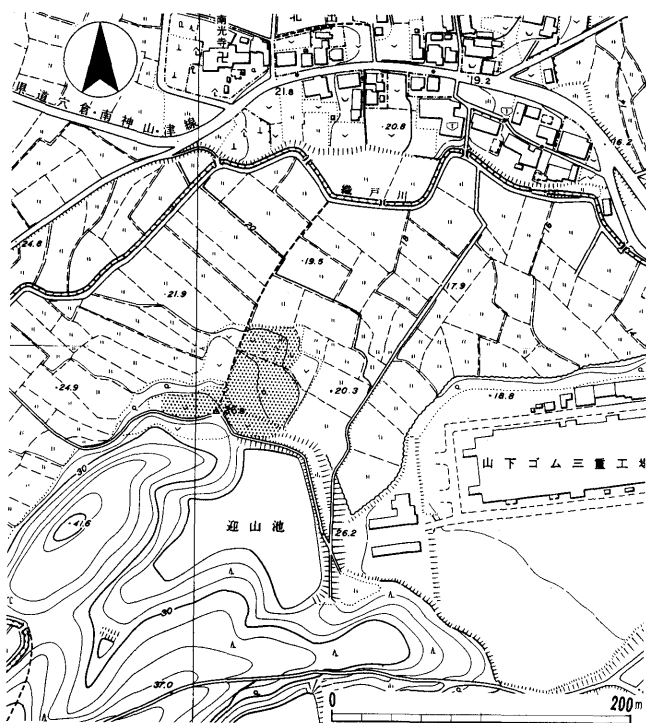
A. A地区包含層出土遺物(1~3)

須恵器壺(1)は、残存1/4で、口径24cmを測る。櫛描波状文の本数は12本、体部叩き目は2.2cmにつき8本である。古墳時代の遺物は、若干の小片を除くとこれのみである。

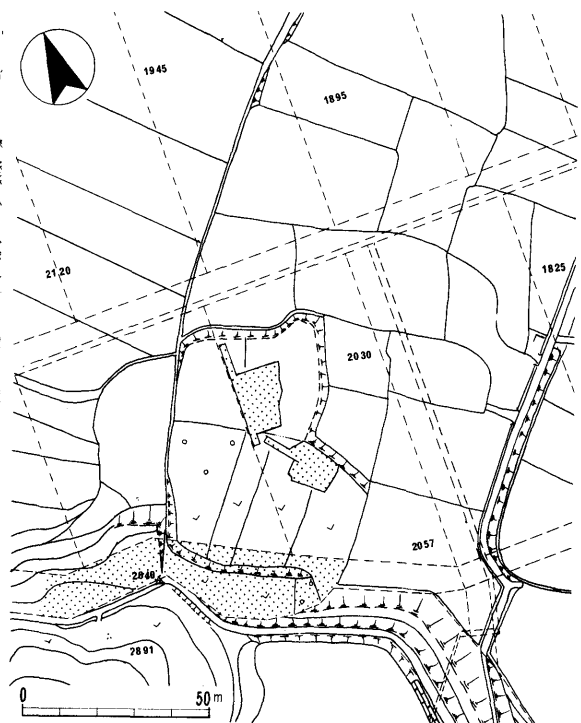
(2・3)は、山茶椀である。(2)は底部のみ、(3)は3/5程残存している。共に安定した低い高台がつき、(3)の高台には粉がら痕が残る。

B. B地区SK1出土遺物(4~13)

練鉢(4)は、約1/4残存しており、口径30.2cm、高さ8.8cmを測る。赤褐色を呈し、外面には



第88図 遺跡地形図(1:5,000)



第89図 調査区位置図(1:2,000)

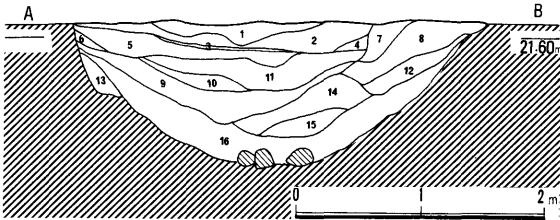
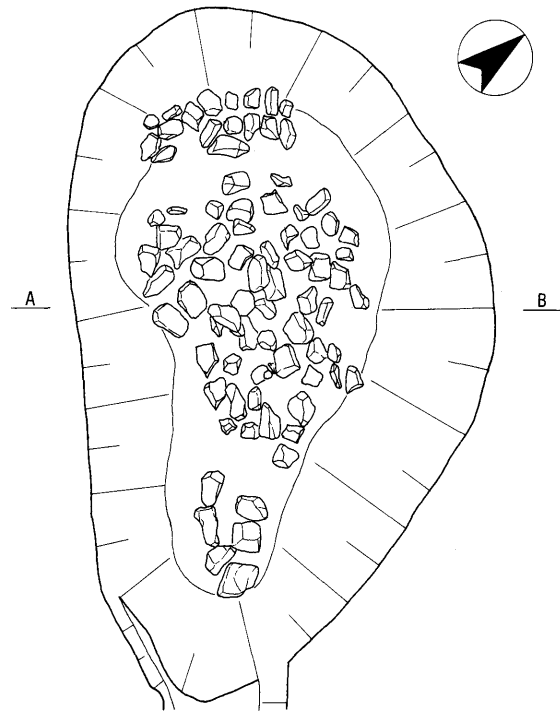
縦方向の削り、底部には、刃が痕が残る。内面底部より体部中央にかけて、使用痕が認められる。常滑産であろう。

山茶碗（5～7）は、いずれも底部のみの残存である。（5）、（6）は比較的しっかりした高台を持ち、内面体部に自然釉が認められる。

鉄釉の小皿（10）は、削りだし高台を持つ。

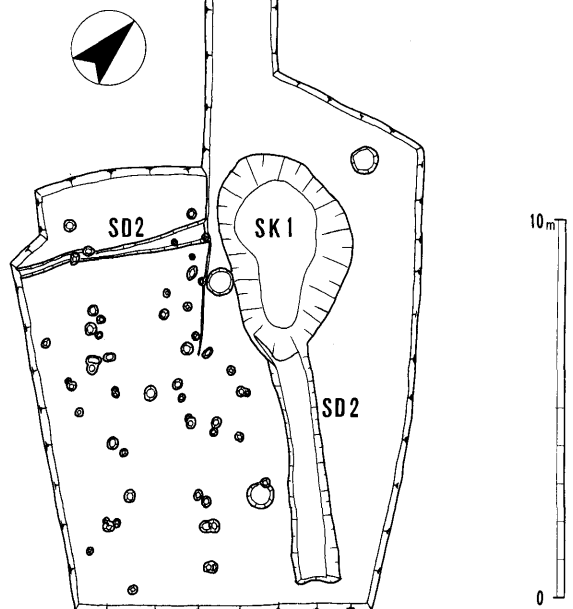
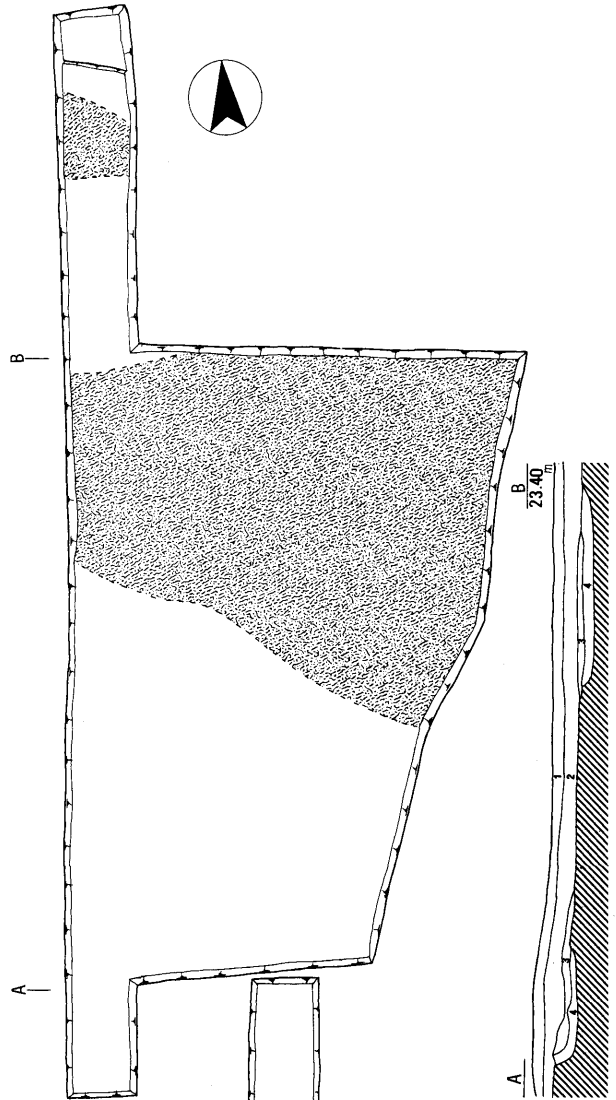
羽釜は、鏝上部に円孔を持たないもの（11）と、2個1対の円孔を持つもの（12、13）がある。いずれも体部から口縁部にかけて内弯し、口縁端部を外反させるもので、鏝の下部より体部に向け、煤が付着する。

これらの一群は山茶碗を除き、概ね16世紀前半代におさまるものと考えられる。

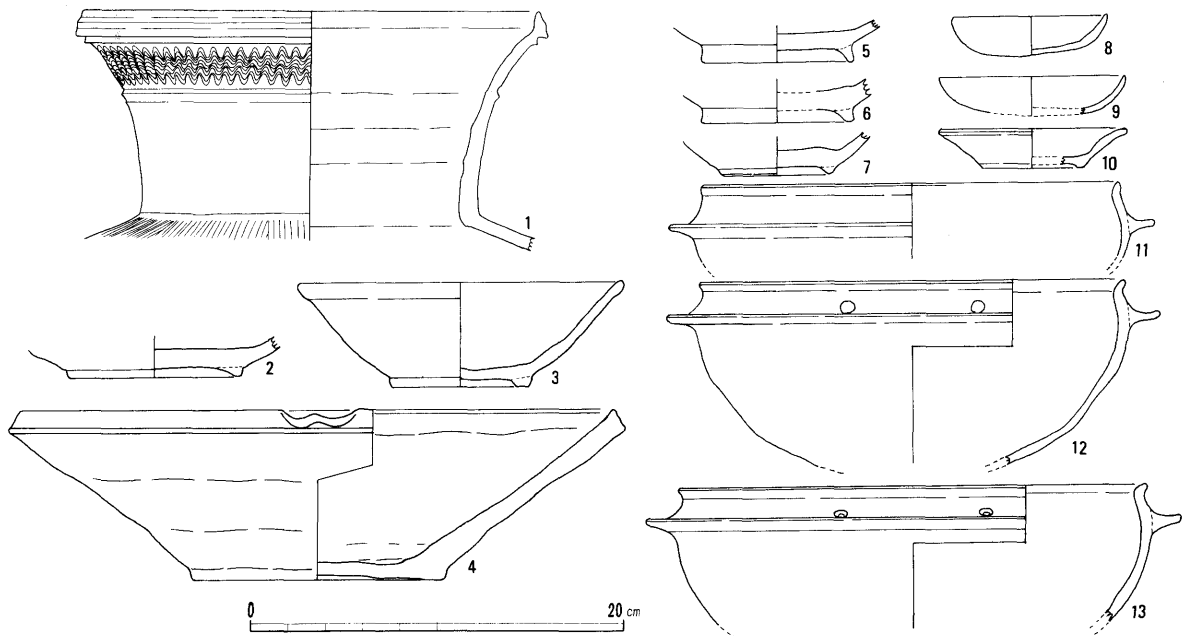


- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 褐色土 | 9. 灰褐色土混入黒灰色土 |
| 2. 淡褐色粘質土混入褐色土 | 10. 淡褐色粘土 |
| 3. 灰色粘土 | 11. 灰褐色土（小石混入） |
| 4. 明褐色土 | 12. 暗灰褐色土 |
| 5. 淡灰色土塊混入褐色土 | 13. 黄褐色粘土 |
| 6. 黄褐色粘質土 | 14. 黄灰色粘土 |
| 7. 濃灰色土 | 15. 黒灰色土粘土 |
| 8. 灰褐色土 | 16. 灰白色粗砂 |

第90図 SK1遺構実測図、断面図（1：60）



第91図 遺構平面図（1：200）



第92図 遺物実測図 (1 : 4)

C. 埴輪

1. 円筒埴輪

出土した埴輪は、土師質、須恵質に分けられる。詳細は観察表にゆずるとして、1～3は土師質で、2にはヘラ描きと思われる沈線がある。4は須恵質だが残存部分が少ないため、ヨコハケの種類は不明である。また、1～4の他にヘラ記号をもつ胴部小片が出土している。

2. 形象埴輪

蓋形埴輪 (5～7) 灰褐色～褐色を呈する須恵質埴輪で、5は立飾りで両面に線刻がある。6も両面に線刻があり、立飾りと受け部の接合部分かと思われる。7は立飾りの受け部にあたり、皿状部分は筒状の軸部に抜けている。皿状部分の粘土接合面には1条の沈線が入る。

家形埴輪 (8) 裾廻台の一部で壁面より2.7cm突出し、橙褐色を呈する。

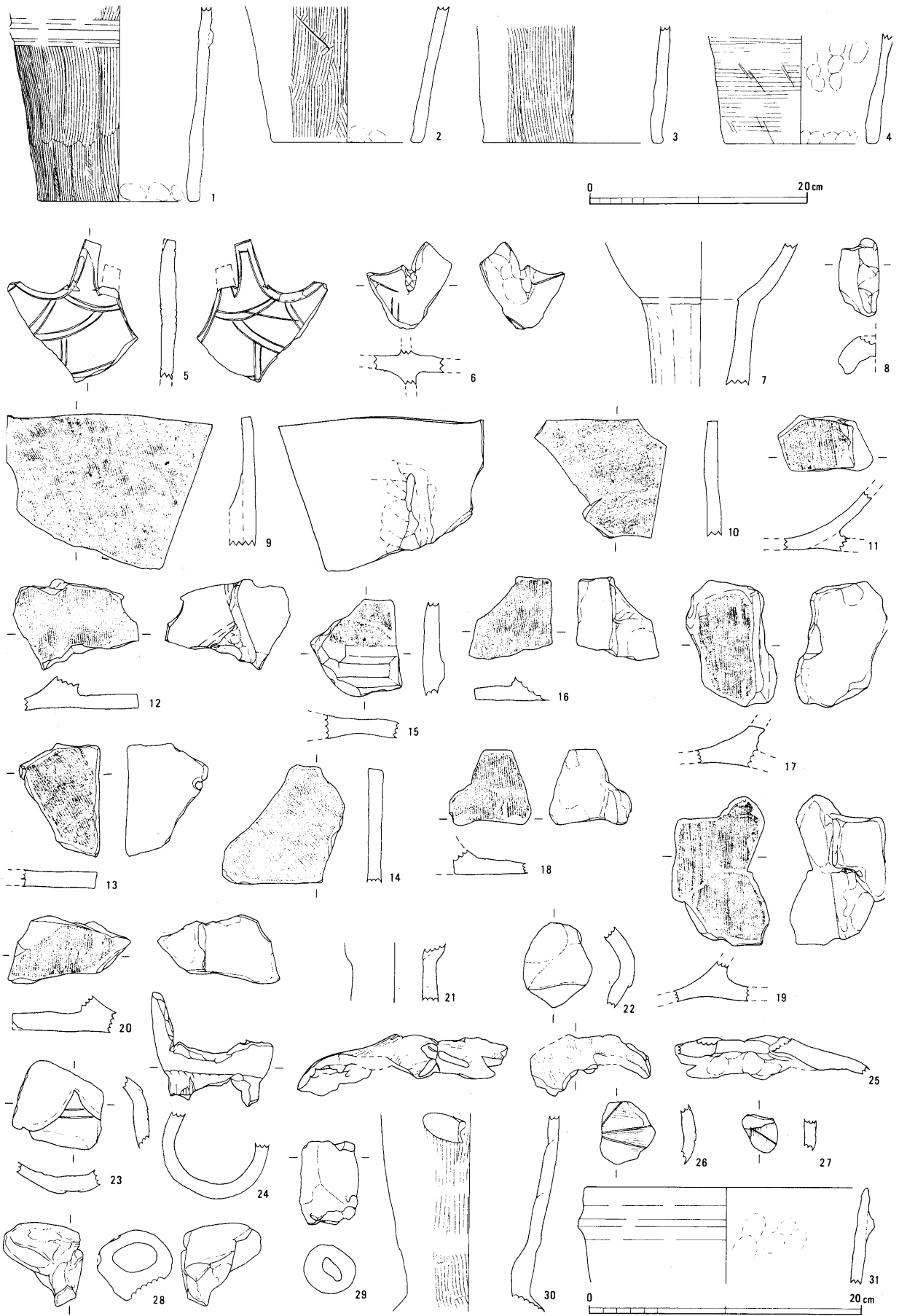
盾形埴輪 (9～20) いずれも外面にハケが施されるのが特徴である。9は須恵器で灰色を呈する。残存部に線刻及び穿孔箇所はないが、端部形態から所謂「石見型盾」と推察される。10～20は須恵質で灰橙色を呈する。13・14は土師質で淡橙色を呈する。板状で蓋形埴輪の立飾りの可能性もあるが、13には方形穿孔痕(残存部の一辺3.5cm)がある。15～20は土師質で淡黄褐色を呈し、盾の鱗部にはゆるく内弯する部分がある。15は低いタガがつき、また17は

円筒部に透孔の一部が残っている。

人物埴輪 (21～29) 21は頸部で橙褐色を呈する。調整は内外面ともにナデ。22・23は頭部と思われる小片で、22は淡黄褐色を呈し、胎土は粗いが粘土を貼付けて段をなしている。23は額の一部で、淡黄褐色を呈する。粘土が「八の字」状に貼付けられ、その間に2条の沈線が入る。24は頸部から頭部にかけての一部であるが額の部分を欠いている。調整は内外面ともナデで、橙褐色を呈する。25は胸から肩にかけての一部で橙褐色を呈する。前に衣服の結び目を表した粘土貼付けがあり、その下から沈線が1条のびている。外面には不規則なハケが施され、内面は頸部への立ち上がり部分のみがナデである。26・27は、25と同一個体の小片で沈線及び粘土の貼付けがある。28は肩部で、淡黄橙色を呈する。剥離が著しいが、粘土を貼付けて段をなす部分がある。29は手で淡黄橙色を呈する。筒状の粘土の先端をつまみ合わせ、粘土を貼付けて指をあらわしている。

形状不明埴輪 (30・31) 30は円筒状で、外面はタテハケ、内面はナデ。外面に粘土の貼付けがあり、屈曲部には粘土の剥離する部分がある。31は須恵質の埴輪で外面がナメナデ、内面がヨコナデ。端部とタガの間が短く、淡褐色を呈する。同一個体の小片には、タテ方向の粘土の貼付けがあり、形象埴輪の円筒部かと思われる。

(藤田充子)



第93图 埴輪実測图 1~4 (1:5)、5~31 (1:4)

番号	1	2	3	4
法量	底部径 14.8cm 残存高 18.3cm	底部径 13.6cm 残存高 12.4cm	底部径 16.4cm 残存高 10.6cm	底部径 14.0cm 残存高 10.0cm
第2段	外面；タテハケ 透孔；一部残存（形状不明）			
第1段タガ 第1段	タガ；幅はひろく突出度低い 外面；タテハケ（8本/cm） 内面；ナデ（タテ方向） 基底部に指頭圧痕 基部；成形右廻り 底面；植物繊維圧痕あり	外面；タテハケ（7本/cm） へら描き 内面；ナデ（タテ方向） 基底部に指頭圧痕 基部；成形右廻り	外面；タテハケ（7本/cm） 内面；ナデ（ナナメ方向） 基底部に指頭圧痕	外面；ヨコハケ（7本/cm） 内面；ナデ（ユビオサエ後 ナナメ方向） 基底部に指頭圧痕
胎土 焼成 色調	やや密 良好 淡橙色	やや密 良好 淡橙色	やや密 良好 淡橙色	やや密 良好 青灰色
備考		へら描きか？		須恵質

第15表 円筒埴輪観察表

（4） 結 語

今回の調査で検出された遺構は、B地区に集中し、土坑、ピット、溝などがある。ピット群は建物としてまとまりに欠くものの、溝に囲まれた何らかの掘立柱建物の存在が想定される。石を入れた土坑は、最近、県下各地で実施された中世遺跡の調査で類例が増加しているが、その性格については不明である。

遺物では、A地区、B地区各所から散在状態で出土した埴輪片が注目される。土師質・須恵質の円筒埴輪のほか、破片ながら蓋・盾・家・人物などの形象埴輪も多種にわたって確認された。時期的には、須恵質埴輪や人物埴輪が見られるところから、およそ5世紀末葉～6世紀初頭頃のものであろう。

当初、これらの埴輪は、古墳が後世の開墾により削平されたために、周辺に散在したものと考えられたが、古墳の痕跡は調査区内では確認されておらず、また蓋・盾などの器財埴輪がセットで出土した具内の古墳は、上野市荒木車塚古墳（4世紀末）、上野市石山古墳（4世紀末）、上野市伊予之丸古墳（5世紀代）、松阪市八重田16号墳（5世紀後半）など、目下、前・中期古墳に限られ、5世紀末段階では未確認である。この時期、当遺跡と同様に器財埴輪のほか多種類の形象埴輪が出土した遺跡としては、当遺跡南東7kmの津市半田丘陵に位置する藤谷埴輪窯が知られているのみであり、同様の埴輪窯が存在した可能性も考えられる。

一方、5世紀末以降、器財埴輪を用いた古墳が未確認とは言え、藤谷埴輪窯では、家・蓋・盾・勒・人物・鶏などの形象埴輪が製作されているので、こうした埴輪をセットとする古墳の存在も否定できない。器財埴輪こそ伴わなかったが、人物・鶏・馬・家など豊富な形象埴輪が出土したことで著名な松阪市岡本町所在の常光坊谷4号墳（5世紀末）、人物・鶏・馬などの形象埴輪のほか、朝顔形円筒埴輪が出土した狼谷古墳（5世紀末）、人物・馬・盾といった形象埴輪が出土した松阪市八重田町所在の八重田7号墳（5世紀後半）では、北麓から尾根筋沿いに上がって行く古墳の東側でまとまって形象埴輪が確認されたとの報告があり、当遺跡でも丘陵部が削平されてはいるものの、丘陵東部に設定した調査区で比較的多くの埴輪の出土をみたことからすれば、形象埴輪を有する古墳が存在したことも十分考えられる。残念ながら藤谷窯の調査成果が公表されていないので、両遺跡出土の埴輪を比較できないのは惜しまれるところである。

いずれにせよ迎山遺跡出土の埴輪については、古墳、埴輪窯の両面から考えるべきであり、興味深い多くの検討課題を提供できたと言えよう。

なお、中世の土坑SK1が完全に埋まり切らないうちに埴輪片がこれに混入しているところから、開墾による当遺跡の破壊は室町時代後半以降のことと思われる。

（堀田隆長・倉田直純）

4 三垣内遺跡、大垣内遺跡

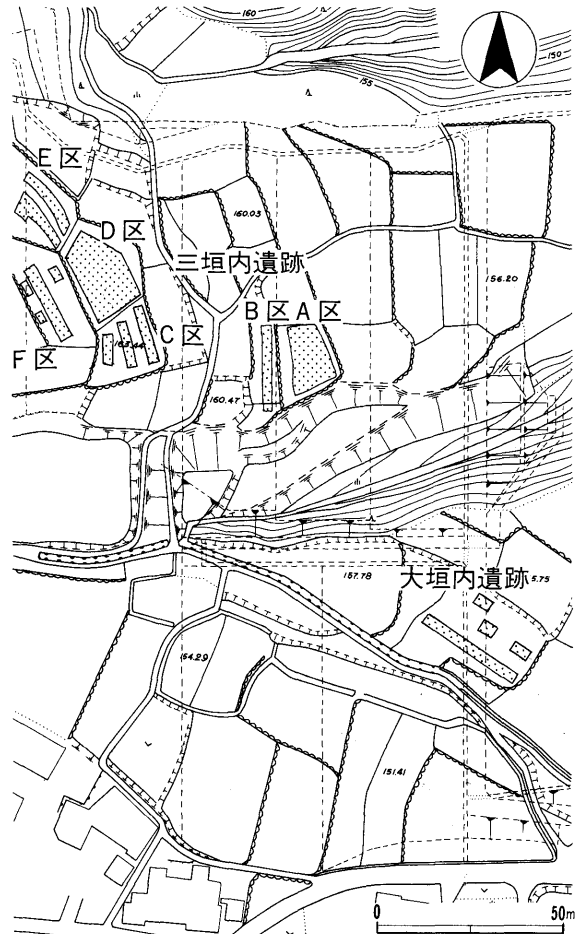
三垣内遺跡は、安芸郡美里村北穴倉字三垣内にあり、穴倉川上流の左岸、標高160m程の台地上に位置している。今回、ほ場整備事業に伴い、600㎡につき立会い調査を行った。この南方150mにある大垣内遺跡は、トレンチ調査の結果、耕作土直下が黄褐色レキ混じりの地山となり、遺構、遺物共に認められなかった。そこで、以下では三垣内遺跡のみについて記述する。

(1) 遺構

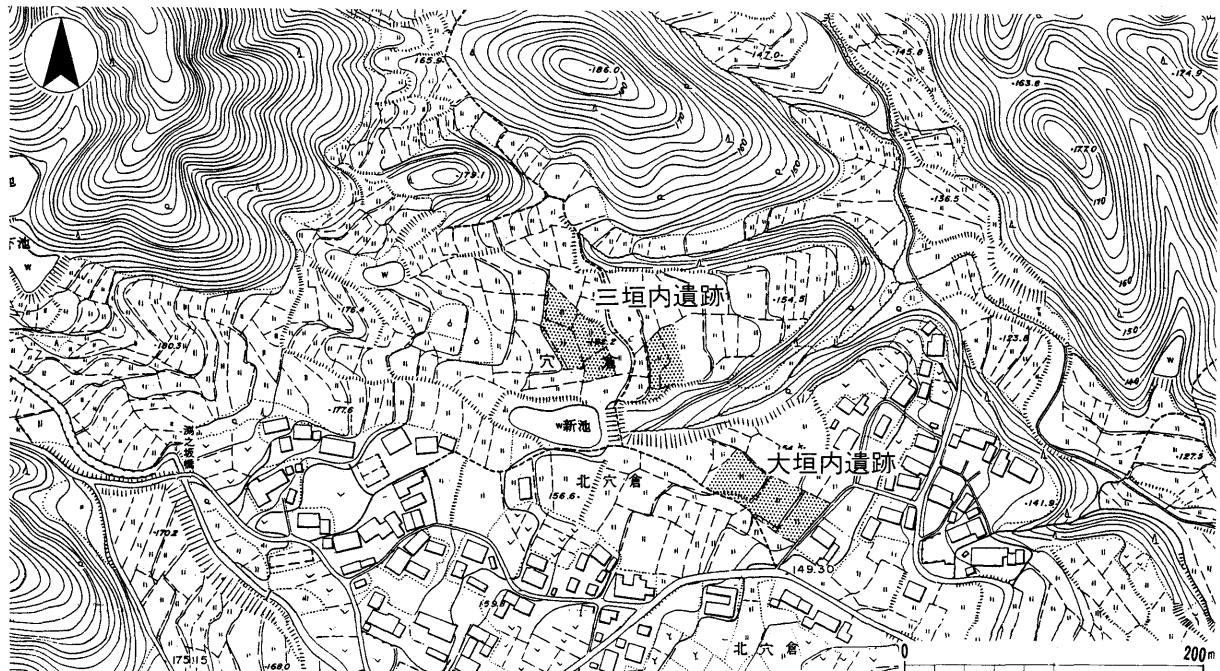
今回の調査で、調査区となった田面のレベルがそれぞれ異なるため、東よりAからF区と称することにし、それぞれの地区で調査を行った。結果、遺構遺物共確認できたのはレベル的に一番低い位置にあるA地区のみであり、他は、黒灰色粘質土の耕作土直下は、黄褐色レキ混じりの地山となり、遺構、遺物共に確認できなかった。

A地区では、中世の土坑2基（SK1、SK2）、ピット群、時期不明の土坑等が検出された。

SK1は長辺4.4m、短辺2.8mの隅丸長方形で深さは30cm弱である。床面に10cmから最大60cm程の河原石が確認された。それらのうち、北辺と東辺は、



第95図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第94図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

意識的に配石されているようで、他の辺及び、内部には意識的に配石されたものが崩れたのか、または最初から意識されなかったのかは不明である。石のなかには、割れたものも見られた。土坑埋土から山茶碗片、山皿片、土師器皿などが出土した。

(2) 遺物

遺物は、中世のものが中心であり、山茶碗片、土師器皿等が出土した。(1)～(8)がSK1、(9)がSK2、他は包含層やピットから出土したものである。

土師器皿(2～4)は、平坦な底部に内弯して立ち上がる口縁部からなる。口径10～12cmで器壁は薄い。土師器小皿(1・10・11)は、口径6～8cmで口縁部は内弯しながら外へ開く。

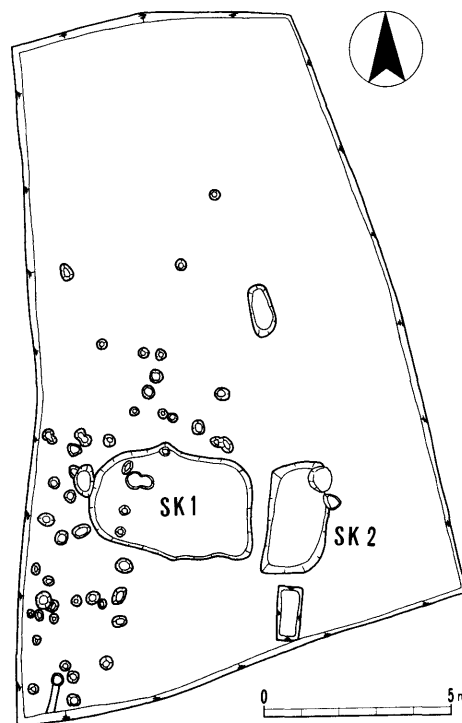
山茶碗は、全体を窺える(12)を除き、大半が底部片のみである。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開き、口縁端部は内傾する面を持つ。底部には低い粗雑な高台が付く。底部見込み部がへこむこのとして、(5・15・16)がある。

山皿(17)は、口径8cm、器高1.8cmで底部は糸切り未調整。口縁の中央部がやや肥厚する。器壁は全体に厚い。

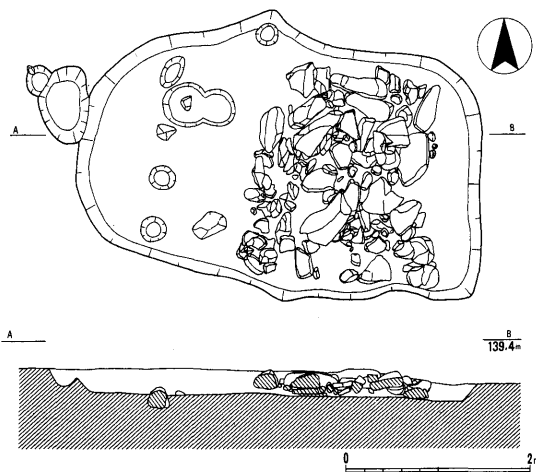
(3) 小 結

今回の調査で確認された遺構は、調査範囲が狭かったため明確なものは数少ない。遺物も破片が多く良好な資料とは言えないが、山茶碗から判断すると、底部にまだ高台をもっているので、鎌倉時代中ごろより以前と思われる。しかし、土師器皿は鎌倉時代後半から室町時代にかけてのもので、山茶碗の年代

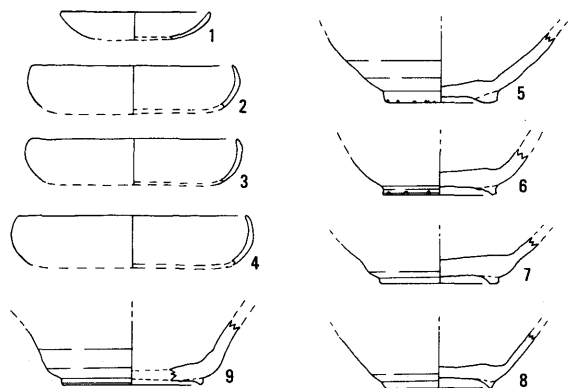
と若干異なる。いずれにせよ中世の人々の営みが当地で始まったことは認識できよう。(堀田隆長)



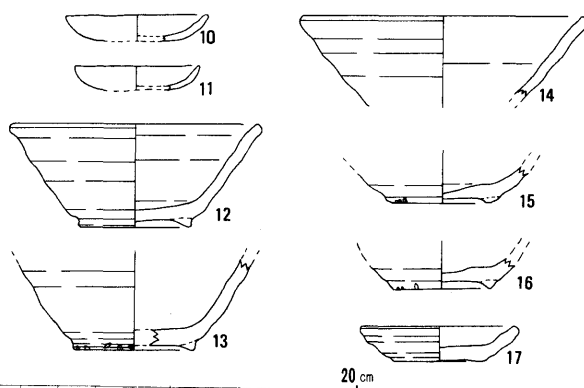
第96図 遺構平面図 (1 : 200)



第97図 SK1 遺構実測図 (1 : 80)



第98図 遺物実測図 (1 : 4)



5 西田遺跡

(1) 遺構

西田遺跡は家所城の南、四方を山に囲まれた小盆地内に位置し、調査前の状況は比較的比高差の激しい水田であった。

今回の調査では、発掘調査区を2区に分けて行った。A区の地山は小礫を若干量含んだ黄橙褐の粘質土で、南に向かってやや下っている。南隅には薄い暗褐色土の遺物包含層も認められた。A区での遺構としては、この地点での土坑1基のみであった。この土坑の埋土には炭化物がかなり含まれており、中世墓であった可能性は高いものと思われる。但し後世削平されたようで、深さは20cm前後と浅く、出

土遺物量も少ない。山茶碗・土師器埴とともに板状の石も数点出土したが、関連の有無については不明である。

B区は、表土下40~50cmで赤褐色粘質土の地山面に達する。遺構としては溝を1条と、いくつかの小穴を検出した。小穴の中には根石状の石を伴うものもあったが堀立柱建物としてとらえられるものではなかった。また溝は出土遺物が極端に少ないため必ずしも断定できないが、中世後期のものと考えられる。

(2) 遺物

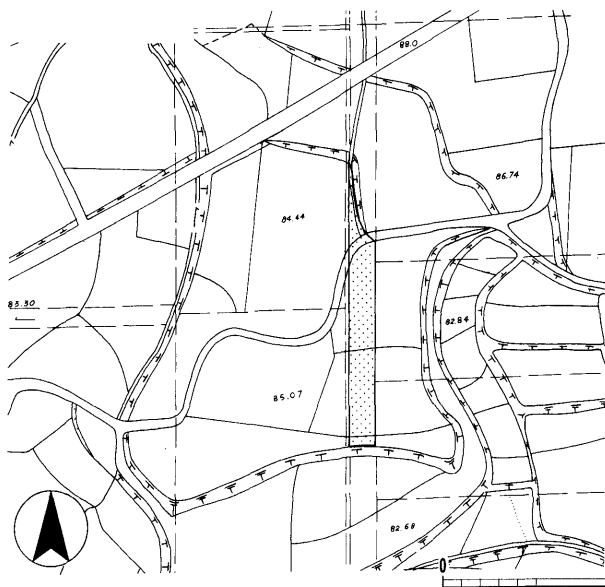
A区SK1出土遺物(1~3)

土坑SK1から出土した遺物は、図示した1~3の3点のみであった。

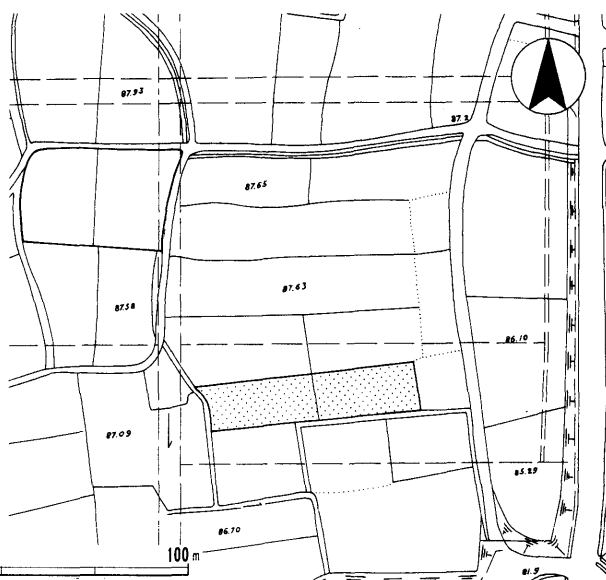
1・2は山茶碗と通称されているものである。かなり細かく割れた状態で出土し、接合後も全体の1/4ほどにしかならなかった。両者とも全体的に開きぎみで、内縁部の器壁はやや厚い。高台は貼付けられているがかなり低く、モミガラ圧痕が残る。胎土には、0.5~5mmの小石を若干含んでいるが密

である。色調は灰白色を呈す。

3は中世の南伊勢に特有の土師器埴である。復元口径は34.6cmで、比較的大型となろう。口縁端部は内側に折り返され、内面に強いヨコナデを施す。器壁は厚めで胎土は粗い。以上の特色より、上記の山茶碗も含め、時代的には鎌倉時代中期頃のものと考えられる。ちなみに4はB地区の小穴からの出土である。



第99図 A区調査区位置図(1:2,000)

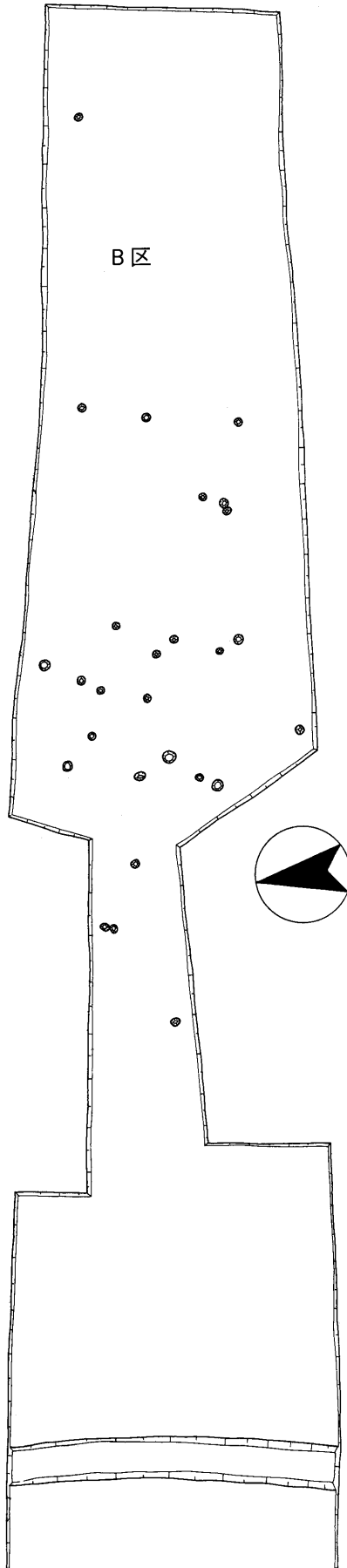


第100図 B区調査区位置図(1:2,000)

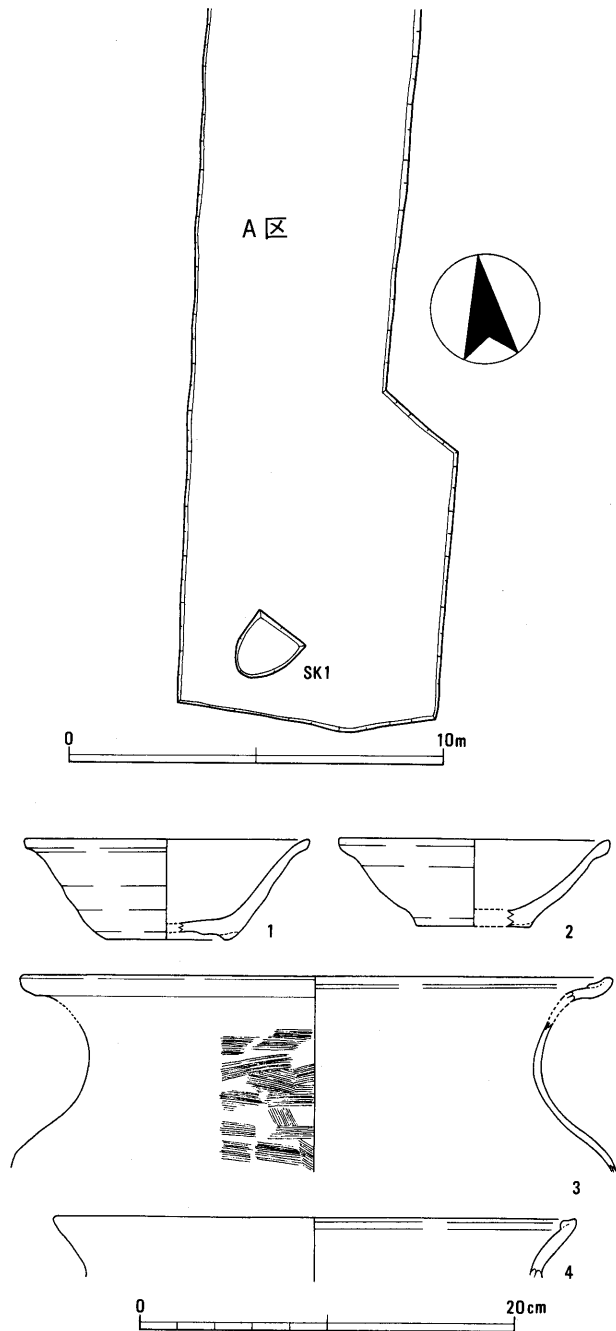
(3) 結 語

今回の調査では顕著な遺構を検出できず、また出土遺物も極端に少なかった。よってこの遺跡の性格について決定的な判断を下すことはできないが、A区で検出できた中世墓と思われる土坑の存在は示唆的であり、近在する家所城の存在とも関連して、本調査区の北側に同時代の集落遺構が広がっている可能性を想起させる。

(小林 秀・福田哲也)



第101図 遺構平面図 (1 : 200)



第102図 遺物実測図 (1 : 4)



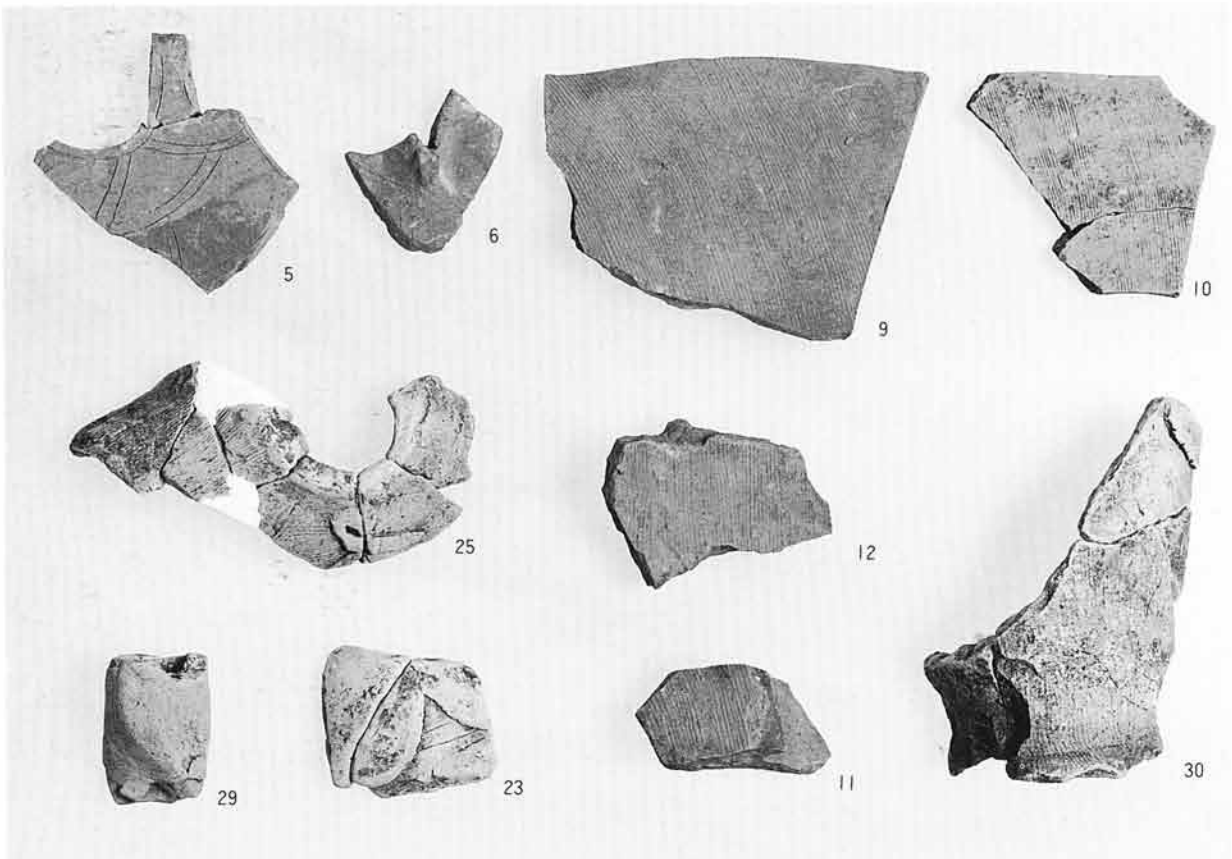
調査区全景（北から）



溝SD2（南から）



調査区南部全景（北東から）



形象埴輪（1：3）



A区全景（南西から）



土坑SK1（西から）



A区全景（北から）



B区全景（北東から）

X 多気郡明和町 外山遺跡・本郷遺跡

1 位置と歴史的環境

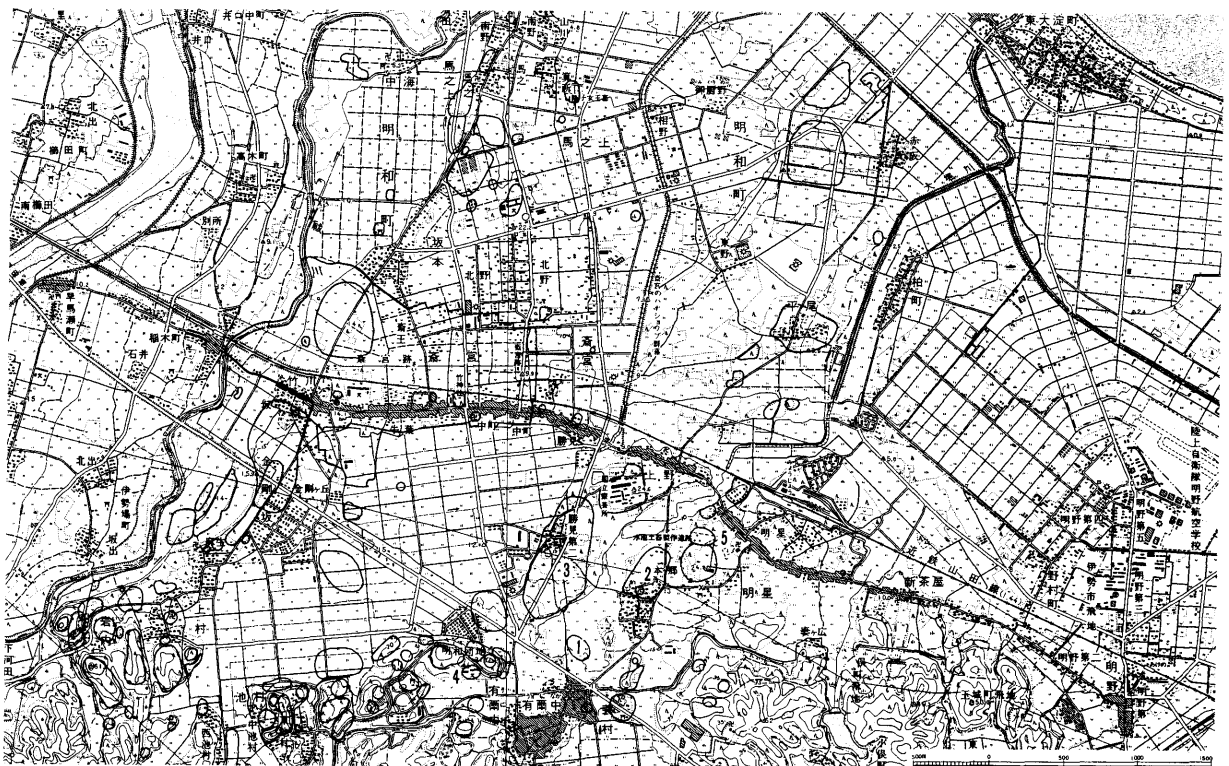
外山遺跡並びに本郷遺跡は旧参宮街道の西方、現在の県道37号線とに挟まれた微高地に立地し、両者は比較的近接した位置にある。行政上は、明和町蓑村に属する。現況は、外山遺跡が畑及び水田で、本郷遺跡はそのほとんどが樹木で覆われていた。

両遺跡の所在する明和町蓑村周辺は、かつては「有爾郷」と呼ばれていた。今も有爾中という地名にその名残を留めている。郷名は『倭名類聚抄^①』に「有貳」と見えるほか、延暦23（804）年に成立したとされる『止由気宮儀式帳^②』にも「多気郡宇式郷」とあり、平安時代の初頭頃にはすでに存在していたものと考えられる。郷域については必ずしも明確ではないが、少なくとも明和町蓑村・有爾中・明星・上野・池村から多気町土羽・池上にまで及ぶ、広大なものがあったとされている。

有爾郷が属する多気郡は、周知のように伊勢神宮領の道後三郡（神三郡）中の一郡である。また、斎宮が設置されていたことからかわるよう古くより伊勢神宮（以降「神宮」と略記）と密接な関係にあったが、やはり特記すべきは当郷が神宮のための土器を生産し、納めていたことであろう。

文献史料による神宮土器調進の初見は延暦23（804）年に設立した『皇太神宮儀式帳^③』で、それには「土師器作物忌」や「陶器作内人」のいたことが記されている。当郷域内にあたる昭和51年調査の水池土器製作跡^④や同57年調査の発シB遺跡^⑤などで、奈良時代を中心とした土器焼成坑が多数確認されていることは、上記の史料との関係で重要である。

「土師器作物忌」や「陶器作内人」等によって神宮土器が生産される体制が、いつ頃から始まり続い



第103図 遺跡位置図（1：50,000 国土地理院 松阪・明野 1：25,000から）

1. 外山遺跡
2. 本郷遺跡
3. 北野遺跡
4. 発シB遺跡
5. 水池土器製作跡

ていたのかについては不明と言わざるを得ない。しかし中世に至ると、神宮は「御器長」を任命して土器生産にあたらせるようになる。そしてこのような体制は、中世の全般を通じて概ね変化はなかったものと思われる。『神宮雜例集』^⑥に所収されている永久4（1115）年9月24日付けの外宮注進状には「有爾村土師長」や「陶土師長」のほか、「長敢支近」・「土師御器長忠近」の名も見えている。また、同書所収の仁安4（1169）年3月15日付けの敢貞元解状によれば、貞元は御器長のほかに下有爾村刀柄をも兼ねていたことが知れるのである。

御器長は原則的には神宮より補任状をもって任命され^⑦、その下に「作手」と呼ばれる職人集団が組織され、属していた^⑧。神宮土器との関係では他に「天平賀役人」も置かれていた^⑨が、その名の示すとおり遷宮に伴う臨時の役職であると思われる、御器長とは性格を異にし、人的な重複もなかったものと考えられる。

さて中世には、どれほどの土器生産者が有爾郷内にいたのであろうか。この疑問に対する答えは、残念ながら現在のところ出されていない。ただ御器長については、同時に複数名いたことが、『氏経神事記』などでの「御器長等」という記述^⑩により窺い知れる。事実、文明17（1485）年9月13日に内宮長官宛に出された有爾郷申状^⑪は、「有爾三郷長中」よりのものであった。よって当時は有爾郷は三郷（村）に分かれ、少なくともそれぞれに御器長がいたことは確実であろう。

室町時代になると、神三郷に入部してきた伊勢国司北畠氏によって、有爾三郷に対し御用銭が課せられるようになる。そのことを示す寛正5（1464）年10月付けの二所太神宮天平賀祝長朝夕御膳御器長等目安^⑫には、「飯野并多気両郡者根本為神領、近年国司様之為御知行也、御器長等散在田地不渡給、猶以有爾三郷江御用銭ヲ御懸候」と見える。つまり北畠氏は、有爾郡御器長等の給免田に相当すると思われる「散在田地」を取り上げた上に、御用銭をも課していたことがわかるのである。このことは、御用銭が北畠等の土地に課せられたものではなかったことを示すと共に、有爾三郷の土器生産が単に神宮への奉納分のみではなく、商品としての土器をも生産

していたことを想起させるに充分であろう。

当該期になると御器長の補任状は形骸化し、神宮は「毎旬神 懈怠之時も無沙汰之人不可存知」という状態となっていた^⑬。即ちこのことは、神宮が彼等土器生産者を既に掌握できなくなっていたことを示しており、同時に彼らが従来の隷属的な「奉仕」の立場から脱却しつつあったことを示している。そのような有爾郷への御用銭賦課が商品土器の生産販売に対するものであったことはほぼ間違いなく、彼等は御器長やその下での作手という身分を獲得することで生産販売の独占権を得ていたものと言えよう。勿論かかる傾向は伊勢国のみの特例ではなく、畿内を中心とした当該期の職人層に普遍的に見られるものである。

因みに、中世終末期の有爾郷での土器調進神役人の総数は280～360人であったとされている^⑭。しかし上記の様な、神宮によって掌握され得なかった職人集団を加えると、その実数は相当な数にのぼったものと思われる。ただ彼等による土器流通がどの範囲にまで及ぶものかについては、まだまだ検討すべき課題も多く、これからの文献・考古の両方よりの研究の蓄積が不可欠である。

（小林 秀）

〔註〕

① 『倭名類聚抄』京都大学文学部 臨川書店 1968年

② 『群書類従』1輯 神祇部

③ 同上

④ 『斎王宮址』明和町教育委員会・三重県教育委員会 1977年

⑤ 『三重県埋蔵文化財年報』13 三重県教育委員会 1983年

⑥ 『群書類従』1輯 神祇部

⑦ 『氏経脚引付』巻七 文明17年9月15日付け内宮六祢宜宛て外宮一祢宜度会朝教書状。

『氏経脚引付』は神宮文庫所蔵氏経直筆本の写真版を利用した。

⑧ 『氏経神事記』寛正3年12月21日条。（大神宮叢書『神宮年中行事大成』前編 臨川書店

⑨ 同上

⑩ 同書寛正3年12月21日条・同5年正月条等

⑪ 『氏経脚引付』巻七

⑫ 同書巻四

⑬ 註（7）参照

⑭ 神宮司庁編『神宮要綱』1928年

2 外山遺跡

(1) 遺 構

外山遺跡の調査は地区をA～Dの4区に分け、うちAとDは本調査を、BとCは立合調査を行った。調査前の現況は、B区が一段低い水田であったほかはA・C・D区の何れも畑地であった。調査の結果どの地区も土層はほぼ単層で、表土下20cm程で遺構基盤層に達する。遺構基盤層は概ね明赤褐色の粘質土であった。

後述するように遺構は、A区では遺物を多量に伴った土坑を2基、またB・C区では掘立柱建物を数棟検出した。さらに台付椀等が多く出土したB区の土坑(井戸か)も注目される。反面D区では、10数条の耕作溝と考えられるもののほかは顕著な遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかったので遺構実測図は省略した。恐らくは、小字名の「外山」が示す通りの微高地が、D区を中心にかけて存在したものと考えられる。そしてそれが後世削平され、現況のような畑地となったものと判断される。

1 A区の遺構

本調査区は東西方向に細長く、西端は農道に接す

る。また周囲の田面より20cm前後高くなっている。

土層は前述したように単層であり、表土下20～30cmで明赤褐色粘質土の遺構基盤層に達する。検出された遺構の主要なものについては以下において述べてゆくが、全体的に遺構密度は薄く、中にはごく最近のゴミ処理穴も見られた。

SK1・3 この二つの土坑には非常に粘性の強い白黄色の粘土がはいっていた。恐らくは、土器製作のための所謂「埴土」を備蓄するための設備ではなかったかと考えられる。このことは、本調査区の歴史的性格を知る上で重要である。

SK4・5 本調査区出土の遺物は多量であるが、その大部分がSK4・5より出土している。埋土はいずれも濃灰褐色土であった。SK4の規模は一辺約5mの角丸方形で、深さは検出面より凡そ40cmであった。SK5も若干形は崩れているものの、SK4とほぼ同じ規模と考えられる。

SK4・5の性格については、出土遺物が多量かつ多器種にわたっているとより土器を廃棄した



第104図 遺跡地形図(1:5,000)

ものと考えてよからう。また埋土が層を形成していないところから、比較的短期間に棄てられ埋まったものと判断し得る。時代は必ずしも絞りきれないもののSK4より「寛永通宝」が出土しているので、概ね近世であると考えている。更に、出土遺物のほとんどを焙烙が占めている反面、使用した痕跡、即ち煤が付着したものは極端に少ない。これらの事実と、外山遺跡を含むかつての「有爾郷」の歴史的な背景や「埴土」備蓄土坑の存在を考え合わせるならば、SK4・5がこの地域での近世における土器生産と深い関係にあったと判断し得るものと言える。

2 B区の遺構

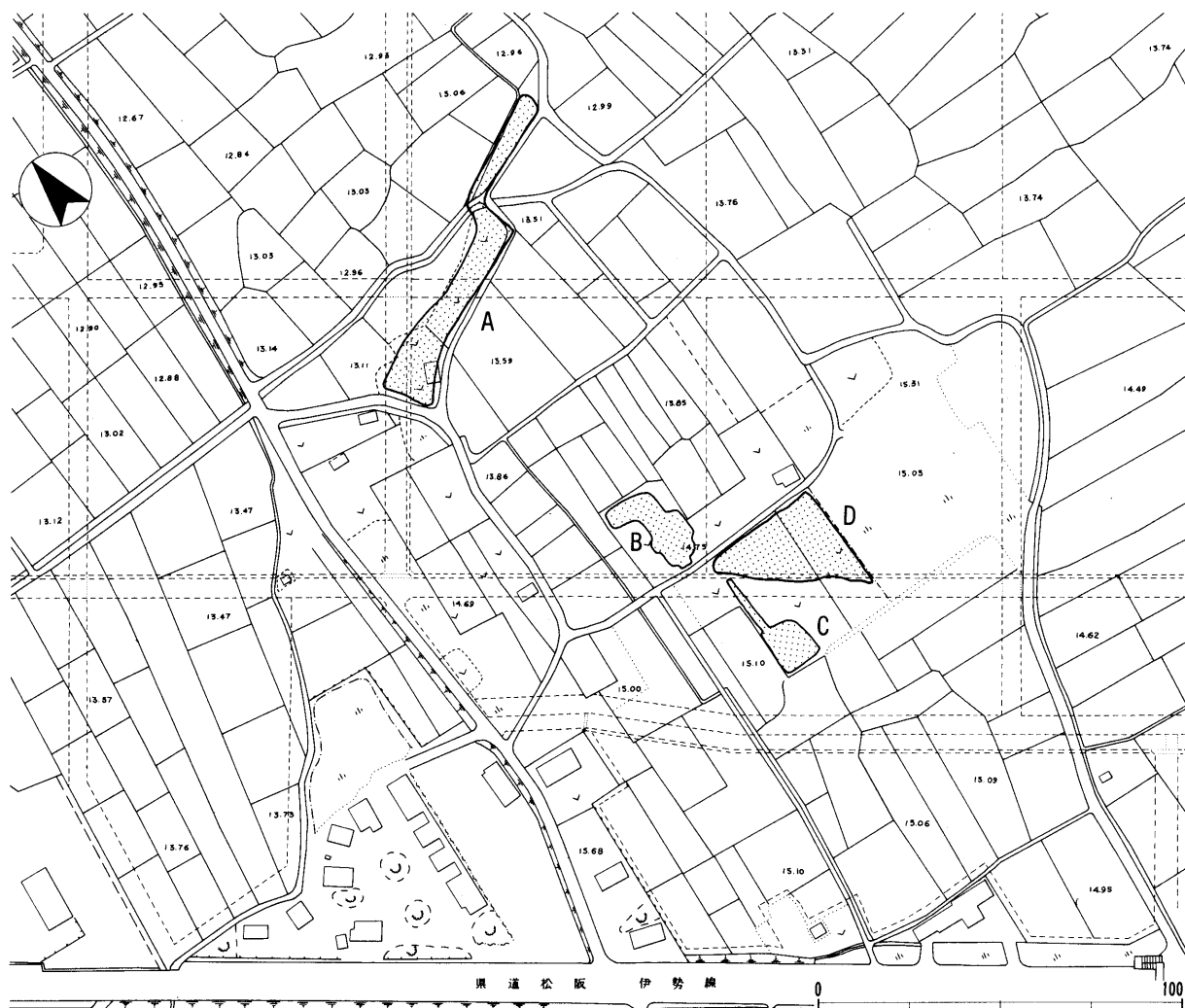
B区南側の遺構集中部分では、表土下20~30cmで黄褐色粘質土の遺構基盤層に至る。それに対し北側はやや深くなり、遺構基盤層上に10~20cmの暗褐色土の遺物包含層が認められた。また遺構基盤層も若干粘性を弱め、色も褐色が強くなる。

遺構としては、掘立柱建物2棟と井戸と考えられる土坑1基、そして溝を数条検出した。

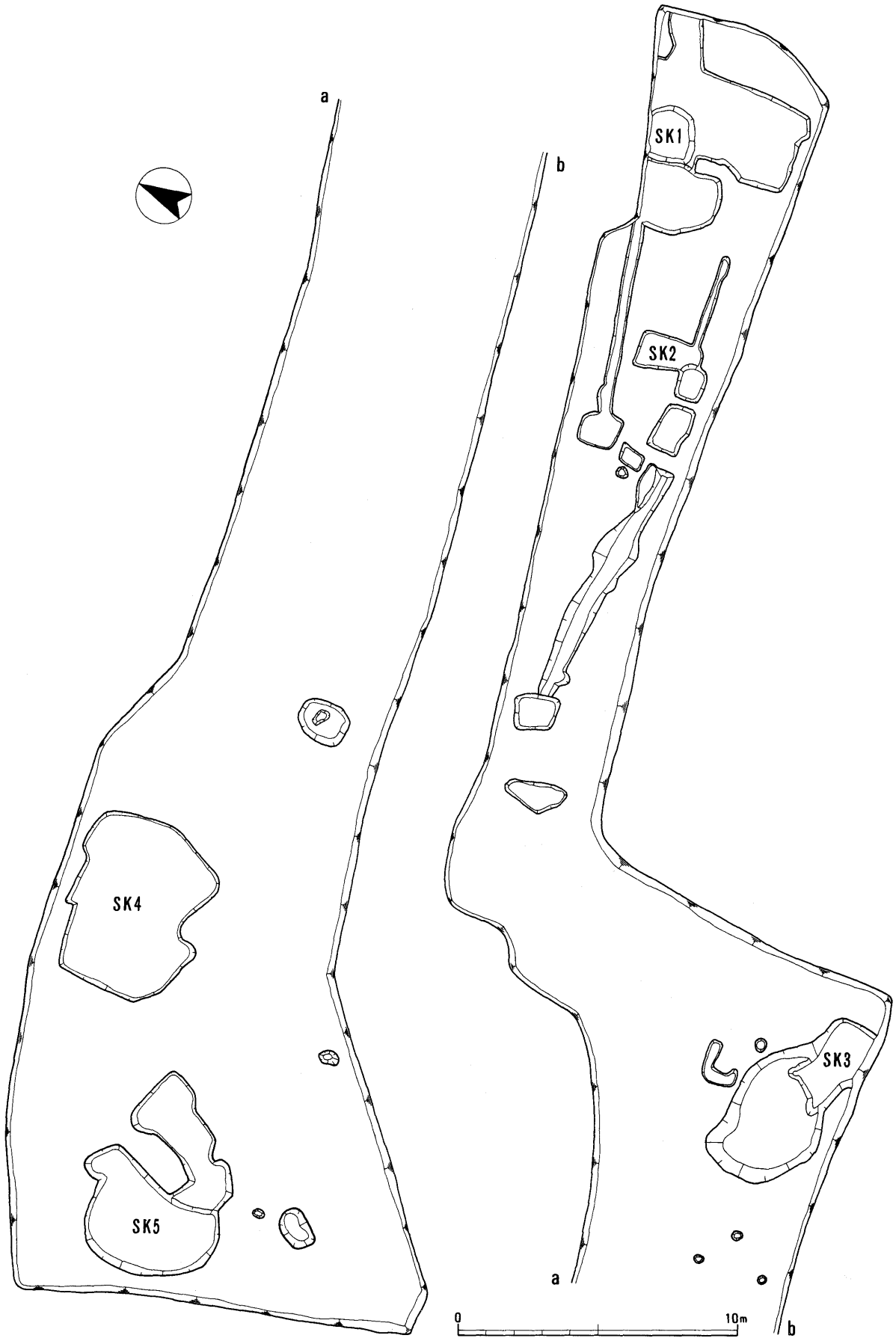
SB1 桁行3間×梁行3間の規模を持つ。北東方向の入側柱の一つは検出されなかった。よって、総柱建物とはならず、この一画は土間であったと判断した。柱穴の残度は良好で、柱の木質部の残欠こそなかったが、掘形の中に柱痕跡が認められるものも幾つかあった。

SB2 その大部分が調査区外にあるため正確にはわからないが、SB1とほぼ同じ規模ではないかと推定される。SB1とSB2は柱通りの方向を揃え、東西に並ぶが近接しているため、同時期に立っていた可能性は少ないものと思われる。いずれの建物も柱穴からの出土遺物が細片である上に極端に少なく、時期を確定するまでには到っていない。

SK3 SB1の北側に近接する土坑で、井戸ではないかと考えている。掘形は袋状を呈しており、



第105図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第106图 A区遺構平面図 (1 : 200)

今も豊富に水が湧きだしている。出土遺物より、概ね平安時代後期に埋没したものと見られる。仮にSK3がSB1・2に伴う井戸であるならば、自ずと掘立柱建物の存続時期も限定されてこよう。

調査区の北側にある溝からは、鎌倉～室町時代初頭の遺物が数点出土した。しかしこの溝の性格については、判断できる材料を何ら検出できなかった。

3 C区の遺構

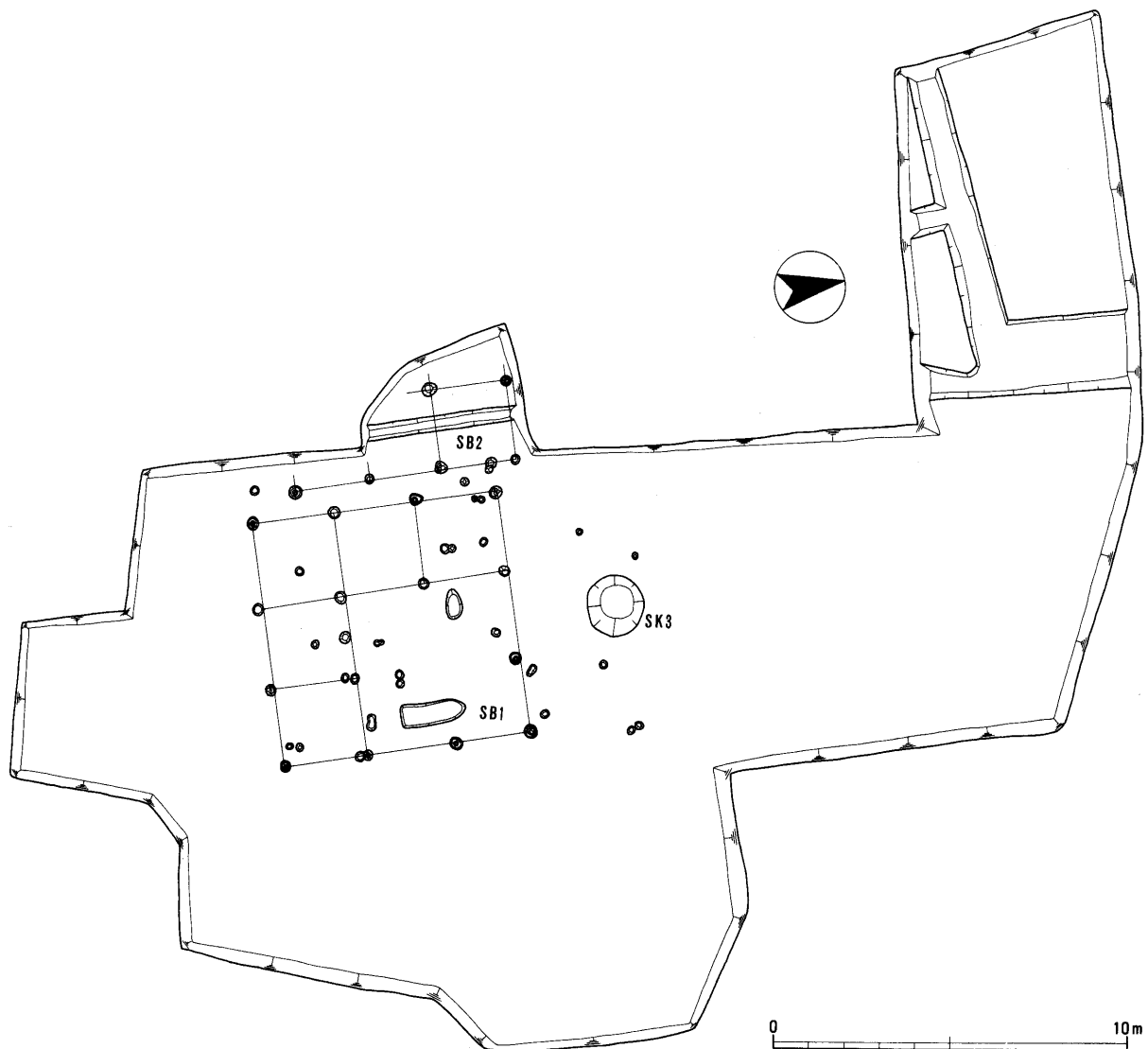
C区の南側は大きく落ち込み、下の田面との比高差は1.5m程もあった。調査前の現況は畑地で、遺物包含層はなく、表土より30～40cmで橙褐色粘質土の遺構基盤層に至る。遺構としては、掘立柱建物を3棟と土坑を1基検出した。

SB1は桁行3間×梁行2間の規模を有する建物で北東隅の柱穴からは破片ではあるが、4個体分の

土師器皿が出土している。恐らくは鎌倉時代末から南北朝期頃の建物と思われるが、SK4よりもほぼ同時期の土師器壺が出土しており、両者の関係は深いものと判断される。

SB2はその大部分が調査区外にあるが、桁行4間の規模を持つ建物である。柱穴は小振りで浅く、おおむね方形を呈している。出土遺物を全く伴わないが、近世の建物であると考えている。また1間四方の小規模なSB3も検出したが、何のための建物であるかは不明である。

SB1の柱間は、桁方向が約2m、梁方向が約2.3mと不規則である。またSB2も桁方向の柱間のほうが狭く約1.5m、梁方向は約2.2mであった。



第107図 B区遺構平面図(1:200)

(2) 遺物

1 A区の遺物

SK4・5より出土の遺物は焙烙をはじめ茶釜・埴・鉢・皿・羽釜、また施釉の碗や土師器の小皿等、多種にわたっている。ただ土器の完成品は全く無い。

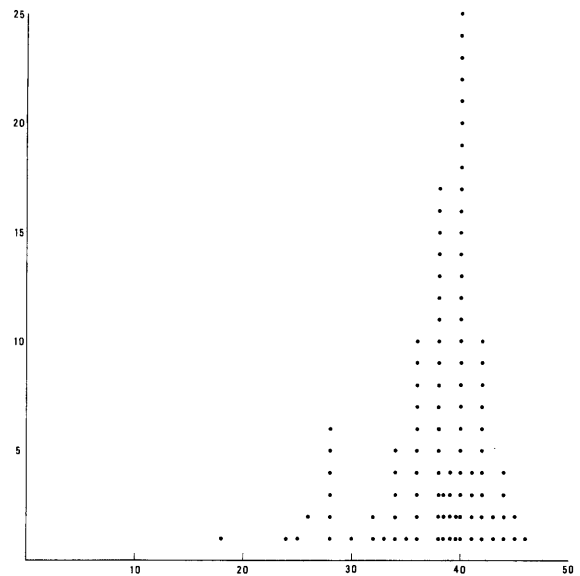
A SK4の出土遺物

焙烙(1~29) 他の器種に比べて圧倒的な量であり、いくつかの形態に分類することができる。

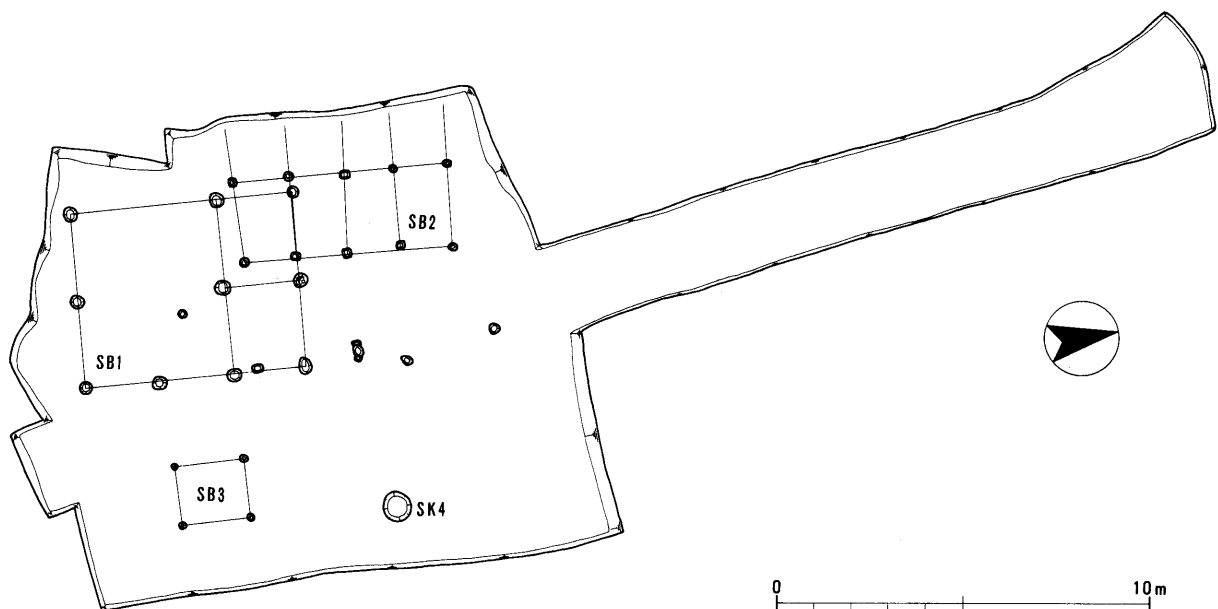
まず、法量的に大別する要素が2点ある。その第1点に口径の大小がある。第16表に注目して頂きたい。これはSK4・5出土の比較的残りの良い焙烙の口径を横軸にとり、縦軸にはその個体数をとって傾向を見たものである。SK4・5が土器生産に伴う廃棄土坑であった可能性を考慮に入れるならば、若干の焼き歪みもあると思われるが、40cm前後と30cm前後にそれぞれのピークがあるという特徴は読み取れよう。すなわち焙烙は、口径という要素をもって2分類することができる。

もう1点は器高である。完形品がないため厳密性を欠くが、傾きがおおよその指標となろう。つまり1~25の焙烙が浅めの部類に属するのに対し、26~29は深めの部類に属する。そのうち26は口径的には大に、27~29は小に属し、数量的には少ないものの深めの焙烙にも先に示した口径の大小の特徴のあることがわかる。よって、口径的要素で40cm前後の

ものをI類、28cm前後のものをII類とし、そのうち浅めのものを1類、深めのものを2類とする。例えば、26はI-2類、25はII-1類である。ちなみに出土数がI類に集中している理由としては、次の様な解釈が可能であろう。即ち、大型の焙烙の需要が小型の焙烙のそれを上回っていたという解釈と、焼成時に口径が大きいことによって焼き歪みがおこり失敗する確立が高かったのではないかという解釈



第16表 口径分類による焙烙個体表



第108図 C区遺構平面図(1:200)

である。

さて調整に伴う口縁部分の特徴の差で、さらに細かく分類してみたい。ただ数量的な問題により、I-1類で行うことを予め断っておきたい。

出土した焙烙の基本的な調整法は、口縁部を大きく外反させ、その内外にヨコナデを施していることである。体部の内外面はナデを基本とするが、概ね外面底部付近にはヘラケズリも見られる。中には内面の一部にもヘラケズリを施しているものもある。その中で口縁部を内側に折り返しているもの（1～13）と、それが認められないもの（14～19）とがあり、二つに大別することができる。よって前者をA類、後者をB類とする。また口縁部が三角形を呈するものと、それが明瞭でないものという特徴もあげられる。前者をa類、後者をb類としておく。

以上分類のための指標について述べたが、SK4出土の焙烙がどの分類に属するかを表にしたものが第17表である。

		A		B	
		a	b	a	b
I	1	8～13 (22, 23)	1～7 (20, 21)	17～19	14～16
	2	26			
II	1	24, 25			
	2	28	27	29	

第17表 土坑SK4出土焙烙分類表

埴 (30～47) 個体数は、かなりの差はあるものの焙烙に次いで多い。このうち30と31は、口径が他に比べて著しく大きい。さらに口縁部がやや弯曲しているものの、他の埴ほど強く外反させていない点で若干の相違点が認められる。しかし口縁端部の調整に関しては、先の焙烙と同様内側への折り返しの有無や、三角形を呈するかどうかという特徴も見られる。しかし数量の不足により、明確な分類は行えなかった。ただ、1点のみではあるが、48の様に全く異なった形態を持つものもある。

茶釜 (49～51) 49と51は口縁端部を外側に折り返している。但し50にはそれが認められない。反面50と51には口縁端部内側に強い面（蓋を受けるためのものと考えられる）を持つことと、体部外面にハケメ調整が施されているという共通点を有する。加えて口径の大きさでも、49と50・51とは明らかに異質の要素を持つと言えよう。しかし、口縁部の特徴

に注目するならば、50のそれが比較的長く直立しているのに対し、49と50はやや短めで外傾していることがよくわかる。よって新旧は不明であるが調整法として、51が49と50の中間に位置するような流れを想定することも可能であろう。

羽釜 (53・54) 出土個体数は、他の器種に比べて非常に少ない。全体的なフローションは碗状に内傾し、やや浅めであると推定される。鏝は貼り付けられているが小さく、装飾性が高い。調整法は口縁部内外面がヨコナデで、他はナデが基調となっている。但し、52には体部内外面の一部にヘラケズリが施されている。

皿 (55～62) 口径の大きさには若干のバラツキがあるが、口縁部をやや外反させている点で共通した形態を持つ。この点50のみは異質であり、このタイプの出土はSK4・5ともこの1点のみである。ただ61には底部内面に剥離の痕跡があり、ツマミなどの存在を想起させる。よって確証はないが、61のそれに類似した59・60は、茶釜などの蓋である可能性も否定できない。

施釉陶器 (63～66) 施釉陶器としては、63から66の4点が出土している。うち65は脚付きの鉢で、他は碗であった。

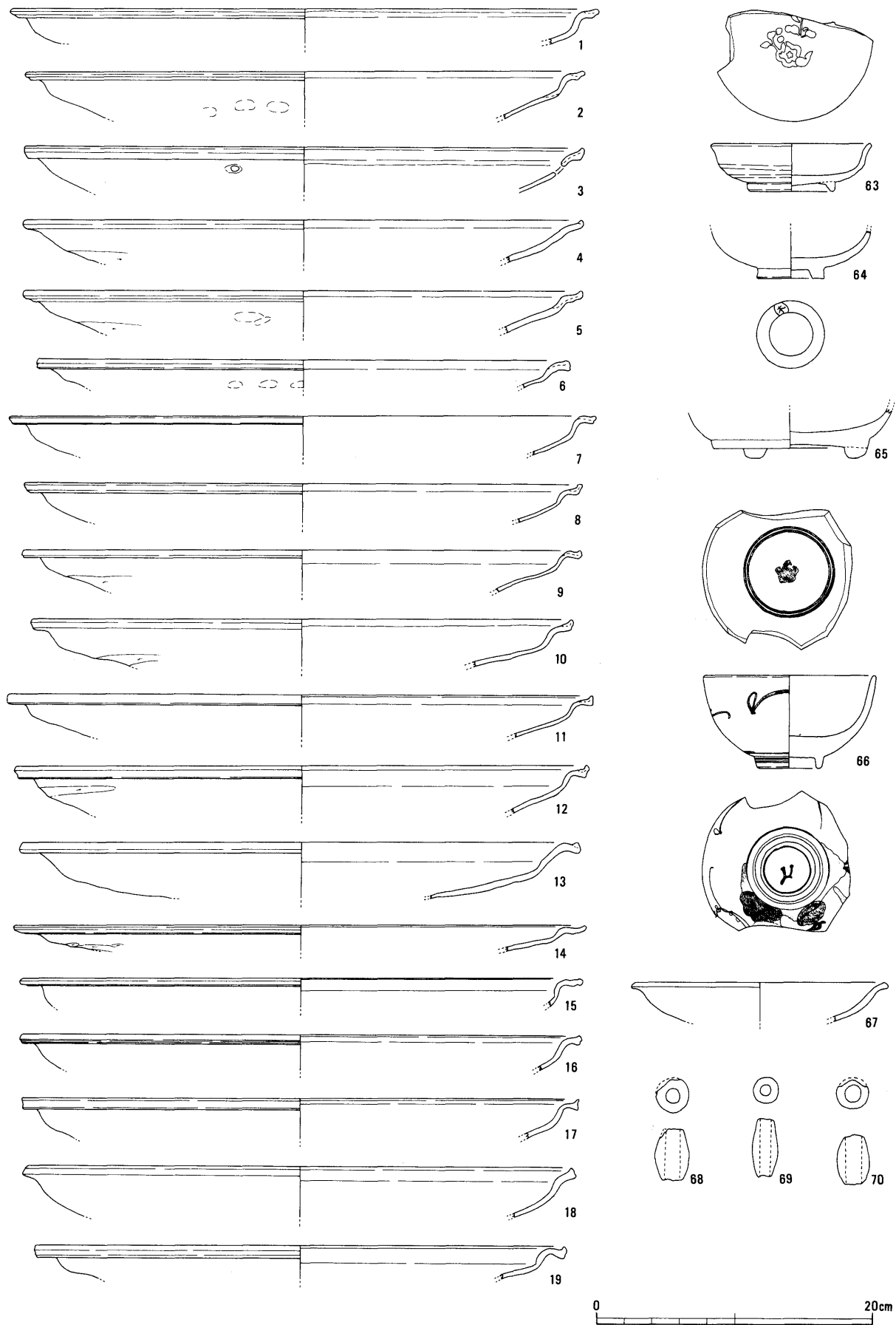
63は高台部を除いて灰釉がかけられている。恐らく浸けがけされたものと考えられる。内面中央付近には梅花をモチーフにしたと思われる文様があった。これは、他の釉薬を用いての絵付けではなく、文様の部分が爛れたような状態になっていた。また一部文様が薄くなっている所もあり、確証はないがスタンプ状の工具で描かれたものと考えられる。

64は高台底部を除き全面に鉄釉が施されている。また高台底部には印の様なもので「㊦」と書かれている。

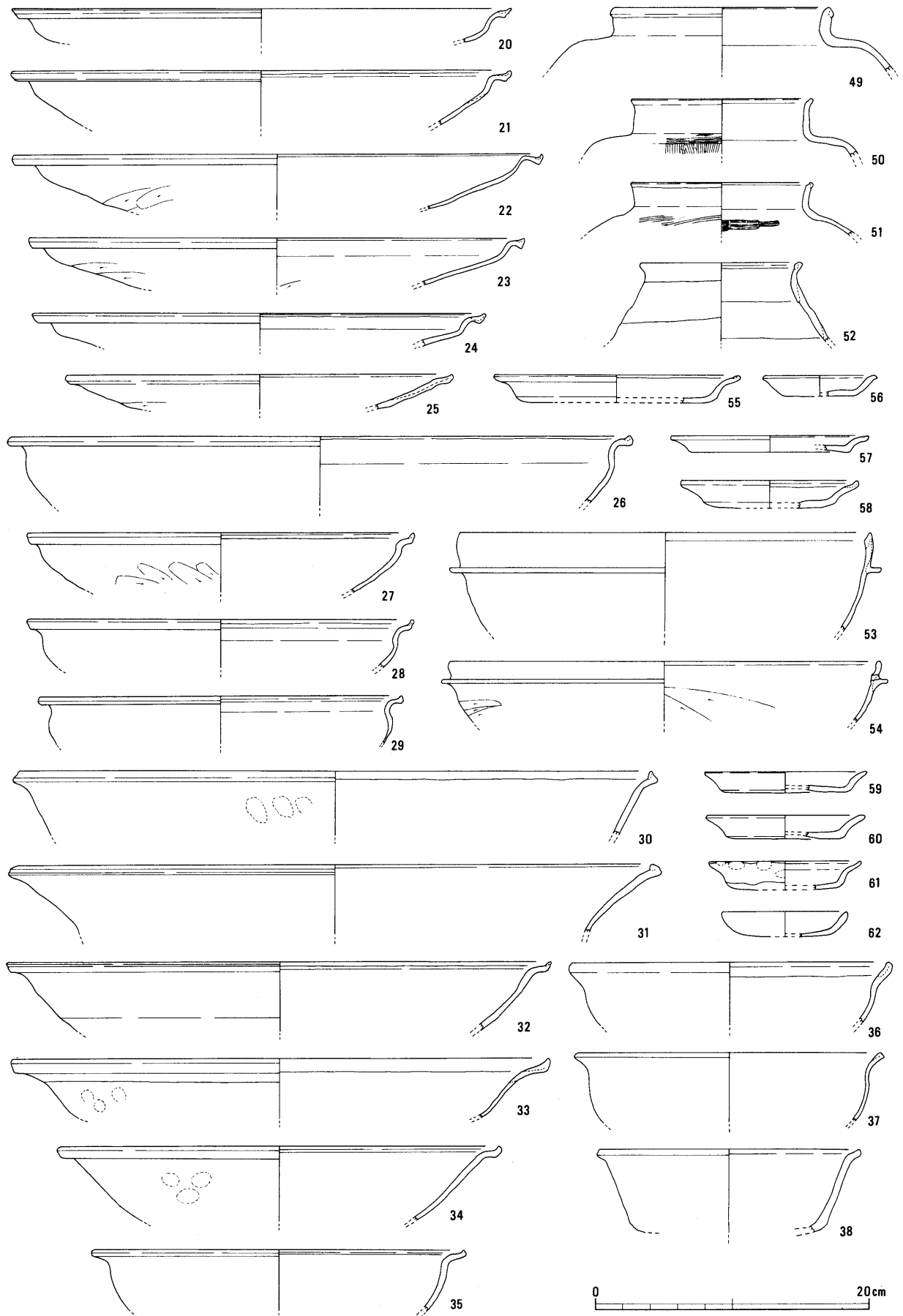
66の碗は磁器で、透明釉にコバルト釉で青絵付けが施されていた。

土錘 (68～70) 土錘はSK4から3点出土した。大きさは何れも比較的小型で、重さも10g前後であった。68と70は表面の一部が剥離しており、何かの軸に粘土を少なくとも2回以上巻き付けるようにして作られたものと考えられる。焼成は非常に良い。

土錘は近郷の蓑村を中心に第二次世界大戦前後ま



第109图 A区SK4出土遺物実測図(1) (1:4)



第110图 A区SK 4 出土遗物实测图(2) (1:4)

で多くの家々で作られ、伊勢市の大湊等に出荷していたそうである。この地域では土鍾を「ユワ」と言っている。

把手鐔付茶釜型注口土器 (72) SK 4より出土したものとしては、72の土器がそれにあたる。図示できるものはこの1点であるが、他にも数個体あることが破片より確認できる。

全体的なフローションは、SK 2より出土した同器種の73の土器によって推定できる。鐔と注口は貼り付けで、体部表面にはハケメが施されている。底部は破片から判断すれば平底で、ヘラケズリが見られる。また、注口部分にあたる体部には径約4mmの穴が外側より三ヶ所開けられている。

硯 (71) 海部が欠落しているものの、比較的良

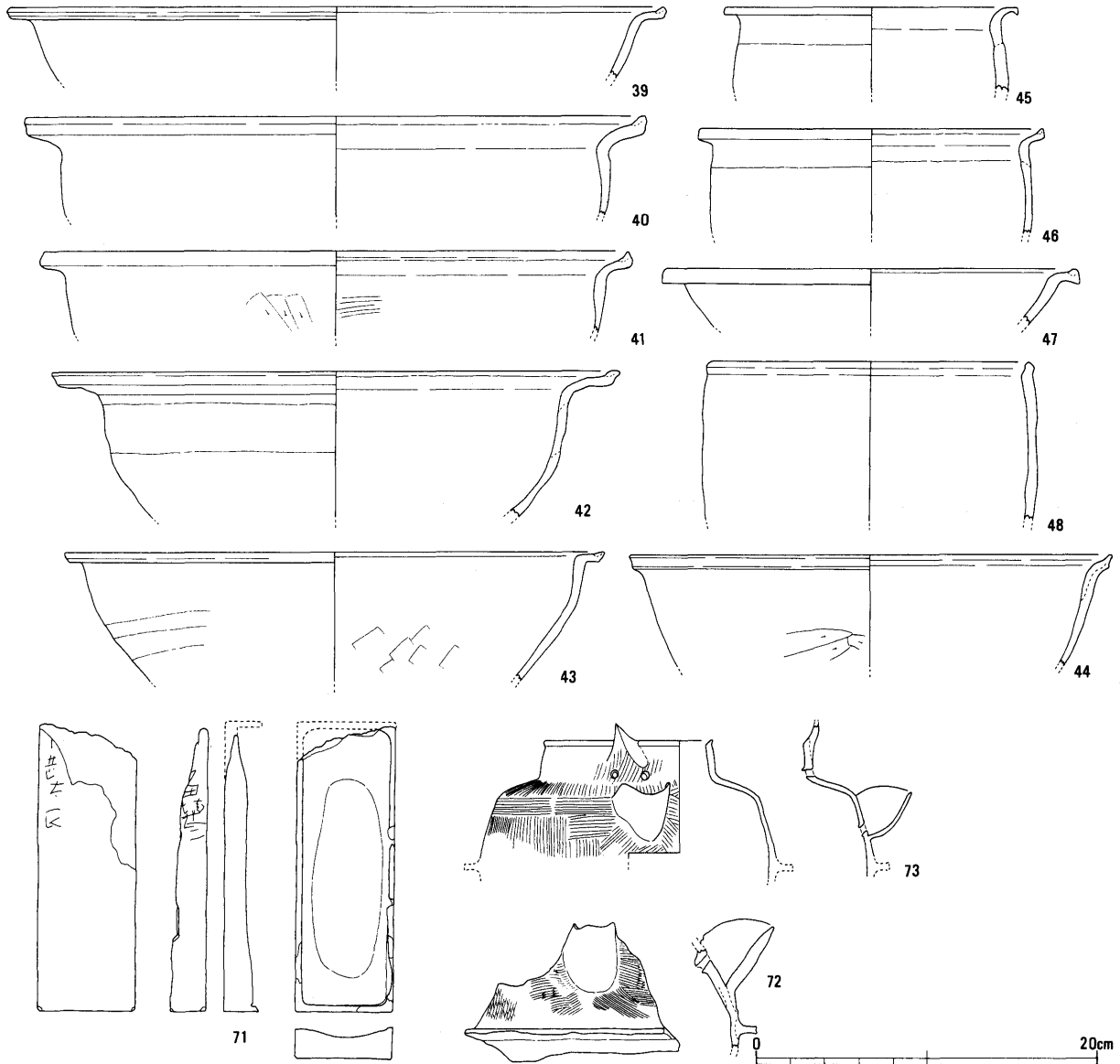
好な状態で出土した。かなり長期間にわたって使用されたようで、陸部は擦り減って窪んでいる。底面と側面には陰刻で名前らしき文字が彫られている。陰刻の深さは底面のはしっかりしていて深い、側面のは非常に浅く、文字の形も明確でない。底部の文字は「甚太良」と読める。

B SK 5の出土遺物

		A		B	
		a	b	a	b
I	1	74, 75, 79 80	78	77	76
	2				
II	1			81	82
	2	83			

第18表 土坑SK 5出土焙烙分類表

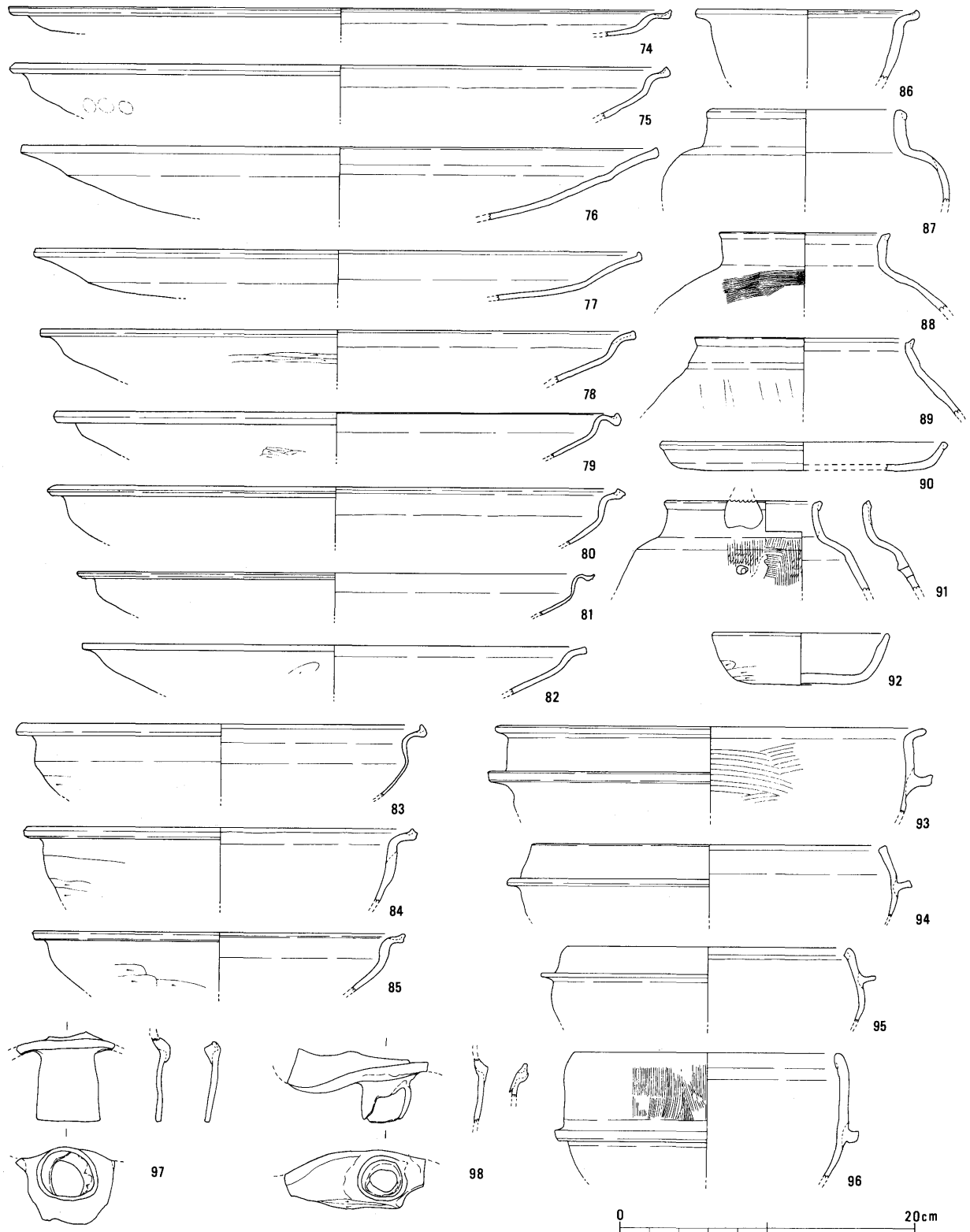
焙烙 (74~83) SK 4出土焙烙の分類の範疇に



第111図 A区SK 4出土遺物実測図 (3) (1 : 4)

入るものであり、表18において分類しておいた。ただ、76と77については器形・胎土において著しい相違が見られ、注目される。また76と77のタイプはSK4からは出土せず、SK5からの出土もこの2点のみであった。

ところで、近世から近現代にかけて焙烙を生産してきた大和地方の事例でも、型を用いて作っていたことが報告されている。また本遺跡が属する明和町蓑村においても、焙烙を作るのに型を使用していたとの古老の証言を得ている。これらの事実に加え、



第112図 A区SK5出土遺物実測図(1:4)

SK4・5の焙烙において、胎土が非常に緻密な上に焼成も良好であるため必ずしも明瞭ではないが、例えばSK4出土の21のように頸部付近に粘土の接合痕跡のみえる個体が、未実測のものを含めて数点確認できるのである。

以上のことより、76・77は焙烙の型である可能性が高いものと判断されるのである。

塀 (84~86) 口縁端部は三角形状を呈し、内面に折り返している。86はやや小振りで、深めである。

茶釜 (87~89) SK5からは、図示した3種の茶釜が出土している。3種とも口縁端部を外側に折り返している点で共通した要素を持つが、89のみは著しく異なった形態を有している。SK4出土の茶釜と比較すると、87は49と、88は51と、また89は52とそれぞれ共通した特徴が認められる。

皿 (90) この種の皿はSK4・5共でこの1点のみであった。口縁端部は外側に厚く折り返され、縁帯状を呈している。

把手鐔付茶釜形注口土器 (91) 図示したものを含めて、数個体分出土した。注口部以下、下半部が失われているが、SK4出土のものと同器種であり、相違点はない。

杯 (92) 口縁部にはヨコナデを、外面底部付近にはヘラケズリが施されている。器形的には平安時代初めの頃の杯のように見えるが、胎土・焼成は共に非常に良好で、他の出土遺物と同様やはり近世のものと考えたい。ただこの1点のみの出土であり、他の器種とは性格を異のしているように思われる。口径は約12cmで、あるいは、有爾郷が果たした歴史的役割から推定すれば、これは所謂「神宮御料土器」で、四寸土器に相当するものではないかとも考えられる。

羽釜 (93~96) 93は口縁部を大きく外反させると共に、内面には粗いハケメが施されている。この点他の羽釜と著しく異なる。また煤が付着し、実際に使用されたと考えられる点も他と異なる要素である。よって93の羽釜はこの地で生産されたものではなく、搬入品ではないかと考えられるのである。

十能 (97・98) 図示した遺物をはじめとして、数個体分の破片が出土した。皿部はほとんど失われているが、端部はナデられ、底部にはヘラケズリが

見られる。

把手は皿部を貫通させるかたちで付けられ、持つには不十分なほど短い。よって木などの棒を挿入させて使用したものと考えられる。

2 B区の遺物

第113図に示した99~129の遺物は全て井戸と推定されるSK3からの出土で、一括性が極めて高いものである。

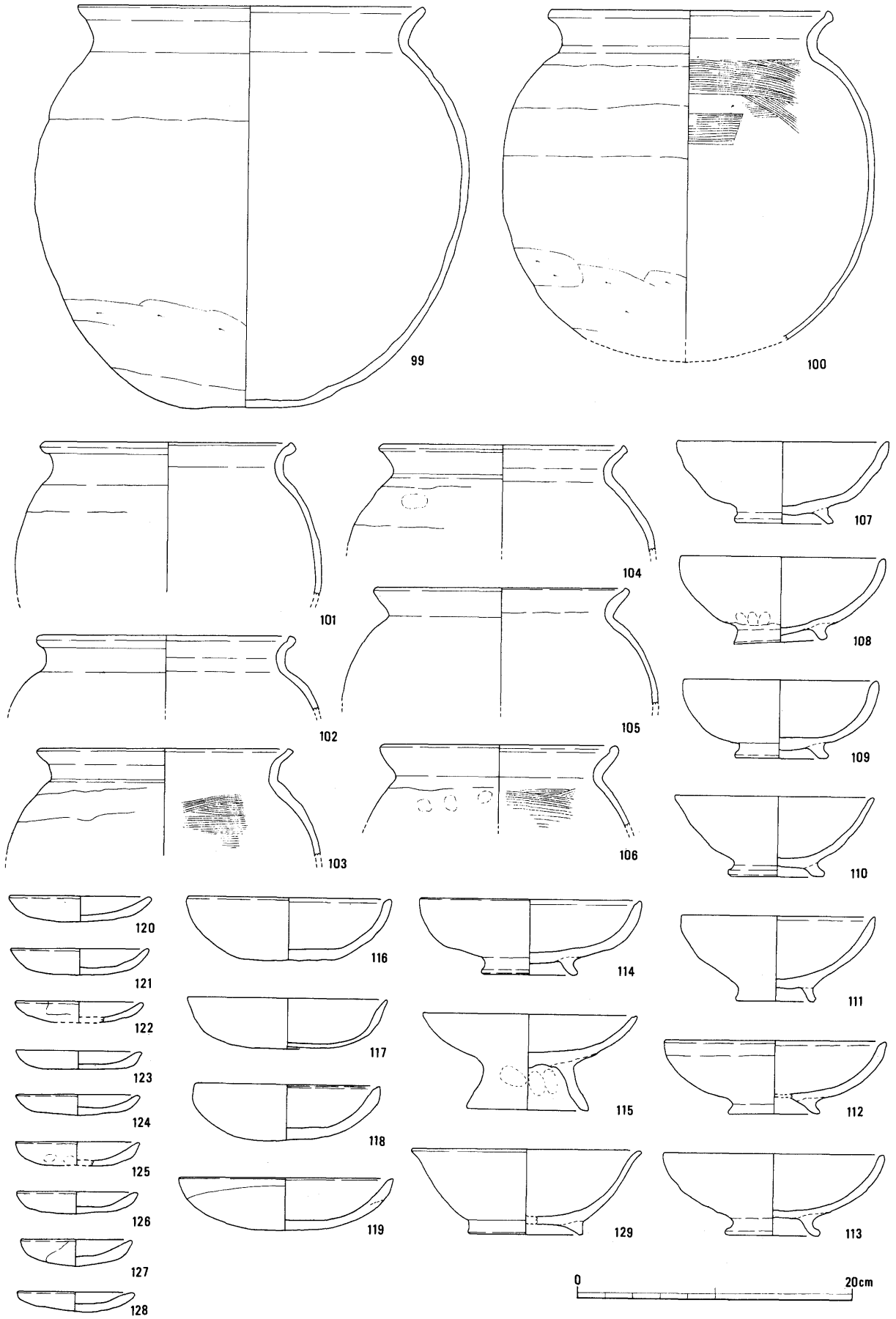
遺物の実年代としては、最上層よりの出土ではあるが、129の山茶碗がその指標となり得る。この山茶碗は、『瀬戸市歴史民族史料館研究紀要』Ⅱの編年表によればⅠ段階2型式ないしはⅡ段階1型式に対比できるものであり、概ね11世紀終末から12世紀の初頭であると考えられる。その点116及び118・119の土師器碗は『斎宮跡調査事務所年報1984』での編年表標式遺構SK1730及びSK1074に相当し、両者に矛盾はない。

土師器甕は、99~106の個体が出土した。この中には頸部を比較的意識しているもの(101~103)と、そうでないもの(99・100・104~106)という若干の相違が認められるものの、個体差の範疇に入るものであろう。調整は摩耗が著しいため不明瞭な部分もあるが、概ね体部内面にハケメが、底部外面にはヘラケズリが施されている。体部外面は基本的にはナデであるが、指頭圧痕の残る個体もあった。

土師器碗としては、高台を持つもの(107~115)と持たないもの(116~119)が出土した。若干異質な117を除いて共通的な特徴は、内面の器壁が比較的滑らかであるのに対し、外面のそれはかなり荒めであるということである。このことは、内面が型作りであることを想起させる。事実110並びに111の内面には、かすかではあるが布目圧痕が残っていた。胎土や焼成もほぼ均一であるが、117のみは色調も他に比べて白い上に器壁も薄手である。器形も碗というよりは杯に近いものと言える。

3 C区の遺物

塀 (130~131) SK4よりこの2点のみが出土した。胎土には若干多めに砂粒が含まれているが、器壁は薄い。口縁部の形状はやや内湾しており、頸部内面には比較的明瞭な稜線を持つ。体部外面には非常に細かいハケメが密に施され、底部外面にはへ



第113图 B区出土遺物実測図(1:4)

ラケズリも見られる。

こうした特徴からすると、伊藤裕偉氏の南伊勢系鍋の編年案^①の第1段階b型式に相当すると思われ、概ね鎌倉時代末から南北朝時代頃ではないかと考えられる。

皿 (132~135) SB1の北東隅柱穴からの一括出土である。胎土は緻密で、色調は淡褐白色を呈する。口縁部は内弯するが、それほど極端ではない。器壁は底部が特に薄く、2mm前後であった。年代的には、SK4の埴とほぼ同時期であったと考えられる。

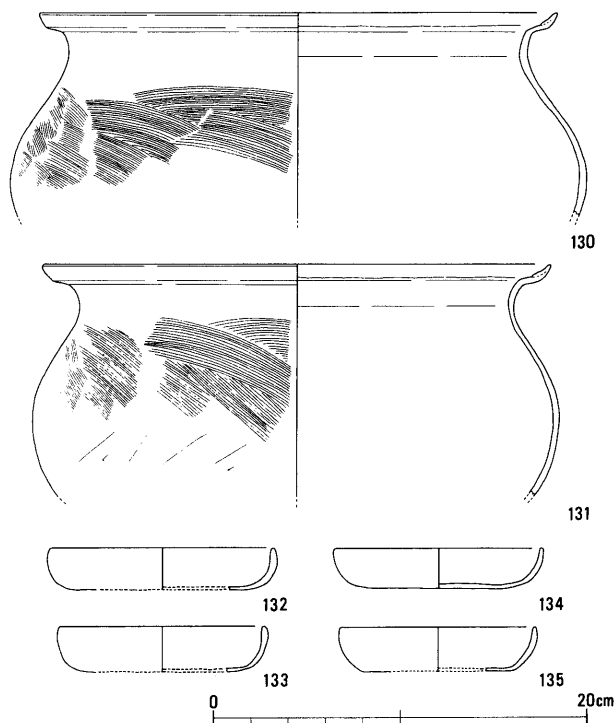
ところで、SB1からはこの北東隅の柱穴からのみ遺物が出土した。この方向は所謂「鬼門」にあたり、陰陽道的な鎮地の祭との関係も考えられる。

(註)

- ① 同氏「中世南伊勢系の土師器に関する一試論『Mie history』vol. 1 1990

(3) 結 語

今回の調査では、外山遺跡中のほんの一部のみの発掘であったが、平安時代後期から近世にわたる複合遺跡であることがわかった。また特に、有爾郷での土器生産に関わる遺構が検出できたことも特記



第114図 C区出土遺物実測図(1:4)

すべきであろう。よって以下において、中世から近世にかけての有爾郷の土器生産に関して若干の考察を行い、本報告の結語にかえたいと思う。

有爾郷の「ほうろく」について

伊勢神宮並びにその別宮・末社摂社での各種の神事に用いる、所謂「御料土器」が多気郡有爾郷において製作されてきたことは、既に良く知られているところである。その起源がいつ頃まで遡り得るかについては詳らかにしがたいが、『皇太神宮儀式帳』^①には「土師器作物忌」が御料土師器三千二百六十口を、また「陶器作内人」が陶器を四百六十五口焼いていたことが記されている。よって、遅くともこの『儀式帳』が成立した延暦年間(782~805)以前までは遡り得るものと見做すことができよう。

この当時の器種はまことに多様で、主なものを列挙すれば、土師器では甗・横釜・瓦泉・埴・坏等が、陶器(須恵器)では、瓶・平釜・塩坏・缶等があり、土師器は十七器種、陶器は十二器種を数える。それに対して今では、昭和四十六年現在で総数こそ約六万点にのぼるが、器種は土師器のみとなり、三寸・

四寸・六寸土器や御箸台・大土埴など、僅かに十一器種となっている^②。特に陶器が失われていることは注目される。ただ、『寶治元年内宮遷宮記』^③には後鎮祭用の供物として「陶土器二十」が挙げられており、鎌倉時代の後期頃までは残っていたものと考えられる。

さて、A区SK4・5が土器製作に伴う廃棄土坑の可能性の高いことは、既に指摘した通りである。このことは、この地で焙烙が多量に生産されていた事を想起させるのである。『河辺家年中行事』十二月十三日条^④には更にそれを裏付けるような注目すべき記述がある。

一有爾郷より正月入用之炮礫調進の事
祝儀銀札貳匁五分
右紙=包のしのしと書遣ス事
辰年六匁五分遣ス事

「一有爾郷より正月入用之炮礮調進の事
祝儀銀札六匁ニ五分ニ相成候事
右紙ニ包のしのしと書遣ス事

「右大炮礮貳枚手付、小炮礮壹枚持参、近年元方焼出し難波ニ付、御断申上候様申聞候に付、為運賃別段壹匁相願候ニ付、例外ニ遣ス、都合三匁五分相渡ス」

本史料を所収する『神宮年中行事大成』前篇の解説によれば、この史料は河辺大宮司家の公私にわたる年中行事を記したもので職掌覚書と考えられること、また嘉永～文久年間（1848～1864）の成立であることが書かれている。恐らく時期的にも本遺構の遺物のそれと接近しているものと考えられる。

さてこの史料によると、正月用の「炮礮」が有爾郷より調進されていることを知りうるが、この「炮礮」こそA区出土遺物の大半を占める焙烙でと考えられる。このことは、先に述べたように、出土焙烙の口径が40cm前後のもの30cm前後の2種に分類できた事実が、史料中の「大炮礮・小炮礮」に相当すると見做されることでも裏付けすることができる。

ところで「炮礮」調進に際して、祝儀として二匁五分と六匁五分が銀札（恐らく当時山田を中心として流通していた「羽書」であろう）で支払われている。また例外としつつも、運賃として別に一匁支払われている。この事実は、断定はできないものの、この調進が神宮神事のための言わば「公」のものでなく、河辺家個人のための私的なものであった可能性を想起させる。ちなみに、有爾郷に支払われた金が当時の相場としてどの程度のものであったかについては、嘉永2年（1849）3月、井関溝普請のために度会郡小川郷の村々より出された人足賃が一人二匁であったことが、その指標となろう^⑤。

では、かかる有爾郷の公私にわたる「ほうろく」の調進は、いつ頃まで遡り得るのであるか。この点に関して、「内宮子良館記」明応6（1497）年3月3日条^⑥に次の様な記述があり、少なくともこの時期までは遡り得ることが知れる。

有爾御土器不参、仍長官ヨリ食之代百文御下行、然ヲ内外六方へ配分スル、大ほうろくニニ廿四文一ハ飯屋殿出納給ル、ぼうろく十廿文、小ほうろく六十文、箸鉢二十文、土器九連十二文（下略）

この史料が、管見内での有爾郷「ほうろく」の初見である。ここでも、『河辺家年中行事』と同様「ほうろく」に大小の2種のあることが注目される。また中世後期における山田・宇治を中心とした南伊勢地域での土器の価格が具体的に知れる点でも、非常に重要な史料といえよう。例えば、「大ほうろく」は1個で12文、「小ほうろく」は6個で10文であった。この時、同じ「ほうろく」でも大きさによって単価に大きな開きのあることに気付くのである。このことは、時期的には中世と近世という相違があるものの、外山遺跡A区出土の焙烙が大口径のものに集中していることに関連して、示唆的である。

さてここでまず検討すべき問題は、この大小「ほうろく」の価格が当時の土器の一般的なそれと比較して、どうであったかである。残念ながら「ほうろく」の価格を具体的に示した他の中世史料は、現在のところ管見に及んでいない。ただ参考可能な史料として、戦国期の成立である『諸芸方代物附』^⑦を挙げることができる。それには「かわらけの代」として「十と入は百ニ五、七と入は百ニ十四」といった記述がある。つまり、「十と入」のカワラケは100文で5個、「七と入」は100文で14個、それぞれを単価にすれば、前者は20文、後者は約7文となる。最小のものは「三と入」で、単価は1文であった。天正9（1581）年伊勢如芸によって著された『寸法雑々』^⑧には「九寸は九度入と云」とあり、これにより、『諸芸方代物附』中の「三と入」が三寸土器を表わしていることがわかるのである。

ところで、先に『内宮子良館記』中には、他に「ぼうろく」という器種名も見える。これは『氏経神事器』^⑨（以降『神事記』と略記）中の「ホンカ・ほんか」と同一であると考えられる。この名称は中世後期成立の『内宮年中神役下行記』^⑩（以降『下行記』と略記）や、近世に成立したとされる『内宮子良年中諸格雑事記』^⑪（以降『雑事記』と略記）中にも散見され、漢字としてはそれぞれ「盆埵」・「盆瓦」を当てている。

ここで注目されるのは『神事記』文正2（1467）正月7日の、「ほんか代ニ七度入二」という記事である。断定はできないが、『神事記』に「土器十五連、内三連七ト入」とあるところより、「ほんか」

の代わりに用いられた「七度入」とはカワラケであると考えられ、このことから、「ほんか」自体皿状ないしは浅い椀状の土器であったと推定できるのである。

『内宮子良館記』によれば、明応年間（1492～1501）頃の「ぼうが」の単価は2文であった。よって間接的ではあるが、当該期の南伊勢地域における「七寸土器」は単価2文であったと考えられるのである。これを先の『諸芸方代物附』中の「七と入」土器の単価と比較すれば、凡そ3分の1であったことが判明する。この価格差は、中央と地方の差異に依るところ大であると思われるが、かなりの安値であったことは注目し値しよう。そして、かかる傾向は、他の器種においても概ね同様であったと考えられる。

次に問題とすべきは、中世史料中に見える「ホウロク」が、外山遺跡A区で出土したような豆等を煎るための所謂「焙烙」と、器形・使用法などが同一であるかである。

結論を先に述べれば、中世の「ホウロク」は名称こそ同一であるが、器形・用途は近世以降の焙烙と全く異なっていた可能性が高いのである。以下記述上の混乱を避けるために、A区で出土したような器形をその典型と考え、それを「焙烙」と記していささかの検討を行うことにする。

『雑事記』には「土器依洪水難等自有爾不調進時事」として、次のように記されている。

右上錢直百四拾八文也、割合、居竈二口代廿四文
堀六代拾貳文、盆瓦六枚代拾貳文、御箸臺三本代六文、カワラキ九連代十貳文、
一見して、『内宮子良館記』の記述と酷似していることは明白である。『雑事記』は近世の成立であるとされているものの、上記引用史料については単価が中世の『内宮子良館記』のそれと類似している点が多く、恐らくは『内宮子良館器』が記された時期をあまり隔たらない頃の記録を写したものではないかと思われる。

さて、両者の記述を克明に比較すると、各器種が対応していることに気付く。つまり「大ホウロク」は「居竈」に、「小ぼうろく」は「堀」に対応しているのである。このことは、次の2つの仮説の設定

を可能とさせる。

第一点は、『下行記』や『神事記』中に散見される「竈・堀」が必ずしも文字通りの「カマ・ナベ」と訓じなかったのではないかである。この点については、『内宮子良館記』中に明瞭に「ホウロク」と記されているにもかかわらず、ほぼ同時期の、より多くの器種名が載せられている『神事記』・『下行記』には全く見られないことから推定できる。

第二点は、器形においても浅い焙烙形ではなく、文字通り深い堀形ではなかったかである。

以上の2点について示唆的なのは、『皇太神宮年中行事』^④中の「一人者自酒殿請取堀杓各一口」という記述である。

『皇太神宮年中行事』は建久3（1192）年6月内宮荒木田忠仲によって編ぜられたもので、原本はなく、幾つかの写本が伝わっている。その内、『神宮年中行事大成』前篇に所収されている元和3（1615）年の写本には、「堀杓」の肩に片仮名で「ホウロクヒジャク」とルビが付してあるのである。このルビは、同じく写本の『続群書類従』所収『建久三年皇太神宮年中行事』^⑤には見られない。よって本来原本にはこのルビはなかったものと考えられ、『神宮年中行事大成』所収の写本が成立した元和3年以降に付けられたものと言える。

ところで、『皇太神宮年中行事』には先の引用部分に続いて、次のように記されている。

件堀水御塩湯所石疊副置、宮司參宮之時以杓宮司手令洗之後、件於堀杓者返上之退出例也
つまり、この時の「堀」は手水用の水を入れるための容器であったことがわかるのである。

同様の記事は、宝暦2（1752）年の成立とされる『山向内人年中勤行式』^⑥にも見える。即ち同書2月9日の条によれば、山向内人は、長官（一祢宜）より錢43文や紙・柄杓などと共に「ほうろく」を一つ下行されている。そして大宮司が參宮する際の手水は「山向勤」となっていて、この「ほうろく」が『皇太神宮年中行事』中の「堀」と同じ用途であったことが知れるのである。

以上のことは、少なくとも近世の神宮においては、煮炊き用の「炮礮」と、手水用の水を入れる「ほうろく」のあったことを示している。煮炊き用の「炮

碌」が、器形的にA区出土の焙烙と同一であることはほぼ間違いなからう。反面、用途的にも、また「埴」に殊更「ホウロク」とルビを入れていることから、手水用の「ほうろく」は、より埴に近い形のものであったと考えられるのである。

近世の神宮において手水用の容器を「ホウロク」と呼び慣わしたのは、少なくとも明応年間には「ホウロク」という言葉が存在した以上は、すぐれて中世的な慣習の名残であると言うことができる。また中世と断定しうる焙烙形の土器が南伊勢地域においてほとんど確認されていないこと^⑮を考え合わせるならば、近世における焙烙の祖形が中世の南伊勢系埴に求められるものとした伊藤裕偉氏の分析^⑯は、十分な妥当性を持つものと言えよう。勿論、本文で取り上げたのは「神宮土器」という一種特別なものである。しかし中世の神宮関係史料に見える土器が

決して一般的な土器と隔絶したものではなかったことは、有爾土器不参の際、「神宮土器」が銭によって購入されている記事が多く見受けられることから^⑰明白である。事実中世後期の山田には、御器座が存在していた^⑱のである。

以上、主に中世における南伊勢での土器について若干の検討を、文献史学の視点より試みた。しかし依然残された問題も山積している。三重県内での中世遺跡の調査事例は、今後更に増加していくものと思われる。そうした中で、残された諸問題も文献・考古の両史学の有機的な結合によって、徐々に解決されて行くものと信じる次第である。よってこの小稿が、今後の研究の一助となれば、これに過ぎる幸せはない。

(小林 秀)

(註)

- ① 『群書類従』1輯 神祇部
- ② 小川啓司氏「神宮御料土器にこめられた古代のころ」(『瑞垣』128)
- ③ 『大日本史料』5-11
- ④ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』前篇
- ⑤ 『度会町史』所収「日向村火打石川新井関溝御普請郷組村々より手伝人足名前帳」
- ⑥ 『統群書類従』1輯下
- ⑦ 『統群書類従』33輯上
- ⑧ 『古事類苑』の引用史料を参照
- ⑨ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』前篇
- ⑩ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』前篇
- ⑪ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』後篇
- ⑫ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』前篇
- ⑬ 『統群書類従』1輯上
- ⑭ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』後篇
- ⑮ 現在県内で出土が確認されている中世の焙烙は昭和63年度に調査された若宮遺跡出土のもの1例で、16世紀後半頃と考えられている。伊藤裕偉「多気郡勢和村丹生地区内遺跡群」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊』三重県教育委員会 1989
- ⑯ 同氏「中世南伊勢系の土器に関する一試論」『Mie history』vol. 1 1990年
- ⑰ 例えば『氏経神事記』永享10年6月16日条に「御器長不参之間、自長官代物五百文歟、内外物忌ニ被下行、致用意」とある。
- ⑱ 『徴古文府』(神宮文庫所蔵)所収「杉本宗大夫家旧蔵文書」天文19年3月付け一志はかりや宗三郎宛て山田三方印判状

No.	器種	地区	遺構	口径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	煤有無	実測No.
1	土師器焙烙	A	SK4	42	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内の小石	軟	赤褐色	1/15	×	63
2	"	"	"	40	-	外：ヘラケズリ→指オサエ→ナデ→ヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内の小石多	やや軟	"	1/12	×	34
3	"	"	"	40	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ、有孔	密	良	外：明黄褐色 内：明赤褐色	1/20	×	81
4	"	"	"	40	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	淡褐色	1/25	×	67
5	"	"	"	40	-	外：ヘラケズリのち指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	軟	淡黄褐色	1/15	×	65
6	"	"	"	38	-	外：ナデのち指オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	淡赤褐色	1/12	×	53
7	"	"	"	42	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石	良	淡黄褐色	1/12	×	47
8	"	"	"	40	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm小石多	良	乳灰白色	1/15	×	20
9	"	"	"	40	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	良	淡赤褐色	1/15	×	66
10	"	"	"	38.8	-	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	良	白灰色	1/10	×	12
11	"	"	"	42	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	乳灰色	1/15	×	62
12	"	"	"	41	-	外：ナデのちヘラケズリのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm以内小石	良	外：淡黄褐色 内：黄褐色	1/10	×	27
13	"	"	"	40	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	軟	外：黄褐色 内：暗褐色	1/18	×	61
14	"	"	"	41	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm前後小石	良	乳灰色	1/10	×	26
15	"	"	"	40	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	淡黄灰色	1/18	×	82
16	"	"	"	40	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	外：黄褐色 内：淡赤褐	1/10	×	39
17	"	"	"	40	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	乳灰白色	1/10	×	45
18	"	"	"	39	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm以内小石	良	明黄褐色	1/12	×	28
19	"	"	"	38	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	軟	淡赤褐	1/12	×	46
20	"	"	"	36.2	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密 1mm以内小石	良	淡灰褐	1/10	×	14
21	"	"	"	36	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石多	良	外：淡黄褐 内：乳灰白	1/12	×	42
22	"	"	"	38.4	-	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	淡褐色	1/10	×	7
23	"	"	"	36	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ	密 1~2mm小石	良	"	1/12	×	24
24	"	"	"	33	-	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	やや軟	明赤褐色	1/6	×	3
25	"	"	"	28	-	外：ヘラケズリのち指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	軟	淡赤褐色	1/10	×	64
26	"	"	"	44.8	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	良	"	1/12	×	54
27	"	"	"	28	-	外：ナデのちヘラケズリのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ	密	良	"	1/10	×	49
28	"	"	"	28	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1~2mm小石	やや軟	"	1/8	×	71
29	"	"	"	26.2	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	やや軟	明赤褐色	1/20	×	32
30	土師器埴	"	"	46	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	淡赤褐色	1/12	×	69
31	"	"	"	46	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	外：暗赤褐色 内：淡赤褐色	1/10	○	59
32	"	"	"	39.6	-	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密 2~3mm小石	良	外：淡黒褐色 内：淡赤褐色	1/8	○	2
33	"	"	"	39	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	やや軟	淡褐色	1/10	○	13
34	"	"	"	32	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	良	明赤褐色	1/10	×	37
35	"	"	"	26.8	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	乳褐色	1/6	×	33
36	"	"	"	23	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石	やや軟	淡赤褐色	1/7	×	57

第19表 外山遺跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	地区	遺構	口径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	煤有無	実測No.
37	土師器壺	A	SK4	24	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm以内小石多	やや軟	淡赤褐色	1/6	×	56
38	〃	〃	〃	18.8	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ	密 1～2mm小石	良	明赤褐色	1/6	×	30
39	〃	〃	〃	38	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1～2mm	良	淡赤褐色	1/16	×	60
40	〃	〃	〃	36	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm前後小石	良	外：淡褐色 内：暗黄褐色	1/16	×	41
41	〃	〃	〃	34	—	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	やや粗 1～2mm小石多	良	淡赤褐色	1/10	×	68
42	〃	〃	〃	33	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1～2mm小石	良	明淡褐色	1/6	×	1
43	〃	〃	〃	31.2	—	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	密	良	淡褐色	1/10	×	103
44	〃	〃	〃	28	—	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	淡赤褐色	1/16	×	58
45	〃	〃	〃	17	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1～2mm小石多	やや軟	〃	1/5	×	70
46	〃	〃	〃	19.8	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗	良	明褐～暗褐色	1/4	×	31
47	〃	〃	〃	23.8	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石	良	赤褐色	1/8	×	35
48	土師器鉢	〃	〃	18.4	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1～3mm小石多	良	明赤褐色	1/5	×	98
49	土師器茶釜	〃	〃	15.4	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 2～3mm小石	良	外：暗褐色 内：暗赤褐色	1/4	×	93
50	〃	〃	〃	13	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm前後小石	良	外：白灰色 内：灰色	1/5	×	95
51	〃	〃	〃	13	—	外：ハケメのちナデのちヨコナデ 内：ハケメのちナデのちヨコナデ	密 若干の砂粒	良	外：暗褐色 内：暗黄褐色	1/3	×	94
52	土師器甕?	〃	〃	11.4	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	外：淡黄褐色 内：明黄褐色	1/4	×	96
53	土師器羽釜	〃	〃	29.8	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ	密 1mm以内の小石	やや軟	淡褐色	1/6	×	8
54	〃	〃	〃	31.2	—	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ、有孔	密	良	淡赤褐色	1/8	×	97
55	土師器?	〃	〃	18	3	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	やや軟	暗赤褐	1/7	○	4
56	土師器皿	〃	〃	8	1.5	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1～2mm小石多	良	淡赤褐	1/2	×	5
57	〃	〃	〃	14.2	1.2	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	良	明赤褐	1/7	×	29
58	〃?	〃	〃	12.8	2	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	やや軟	淡赤褐	1/4	×	6
59	〃?	〃	〃	11.6	1.6	外：指オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	やや軟	〃	1/8	×	23
60	〃?	〃	〃	11.2	1.7	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	〃	1/10	×	11
61	〃?	〃	〃	11	2	外：ナデのちヨコナデ、指オサエ 内：ナデのちヨコナデ	密	やや軟	赤褐色	1/4	×	10
62	〃	〃	〃	9	1.8	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	良	〃	1/3	×	9
63	施釉陶器小皿	〃	〃			外：ロクロナデのちヘラケズリ 内：ロクロナデ、高台ハリツケ	密	良	胎土：乳褐色 釉：緑白色	1/2	×	92
64	施釉陶器碗	〃	〃	(底)4.9	—	内、外：ロクロナデ、ケズリ出シ高台	密	良	胎土：淡灰白色 釉：黒	底部完形	—	117
65	施釉陶器鉢	〃	〃	(底)11	—	内、外：ロクロナデ、底部ヘラケズリ 脚はハリツケ	密 1mm以内小石	良	胎土：淡灰白色 釉：黒	底部 1/2	—	118
66	施釉磁器碗	〃	〃	12.2	6.6	内、外：ロクロナデ、ケズリ出シ高台	密	良	胎土：灰白色 釉：暗灰白色	底部完形	—	88
67	土師器焙烙?	〃	〃	18	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1mm前後小石多	やや軟	淡赤褐色	1/6	—	87
68	土錘	〃	〃	(径)2.4 (孔)1	—	ナデ	密	良	赤褐色	ほぼ完形	—	89
69	〃	〃	〃	(径)1.9 (孔)0.8	—	ナデ	密	良	〃	完形	—	90
70	〃	〃	〃	(径)2.3 (孔)1.2	—	ナデ	密	良	〃	ほぼ完形	—	91
71	石製硯	〃	〃	(長)16.7 (巾)5.6	—	—	—	—	暗灰色	一部欠	—	99
72	把手鐔付茶釜型注口土器	〃	〃	—	—	外：ヘラケズリのちハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1～3mm小石	良	外：明白橙色 内：暗赤褐色	注口部分	×	115

第19表 外山遺跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	地区	遺構	口径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	煤有無	実測No.
73	把手鐫付茶釜型注口土器	A	SK4	9.8	-	外：ヘラケズリのちハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	淡黄褐色	ほぼ上半部完形	×	116
74	土師器焙烙	"	SK5	44.8	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm前後小石	良	乳褐色	1/6	×	83
75	"	"	"	44	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1~3mm小石	良	外：赤白褐色 内：乳褐色	1/12	×	86
76	" ?	"	"	42.6	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1~2mm小石多	良	外：暗赤褐色 内：淡赤褐色	1/6	×	72
77	" ?	"	"	40.8	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 1~2mm小石多	良	"	1/10	×	73
78	"	"	"	40	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 3mm小石	良	白黄褐色	1/12	×	85
79	"	"	"	38	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	明赤褐色	1/10	×	79
80	"	"	"	38	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	外：白赤褐色 内：白黄褐色	1/9	×	76
81	"	"	"	35	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm前後小石	良	外：黒褐色 内：乳褐色	1/8	○	80
82	"	"	"	34	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 若干の砂粒	良	淡赤褐色	1/9	×	77
83	"	"	"	27	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1~2mm小石	良	外：淡褐色 内：白赤褐色	1/8	○	104-b
84	土師器埴	"	"	26	-	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1mm前後小石	良	白赤褐	1/8	×	104-a
85	"	"	"	25	-	外：ヘラケズリのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	暗赤褐色	1/7	×	75
86	"	"	"	14.8	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	外：黒褐色 内：淡褐色	1/6	○	102
87	土師器茶釜	"	"	12.6	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや粗 砂粒多	良	外：黒褐色 内：暗褐色	1/4	×	105
88	"	"	"	11.4	-	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密 1/2mm前後小石	良	外：暗褐色 内：淡褐色	1/5	×	108
89	" ?	"	"	14.6	-	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	外：暗褐色 内：白褐色	1/4	×	106
90	土師器皿	"	"	19	2	外：ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	密	良	淡赤褐色	1/5	-	101
91	把手鐫付茶釜型注口土器	"	"	10.4	-	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	"	1/2	-	107
92	土師器杯?	"	"	11.8	3.5	外：ナデのちヘラケズリのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	"	1/5 (底完形)	-	100
93	土師器羽釜	"	"	28.4	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密	良	外：黒褐色 内：淡褐色	1/10	○	111
94	"	"	"	23.8	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	良	明赤褐色	1/8	×	110
95	"	"	"	19	-	外：指オサエのちナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	やや軟	"	1/8	×	109
96	"	"	"	18	-	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密	やや軟	外：淡橙褐色 内：橙色	1/8	×	114
97	土師器十能	"	"	-	-	ナデ	密	良	暗褐色	取手部のみ	×	112
98	"	"	"	-	-	ナデ	密	良	淡黄褐色	"	×	113
99	土師器甕	B	SE3	25	29	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ	粗 2mm以内小石多	軟	"	ほぼ完形	○	230
100	"	"	"	20	25.5	外：ヘラケズリのちナデのちヨコナデ 内：ヘラケズリのちナデのちハケメのちヨコナデ	粗 1~5mm小石多	軟	黄褐色	1/4		223
101	"	"	"	17	-	摩耗のため不明、口縁部ヨコナデ	粗 1mm以内小石多	軟	淡黄褐色	1/2	○	226
102	"	"	"	18	-	"	"	"	"	1/4		229
103	"	"	"	18	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗 1~3mm小石多	"	"	1/4		227
104	"	"	"	17.6	-	外：指オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	"	"	1/12		228
105	"	"	"	18	-	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1~2mm小石多	"	暗黄褐	1/10		224
106	"	"	"	17	-	外：指オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	軟	淡黄褐色	1/6		225
107	土師器碗	"	"	15.4	5.8	摩耗のため不明、口縁ヨコナデ	粗 1~2mm小石多	"	明黄褐色	1/2	-	222
108	"	"	"	14.6	6.1	外：指オサエのちヨコナデ 内：指オサエのちナデのちヨコナデ	粗 1~5mm小石多	"	淡褐色	完形	-	200

第19表 外山遺跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	地区	遺構	口径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	煤有無	実測No.
109	土師器碗	B	SE3	13.8	5.6	摩耗のため不明、口縁ヨコナデ 内面は型押しか?	粗 1~4mm小石多	軟	白赤褐色	完形	-	201
110	"	"	"	14.3	5.8	外: 摩耗で不明 内: 型押し、布目痕あり、ヨコナデ	粗 1~2mm小石多	"	灰白色	1/3	-	221
111	"	"	"	14.2	6.1	外: 摩耗で不明 内: 型押し、布目痕あり、ヨコナデ	"	"	淡黄褐色	1/2	-	220
112	"	"	"	16	5.3	外: 指オサエのちヨコナデ 内: 型押し? 口縁ヨコナデ	粗 1~5mm小石多	やや軟	(外): 淡褐色 内: 暗褐色	1/2	-	205
113	"	"	"	16	5.9	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: 型押し? 口縁ヨコナデ	"	軟	外: 暗黄褐色 内: 暗橙褐色	1/2	-	216
114	"	"	"	16	5.4	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: 型押し? 口縁ヨコナデ	粗 1~3mm小石多	"	白褐色	4/5	-	215
115	"	"	"	15.6	6.9	摩耗のため不明、口縁ヨコナデ	粗 1mm以内小石多	軟	黄褐色	1/2	-	219
116	土師器杯	"	"	14.6	4.5	外: 摩耗のため不明 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~3mm小石多	"	外: 白黄褐色 内: 暗褐色	4/5	-	204
117	"	"	"	14.6	3.6	摩耗のため不明	粗 1~2mm小石多	"	褐白色	7/10	-	217
118	"	"	"	13.2	4	摩耗のため不明、口縁ヨコナデ	粗 1~3mm小石多	"	白褐色	ほぼ完形	-	202
119	"	"	"	15.4	3.8	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~5mm小石多	"	外: 暗褐色 内: 橙色	7/10	-	203
120	土師器皿	"	"	10.2	1.9	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~2mm小石多	"	暗橙褐色	完形	-	209
121	"	"	"	10.0	1.9	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~5mm小石多	"	淡褐色	3/10	-	213
122	"	"	"	9.2	1.5	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~2mm小石多	"	"	2/5	油煙	211
123	"	"	"	9.0	1.3	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~5mm小石多	良	黒褐~淡褐色	1/2	-	206
124	"	"	"	8.8	1.5	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ、モミガラ痕	粗 1~2mm小石多	軟	乳褐色	1/5	-	210
125	"	"	"	8.8	1.7	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	"	白褐色	1/5	-	214
126	"	"	"	8.4	1.5	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~2mm小石多	"	淡褐色	完形	-	208
127	"	"	"	8.0	1.9	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1~5mm小石多	やや軟	明橙色	1/4	-	212
128	"	"	"	8.2	1.4	外: 指オサエのちナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 2~3mm小石多	軟	"	完形	-	207
129	陶器碗 (山茶碗)	"	"	16.8	6.1	ロクロナデ、底部糸切り	密 1~5mm小石	良	灰色	2/5	-	218
130	土師器埴	C	SE4	27.5	-	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗 1mm以内小石多	良	乳灰白色	3/4	○	254
131	"	"	"	27	-	外: ヘラケズリのちハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	"	"	外: 乳灰白色 内: 明赤褐色	1/4	○	255
132	土師器皿	"	SB1	11.8	2.2	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	密 1mm以内小石	"	外: 灰褐色 内: 淡褐色	1/4	-	253
133	"	"	"	10.8	2.4	"	密 1mm以内小石多	やや軟	外: 淡褐色 内: 褐灰色	1/4	-	252
134	"	"	"	11.0	2.1	"	やや粗 1mm以内小石多	"	褐灰色	7/10	-	250
135	"	"	"	10.4	2.4	"	"	"	外: 暗褐灰色 内: 明褐灰色	1/4	-	251

第19表 外山遺跡出土遺物観察表(4)

3 本郷遺跡

(1) 遺 構

現況は畑地及び山林で、遺構は耕土直下で検出された。今回の調査地は、本郷遺跡の中でも西端の台地縁辺部に位置したため、検出された遺構は、掘立柱建物1棟、溝数条、土坑数基にとどまる。溝、土坑の中には、近世のものも含まれるが、ほとんどが平安時代末期に属するものである。

1 平安時代末期の遺構

SB1 桁行2間×梁行2間の総柱建物。柱間寸法は、桁行、梁行とも2.0mを測る。柱掘形は径20cm前後の小さなものである。建物の方向はN20°Wで、この建物から南に約7.0m離れて東西に走る溝SD8の溝方向とほぼ揃う。

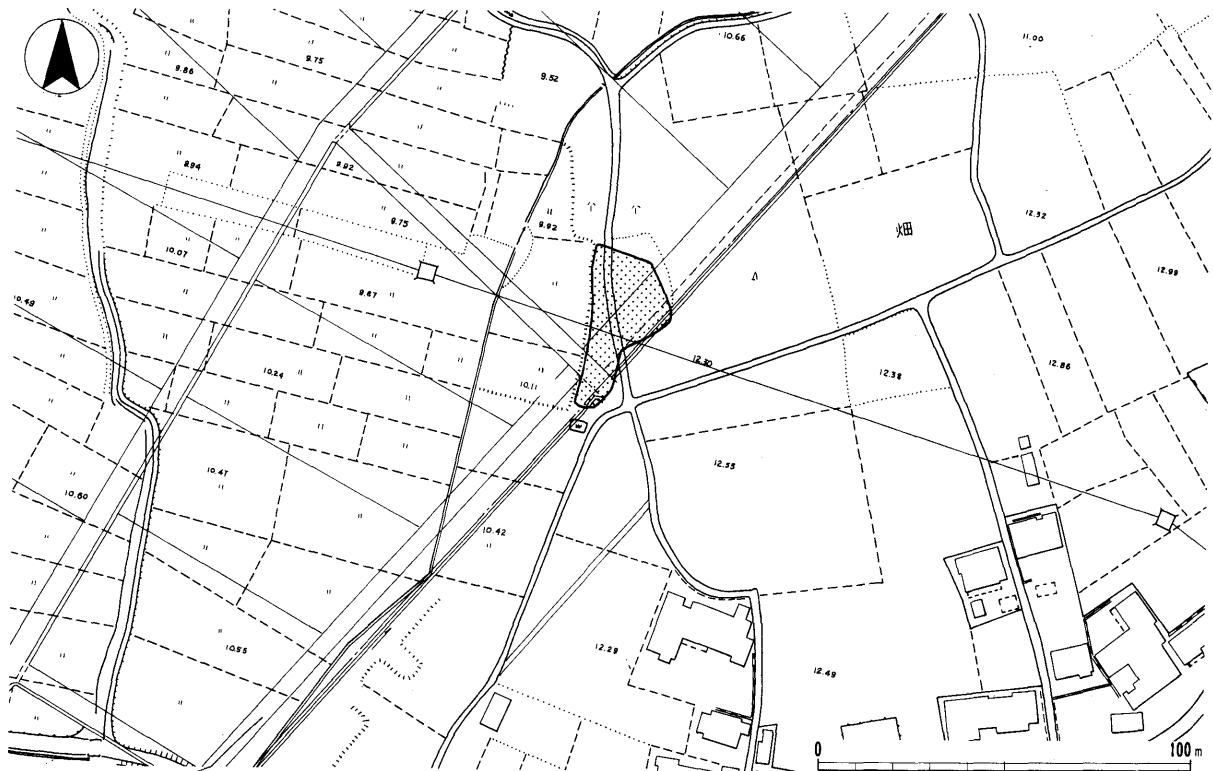
SD2 北東から南西方向に走る幅40cm～60cmの溝。深さは遺構面から10cm前後と浅いが、部分的に30cmを測る深く掘り窪められた箇所がある。

SD7 SB1の南にある長さ2.1m、幅20cm、深さ10cmの小溝。溝埋土から土師器鍋片が少量出

土した。

SD8 溝方向が、SB1の南側柱通りの方向にほぼ揃う東西溝。溝の北側の肩は、L字形に曲がる近世の溝SD3に切られる。この溝の西端は、溝SD11と合流し南側へ延びるものと思われる。溝幅は1.0m以上であるが、深さは25cm前後と浅い。溝底のレベルは、遺構が台地西端部に位置するという関係上、東で高く、西で低い。溝からはテンバコで11箱分の遺物が出土している。中でも土師器鍋の占める割合が高い。

SD10 溝SD8とSD11の合流点から、やや弯曲しながら西へ延びる溝。西端は、段丘の端に開き排水溝としての機能を果たしていたものと思われる。幅1.8m、深さ1.0m。なお溝埋土から少量出土した山茶碗片、土師器鍋片から一応この時期のものと考えたが、SD8、SD11との前後関係については、明らかにし得なかった。

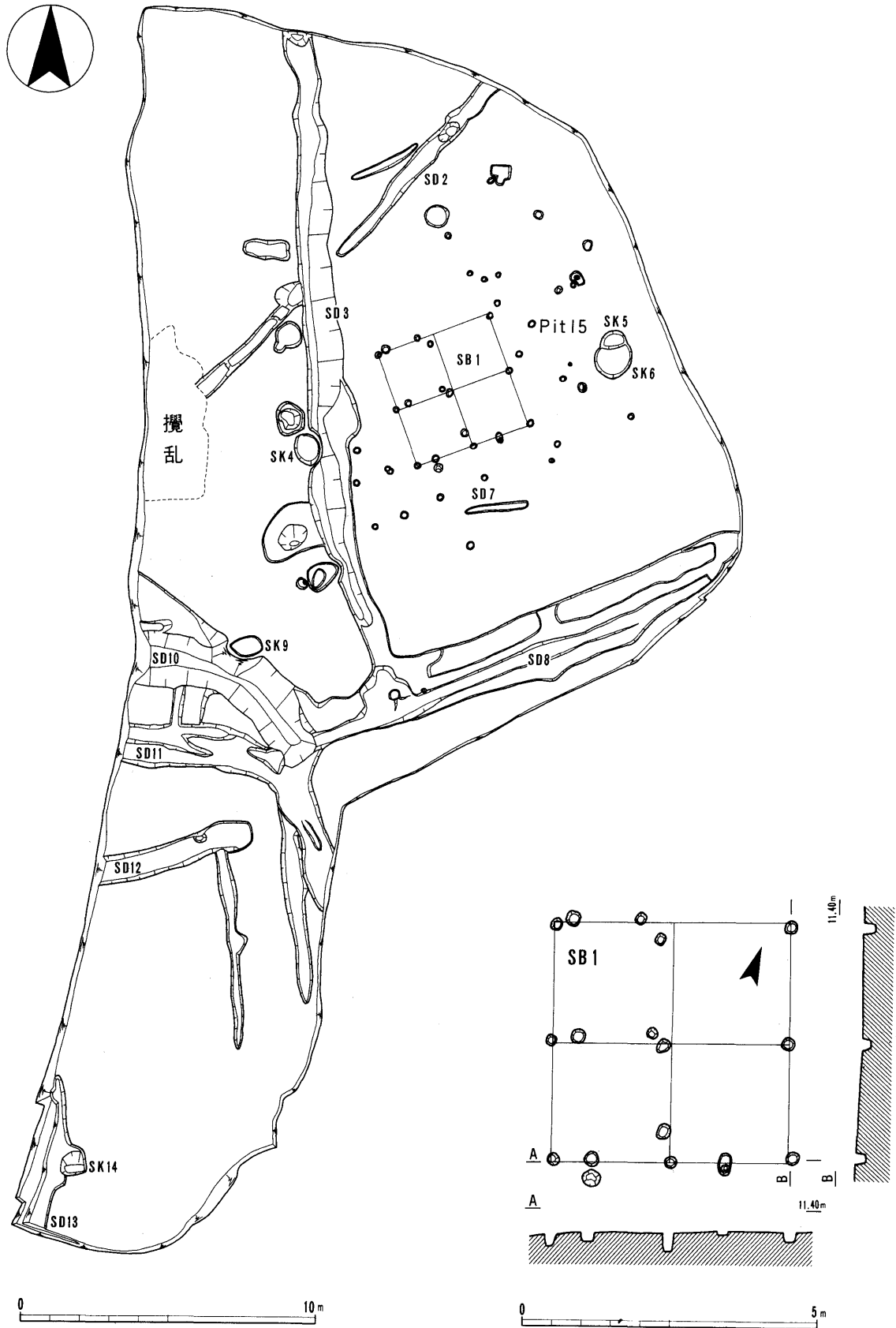


第115図 調査区位置図 (1 : 2,000)

SD11 溝SD8から分岐し、台地西端部に向かって延びる東西溝。幅1.5m、深さ30cmで、北側半分がさらに5cm程深い。

SD12 溝SD11の南にあり、同様に台地西端部に向かって延びる東西溝。幅1.0m、深さ20cm前後。

SD13 調査区南端部にある南北溝。台地縁辺部



第116図 遺構平面図 (1 : 200) 右下 ; 掘立柱建物SB1実測図 (1 : 100)

に沿うため溝幅は不明である。深さは15cm前後。

SK 5 土坑SK 6と重複し、当初はSK 6の単一土坑として掘り進めた結果確認されたもので、長径90cm、深さ13cmを測る。

SK 6 土坑SK 5の大半を切る土坑で、径1.2mの円形を呈し、深さは6cmと浅い。SK 5・SK 6とも土師器鍋・皿の少片と山茶碗などが若干量出土している。

SK 14 溝SD 13と一部が重複するが、両者の前後関係については不明。径80cm、深さ30cmを測る。

2 近世の遺構

SD 3 台地縁部に沿って南北に走り、南ではL

字形に曲がる溝。南北溝のすぐ西側には、この溝に沿うように現在の農道が走っていたため、当初この農道の側溝かとも思われたが、出土遺物は微量ながら、近世まで遡り得る。幅1.0m～1.4m、深さ30cm前後で、溝底のレベルは北で深い。溝の法面は西側が比較的まっすぐで、東側は緩やかである。

SK 4 径1.1m×0.9m、深さ20cmの楕円形土坑である。溝SD 3の埋土を切っており、これより新しい。土師器小皿が少量出土。

SK 9 径1.1m×0.7m、深さ8cmの楕円形土坑。溝SD 10の埋土を切る。SK 4と同様土師器小皿が少量出土した。

(2) 遺物

顕著な遺物包含層が認められなかったため、出土遺物の大半は、溝、土坑などの遺構に伴うものである。その多くは平安時代末期のもので、若干近世の遺物が認められた。以下比較的多量の遺物が出土したSD 8出土の土器を中心として概述することにする。

1 平安時代末期の遺物

A. SD 8出土土器 (1～25)

主な器種として土師器皿・小皿・鍋・鉢、山茶碗のほか、土錘が1点出土している。土師器は器面の保存が悪く。細片化したものが多い。

土師器皿 (1～7) 器高が比較的低く、器壁が口縁部、底部とも均一で、口縁部のヨコナデ範囲がやや広いもの(A類; 2～3)と口径に対し器高が高く、口縁部が肥厚し、口縁端部のみ強くヨコナデされて、断面が三角形に尖るもの(B類; 4～7)がある。色調はいずれも淡褐色ないしは濁白色を呈する。なお、土師器皿1については、平安時代後期の土師器杯の系譜につながるものと思われ、この中では幾分古い要素をもっている。

土師器小皿 (8～14) 口径8.0cm前後のもの、8.6cm前後のものがある。器形の断面が、レンズ状となり、口縁部と底部の境が不明瞭なもの(A類; 8～10)と底部が平坦で、口縁端部のみ強くヨコナデされて、口縁端部が斜め上方に尖るもの(B類; 11～14)がある。器高の色調は淡褐色ないしは白味がかった褐色を呈する。

土師器鍋 (15～20) 器形から見て大きく分けると、体部が球形ないしは球形になると推定でき、体部最大径が口径より大きいもの(A類; 15～19)と、体部が扁平で肩の張らないもの(B類; 20)がある。口縁部はいずれも外反し、口縁端部は内側に折り返されて肥厚し、端部上面に平坦面をつくる。なお、器面の調整は、内外面をなでて仕上げるものが多く認められるが、鍋A類の中には、ハケ調整するもの(18、19)や、口縁部の外反度がやや弱いもの(15、16)などバラエティーに富む。

土師器鉢 (21) 平坦な底部に鋭く外反する腰部、大きく開く口縁部から成る。底部外面は不定方向のヘラケズリを行い、口縁部はヨコナデ、他はなでて仕上げる。腰部から口縁部にかけてススが付着する。

山茶碗 (22～24) 口縁部は直線的に開き、端部はやや外反する。腰部が若干張るもの(23)もある。底部の高台は低いと比較的ていねいにつくられる。淡灰色を呈し、胎土、焼成共に良好。22、23の内面は、コテを使用した痕跡が顕著に認められる。底部外面は高台を付ける際のナデにより、糸切り痕の大半が消される。22の口縁部には指でつまんだ輪花が3ヶ所に付く。

土錘 (25) 径4cmの大形品である。長さは片方の先端部が欠け不明。重量80g。

B. SK 6の出土土器 (26～30)

出土土器に限られているため、良好な一括遺物とは言えないが、基本的にはSD 8出土土器と同時期

と考えられる。土師器では皿A類(26)、皿B類(27)、小皿A類(28)、鍋A類(29)のほか、S D 8出土の山茶碗に比べ、さらに低い高台の付く山茶碗(30)などがある。

C. S D 12出土土器(31~32)

図示し得たのは、土師器鍋2個体のみである。鍋(31)は、口縁部の折り返し幅がS D 8出土の鍋より広く、やや後出のものと考えられる。鍋(32)は、体部が扁平で下半部をヘラケズりする。体部が扁平という点では、鍋B類の範疇に入るが、体部最大径は口径を凌いでおり、ちょうど鍋A類とB類の中間的な様相を呈する。

D. S D 13出土土器(33)

ほぼ完形の土師器皿(33)を除いては、土師器、山茶碗の細片が少量出土したにとどまる。皿(33)は底部が平坦で器壁は2mmと薄く、口縁部は内弯

気味に立ち上がる。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好であるが器面の保存が悪く、調整は不明瞭。器形から受ける印象は鎌倉前期に属するものと考えられるが、他の土器片は平安時代末期に相当する。

2 近世の遺物

S D 3出土土器(34~37)

土師器小皿(34~36)は、赤褐色を呈する薄手のもので、胎土良好で焼成堅緻。法量から見て、少なくとも大と小の2種がある。

土師器鍋(37)は、口縁部が1/8のみ残存。所謂ほうろくと呼ばれるもので、推定口径31cmを測る。底部は内外面共に横方向にヘラケズリされる。

3 その他の遺物

掘立柱建物S B 1の東側で検出した径25cmの小穴Pit15から、石錘(38)が1点出土した。扁平な河原石の両端を表裏両面から打ち欠き製品とする。

(3) 結 語

本郷遺跡は、明和町遺跡分布調査報告書によると、弥生時代から中世に至る面積107,500㎡に及ぶ広大な遺跡であることが知られている。今回はこの中の西端部に位置し、標高差約2.5mの沖積地を見下ろす台地縁辺部にあたる場所を調査した。調査面積は510㎡と狭い範囲ではあったが、主として平安時代末期の遺構・遺物を検出した。

遺構では、2間×2間の小規模な総柱の掘立柱建物のほか、屋敷地を囲うものと思われる区画溝の一部が検出された。おそらく主要な建物は、調査区の東側や南側に拡がるのが予想される。最近こうした溝で囲まれ、屋敷地を想定し得る平安時代末期から鎌倉時代の総柱建物群の検出例が増加しつつある。代表的なものとして、玉城町勝田所在の楠ノ木遺跡^①、亀山市羽若町大藪遺跡^②などがあげられ、今後考古学の立場から見た中世村落構造の解明に期待が持たれるところである。

遺物は、前述のごとく大きく分けて平安時代末期の土器と近世の土器が検出した。溝S D 8出土の土師器皿類は、斎宮跡土師器編年^③の標識遺構であるS D 3052出土のものに相当し、山茶碗は藤澤良祐氏編年試案^④によるⅡ段階4型式~Ⅲ段階5型式に相当するものと考えられる。したがって12世紀中葉~

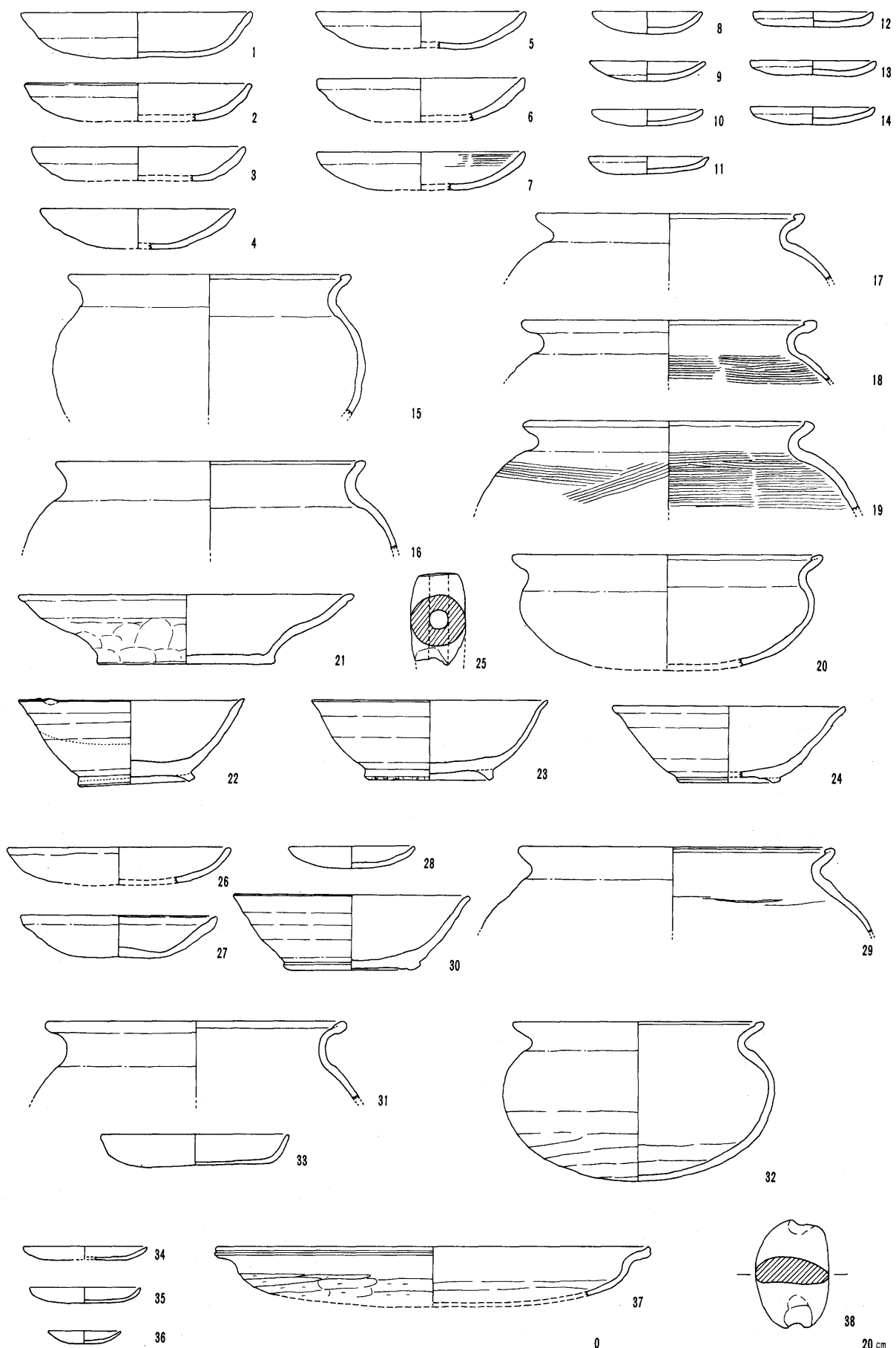
後半の時期が与えられよう。なお溝S D 12出土の鍋(32)は、器形から見れば鎌倉時代前半期に位置付けられている「伊勢型」鍋5類^⑤に近いが、口縁部のおさめ方、器壁の厚さという点では、平安時代末期の鍋に通じるところから、平安時代末期~鎌倉時代前期への過渡的な鍋として位置付けたい。

ところで本遺跡における土師器の器種の割合に注目した場合、およそ7割以上が鍋であり、供膳具のうち台付皿類は2点しか見つかっていない。またロクロ製土師器が全く見られないなど斎宮での出土状況と比べ、極立った差がある。宮衙と一般集落との生活の違いを反映しているものと理解されよう。

一応近世の遺物と考えたS D 3出土の土師器については、まだ県下で良好な一括資料に恵まれておらず、今後の資料の増加を待ち、その位置付けについて再考したい。

(倉田直純)

- ① 三重県埋蔵文化財センター「きんき道調査ニュースNo.24」
- ② 三重県教育委員会「大藪遺跡(B、C地区)発掘調査現地説明会資料」1989
- ③ 三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』1985
- ④ 藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民族資料館1983
- ⑤ 新田 洋「平安時代~中世における煮炊用具-「伊勢型」鍋-に関する若干の覚書」『三重考古学研究Ⅰ』1985



第117图 遺物実測図 (1 : 4) SD 8 ; 1~25 SK 6 ; 26~30 SD12 ; 3・32 SD13 ; 33 SD 3 ; 34~37、Pit15 ; 38

No.	器種	出土遺構	法量 (cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	備考	実測 No.
			口径	器高	底径					
1	土師器皿	SD 8	16.6	3.3	-	口縁部ヨコナデ	砂粒含む が良	濁白色	口縁1/3を欠く	9
2	"	"	16.0	2.7	-	"	石英、長石 粒含む	淡褐色	口縁1/3残	10
3	"	"	15.2	2.4	-	"	細砂含む	淡黄褐色	口縁1/4残	14
4	"	"	14.0	2.9	-	口縁端部ヨコナデ 端部断面三角形	石英粒含む	淡褐色	1/4残、内面にス ス附着	28
5	"	"	15.0	2.6	-	"	細砂含む	赤褐色	1/4残	15
6	"	"	15.0	3.1	-	"	石英、長石 粒含む	淡褐色	口縁1/4残	11
7	"	"	15.0	2.7	-	"	石英少量	赤褐色	口縁内側にハケ目	6
8	土師器小皿	"	8.0	1.6	-	器面の保存悪く、調整 不明	粗	淡褐色	1/2残、口縁異びつ	24
9	"	"	8.4	1.4	-	" ナデか?	石英、長石 粒含む	白褐色	1/3残	12
10	"	"	8.0	1.2	-	" ナデか?	"	"	"	13
11	"	"	8.6	1.2	-	口縁端部ヨコナデ	良	淡褐色	口縁部1/4を欠く	7
12	"	"	8.6	1.1	-	"	石英、長石 雲母含む	淡褐色	1/5を欠く	8
13	"	"	9.0	1.0	-	"	石英、長石 粒微量	淡黄褐色	1/4残	37
14	"	"	9.0	1.2	-	"	"	白褐色	"	38
15	土師器鍋	"	(20.2)	-	-	口縁部ヨコナデ 内面板ナデ	砂粒多い	濁白色	口縁1/8残	22
16	"	"	22.0	-	-	"	"	白黄色	口縁1/6残	18
17	"	"	19.2	-	-	内面不明	石英、長石 粒含む	淡黄褐色	口縁1/4残	16
18	"	"	21.0	-	-	内面ハケ目	石英少量	灰白色	口縁1/5残	17
19	"	"	19.6	-	-	体部内外面ハケ目	良	暗灰色	口縁1/7残	23
20	"	"	22.0	(8.3)	-	内面ナデ	石英、長石 粒含む	濁白色	1/2残、外面にスス	21
21	土師器鉢	"	24.0	5.0	12.8	底部不定方向ヘラケズリ	石英多量	暗褐色	1/4残、口縁内側 ~外側にスス	20
22	山茶碗	"	16.2	6.0	8.4	内面にコテ使用	良	淡灰色	完形、口縁内外面に 自然釉	27
23	"	"	17.0	5.7	8.6	"	"	"	高台にもみから痕	26
24	"	"	16.6	5.4	7.6	ロクロナデ	"	"	1/2残	25
26	土師器皿	SK 6	16.0	2.7	-	口縁部ヨコナデ	良	灰褐色	1/4残、粘土 巻き上げ痕有り	2
27	"	"	14.0	3.0	-	口縁端部強いヨコナデ	石英、長石 粒含む	淡灰色		1
28	土師器小皿	"	9.0	1.5	-	口縁部ヨコナデ	良	橙色	1/4残	3
29	土師器鍋	"	22.2	-	-	内面板ナデ	石英、長石 粒多量	明茶褐色	"	4
30	山茶碗	"	17.0	5.4	8.6	ロクロナデ	長石、砂粒 含む	淡褐色	口縁3/4を欠く	5
31	土師器鍋	SD12	21.2	-	-	口縁部ヨコナデ	石英、長石 粒含む	灰褐色	口縁1/2残	35
32	"	"	18.0	11.3	-	体部下半~底部ヘラケズリ	"	黄白色	1/2残、口縁異びつ	34
33	土師器皿	SD13	13.4	2.2	-	器面の保存悪く、調整 不明	良	淡茶褐色	完形	29
34	土師器小皿	SD 3	9.0	1.0	-	内外面ともナデ	"	赤褐色	1/4残	30
35	"	"	8.0	1.1	-	"	"	"	"	31
36	"	"	5.4	0.9	-	"	"	"	1/2残	32
37	土師器鍋	"	(31.0)	(4.2)	-	口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	"	明茶褐色	口縁1/8残	33

第20表 本郷遺跡出土遺物観察表



A区南部（南から）



土坑SK4（南から）



B区掘立柱建物SB1（西から）



C区遺構全景（南東から）



A区出土遺物 (1 : 3)



石硯



71





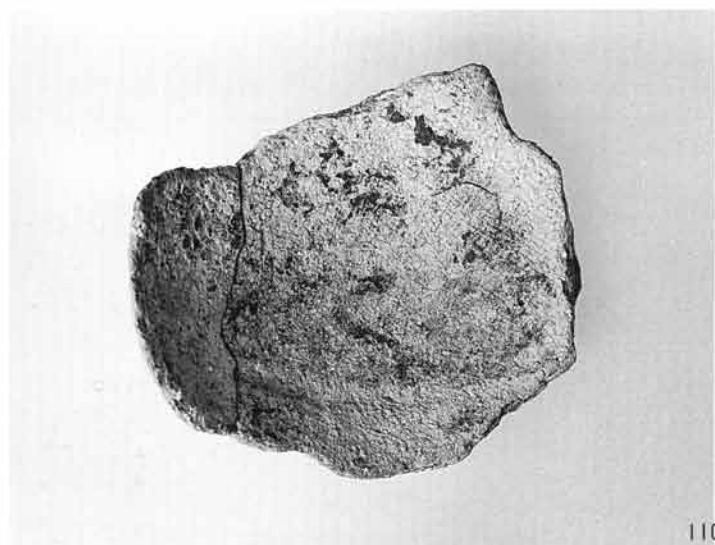
99



73



108



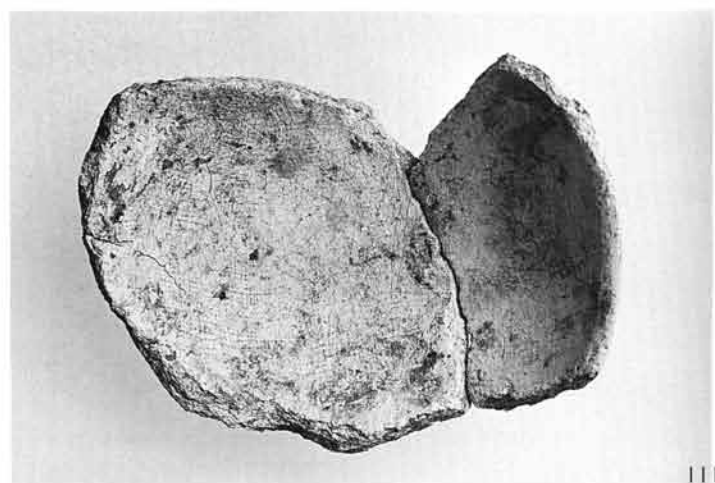
110



109



107



111



118



116

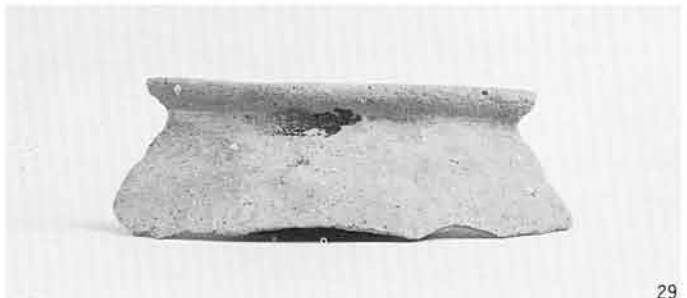
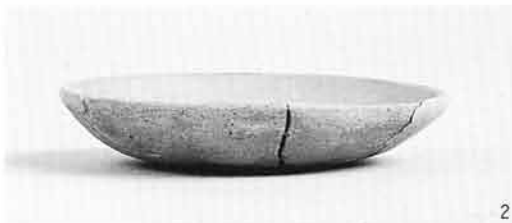
A・B区出土遺物



調査区全景（南から）



掘立柱建物SB1（東から）



出土遺物 (1 : 3)

XI 一志郡白山町 家野遺跡

1 位置と歴史的環境

家野遺跡は、県境の三峰山（1235m）に源を発する雲出川中流右岸の標高65m程の段丘上に位置する。行政上は一志郡白山町南家城字家野に所存する。

遺跡範囲は東西約500m、南北50～200mの規模で約25,000㎡の面積をもつ。昭和63年度県営ほ場整備事業に伴い、水路部分を中心に約740㎡の発掘調査^①を実施している。調査区はA区・B区・C区に分かれ、弥生時代中期の竪穴住居や土坑群、平安時代の掘立柱建物、室町時代のピット群が検出された。

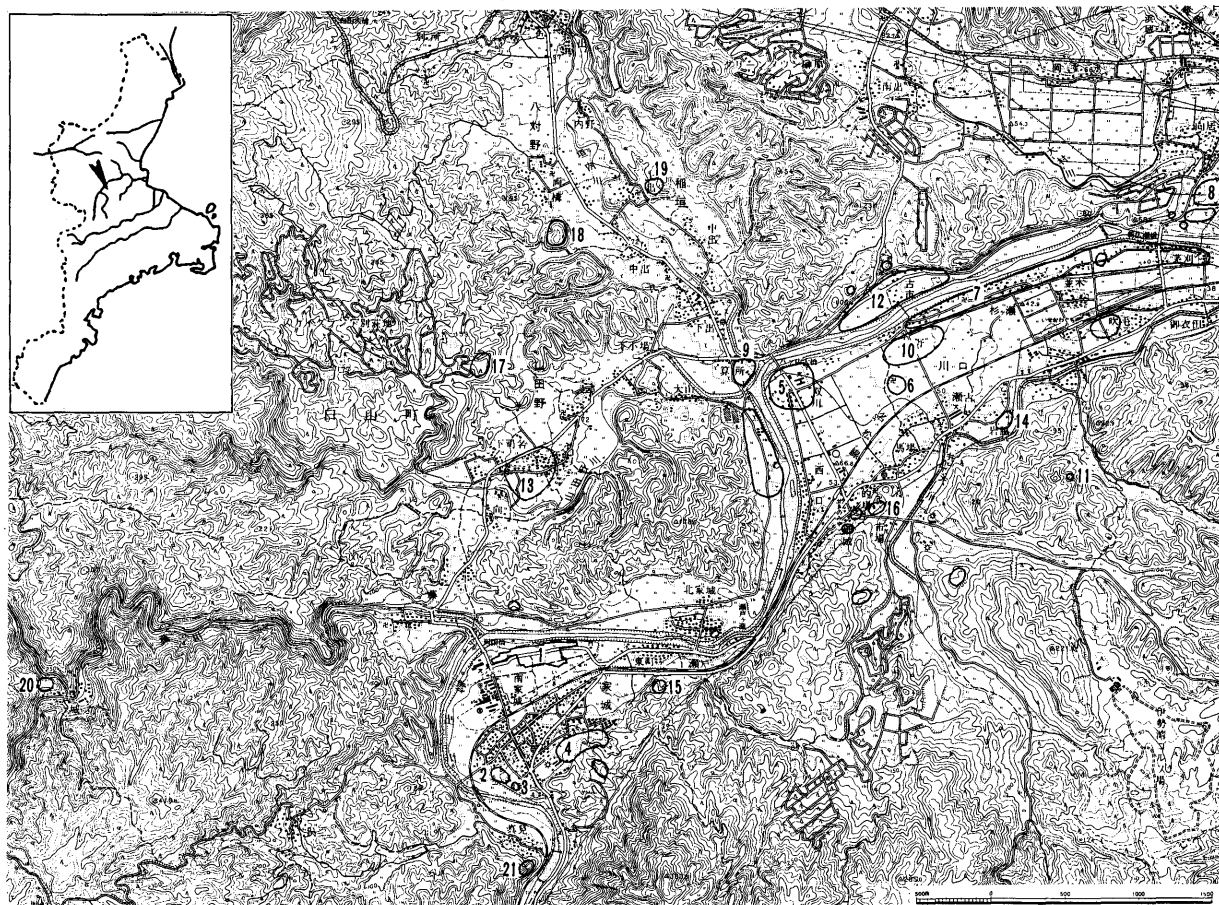
今回の調査は、県営ほ場整備事業と町道改良事業に伴うものであり、町道部分は白山町教育委員会が調査主体となり実施された。調査面積は、ほ場整備事業部分が約2,000㎡、町道部分が約400㎡である。

調査は、町道改良事業部分調査担当者^②、地元改良区及び白山町教育委員会の協力を得て、平成元年7月17日から開始し、9月28日まで実施した。調査地区は、D区、E区、E-II区（町道部分）とする。

雲出川流域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が幅広く分布している。家野遺跡（1）周辺の遺跡を時代を追って概観してみる。

縄文時代には、早期の押型文土器の散布する南出遺跡（2）や西出遺跡（3）、縄文～中世にかけての遺物散布地であるミドダニ遺跡（4）等があげられる。

弥生時代には、昭和57年に白山中学校武道館建設に伴う緊急発掘調査で中期の竪穴住居跡が2棟検出



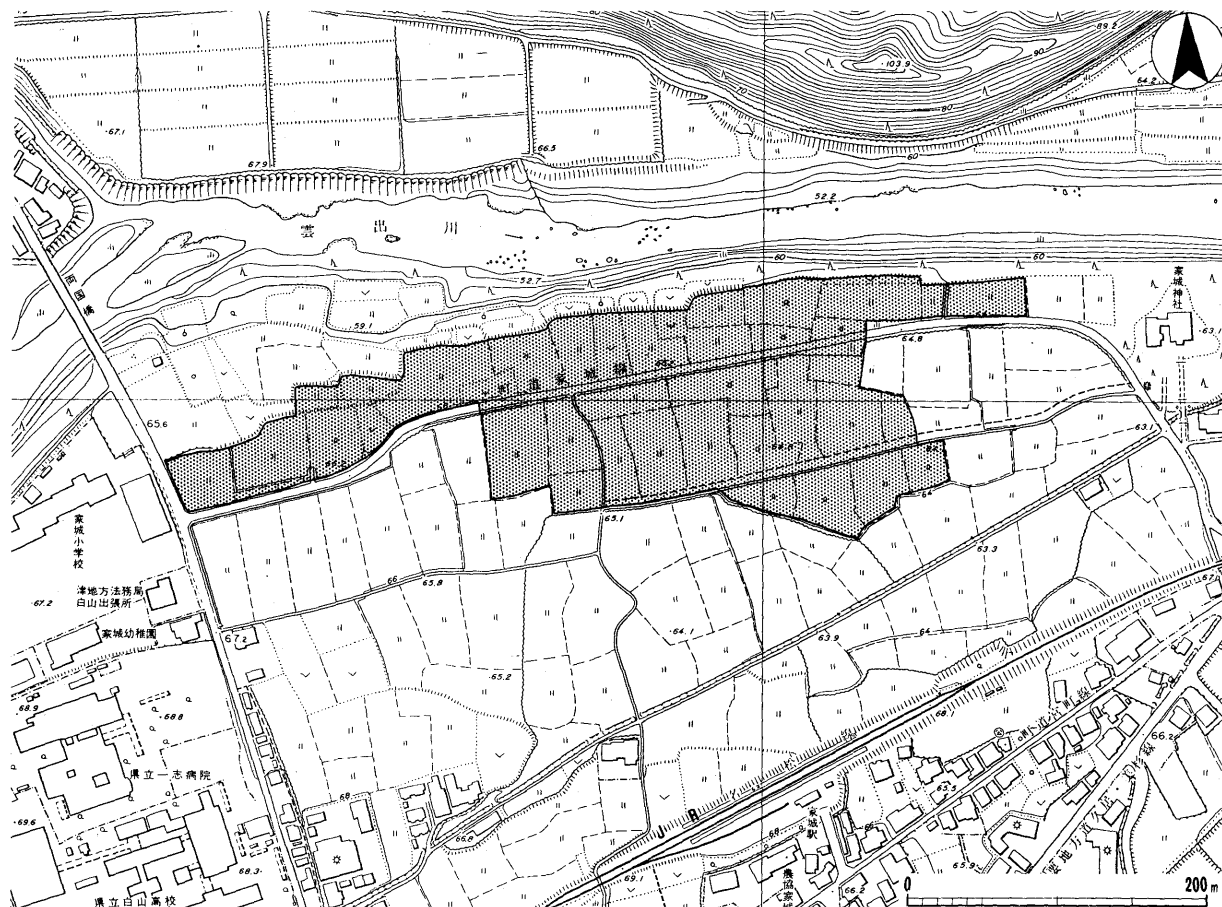
第118図 遺跡位置図（1：50,000 国土地理院 二本木 1：25,000から）

された大角遺跡（5）、昭和46年に調査され中期の台付無頸壺が出土した野田浦遺跡（6）、東西2kmと細長く広がる川口北方遺跡（7）、二本木の林業技術センターが立地している、雲出川中流域の拠点集落と考えられている和遅野遺跡（8）がある。その他、算所遺跡（9）、上野西遺跡（10）、風呂谷銅鐸出土地（11）等の弥生時代の遺跡がある。前述の算所遺跡では、昭和61年の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査において、古墳時代の竪穴住居跡や土坑が検出されている。

8世紀に入り、この地には聖武天皇が藤原広嗣の乱を避けて一時滞在していた川口頓宮が置かれ、平城京出土の木簡にも川口関の名が見られる。また、斎王の退下の際の滞在地にもなっており、古代交通路の要衝の地であるが、奈良、平安時代の遺跡や交通路については、現在のところ不明瞭である。

中世になると、「山田野荘」「川口荘」「家城荘」などの荘園名が登場してきており、その成立は平安時代まで遡るものと考えられている。中世の遺跡としては古市遺跡（12）、田中名遺跡（13）、岩脇C

遺跡（14）がある。いずれも、県営ほ場整備事業に伴い発掘調査されたものである。田中名遺跡では、掘立柱建物を数棟検出しており、古市遺跡では線的な調査のため遺構は明確ではないが、土師器鍋や陶器類などの遺物が多数出土している。また、中世後期に入り、雲出川の支流である八手俣川の上流域にある美杉村多気の霧山城を拠点とした北畠氏支配下の中世城館が各地にみられる。当遺跡東方には、家城主水正が修築した家城城（15）、北東には、鹿々爪玄番の居城と言われる川口城（16）、北方には、長野左京進の居城である山田野城（17）や八対野城（18）、垣内城（19）があり、西方には、福山越中守の居城である霧生城（20）、西南には真見城（21）があげられる。当遺跡の対岸の藤の集落の南の丘陵上には、僅かながら平坦な地形がみられ、ふもとの平地には馬場や的場と言った俗称があるが、明確な城館跡の痕跡は確認できない。当遺跡からは中世の住居遺構が検出され、多数の遺物が出土しており、集落と中世城館との関連が考えられ、今後の詳細な調査に期待される。（高森英純・服部久士）



第119図 遺跡地形図（1：5,000）

第21表 掘立柱建物一覧表

遺構 番号 S B	規 模				棟 方 向	柱 間 寸 法 (m)		備 考 (色調は埋土)
	間 数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)		桁 行	梁 行	
9	2以上×2	4.2以上	5.4	—	東西棟E12°N	2.1	2.7	総柱建物、灰茶褐色炭混
10	2以上×2	4.2以上	4.8	—	“ E10°N	2.1	2.4	暗褐色炭混、S B12より新
11	2以上×2	4.8以上	6.0	—	“ E13°N	2.4	3.0	総柱建物、暗茶褐色、S B12より古
12	2以上×2	4.8以上	5.4	—	“ E13°N	2.4	2.7	束柱あり、茶褐色、S B10より古
13	1以上×2	2.1以上	4.2	—	“ E13°N	2.1	2.1	暗褐色、S B12より古
25	3×2	9.0	6.0	54.00	“ E3°N	3.0	3.0	一部束柱あり
26	3×2	7.8	6.0	46.80	“ E3°N	2.1+3.0+2.7	3.0	総柱建物、S B30より新、一部炭混
27	4×3	8.4	7.2	60.48	“ E3°N	2.4×2+1.8×2	1.8+2.7×2	
28	3×3	7.2	5.7	41.04	“ E7°N	2.4	1.8+2.1+1.8	一部束柱あり
29	3×2	9.5	6.6	62.70	“ E16°N	2.7+2.0+2.4×2	2.1+2.7+1.8	淡茶褐色
30	3×2	7.8	4.5	35.10	“ E12°N	2.7+2.4+2.7	2.4+2.1	炭混
31	2×2	4.0	4.0	16.00	南北棟N5°W	2.0	2.0	一部根石あり
32	2×2	4.8	4.0	19.20	“ N1°W	1.8+3.0	2.0	
43	4以上×3	9.6以上	8.4	—	東西棟E8°N	2.4	3.0+2.4+3.0	暗褐色、山茶碗、瓦器出土
44	4以上×2	9.9以上	6.3	—	“ E10°N	3.0+2.1+2.7+2.1	2.7+1.8×2.0	灰黄斑混淡茶褐色
45	3以上×2	7.2以上	6.0	—	“ E13°N	2.4	3.0	灰黄色炭混、S B46・47より古
46	3以上×2	8.4以上	4.5	—	“ E12°N	3.6+1.8+3.0	1.3+1.5+1.5	黒褐色、S B45より新
47	3以上×3	8.1以上	7.1	—	“ E12°N	2.7	3.0×2+2.1	淡茶褐色、S B45より新
48	5×2	10.5	5.4	56.70	“ E7°N	2.1	2.7	暗灰褐色
49	3以上×2	8.1	5.4	—	“ E10°N	2.7	2.7	一部根石あり
50	3×2	5.0	4.4	22.00	南北棟N13°W	2.0+3.0	2.2	茶褐色
51	3×2	5.2	3.2	16.64	“ N12°W	1.3+2.6+1.3	1.6	暗褐色
52	3×2	5.7	4.2	21.84	“ N13°W	1.8+2.1+1.8	2.1	黒褐色、炭混
53	3×2	5.7	3.6	20.52	“ N6°W	1.8+2.1+1.8	1.8	淡茶褐色、炭混

不確定であるが、堅穴住居跡の可能性も残る。

S K 8・35～37 調査区の南西部で検出した。いずれも、平面形は、長さは1.4m～2.4m、幅1.0m～1.4mの楕円形を呈し、深さは0.4m前後で、断面形は摺鉢状を呈するものが多い。埋土は暗褐色であり、S K36からは完形の弥生土器の甕が出土している。S K35～37は、長軸がほぼ東西方向に揃うのに対し、S K 8は、南北方向に長軸をもつ。昨年度調査のC区においても同様な土坑が検出されており、土坑墓の可能性をもつものと考えられる。

B. 鎌倉・室町時代の遺構

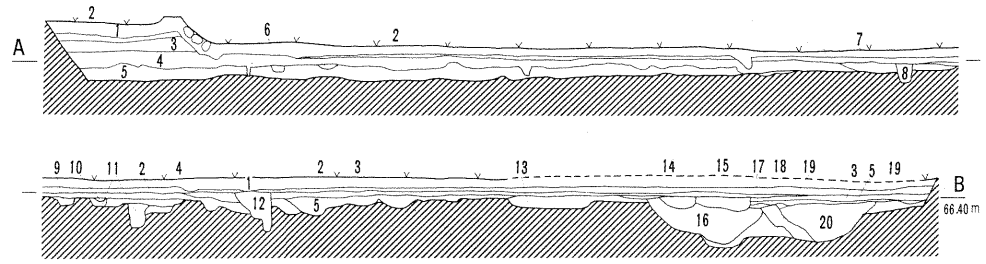
幅0.5～1.5mの溝によって区画された3ブロックの屋敷地が東西に並び、溝の内側に遺構が集中している。西から屋敷地A・B・Cと呼称する。

屋敷地Aは、北と東側が溝で囲まれており、西側部分は調査区外になる。屋敷地Bは、S D20～22・40によって囲まれており、南側では溝は検出されて

いない。溝の内側で東西幅約20mとなり、S A38が南端を区画すると考えると、南北約25mで屋敷地面積は約500㎡になる。屋敷地Cは、S D41～42・58によって囲まれており、東側部分は調査区外に伸びる。南北は溝の内側で約23～36mの距離を測る。

三屋敷地とも北半分に遺構が密集し、5回以上の掘立柱建物の建て替えが見られる。南半分は、比較的遺構密度が薄く、僅かに規模の小さい付属建物のほか、井戸があるに過ぎない。屋敷地Cは敷地内に井戸を持つが、屋敷地A・Bは境界部分に井戸が在り、共同で使用していたものと思われる。屋敷地の北東付近には、大量の土師器類が出土する土坑が見られる。

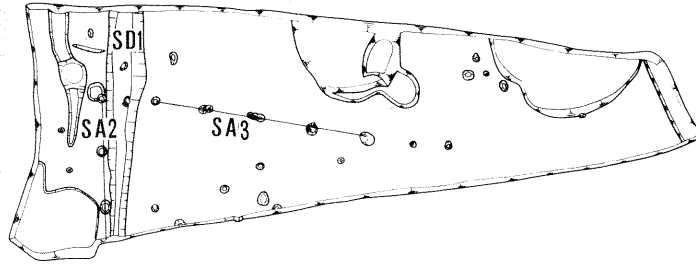
なお、屋敷地B・CのS D40とS D41の間は、幅2～3mにわたり遺構密度が極めて希薄の部分が見られるところから、通路の可能性が高いものと思われる。



(1 : 150)

- | | | | |
|----------------|------------|-----------------|---------------|
| 1. 耕土 | 6. 淡黒褐砂質土 | 11. 濃茶褐砂質土 | 16. 灰茶砂質土 |
| 2. 灰褐色黄斑混 (床土) | 7. 濃茶褐砂質土 | 12. 灰褐砂質土 | 17. 黄褐砂 |
| 3. 暗褐砂質土 | 8. 暗灰褐砂質土 | 13. 濃灰褐砂質土黄斑炭混り | 18. 濃茶砂質土黄砂混り |
| 4. 黒褐粘質土 | 9. 淡灰褐砂質土 | 14. 濃茶褐砂質土炭混り | 19. 暗灰茶砂質土 |
| 5. 暗茶褐砂質土 | 10. 黄茶褐砂質土 | 15. 暗茶褐砂質土黄斑混り | 20. 黒褐砂質土 |

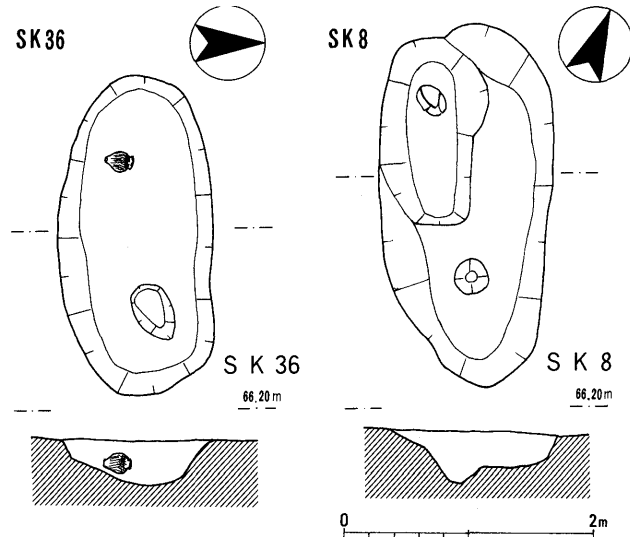
D区



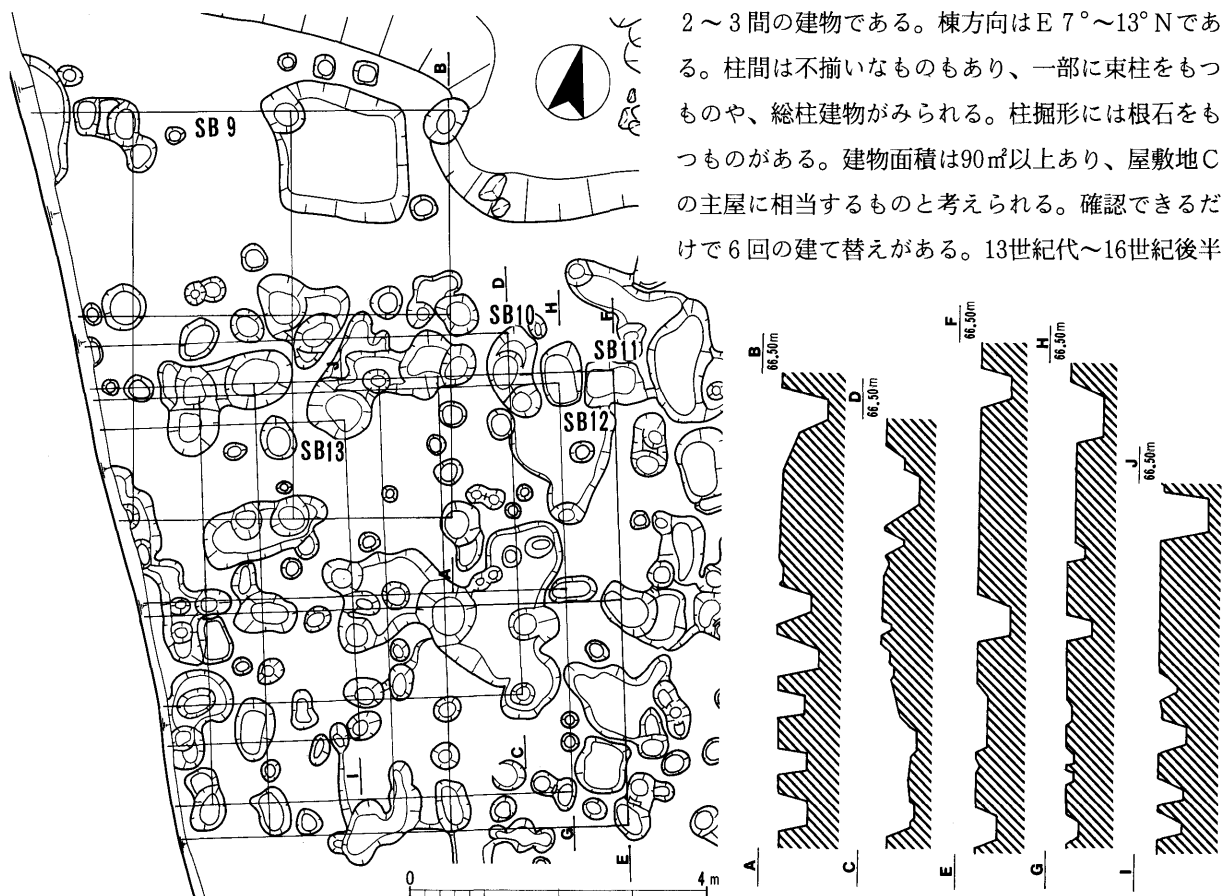
第121図 遺構平面図 (1 : 300)

ア. 掘立柱建物

SB 9～SB 13 屋敷地Aの北部に位置する東西棟の掘立柱建物である。梁行2間の建物が多い。ほぼ同一場所に建て替えられている。建物の西側が調査区外に伸びるため規模は不明である。柱掘形は径50～80cmほどで深さ40～70cmの円形のものが多い。



第122図 SK 8・36遺構実測図 (1 : 60)



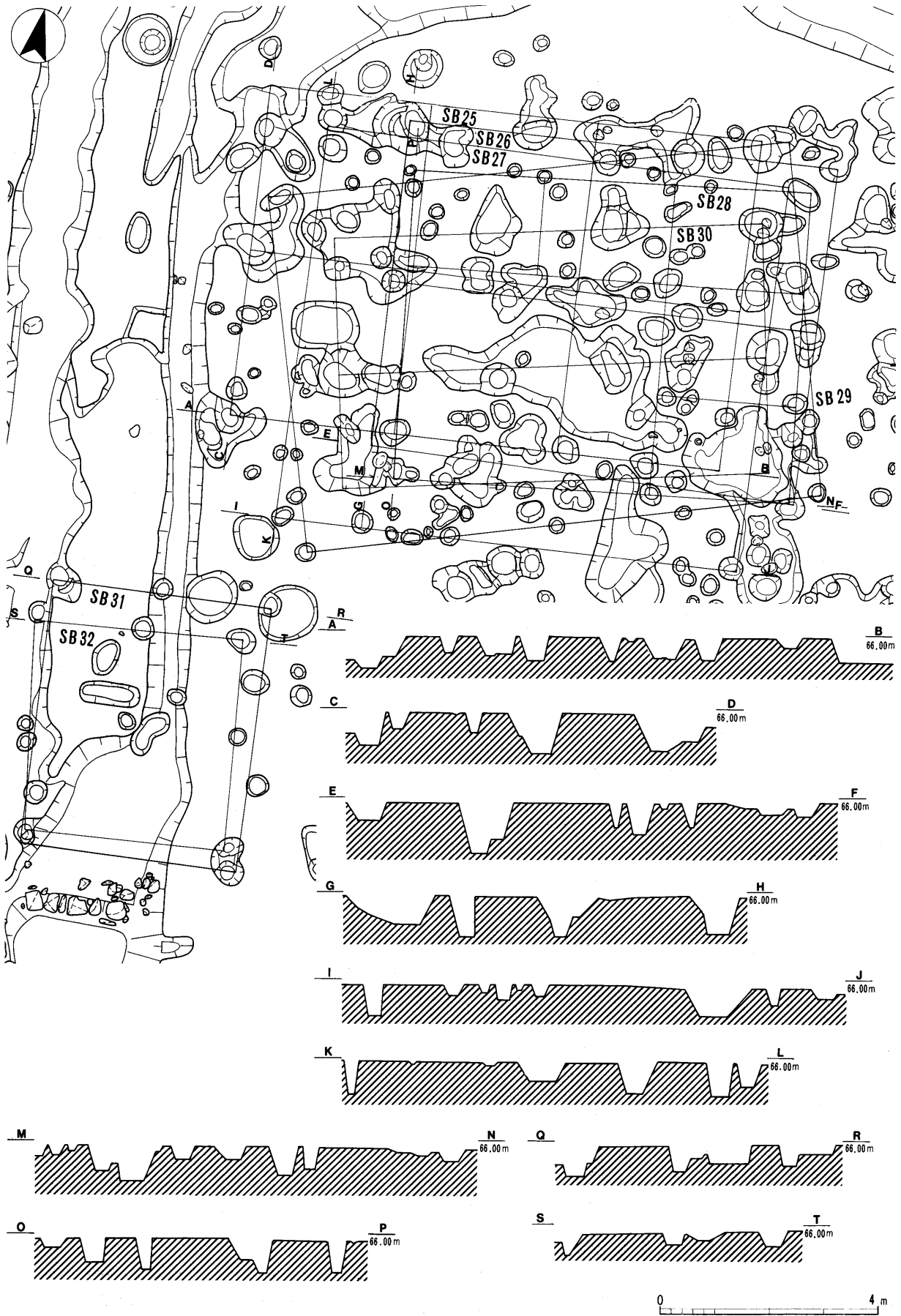
第123図 SB 9～13遺構実測図 (1 : 100)

SB 9・11には炭の混じっている柱掘形が見られる。切り合い関係からSB 9が最も古いと考えられ、SB 11と13の新旧は不明であるが、SB 12、10の順で新しくなる。建物の棟方向はE10～16° Nである。

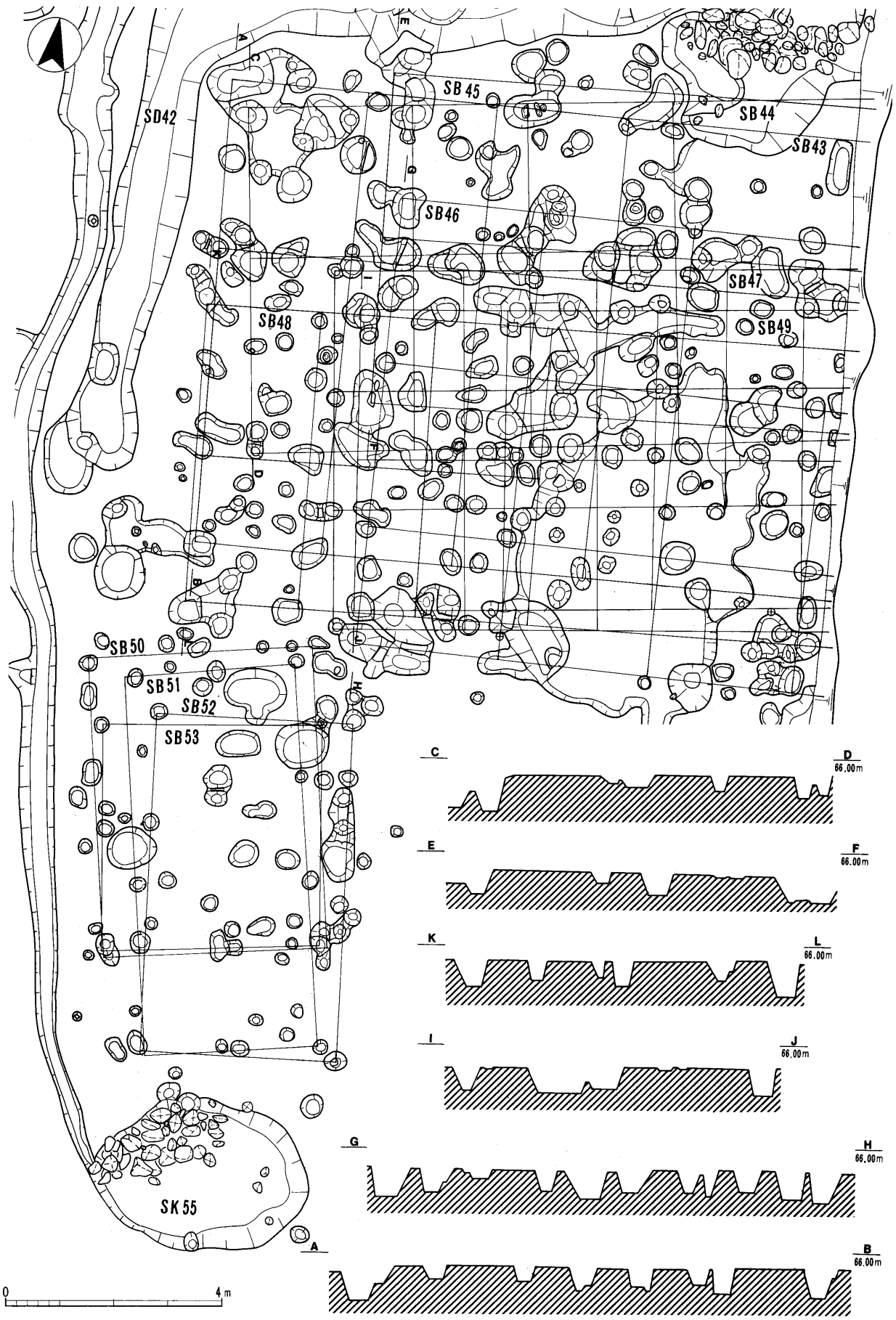
SB 25～SB 30 屋敷地Bの北部に位置する東西棟の掘立柱建物である。4×2間の建物が多い。面積は約35～65㎡である。棟方向はE 0°～16° Nである。柱掘形は、屋敷地Aとほぼ同様である。SB 26・30の埋土には炭が混じる。新旧関係は不明な点が多いが、SB 26はSB 30よりも新しい。屋敷地Bの主屋に相当するものと考えられる。

SB 31～SB 32 屋敷地Bの西南に位置する南北棟の掘立柱建物である。側柱のみであり、やや西偏する。面積は16～19㎡であり、付属建物と推測される。SD 22を跨ぐように建っており、遺物や切り合い関係からは新旧は判定し難く、同時存在の可能性もある。なお、南西隅の柱穴は、根石をもつ。

SB 43～SB 49 屋敷地Cの北部に位置する東西棟の掘立柱建物である。東側が調査区外になるため桁行は確定できないが、4間分以上あり、梁間は2～3間の建物である。棟方向はE 7°～13° Nである。柱間は不揃いなものもあり、一部に束柱をもつものや、総柱建物がみられる。柱掘形には根石をもつものがある。建物面積は90㎡以上あり、屋敷地Cの主屋に相当するものと考えられる。確認できるだけで6回の建て替えがある。13世紀代～16世紀後半



第124図 S B 25~32遺構実測図 (1 : 100)



第125図 S B 43~53遺構実測図 (1 : 100)

にかけて継続して建てられている。山茶碗・瓦器片の出土したS B43が最も古いと考えられ、他の掘立

柱建物の柱穴からは土師器鍋、天目茶碗等が出土しており、切り合い関係からS B45はS B46・47よりも古く遡る。

S B50～S B53 屋敷地Cの西南に位置する南北棟の掘立柱建物である。側柱のみであり、桁行の柱間が不揃いであり、付属建物と推測される。4棟とも、ほぼ建物規模は似通っており、面積は16～20㎡である。S B43～49の建物方向とほぼ一致している。

イ. 井戸

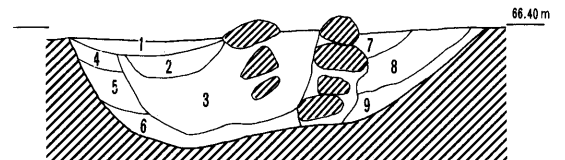
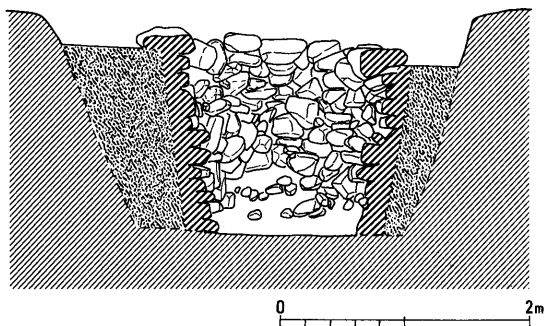
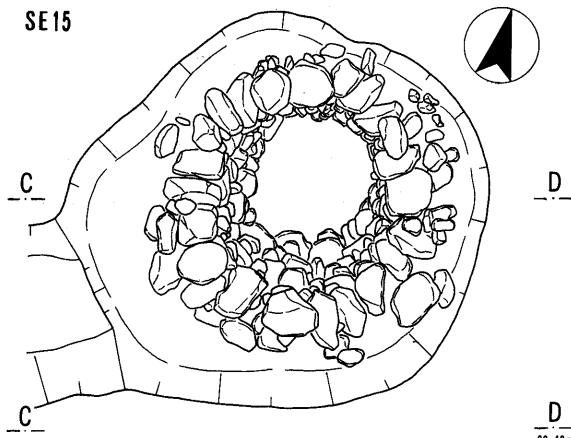
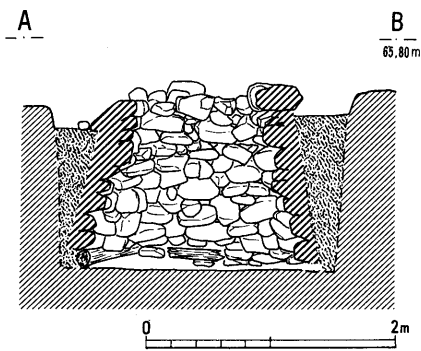
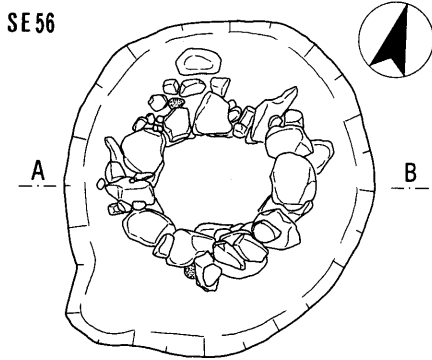
SE 15 屋敷地AとBの境の石組井戸である。掘形は、約3.2mのほぼ円形を呈する。石組は、拳大から人頭大の石を十段以上にわたり1.6mの高さに積む。平面形はほぼ円形である。上面の径は1.3m、底部径は1.1mであり、底にいくほど狭くなっている。石の組み方は雑であり、石の大きさも不揃いである。埋土には人頭大以上の石が多数含まれていた。また、湧水がみられ、水深は1.0m前後になった。

SE 56 屋敷地Cの西南端に位置する石組井戸である。掘形は、約2.4mのほぼ円形を呈する。石組みは、人頭大の石を深さ1.3mにわたり7段に積む。平面は楕円形を呈し、上面で径0.7～0.9m、底部で径1.4mのフラスコ状を呈する。最下部には径0.1mの丸木を横にわたす。埋土には人頭大以上の石が多数含まれており、廃絶時に投棄されたものであろう。埋土を除去すると調査時でも絶えず湧水がみられ、水深0.9m前後を測った。

ウ. 土坑

SK 7 最大径5m程の不定形土坑であり、深さは1m程である。人頭大から80cm前後の大きな石が底付近でかたまっている。埋土からは、多量の土師器鍋等が出土しているが、比較的残存度の大きな破片が多い。SD 5とSD 14と繋がっているが、新旧関係は、不明である。

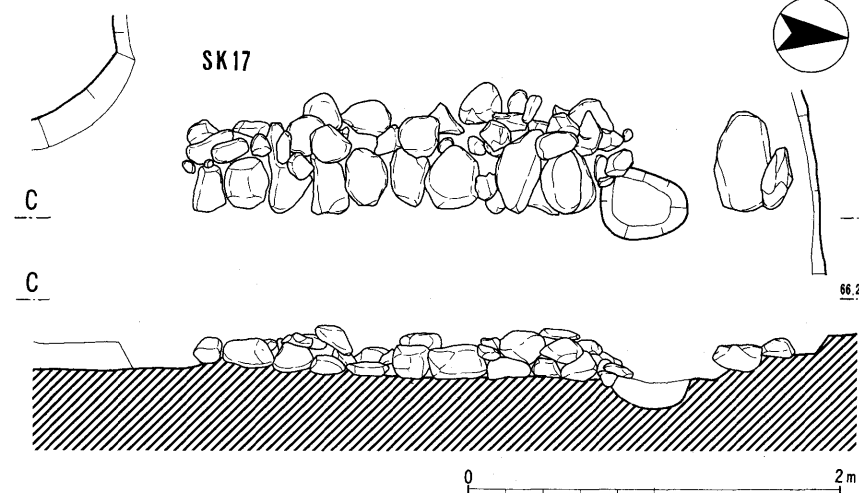
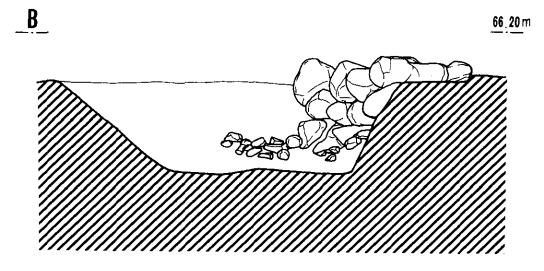
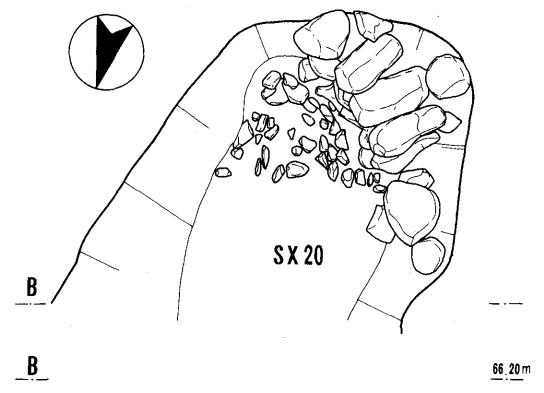
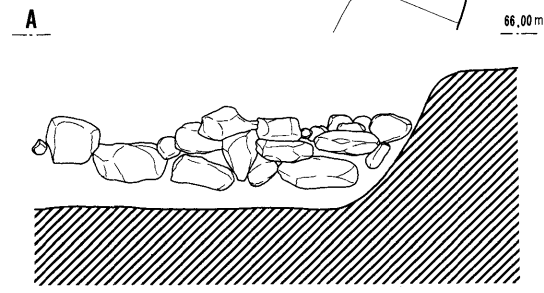
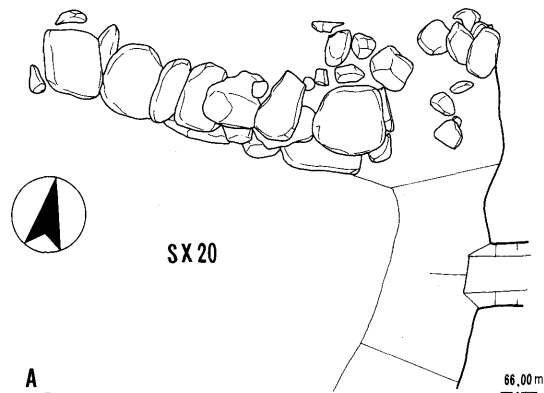
SK 24 屋敷地Bの北方に位置する。径3.0mの



- 1. 暗茶褐色砂質土 4. 茶褐色砂質土 7. 濃暗褐色砂質土
- 2. 濃暗茶褐色 // 5. 茶褐色 // 8. 黒褐色黄斑混り //
- 3. 暗褐色 // 6. 濃茶褐色 // 9. 灰茶褐色 //

第126図 SE 56・15遺構実測図 (1 : 60)

第127図 SD 14土層断面図 (1 : 40)



円形を呈し、深さ1.2mのすり鉢状の土坑である。50cm前後の大きな石が底にかたまっている。中世の土師器片が出土している。

S K39 屋敷地Bの東端に位置する。6.5×5.0mの不定形の楕円形を呈し、南側は深さ0.3~0.5mのテラス状になっており、北端の最深部で1.2mを測る。SD22に繋がっており、東側はSD40と接する。

S K53 ブロックCの東北端に位置する。SD41と繋がっており、南側は石積がみられる。深さ0.8m程で、断面形はすり鉢状を呈する。出土遺物は、土師器鍋片等であるが、量はさほど多くない。水溜的な施設の可能性もある。

S K55 深さ0.4m程と比較的浅く、断面形はすり鉢状を呈する。西北側に人頭大の集石が見られ、西端は、SD41と繋がっている。同時に機能していたものと思われる。

エ. 溝

SD14 屋敷地Aの東側で検出された南北方向の溝である。少なくとも2回以上の浚渫、掘り直しが行われている。最終段階では、幅1.5m、深さ40~60cmの断面U字形を呈し、西岸は人頭大の石を3段に組む護岸が形成されている。石組の西側の溝埋土からは13世紀代の山茶碗や14世紀代の土師器鍋等が出土している。一方石組東側の溝埋土からは土師器鍋・羽釜、志野皿等が出土している。屋敷地Aの東北コーナーのSK7と接する部分は石組みが見られないが、その北側には、石組みの痕跡が残っており、調査区外に北へ延びていたものと推測される。

SD18・19 SE15の南から検出した南北溝である。SD19は幅70cm、深さ30~40cmのしっかりとした断面U字形を呈する。一方のSD18は、北側が幅2mに広がり、西側に長さ2.5m、高さ30cmの東方に面を持つ石組み遺構のSK17と繋がる。両溝は約1.8mの距離をもってほぼ平行しており、屋敷地B・Cから南方に向かう道の側溝の可能性はある。

SD21 幅約1m、深さ30cm

第128図 SK17・SX20遺構実測図(1:40)

程の溝であり、当初の屋敷地Bに伴うものであるが、一旦廃絶の後、16世紀代に幅50cmの溝として再使用されている。

SD22 屋敷地Bの北側を「コ」の字に区画する溝である。北側では幅120cm、深さ40cm程であるが、部分的に付け替えがある。東端はSK39、西端はSX20と繋がっている。水溜施設であるSX20から溢れた水が、この溝を流れてSK39に流れ込むものと推測される。

SD40 幅50～80cm、深さ50cm程であり、埋土の上層は拳大から人頭大の黒色の煤けた多数の石が検出された。おそらく廃絶後に投げ込まれたものであろう。溝の南端は、幅2mに広がっており、水溜的な機能を果たしていたものと推測される。

SD41 SK55から始まり、徐々に北に行くに従い幅と深さが増し、幅70cm、深さ40cm程になる。西北のコーナーでSD40と繋がる落ち込みがある。溝は東に屈折し、幅120cm、深さ30cm程に広がる

が、東端では、幅40cm、深さ25cmを測る。

SD42 SD41の内側に位置する。西端は収束しており、西側で幅120cm、深さ30cm程である。北側部分は幅、深さとも大きくなり、溝の輪郭も不鮮明であり、土坑と重複する。調査区の東端では、溝より新しいSK53と重なっている。

SD58 屋敷地Cの南側で東西方向に検出された。北側の肩は石が敷かれており、深さ30cm程の浅い溝である。

SD61・62 屋敷地Cの南東に位置する。幅50cm程であり、SD62は、北に屈曲する。新旧関係は不明であるが、両者は付け替えられたものであろう。

オ. その他の遺構

SX20 屋敷地Bの西南端に位置し、北壁と南壁に人頭大の石が積まれている。SE15のすぐ東にあり、北側はSD22と繋がっている。最大深は0.8mである。西側の3m四方に石を敷いたような集石遺構とは、0.5mの段差がある。水溜施設であろう。

3. 遺物

出土した遺物は、整理箱にして78箱分である。D区の遺物は若干であり、E区の遺物は南の道路側にいくほど希薄になっている。時期としては弥生時代と室町時代のものが中心である。前者は土坑から甕・壺が出土した。後者のものとして土坑、溝から土師器鍋・羽釜、捏鉢等の陶器が大量に出土した。

その他、縄文土器片も数点出土している。以下時代順に概述していく。

(1) 縄文・弥生時代の遺物

A. 縄文土器 (1～4)

いずれも小片であり、1は浅鉢の口縁部片と思われる、2～3は深鉢の体部片、4は底部片である。1の体部外面は並行沈線の間を綾杉文で埋めており、口縁部は内折し、円形の窪みや羽状の短い沈線文様で飾る。縄文は見られず、在地のものであろう。2は別の2本の縄を原体とする羽状縄文が施文される厚手のものである。3は渦巻き文様の沈線ののち、外部を細かい無節の縄文を充填させている。4は単節の縄文が約2cmの空白帯をもち縦施文される。

2は前期のものであり、他は中期末のものである^③。

B. 弥生土器 (5～14)

壺 (5～6) 5は口縁部片であり、6は口縁部が欠損するが、体部は残存している。5は口縁部が緩く外反する広口壺であり、頸部以下には縦方向の密なハケメが施される。6は、推定高12cm程の小型の壺である。

無頸壺 (7) 口縁部が短く外反するもので、体部外面はハケメののちミガキが施される。頸部には、2カ所に穿孔がみられ、紐を通して蓋を固定していたものであろう。

甕 (8～13) 体部の比較的上位に最大径の脹らみをもち、口縁部は外反して端部に刻目が施される。底部は平底であり、10の底部中央には径4mmの孔が穿たれており甕の用途をもつものであろう。9・10は縦方向のハケメののち横方向のハケメが体部の上半部にみられる。

鉢 (14) 口縁部が折り返され、端部外面に面をもち、櫛状工具による刺突が施される。口縁部片であるが、浅鉢と考えられる。

C. 石製品 (15~18)

15は、三角形を呈する横型の石匙であり、円弧状の先端部分は、片面のみ調整されて刃先が造られている。横型石匙は東海・近畿地方の縄文時代前期の北白川下層式土器に伴うのが顕著であり、2の羽状縄文を施文する土器片と同時期のものであろう。

16はサヌカイト製の無茎石鏃であり、基部はやや挟りがみられる。

17はサヌカイト製の石錐である。つまみは錐部よ

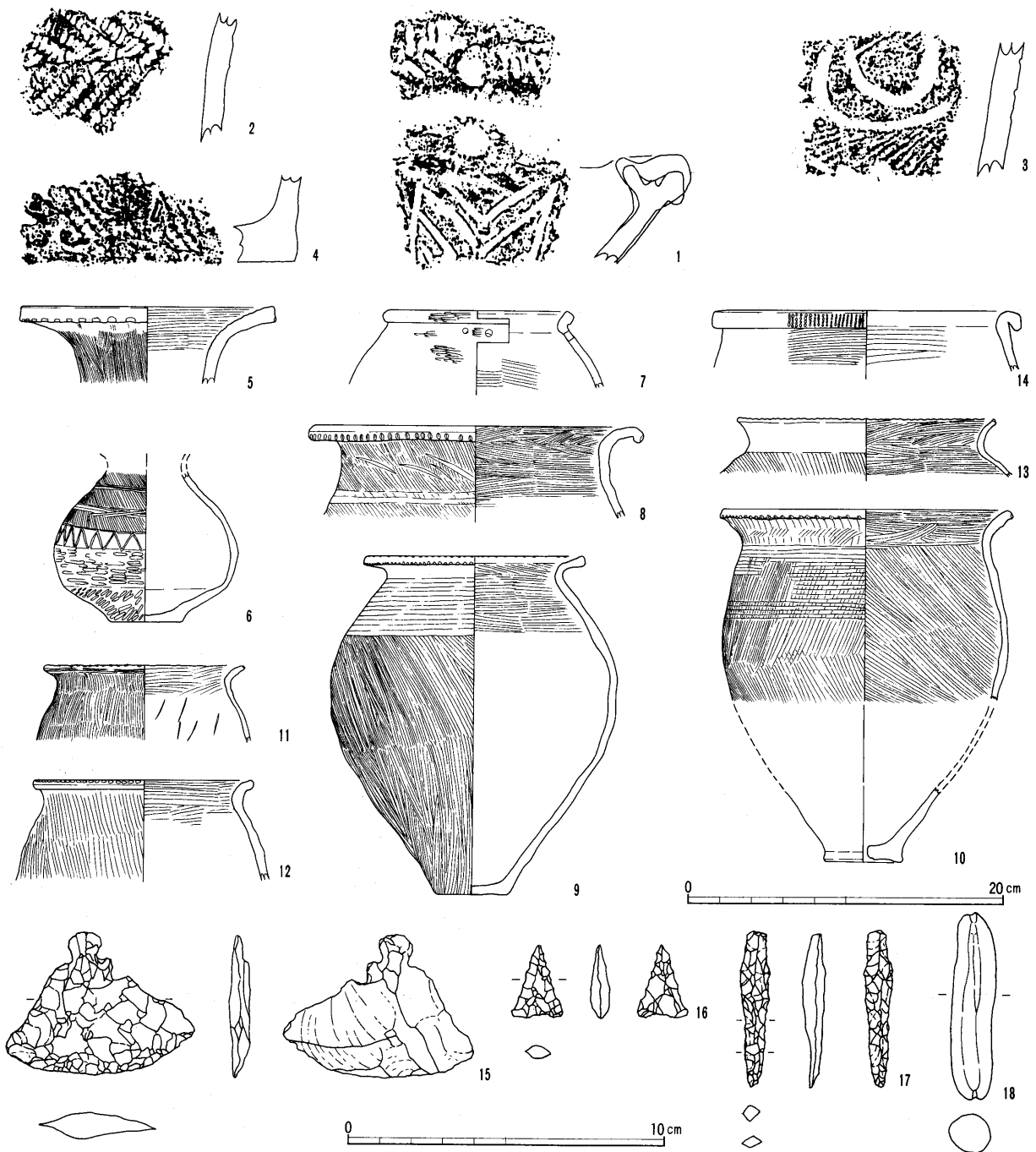
りも細くなっている。16・17とも弥生時代のもの^①と思われる。

18の石錘は、川原石の粘板岩と思われる径1.3cmの円棒状の石材の両端に、幅0.2cmの一字の浅い溝を刻んでいる。

(2) 鎌倉・室町時代の遺物

A. 土師器

皿 出土数はさほど多くない。ほとんどが口径



第129図 縄文・弥生遺物実測図 (1~4・15~18 は 1 : 2、他は 1 : 4)

6～9cmの小皿である。104～106は器壁が厚く、丁寧仕上げであり、鎌倉時代のものであろう。他は薄手であり、口縁部の立ち上がりの少ないもの(98～102)と内湾気味に深く立ち上がるもの(78・79・84・103・107)に分類できる。107は口径13cmの皿である。

蓋 平坦な体部から屈曲して開く口縁部を有するものと外反して開く口縁部を有するもの(74・108)がある。74は底部内面につまみの痕跡が認められる。

茶釜 口縁部の形態により、茶釜A：口縁部の内傾するもの(20)、茶釜B：直口気味のもの(21・50～52)、茶釜C：「く」の字形に屈曲し開くもの(22)がある。52は、体部上半2カ所に把手状の偏平な突起が付く。体部は楕円形を呈し、直口気味の口縁部の端部は外側に肥厚し、上面にやや凹む面を持つ。20・21は外面に付煤が確認される。

鍋 口縁部の形態により、鍋A：口縁端部を内側に折り返すが、端部外面に面を有しないもの(31・73・76・77)と鍋B：口縁端部を内側に折り返し、端部外面に面を有するもの(32～37・56・57・68・83・87・91)がある。この時期の鍋については、新田洋氏の「伊勢型」鍋の分類^⑤があるが、昨年度の「東海道遺跡」^⑥「若宮遺跡」^⑦の発掘調査報告において伊藤裕偉氏が分類化を行っている。

鍋Aについては、比較的厚手で、頸部が長く伸びて外反し、端部が折り返され、端部内面が強くヨコナデされるもの(73)、丸みをもつ体部から頸部が垂直に伸び、端部が強く外反するもの(76・77)、頸部が短く体部からすぐに口縁部が外反するものの3つに細分することができる。73は、山茶碗(33)が共伴しており13世紀代と考えられる。鍋Aの出土量は僅かである。

鍋Bは、出土量が最も多く、口縁部が「く」の字に屈曲するもの(32～34・57・68・83)と、口縁部がくびれず、口縁部が短く開くもの(35～37・56・87)がある。口縁端部の形態については、上方に突出するものと内傾するものとに大別できる。前者には、体部内面がナデのものやハケメ調整のみられるものがある。口径は、28cm前後のものや33cm前後のものに区分ができる。後者には、頸部外面が強くナデられているものとハケメ調整がされているもの

とがある。口縁部の屈曲は強く水平に開くものから緩く外方に開くものがある。口径は21～23cm、26cm前後、29～33cmのものに大別ができる。鍋A、鍋Bともに確認できるものはほとんどが、外面に火を受けており、付煤がみられる。

炮烙 39・40と図示し得た点数は少ない。偏平な体部に口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は垂直に伸びている。口径は36～39cmと鍋と比較するとやや大きめである。調整技法は鍋Bとの共通点を有する。体部外面には付煤がみられる。

羽釜 口縁部の形態により羽釜A：口縁部が内湾し、端部を外側に折り返すもの(53・75)、羽釜B：口縁部が内湾し端部は丸く内側にのびるもの(23)、羽釜C：口縁部が内湾し、内側に面を有するもの(25・26・85・86)、羽釜D：口縁部が直立気味であり、端部上面に面をもつもの(27～30・54・55・65～67・109)と羽釜E：口縁部が内湾し、端部は丸く収まり面を有しないもの(24)に分類できる。

羽釜AとBは薄手であり、鏝部の長いものが多い。

羽釜Cは、口径が23～25cmと29～30cmのものがあり、口縁部は比較的短い。底部が偏平に近いものと丸いものがある。口径が大きいものは前者に多く、口径の小さいものは後者に多く見られる。鏝部は水平に近いものから、やや上方に伸びるものがある。体部外面には付煤が見られるが、調整としては、上半部がハケメ、下半部がケズリであり、体部内面は板状工具によるケズリの他、ハケメのあるものや丁寧にナデられたものがある。

羽釜Dは、口径が23～25cmであり、鏝部は羽釜Aと比べると短い。109の鏝部は、厚く短いものである。羽釜Eは、羽釜A・Bに比べ点数は少なく、図示したのは1点だけである。口縁部に2カ所の穿孔をもつ。

B. 瓦器

瓦器碗 出土量は、多くない。(62)は内外面とも比較的密に磨かれている。口縁端部内面には、沈線がみられる。12世紀代のものであろう。

C. 瓦質土器

香炉 111は両面ともいぶしの掛かった瓦質土器で、口径11.4cmと小振りであり、底部から口縁部

が直立する。半分近く残存しており、溝22からの出土である。外面には8弁の菊花状の文様がほぼ等間隔に刻印されている。

D. 陶器・磁器

鎌倉時代および室町時代後半から江戸時代初期にかけてのものが出土している。

志野皿 (81・113・114) 口径が11~12cmの灰白色を呈するもので、高台は削り出している。他に鼠志野皿の破片も出土している。調査区の西北部からの出土が多い。

鉄釉皿 (41・80・113) 瀬戸、美濃産であり、口径は9~12cmのものである。高台は削り出している。釉の色には、茶褐色系のもものと黒褐色系のものである。底部内面には、重ね焼きのために施釉のない部分がみられる。16世紀代の大窯期のものである。

絵皿 (116) 口縁部内外面ともに緑色の施釉がなされ、内面には、漆褐色の花弁状の模様が描かれている。高台は貼付られており、口縁部は僅かに外反する。底部はロクロケズリされる。

山茶椀 (72~92) 出土数は少ない、72は高台に粉殻痕がみられる。鍋Aが共伴しており、13世紀代と考えられる。他に口縁部片や底部片が出土している。92はS E56出土の底部片である。山皿の112はA区SD1からの出土である。

白磁椀 (82) 輸入陶器である。小片がほとんどであり出土数は僅かである。75は玉縁の口縁部をもつものである。

天目茶椀 (42・58・63~64・117~119) 口径が10cm以下と11~12cmの大きさのものに大別できる。口縁部は強くナデられており、端部は外反する。42・117の体部は丸みをもっている。大窯期に比定される。

丸椀 (43) 淡黄白色をした黄瀬戸茶椀である。高台は削り出しで断面三日月形を呈する。16世紀後半に比定されるものであろう。

耳付水注 (120) 緑灰色をした施釉陶器である。耳部分は欠損しており、僅かに痕跡がみられる。

壺 (49・60・121) 49は、復元接合によって完形となったものである。焼成は甘く、灰白色を呈している。胎土に小石を多く含んでいる。60も49と同

様の形態を呈し、信楽産のものであろう。121は口縁部片であるが、胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈し常滑産と思われる。

壺 (59・93・122・123) 59は「N」字状の口縁部が密着している。93は口縁部が上下に伸びている。122は口縁部が外反し、端部を上方につまみ上げる。濃緑色の釉が掛かっている。123は「N」字状に口縁部が垂下している。いずれも常滑産であろう。

播鉢 口縁部の形態により播鉢A：口縁部が丸みをもち外反しないもの、播鉢B：口縁部が外反するもの、播鉢C：口縁部が外反しやや肥厚するもの、播鉢D：口縁部内側に稜をもつもの、播鉢E：口縁部外面に面をもつものに分類することができる。

播鉢Aは点数が少なく69のみである。播目は1.4cm幅に3本あり、底部付近で7cmの間隔があるところから、全体で5ヶ所に施されていたものと推測される。信楽産である。

播鉢Bは、口縁部が緩く外反して丸みをもつもの(61)と強く外反し上端に面をもつもの(45・127)に細分できる。播目は1.3cmほどの幅に4本で疎らに施される。前者は10ヶ所ほどであるが、後者は更に密に施している。色調は黄白色から黄褐色を呈し、焼成は軟であり、厚手のものが殆どである。61は片口をもつ。15世紀代の信楽産である。

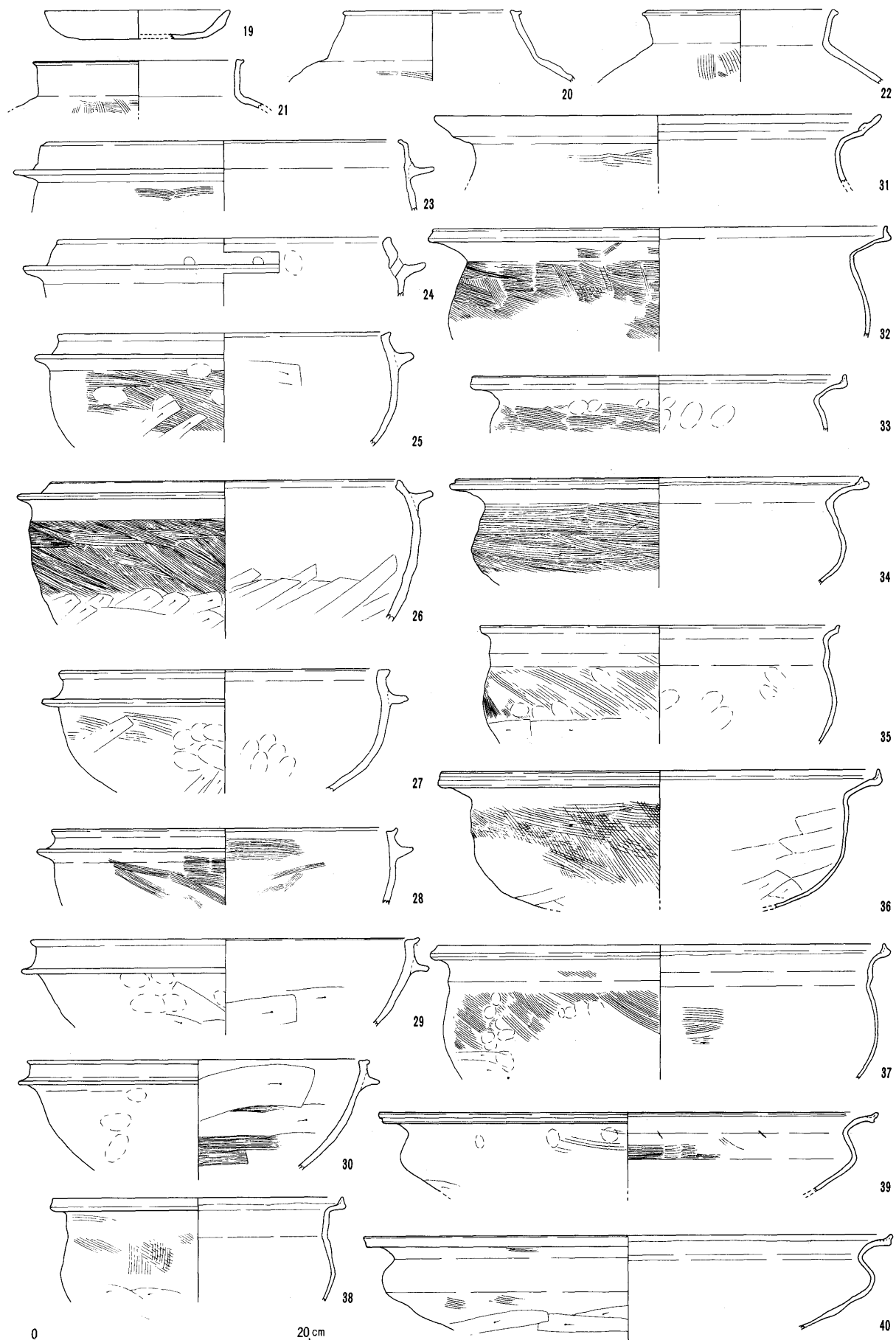
播鉢Cは、46の1点である。口縁部が丸みをもち肥厚している。体部はやや細身である。播目は5本で弯曲して掻き上げられている。外面に指頭痕がみられるなど播鉢Bと異なる様相をもつ。産地は不明である。

播鉢D：播鉢の中では出土量が最も多い。端部の外反しないもの(44)と外反するもの(125・126)に細分できる。44は外面がハケメを施したのちナデられており、125、126とは異なる様相をもつ。後者は胎土良好で、橙褐色を呈し、良く焼き締められており、細身である。播目は5本であり、播鉢B・Cに比べて密に施されている。前者は大和産の瓦質播鉢の影響を受けたものである。後者は信楽産である。16世紀代に比定できよう。

播鉢E：口縁端部が断面三角形を呈し、外側に面をもつもので、124の1点だけである。播目は、扇状に施され、暗紫褐色を呈し、瓦質的である。17世

第22-1表 家野遺跡出土遺物観察表

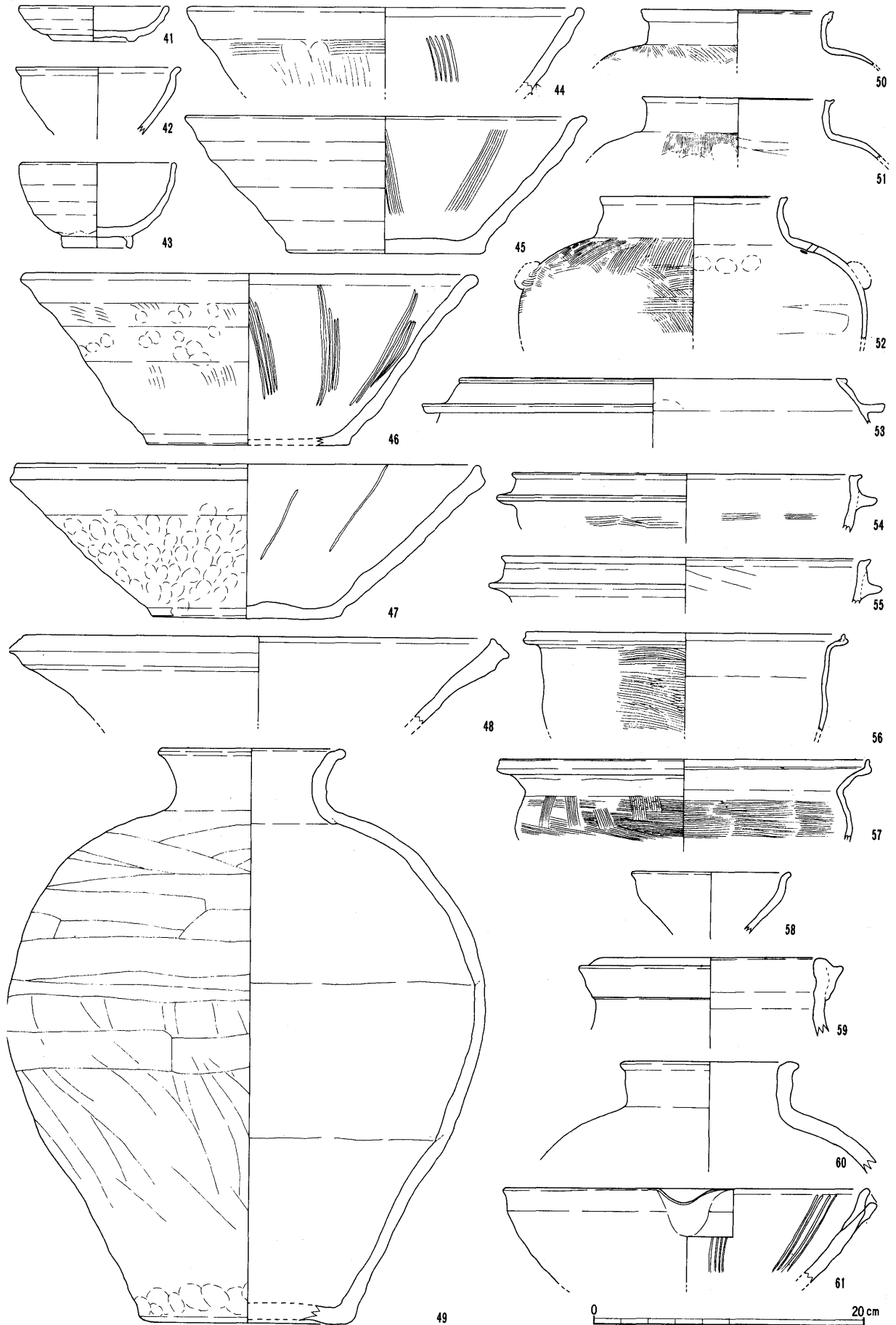
報告書No	出土位置	器種 器形	法量 (cm)		成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	実測No
			口径	器高							
1	D-9 SK21	縄文土器 浅鉢			並行沈線の間を綾杉状沈線、 口唇部に凹点と綾杉状沈線	淡褐色	～3mmの長石 雲母含む	並	口縁部		074-04
2	D-11 SK23	縄文土器 深鉢			羽状文	淡白橙色	～3mmの石英 長石多く含む	並	体部片		074-02
3	I-3 包含層	縄文土器 深鉢			渦巻文のち縄文施文	淡灰褐色	～5mmの石英 長石雲母含む	硬	体部片		074-01
4	J-5 包含層	縄文土器 深鉢			縄文縦施文	黄褐色	～5mmの長石 含む	並	底部片		074-03
5	I-15 SK54	弥生土器 広口壺	15.8		口縁端部、刻目	淡褐色	小石含む並	良好	1/4	頸部以下外面付煤	052-02
6	F-6 包含層	弥生土器 細口壺			体部中央、鋸歯状窪描、 上半部ハケメ、下半部飽磨き	淡茶褐色	小石、金雲母 含む並	硬	口縁部 欠損		049-05
7	G-5 SD6	弥生土器 無頸壺	11.2			橙色	砂粒含む粗	良好	口縁部 1/6		019-01
8	N-15 包含層	弥生土器 甕	20.0		内外面：ハケメ 口縁端部：刻目	明褐色	粗	良好	口縁部 1/3		072-01
9	K-5 SK36	弥生土器 甕	13.6	21.0	内外面：ハケメ 口縁端部上下端：刻目	茶灰色	細砂多く含む 並	良好	ほぼ完 形	外面付煤	050-01
10	J-8 SK37	弥生土器 甕	18.0	*10.9	内外面：ハケメ 口縁端部下端：刻目	茶褐色	小石、金雲母 含む並	良好	1/4	外面付煤	057-01
11	K-16 SK59	弥生土器 甕	12.4		外面：頸部内面：ハケメ 口縁端部上面：刻目	黄褐色	精緻	軟	口縁部 1/6		072-04
12	I-14 Pit1	弥生土器 甕	13.6		外面：頸部内面：ハケメ 口縁端部：刻目	外赤褐色 内橙褐色	小石含むやや 粗	並	1/4		052-01
13	L-16 SK59	弥生土器 甕	16.0		内外面：ハケメ 口縁端部上面：刻目	明茶褐色	細砂含む良	硬	口縁部 1/3		072-02
14	L-16 SK59	弥生土器 鉢	17.8		内外面：ハケメ 口縁：櫛状工具による刻目	茶褐色	小石含む並	やや軟	1/8	内外面とも付煤	073-02
15	D区 包含層	石製品 石匙	長さ 4.4	幅 6.0	打製	—	—	—	完形	13.1gササカイト	077-01
16	K-16 包含層	石製品 石鏃	長さ 2.3	幅 1.6	打製	—	—	—	完形	0.9gササカイト	077-02
17	排土	石製品 石錐	長さ 4.9	幅 0.9	打製	—	—	—	完形	2.3gササカイト	077-03
18	D-4 包含層	石製品 石鏃	長さ 5.7	幅 1.3	自然石の両端に刻み	—	—	—	完形	15.3g粘板岩	077-04
19	D-4 SK7	土師器 皿	14.8		外面：ナデ、指頭痕あり 外面：ナデ	暗橙褐色	1～2mmの小 石含む粗	良好	1/7		006-03
20	C-4 SK7	土師器 茶釜	12.6		口縁：内傾し端部外へ折り返す 体部外面：ハケメのちナデ	白褐色	1～2mmの 石英含む密	良好	1/4	外面付煤	012-02
21	D-4 SK7	土師器 茶釜	15.0		口縁：直立し端部肥厚、ヨコナデ 体部外面：ハケメ	淡黄褐色	1～2mmの 小石含む密	良好	1/3		030-05
22	D-4 SK7	土師器 茶釜	13.6		口縁：外反し端部肥厚、ヨコナデ 体部外面：ハケメ	暗乳褐色	1mmの石英 含む密	良好	3/4	外面付煤、 口縁部若干歪む	006-01
23	D-4 SK7	土師器 羽釜	25.6		口縁：ヨコナデ 体部外面：ハケメ	淡褐色	雲母を含む密	やや 良好	1/4	外面付煤	004-01
24	D-4 SK7	土師器 羽釜	23.8		内外面：ヨコナデ 口縁端部わずかに肥厚	淡黄褐色	石英、長石含 むやや粗	良好	1/3	罅部以下外面付煤 鈹部穿孔あり	018-02
25	D-4 SK7	土師器 羽釜	24.0		外面：上半ハケメ、下半ケズリ 内面：ケズリのちナデ	褐色	1mmの長石 含む密	良好	1/8	罅部以下外面付煤	018-04
26	D-4 SK7	土師器 羽釜	25.2	推定 12.0	外面：上半ハケメ、下半ケズリ 内面：上半ナデ、下半ケズリ	橙褐色	緻密	良好	1/2	罅部以下外面付煤 著しい	059-01
27	D-4 SK7	土師器 羽釜	24.0	推定 9.8	外面：上半ハケメ、下半ケズリ 内面：ナデ、指頭痕あり	淡茶褐色	緻密	やや軟	1/3	罅部以下外面付煤	003-02
28	D-4 SK7	土師器 羽釜	25.0		外面：上半ハケメ 内面：上半ハケメ、下半ケズリ	明赤褐色	緻密	良好	1/2	外面付煤	013-01
29	D-4 SK7	土師器 羽釜	28.0		外面：ケズリ、指頭痕あり 内面：上半ナデ、下半ケズリ	淡黄褐色	1mmの長石含 む密	良好	1/7	罅部以下外面付煤	018-03
30	D-4 SK7	土師器 羽釜	25.0		外面：ナデ、指頭痕あり 内面：ハケメのちケズリ	暗褐色 灰褐色	1mmの長石 含む密	良好	1/2	外面付煤	018-01
31	B-4 SK7	土師器 鍋	32.4		外面：ハケメ 口縁部：折り返しのち強いナデ	灰白色	緻密	良好	1/6	外面付煤	015-02
32	D-4 SK7	土師器 鍋	33.0		外面：横のち縦方向に粗いハケメ 口縁部：強く屈折	淡黄褐色	緻密	良好	1/5	外面付煤	023-01
33	C-4 SK7	土師器 鍋	27.0		外面：ハケメ	淡褐色	緻密	良好	1/6	外面付煤	002-01
34	D-4 SK7	土師器 鍋	29.4	推定 9.0	外面：上半ハケメ、下半ケズリ	乳褐色	緻密	やや軟	1/4	口縁端部除く外面 付煤	059-02



第130図 SK 7 出土遺物実測図 (1 : 4)

第22-2表 家野遺跡出土遺物観察表

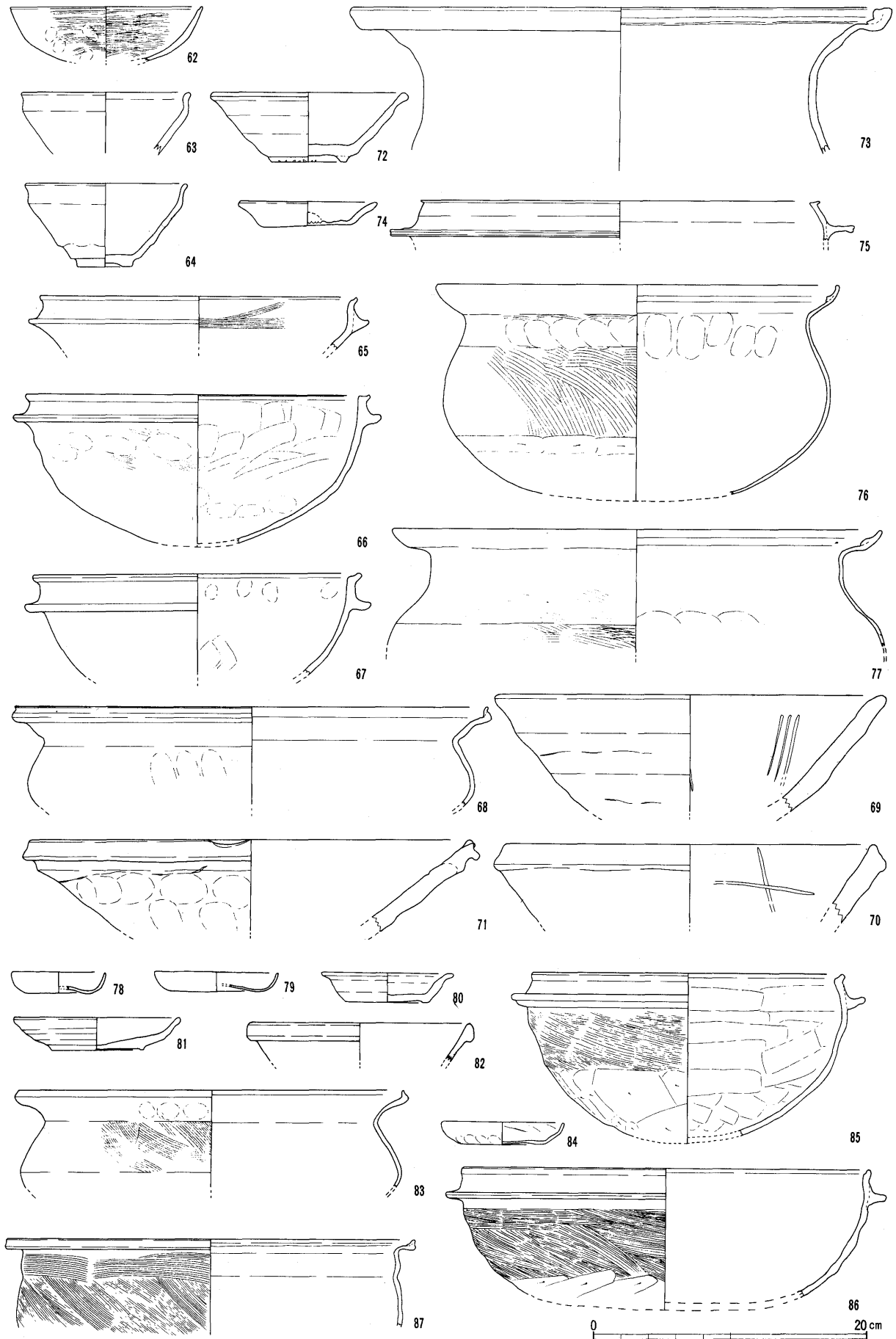
報告書№	出土位置	器種 器形	法量 (cm)		成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	実測 No.
			口径	器高							
35	D-4 SK7	土師器 鍋	26.0		外面：上半ハケメ、下半ケズリ 頸部垂直に伸び、口縁部屈折	暗灰褐色	やや粗	並	1/10	口縁部～体部外面 上半付煤	003-01
36	D-4 SK7	土師器 鍋	32.0	推定 10.8	外面：上半ナデ、下半ケズリ 内面：板ナデ、丸みがない体部	灰白色	緻密	良好	1/8	体部以下付煤	032-03
37	D-4 SK7	土師器 鍋	32.4		外面：上半ハケメ、下半ケズリ 内面：ハケメ	淡褐色	緻密	良好	1/8	口縁部以下付煤	001-02
38	D-4 SK7	土師器 鍋	21.0		外面：上半ハケメ、下半ケズリ 内面：上半ケズリ	淡灰褐色	緻密	良好	1/8	外面付煤	013-04
39	D-4 SK7	土師器 炮烙	36.2	推定 7.8	外面：上半部ハケメ、下半部ケズリ	淡褐色	緻密	良好	1/5	外面付煤	015-01
40	D-4 SK7	土師器 炮烙	38.6	推定 7.6	外面：上半部ハケメ、下半部ケズリ	濁褐色	緻密	良好	1/8	外面付煤	021-01
41	D-4 SK7	陶器 鉄釉皿	10.7	2.6	内外面：施釉、底部外面に重焼 きによる施釉の剥離あり	明茶褐色	小石含むやや 粗	軟	1/4	全体に施釉、三叉 トチン痕跡	060-02
42	D-4 SK7	陶器 天目茶碗	11.2		外面：下半部ヘラケズリ	明橙褐色	長石、細砂含 む密	良好	1/4	釉：暗緑赤色	006-05
43	D-4 SK7	陶器 丸碗	11.2	6.2	ロクロナデのち施釉	淡黄白色	緻密	良好	1/2	貼付高台、 釉：淡緑色	060-03
44	D-3 SK7	陶器 播鉢	28.8		外面：ハケメのちナデ 口縁：内面に段をもつ	濁黄褐色	小石を含む粗	やや軟	1/8	播目5本やや幅広 い	069-02
45	D-4 SK7	陶器 播鉢	29.2 14.0	10.0	ロクロナデ、底部ナデ	黄白色	2mmの小石含 む粗	軟	口1/3 底1/2	播目4本×10単位	071-01
46	D-4 SK7	陶器 播鉢	32.8	12.6	外面：ハケメのちナデ、指頭 痕あり	淡橙褐色	小石を含む並	良好	1/4	播目5本×12単位	058-02
47	D-4 SK7	陶器 捏鉢	34.0	11.3	外面：体部ナデ、指頭痕あり 口縁：平坦面をもち、側面反りかえり	淡黄白色	小石を含む並	やや軟	1/6	体部内面「の」の 字のナデ	058-01
48	C-4 SK7	陶器 捏鉢	34.4		外面：ロクロナデ 口縁：平坦面をもち、側面反りかえり	紫褐色	小石を含む 緻密	良好	1/8	体部内面摩耗著し い	065-03
49	D-4 SK7	陶器 壺	12.8	41.8	外面：工具による縦方向ナデ 内面：工具による横方向ナデ	灰白色	小石を含む粗	やや軟	1/3	復元完形、底部外 面に指頭痕	075-01
50	D-11 SK24	土師器 茶釜	14.2		外面：ハケメ、内面：工具による横 方向ナデ口縁：外側に折り返し肥厚	暗黄褐色	石英、長石含 むやや緻密	良好	1/6		028-01
51	D-11 SK24	土師器 茶釜	14.2		外面：横のち縦方向のハケメ 内面：工具による横方向ナデ	淡黄褐色	小石を含む緻 密	良好	1/4	内面に炭化物付着	028-03
52	D-11 SK24	土師器 茶釜	13.8		外面：斜方向のち横方向のハケメ 内面：工具による横方向ナデ	淡黄褐色	緻密2mm以下の 長石・雲母を含む	良好	1/3	体部上半2カ所に偏 平な突起と穿孔あり	028-02
53	C-11 SK24	土師器 羽釜	27.2		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ、指頭痕あり	灰白色	長石若干含む 緻密	良好	1/8		019-03
54	D-11 SK24	土師器 羽釜	25.6		外面：横方向のハケメ 内面：ケズリのちナデ	明褐色	緻密	良好	1/8	鏝部以下外面付煤	056-01
55	C-11 SK24	土師器 羽釜	27.0		内面：工具による横方向ナデ	明褐色	長石若干含む 緻密	良好	1/8	鏝部以下外面付煤	019-02
56	D-11 SK24	土師器 鍋	23.4		外面：ハケメ	淡黄褐色	緻密	良好	1/10	外面付煤	020-03
57	C-11 SK24	土師器 鍋	27.2		外面：ハケメ 内面：ハケメのちナデ	淡褐色	緻密	良好	1/8	口縁部まで外面付 煤	055-04
58	D-11 SK24	陶器 天目茶碗	11.4		全面施釉	濃灰色	やや粗	並	1/12	施釉：濃黒茶色	056-03
59	D-11 SK24	陶器 壺	16.0		ロクロナデ、口縁：垂下して 頸部に密着	明茶褐色	小石を含むや や緻密	良好	1/4		055-02
60	D-11 SK24	陶器 壺	11.4		外面：ロクロナデ 内面：ナデ	淡灰褐色	やや粗	並	1/4		055-01
61	D-11 SK24	陶器 播鉢	26.8		内外面：ロクロナデ	黄白色	2mmの小石含 む粗	軟	1/2	播目4本×10単位 片口	066-01
62	I-3 SK17	瓦器 碗	14.0		内外面：ヘラミガキ 口縁部内面：沈線	暗灰色	緻密	並	1/6		034-02
63	J-4 SK17	陶器 天目茶碗	12.2		内外面：ロクロナデ、施釉	暗灰褐色	緻密	良	1/6		011-03
64	J-4 SK17	陶器 天目茶碗	11.6	6.0	内外面：ロクロナデ、施釉	茶色	やや粗	並	1/2		055-03
65	J-4 SK17	土師器 羽釜	24.0		内面：ハケメ、ケズリ	明赤褐色	緻密	良	1/8	鏝部以下外面付煤	035-02
66	J-3 SK17	土師器 羽釜	25.2	11.9	外面：ハケメのちナデ 内面：上半板ナデ、下半ケズリのちナデ	赤褐色	やや密、2mm以下 の砂粒多く含む	良好	1/4	鏝部以下外面付煤 底部内面炭化付着	036-01
67	J-4 SK17	土師器 羽釜	24.0		内面：ケズリ	橙色	並	良好	1/4	鏝部以下外面付煤	035-01
68	C-11 SK17	土師器 鍋	34.0		外面：ナデ、指頭痕 内面：板ナデ	茶褐色	緻密	良	口縁部 ほぼ完	外面付煤	034-01



第131图 SK 7 · SK 24出土遺物実測図 (1 : 4)

第22-3表 家野遺跡出土遺物観察表

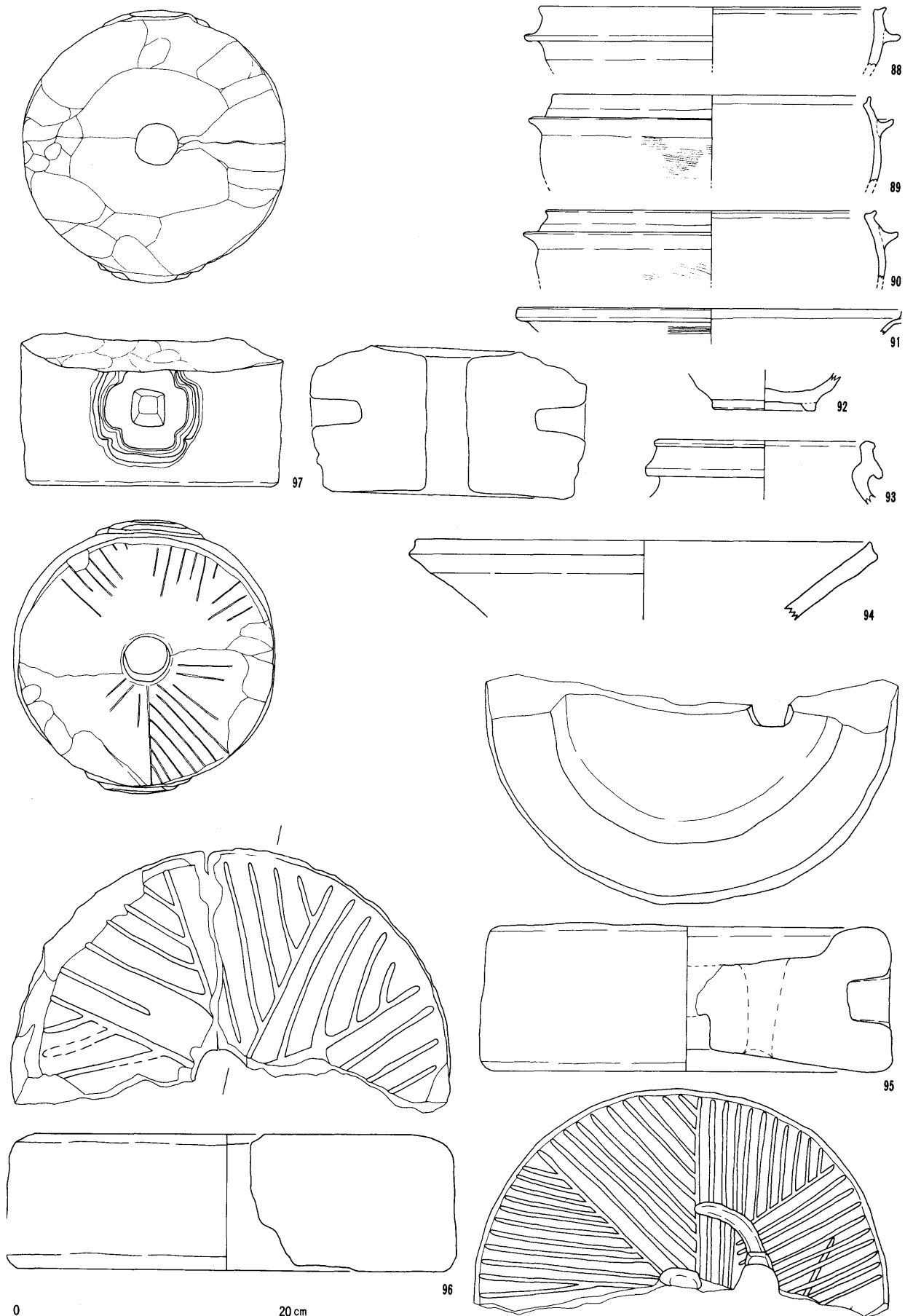
報告書No	出土位置	器種 器形	法量 (cm)		成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	実測No
			口径	器高							
69	J-3 SK17	陶器 播鉢	28.0		外面：ロクロナデ、ナデ	黄白色	2mmの小石含む並	良好	1/6	播目3本	064-01
70	I-4 SK17	陶器 捏鉢	28.6		口縁部ヨコナデ、体部ナデ	橙褐色	小石を含む粗	やや軟	1/10	×印	065-02
71	J-3 SK17	陶器 捏鉢	32.0		外面：体部指オサエのち縦方向のナデ 口縁：ヨコナデ	濁黄褐色	小石を含む粗	良好	1/6	体部内面摩耗著しい	064-02
72	G-8 SK33	陶器 山茶碗	14.4	5.0	内外面：ロクロナデ 底面：ナデ	灰白色	粗	並	1/4	粉殻痕あり	056-02
73	G-8 SK33	土師器 鍋	39.0		頸部内外面：ナデ	濁乳褐色	やや粗	やや軟	1/4		056-04
74	K-3 SK17	土師器 蓋	10.2	2.0	口縁内外面：ヨコナデ 底：指オサエのちナデ	黒灰色	緻密	良好	2/3	内底部にツマミの剥離痕跡	036-02
75	C-2 SK6	土師器 羽釜	29.2		内外面：ヨコナデ	淡褐色	緻密	良好	1/6		027-01
76	B-4 SK6	土師器 鍋	29.4	14.6	外面：上半やや粗いハケメ、下半部ケズリ、内外面頸部指頭痕	淡黄褐色	金雲母含むやや粗	良好	1/3	頸部以下外面付煤	024-01
77	B-4 SK6	土師器 鍋	35.6		外面：ハケメのち頸部ヨコナデ	灰白色	3mm以下の石英含むやや粗	良好	1/6	頸部以下外面付煤	024-02
78	F-16 SK53	土師器 皿	7.0	1.5	口縁：ヨコナデ	濁橙色	並	並	1/6		042-03
79	F-16 SK53	土師器 皿	9.0	1.4	口縁：ヨコナデ、底外面：指オサエ、内面：ナデ	濁橙色	緻密	良好	1/5		042-02
80	F-16 SK53	陶器 鉄釉皿	9.6	2.1	ロクロナデ	黒褐色	緻密	良好	2/5		004-02
81	F-16 SK53	陶器 志野皿	12.0	2.3	ロクロナデ	灰白色	細砂含む粗	良好	1/2	全体に施釉	063-01
82	F-16 SK53	陶磁器 白磁碗	14.0			灰色	密	良好	1/5	施釉淡緑白色	009-01
83	F-16 SK53	土師器 鍋	28.8		外面：上半部ハケメ、下半部ケズリ	黒褐色 黄褐色	緻密	良	1/4	外面付煤	036-03
84	F-11 SK39	土師器 皿	9.0	1.5	口縁外面：ヨコナデ・指オサエ	明乳褐色	緻密	良好	1/2		007-03
85	F-11 SK39	土師器 羽釜	23.0	12.5	外面：上半ハケメ、下半ケズリ 内面：ケズリ	濁赤褐色	緻密	良好	完形	外面付煤	007-02
86	F-11 SK39	土師器 羽釜	29.6	10.0	外面：ハケメ、底部ケズリ 内面：ナデ	橙褐色	緻密	良好	1/2	外面付煤	053-05
87	G-11 SK39	土師器 鍋	30.0		外面：頸部にかけハケメ 内面：ヨコナデ	明褐色	緻密	良好	1/4	外面付煤	007-01
88	K-14 SE56	土師器 羽釜	25.2		外面：ハケメのちナデ、口縁ヨコナデ、内面：ヨコナデ	赤褐色	長石・金雲母含む緻密	良好	1/5	外面付煤、口縁部歪みあり	025-01
89	K-14 SE56	土師器 羽釜	23.2		外面：ハケメ、口縁ヨコナデ 内面：工具によるヨコナデ	赤褐色	長石・金雲母含むやや密	良好	1/12	外面付煤	025-02
90	K-14 SE56	土師器 羽釜	24.0		外面：ハケメ、口縁ヨコナデ 内面：工具によるヨコナデ	暗赤褐色	長石・金雲母含む緻密	良好	1/16	外面付煤	025-04
91	K-14 SE56	土師器 鍋	28.0		外面：ハケメ 内面：ナデ	濁乳褐色	やや粗	並	1/12	外面付煤	052-03
92	K-14 SE56	陶器 山茶碗		底径 7.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	灰白色	粗	並	底部	底部みこみの摩耗著しい、高台逆台形貼付	052-05
93	K-14 SE56	陶器 甕	15.0		外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	淡赤褐色	2~5mmの小石を含む	良好	1/12		052-04
94	K-14 SE56	陶器 捏鉢	30.0		外面：ナデ 内面：ヨコナデ	赤褐色	4mm以下の小石を含む粗	良好	1/6		025-03
95	K-14 SE56	石製品 石臼上石	30.0	10.5	8分画9溝、溝幅0.3cm、ふくみ1.6cm ものくばり長6cm、幅1.2cm	—	—	—	1/2	花崗岩、挽き木孔1カ所、幅2.6cm、奥行3.0cm	061-01
96	K-14 SE56	石製品 石臼下石	32.0	9.8	8分画5溝、溝幅0.4cm	—	—	—	1/2	花崗岩、2片	044-01
97	K-14 SE56	石製品 茶臼上石	12.0	7.1	8分画9溝か、軸受部径1.6cm	—	—	—	完形	花崗岩、2片挽き木孔2カ所、幅1.5cm、奥行2.3cm、縁部の盛上り	076-01
98	J-4 SD18	土師器 皿	6.0	1.2	口縁：ヨコナデ 底部：指オサエ	黄褐色	並	並	1/4		026-05
99	F-6 SP20	土師器 皿	6.0	1.1	口縁：ヨコナデ・指オサエ	淡黄褐色	緻密	良好	1/6		030-03
100	F-6 SP20	土師器 皿	7.9	0.7	外面：指オサエ 内面：ナデ	淡黄褐色	緻密	良好	1/2	全体に歪み	030-02
101	H-4 Pit15	土師器 皿	6.8	1.4	口縁：ヨコナデ 底部：指オサエのちナデ	乳褐色	細砂含むやや粗	良好	完形	手づくね	053-02
102	H-13 Pit3	土師器 皿	8.2	1.5	口縁：ヨコナデ・指オサエ 底部：未調整	乳褐色	小石若干含む緻密	良好	完形	灯明皿に転用、口縁部に黒褐色の芯跡	052-06



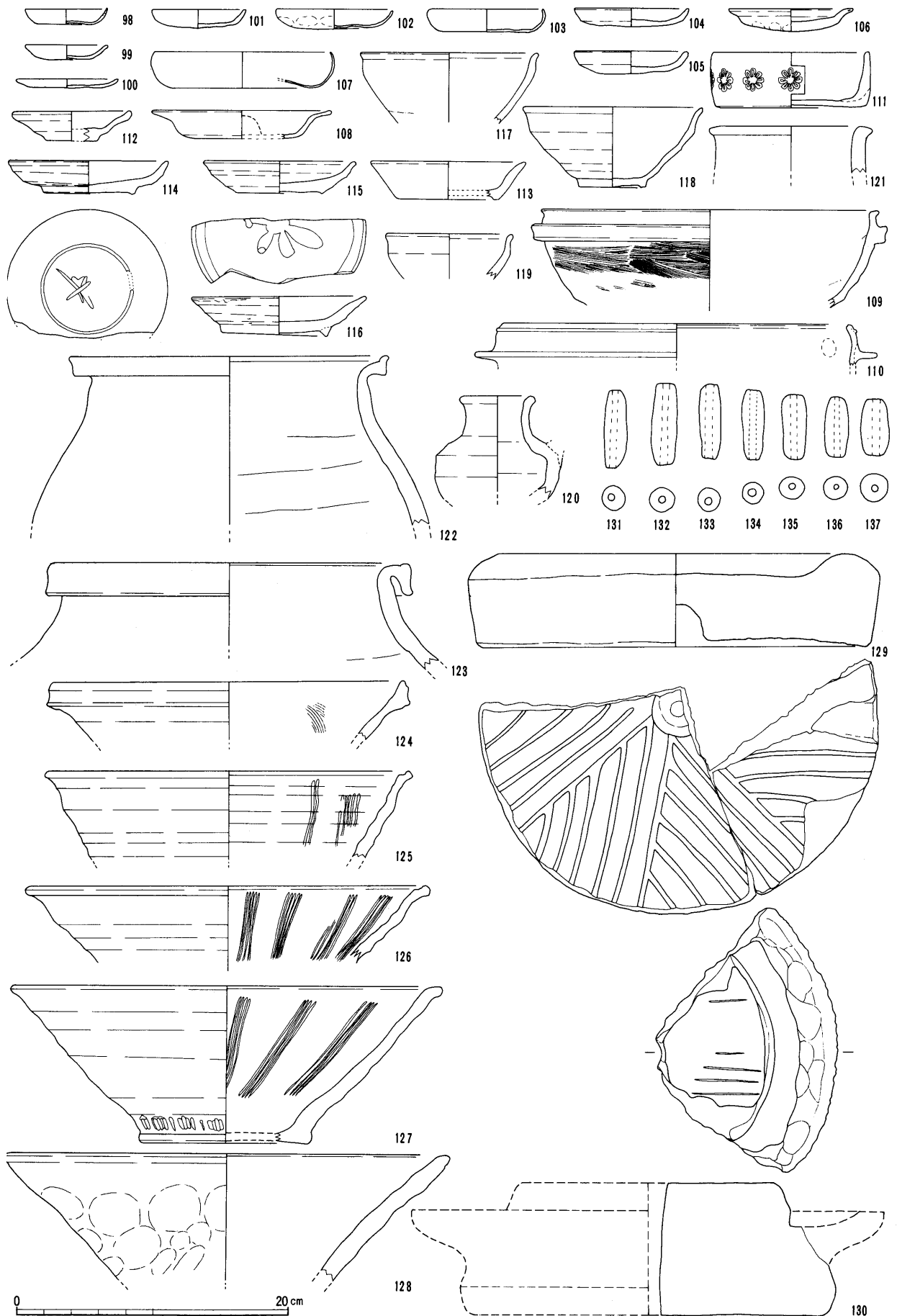
第132図 S K 17ほか土坑出土遺物実測図 (1 : 4)

第22-4表 家野遺跡出土遺物観察表

報告書No	出土位置	器種 器形	法量 (cm)		成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	実測 No
			口径	器高							
103	E-13 SK55	土師器 皿	8.2	1.9	口縁：ヨコナデ 底部：指オサエ・ナデ	乳褐色	緻密	良好	1/2		053-01
104	D-3 SD5	土師器 皿	8.6	0.7	口縁：ヨコナデ 底部：指オサエのちナデ	明褐色	緻密	並	1/2		029-04
105	包含層	土師器 皿	8.4	1.8	口縁：ヨコナデ 底部：指オサエのちナデ	淡黄褐色 濁褐色	やや粗	並	1/2		029-05
106	包含層	土師器 皿	9.1	1.7	口縁：ヨコナデ 底部：指オサエ、内面：ナデ	淡褐色	長石・石英多 数含むやや粗	良好	完形		031-01
107	C-12 SD40	土師器 皿	13.0	2.7	口縁：指オサエ 内面：ヨコナデ	灰白色	密	並	1/4		026-01
108	H-4 Pit	土師器 蓋	13.0	2.1	口縁：ヨコナデ	濁乳茶色	緻密	並	1/6		049-02
109	H-15 包含層	土師器 羽釜	24.8	推定 8.0	外面：ハケメ 内部：ナデ	黄褐色	やや粗 微細砂	良好	1/6	外面付煤、 鏝部太く短い	029-06
110	D-13 SK	土師器 羽釜	24.0		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	乳白色	小石を含むや や粗	並	1/8		029-06
111	C-3 SD22	瓦質土器 浅鉢	11.4	4.1	体部：ナデ 底部：ナデ・ケズリ	灰色 灰褐色	やや粗	良好	2/5		030-01
112	W-3 SD1	陶器 山皿	8.5	2.2	ロクロナデ	淡灰白色	並	良好	1/2		049-01
113	E-9 Pit	陶器 鉄釉皿	11.2	2.8	ロクロナデ	白褐色 褐色	緻密	良好	1/5		009-04
114	F-5 SD14	陶器 志野皿	11.6	2.4	ロクロナデ	明灰色 灰白色	緻密	良好	口縁一 部欠損	内外面施釉、重焼き痕、 底部ヘラ記号	005-01
115	G-5 SD14	陶器 志野皿	11.0	2.4	外面：ケズリ	灰白色	緻密	良好	2/5	外面施釉不均一	004-03
116	F-6 Pit	陶器 皿	12.8	2.8	外面：ロクロナデ、ヘラケズリ	褐白色	緻密	良好	1/4	内面、外面上半部施釉、 内底部赤褐色の絵模様	010-02
117	H-5 SX20	陶器 大目茶碗	12.0		ロクロナデ	灰白色 赤褐色	緻密	良好	1/6		023-02
118	I-15 SK54	陶器 大目茶碗	13.0	5.9	ロクロナデ	紫褐色	並	軟	1/2		051-02
119	E-9 Pit	陶器 大目茶碗	9.2		ロクロナデ	灰色 明褐色	緻密	良好	1/4		009-03
120	D-5 SD14	陶器 灰釉壺	4.8	* 8.6		緑灰色	緻密	並	1/2		029-03
121	J-11 SD40	陶器 壺	16.0			赤褐色	並	良好	1/5		039-02
122	F-6 SP20	陶器 甕	23.0		外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、未調整	褐灰色	2mmの小石を 含む並	良好	1/12		038-01
123	D-4 Pit	陶器 甕	26.2			灰白色 赤褐色	並	良好	1/15		039-01
124	H-11 SD40	陶器 播鉢	25.6		内外面：ロクロナデ	暗紫褐色	粗	良好	1/8	播目5本扇状に施す	070-01
125	F-15 SD41	陶器 播鉢	26.4		内外面：ロクロナデ	明褐色	小石若干含む 緻密	良好	1/12	播目5本	068-03
126	E-14 SD41	陶器 播鉢	29.0		内外面：ロクロナデ	橙褐色	小石を含むや や密	並	1/8	播目5本やや密に 施す	054-02
127	E-11 SK39	陶器 播鉢	31.2	11.5	内外面：ロクロナデ 外面：底部との境に刻み	濁乳褐色	小石を含む粗	やや軟	1/8	播目4本×12単位	054-01
128	E-6 SD21	陶器 捏鉢	32.0		外面：ナデ、指頭痕あり	褐色	小石を含む粗	良好	1/2	内面下半部摩耗著 しい	067-01
129	D-7 SD21	石製品 石臼上石	29.6	7.0	8分画5溝かふくみ0.7cm、溝幅0.2cm~ 0.5cm、挽き木孔、軸受径3.6cm	—	—	—	1/2	花崗岩、2片接合	045-01
130	L-12 SD40	石製品 茶臼下石	—	6.0	溝部分摩耗著しく、溝本数・ 幅不明	—	—	—	1/4	花崗岩、受け皿部 欠損	033-01
131	D-3 SD5	土製品 土鉢	(長) 5.7	(径) 1.7		黒褐色	並	並	完形	15.6g	026-07
132	D-3 SD5	土製品 土鉢	(長) 6.0	(径) 1.9		濁黄褐色	並	良好	完形	20.0g	026-08
133	D-3 SD5	土製品 土鉢	(長) 5.4	(径) 1.6		濁黄褐色	並	良好	完形	13.9g	026-09
134	K-5 SK36	土製品 土鉢	(長) 5.2	(径) 1.7		灰白色	並	並	完形	11.2g	026-10
135	C-8 SD22	土製品 土鉢	(長) 4.8	(径) 1.8		濁黄褐色	密	良好	完形	11.2g	026-03
136	C-8 SD22	土製品 土鉢	(長) 4.4	(径) 1.8		濁黄褐色	密	良好	完形	12.2g	026-04
137	C-8 包含層	土製品 土鉢	(長) 4.0	(径) 2.2		濁褐色	密	良好	完形	17.5g	026-02



第133图 SE 56出土遺物実測図 (1 : 4)



第134図 その他の遺構、包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

紀代のものである。

捏鉢 口縁部の形態により捏鉢A：口縁部が丸みをもつもの、捏鉢B：口縁部の外面に面をもつもの、捏鉢C：口縁部の外面が強くヨコナデされ、上下に面がつまみ出されるものに分類できる。

捏鉢Aは、128の1点だけである。外面は、指頭痕のあとで、ナデられている。内面下半部は使用痕により磨滅が著しい。体部は直線的であり、口径が32cmであるところから14世紀後半の常滑産と考えられる。

捏鉢Bには、47・70・94があり、黄褐色を呈する。比較的厚手の体部をもち、焼成はやや軟であるものが多い。片口をもつものやヘラ状工具による×印筋目が内面に施されるもの(70)がある。常滑産であり15世紀代と考えられる。

捏鉢Cには、48・71がある。焼成は良好であるが、前者は紫褐色を呈し胎土も緻密であり、体部下半部がケズリを施され薄くなっている。一方後者は、黄褐色を呈し、胎土もやや粗くなる。外面には、指頭痕がみられ、後にナデられている。片口をもち、内面の上半部に横方向にヘラ状工具によると思われる沈線が施される。常滑産であり、16世紀代と考えられる。

E. その他の土製品

土錘 (131~137) 7点出土しており、いずれも完形である。長さは、4~6cm、径1.6~2.2cmの紡錘状を呈するものである。重さは11.2~20gであり、両端から穿孔されている。孔径は2~3mmである。黄褐色を呈するものが多い。

F. 石製品

石臼 (95~96・129) 図示した3点以外にもS E15、S E56、S D21、S D40から合計7点の石臼が出土している。いずれも、 $\frac{1}{2}$ ないし $\frac{1}{4}$ に分割された状況で出土しており、恣意的に廃棄した可能性がある。切線主溝型とよばれる^⑥溝が彫られているが、西日本に多いとされる8分画が主であり、1点だけ6分画も含まれている。1区画の溝の本数は5~9本と多彩である。直径は28~30cmであり、ほぼ規格性が窺える。厚みについては7cm前後のものと10cm前後のものに区分できる。95・96は上石であり、側面には、「横打込み式引き手」用の挽き木孔が穿たれている。 $\frac{1}{2}$ の残存のため確定的ではないが、挽き木孔は1ヶ所の可能性が高い。他に4点の上石が出土しており、形態が異なることから、少なくとも6個体分の石臼が使用されていたこととなる。95は「ものくばり」や軸受け部の形態を窺い知ることができる。95は、129よりも「ふくみ」が大きい。95はさほど摩耗を受けておらず、比較的短期間で廃棄されているようである。他は摩耗が著しい。

茶臼 (97・130) 97は上石でS E56から、130は下石でS D40からの出土でありセットで使用されていたものと考えられる。97はS E56内から $\frac{1}{2}$ ずつに分断されて出土したが、完形に接合できた。8分画8溝と考えられる。溝幅は石臼に比べて非常に細かく1mm以下である。直径は12cmと小振りである。ふくみはほとんどない。また、2ヶ所に挽き木孔が穿たれており、その部分は4弁の花弁状の盛り上がりが見られる。下石の130は受け皿部が欠損している。溝部分の摩耗は著しい。

4. 結 語

今回の家野遺跡の調査の結果、弥生時代と鎌倉・室町時代の遺構・遺物について良好な資料を得ることができた。弥生時代の遺構は土坑群が中心であり、昭和63年度の県営ほ場整備事業に伴う調査結果を併せてみると、弥生時代から平安時代にかけて、集落の中心は東方にあったものと推測され、今回の調査地域は集落の縁辺部に位置していたと言える。

その後、当区域では、鎌倉・室町時代の遺構・遺

物が集中している。14世紀以降になって溝による区画をもった居住空間が出現し、ほぼ同じ位置に建物が再築されており、同一区画内に連綿として住居を形成している様相が窺える。

三重県下においては、中世の城館の発掘調査例は比較的多く、分布、形態等について明らかになった点も多い。それに対し、一般集落については面的な調査例が少なく、村落構成・形態については詳らか

でない点が多い。当遺跡は、幅が狭く浅い溝によって区画された屋敷地を三区画分並んで検出しており、居館遺跡というよりは村落遺跡の範疇と考えられる。以下、今回の調査により明らかとなった点を列記しておく。

(1) 屋敷地は三方、あるいは四方を幅0.5~1.5m、深さ0.3~0.7mの規模の小さい溝によって区画されており、東西約25m、面積500㎡程度の規模を持っており、東西方向に3区画分が並んでいる。

(2) 出土遺物からは、13世紀代以降の生活が窺えるが、3区画分の屋敷地は14世紀以降に形成されたものと考えられ、16世紀末まで約300年間にわたって継続して使用されている。

(3) 屋敷地内の建物配置は、ほぼ踏襲されており、大きな変化は見られない。

(4) 主屋建物は敷地の北側に建てられており、南側は遺構密度が薄く、作業場的な前庭が想定される。

(5) 屋敷地の区画が現代の水田の区割とほぼ一致しており、中世の土地区画が近世以降の土地区割に継続されていた可能性がある。

(6) 屋敷地Cは、付属建物を持ち、敷地内に井戸が単独であることなどから、共同井戸をもつ屋敷地A・Bの居住者と比べると階層的に違いがある可能性をもっている。

以上の点から、村落の規模は不明であるが、一般村落の居住形態を窺うことができる。また、規模等において、継続性が強いことから、居住者の階層的な異動はみられず、血縁的要素が強いものと考えられ、比較的安定した支配下に置かれていたものと言える。当地域が伊勢国守護職であった北畠家の支配

下にあり、有力家臣であった家城氏の居城にも近いことに関連するのであろうか。

次に遺物について若干の考察を加えておく。今回の調査では、縄文時代の遺物が若干出土しているが、弥生時代と中世が中心である。

中世土器は、一般的には皿、椀等の供膳用具が量的に最も多いとされるが、今回の出土遺物については、鍋、羽釜等煮沸用具の多さが目立つ。良好な一括遺物が少ないため明確な時期決定はしがたいものの、14~16世紀についての土師器・陶器類の大まかな傾向を窺い知ることができる。土師器鍋等については、南伊勢を中心に形態分類、編年^⑥が試みられており、当遺跡出土の遺物についても、基本的に該当させることができる。但し、羽釜の口縁部や鍋の形態等については、南伊勢の形態と若干異なっており、地域性によるものと考えられる。また、播鉢は信楽産が多数を占める。捏鉢は常滑産が多いなど、複数の生産地との結びつきが窺える。なお、今回の調査では、天目茶椀や茶釜の出土に加えて茶臼の出土が見られる点も注目に値する。茶臼については、他の石臼同様に幾つかに分断されて出土している。一般に中世のこの時期に茶の風習を嗜むことができたのは、ある程度の上層階級であったとされている。遺構上は、一般村落の性格を持っているが、何らかの形で支配者層との強いつながりをもった人々の居住地であった可能性が考えられる。今後、更に一般村落の調査事例が加わることにより村落構成、形態が明らかになっていくものと思われる。

(服部久士)

(注)

- ① 宮田勝功「家野遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊-』三重県教育委員会 1989
- ② 県文化財調査員の高森英純氏、本堂弘之氏、下村純也氏、白山高等学校の武田憲二氏の協力を得た。
- ③ 三重県埋蔵文化財センター 田村陽一氏の御教示による
- ④ 斎宮歴史博物館 久保勝正氏の御教示による
- ⑤ 新田 洋「平安時代~中世における煮炊用具-伊勢型鍋-に関する若干の覚書」『三重県考古学研究』1 三重県考古学談話会 1985

- ⑥ 伊藤裕偉『磯部大王自転車道整備事業に伴う東海道遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1989
- ⑦ 伊藤裕偉「若宮遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊-』三重県教育委員会 1989
- ⑧ 三輪茂雄「粉の文化史からみた民具」『民具が語る日本文化』河出書房新社 1989
- ⑨ 前掲 ⑤ ⑥ ⑦ や増田安生『ミゾコ遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1985、増田安生・田村陽一「古市遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985 などがある。



調査区全景（西から）



調査区東部全景（南から）



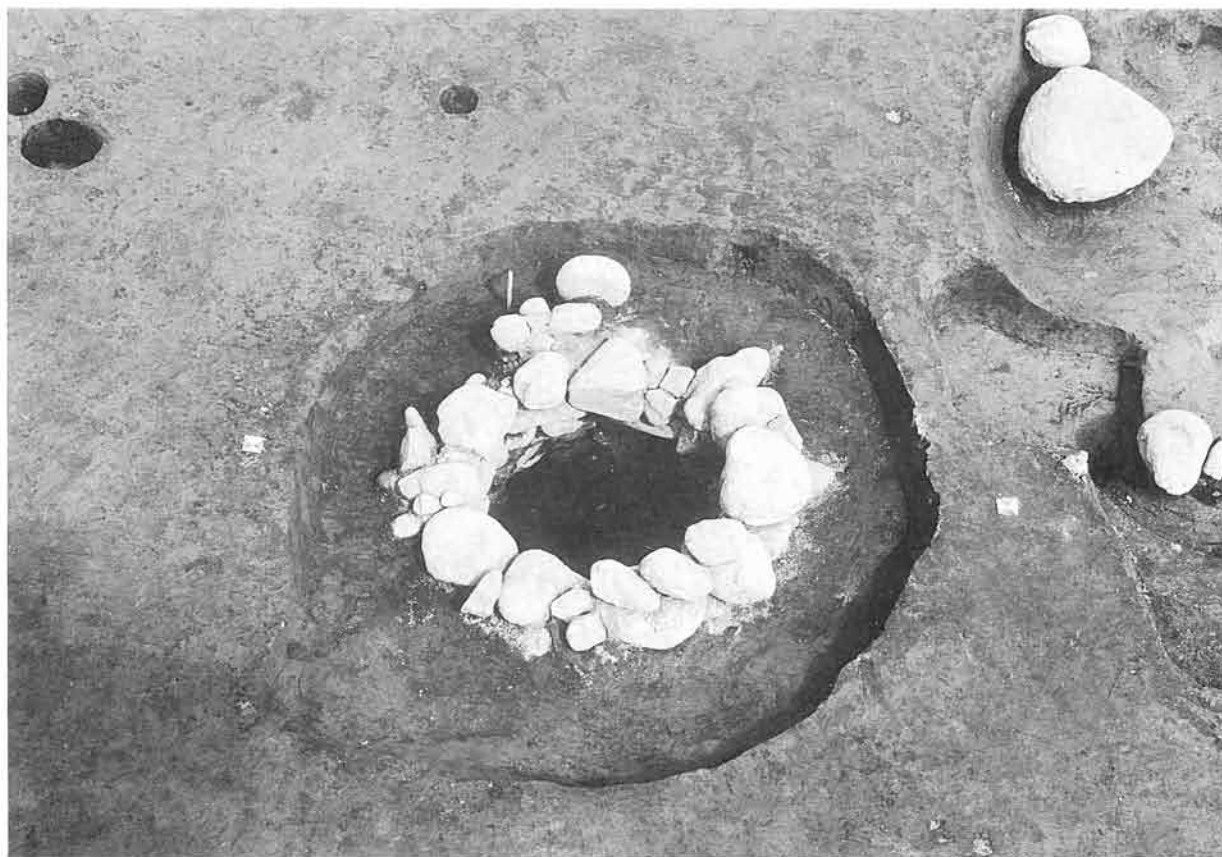
中央部掘立柱建物群（南から）



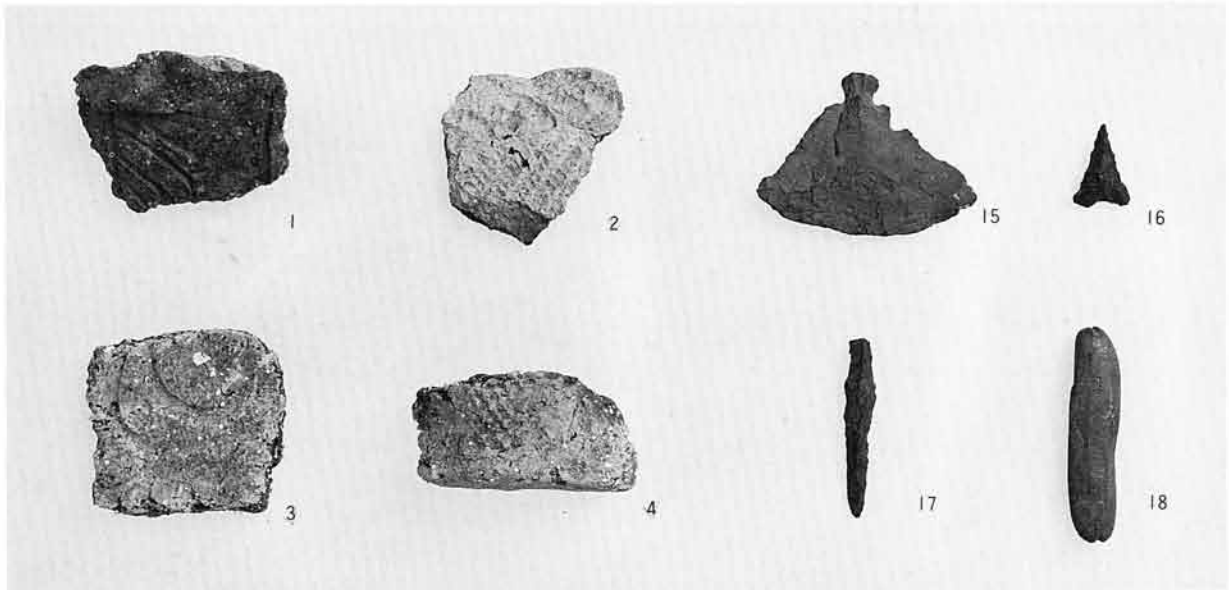
西部掘立柱建物群（南から）



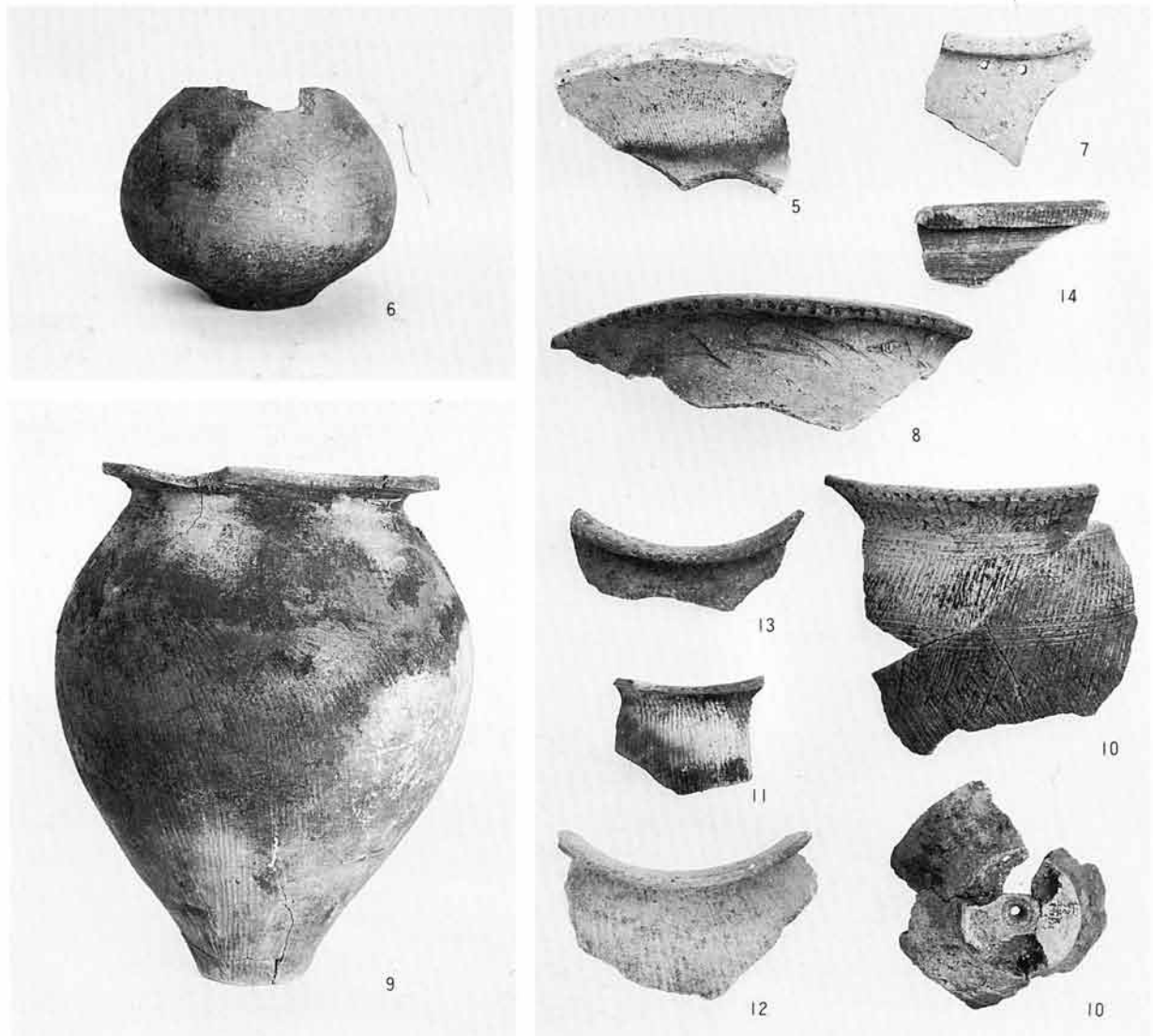
井戸SE15・SX20（南から）



井戸SE56（南から）



縄文土器、石器 (1 : 2)



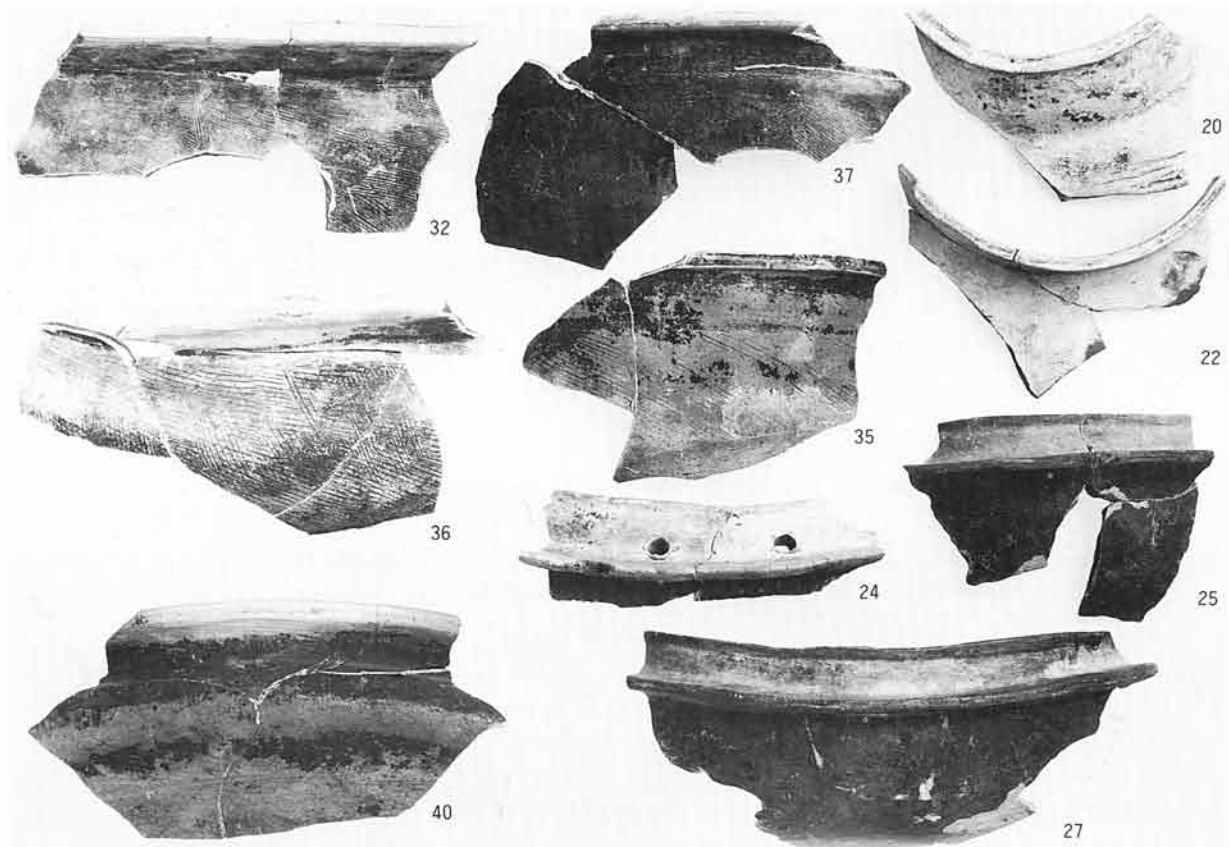
弥生土器 (1 : 3)



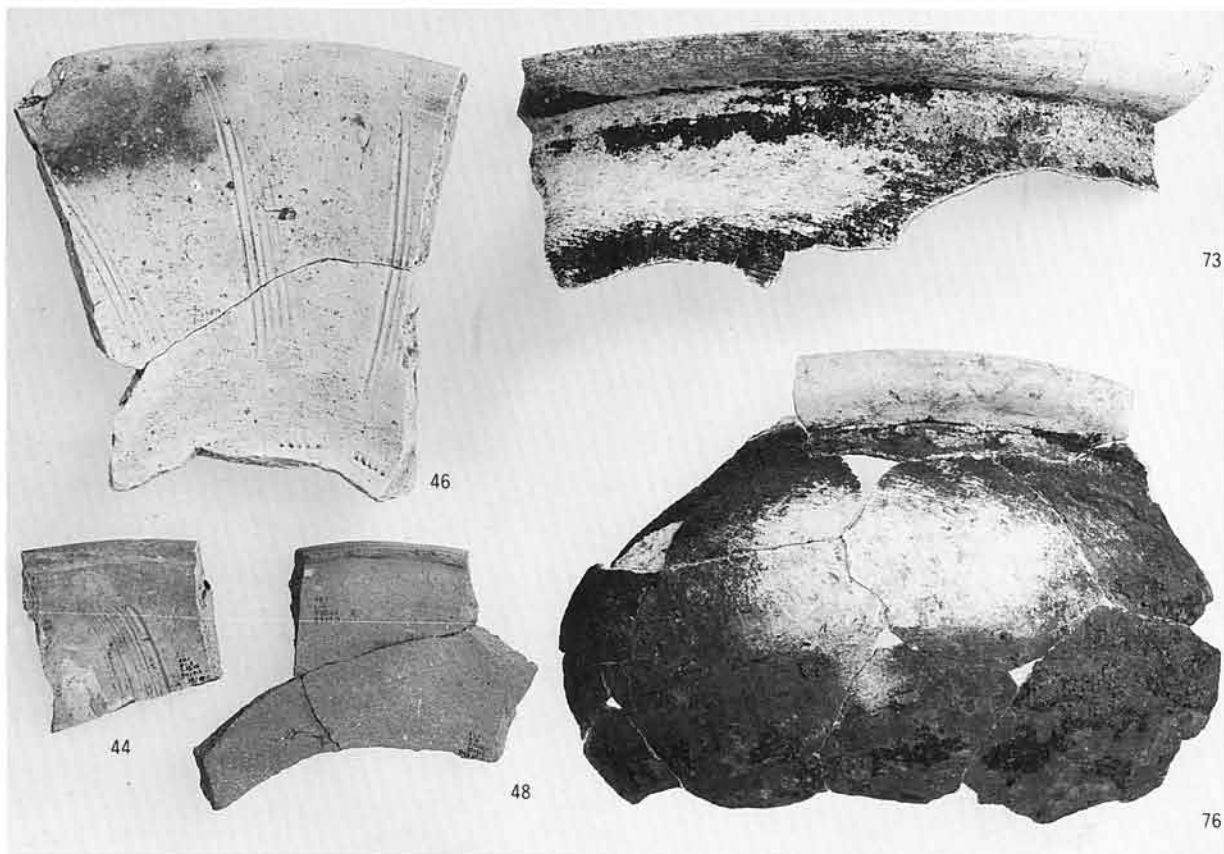
出土遺物 (1 : 3)



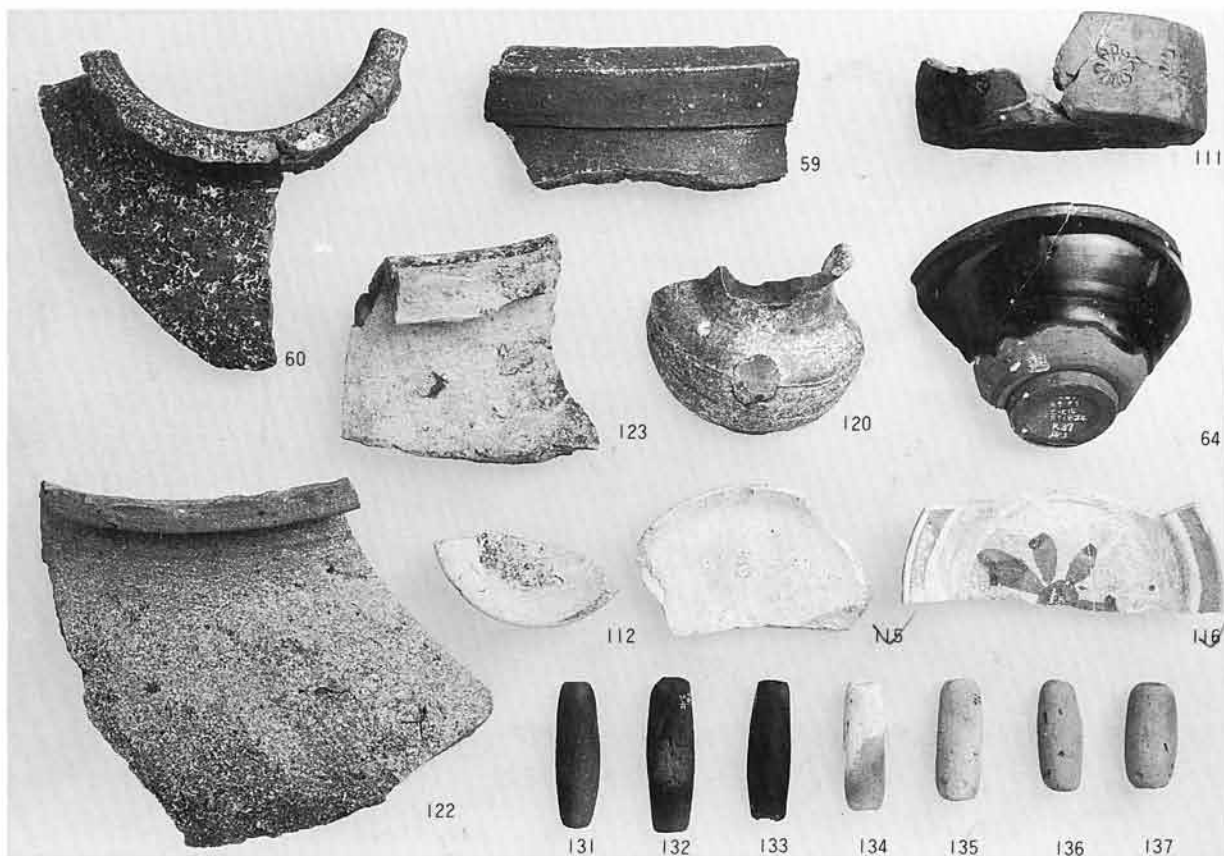
出土遺物 (1 : 3、49は 1 : 4)



SK7出土遺物 (1 : 3)



SK7・SK6出土遺物(1:3)

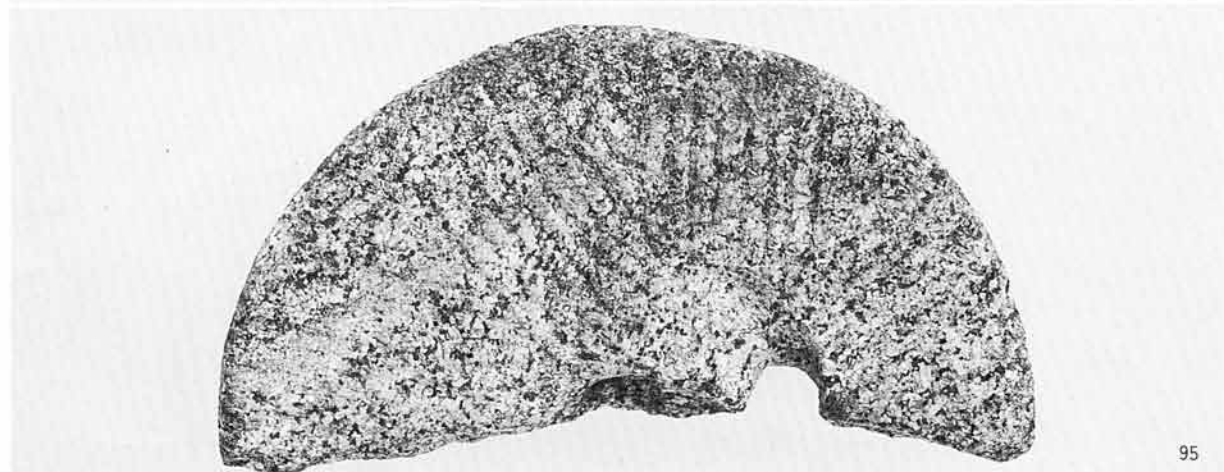


出土遺物(1:3)



97

130



95

石臼・茶臼 (1 : 3)

平成2(1990)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 92-1

平成元年度農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

— 第1分冊 —

1990年3月

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 有限会社 第一プリント社
